
緋色の眼 ~ Days ~

ジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の眼〜Days〜

【Nコード】

N0260B

【作者名】

ジョン

【あらすじ】

過去があるから現在があり、現在があるから未来がある。それは緋眼使い、式神使い達も例外ではない。そんな彼らの日常や過去を描いた緋色の眼の登場人物達の短編集。注意【緋色の眼を読んでからご覧になった方が意味が分かります】

Days 1：千島蒼二（前書き）

まずは蒼二からです。

彼の前作までのテーマ曲は

牙狼〜SAVIOR IN THE DARK〜でしたが
Daysは希望峰という曲を聞きながら書きました。

Days 1：千島蒼二

毎朝、俺は五時には起きてランニングを一時間。

そして家に帰ったら、筋トレをしてからシャワーを浴びて朝飯。

それが俺　千島蒼二のいつもの朝。

高校にも行っていない俺にはぶっちゃけこんな事しかやる事が無い。

煉が俺の中から消えたので、俺はもうアイツにすがって生きていくわけには行かない。

だからこうやって鍛錬を欠かさずに、いつでも戦いの準備に入れるようにしている。

「おはよう、蒼二」

シャワーを浴びて出てくると母さんが朝食を用意してくれていた。この家で俺の他に唯一自堕落ではない人間、それが俺の母親千島遥その人。

流石に俺ほどは早く起きられないみたいだが、主婦としては普通

の時間であろつ。

「おはよう」

俺がこの家に帰ってきてから一週間、未だに俺は家族と打ち解けていない気がする。

母親は何か楽しそうに俺が飯を食ってる姿を見ているが、その感情の正体が不明。

なんていうか、俺だけ気まずいみたいな状況。

「蒼二、もう少しゆっくりとしてもいいんだよ？」

「・・・ん」

母さんの気遣いを感じる。

だが素直じゃない俺は、適当に返事をするとなんにも目も向けた。

「・・・ああ、やっぱりもう少し会話を続けてみようかな。」

「これは、死罪六神の頃からやってたからもう習慣になってるんだよ」

「へえ・・・」

母さんの顔が曇る。

そうだよな・・・息子が人殺しまがいのやってた頃の話など面白いはずが無い。

俺はついこの間まで死罪六神という組織に入って、世界のバランスを崩すような事をしていた。

まあ・・・それで色々あって今は敵だった家族とも和解してこうやって暮らしているのだが。

どうにも、まだなじめない。

「親父も遥緋もいつも何時まで寝てるんだ？」

「蒼威君は・・・うーん・・・その日によつて、遥緋は後五分ぐらいもすれば起きてくるわよ」

「へえ・・・随分とのんびりした家だな」

「これが普通なのよ」

「そうなんだ」

そこで会話がきれ、俺と母さんはＴＶを眺めた。

お天気お姉さんが今日は傘を持ってけと言っている、余計なお世話だっての。

そしてしばらくすると母さんが言った。

「遥緋遅いわねえ・・・蒼二、起こしてきて」

「わかった」

俺は返事をするとしち上がつて、階段を登る。

階段を登り終えると、正面にある二つの部屋の右側の部屋の前に立つ。

ここが俺の双子の妹、千島遥緋の部屋だ。

「おい、コラ！ 起きろ」

ドア越しに話しかけても返事が無い。

段々とイライラしてきた俺は、ドアを開けると遥緋の部屋へ入った。

女の子特有の甘い匂いが鼻につき、ベッドで布団に包まっている遥緋を見た。

「う……………ん」

甘い声が部屋に響いた。

大方、何か美味しいものでも食ってる夢を見てるのであろう。幸せそうな奴め。

そしてベッドの台の上では粉々になった元目覚まし時計が在った。こいつの式神、輪廻転生の力によって破壊されたのであろう、相変わらず危ない力だ。

式神つてのは俺にもよくわからん。

どうやら自分の根源と自分をつないで、その根源を具象化したのが式神というのが一般論。

んで、今寝てる妹の式神の名前は【輪廻転生】再生と死滅の現象を起こす式神だ。

ちなみに、俺の式神は【修羅雪】氷の力を持った二刀の小型チェインソーである。

「おい、遥緋……起きろ！」

「ん……うるさい……………」

遥緋の手が空間を風ぐ。

俺はその腕を取り、間接を決めるとそれをグイと締め上げる。

「イタタタタタッ！！ 痛いって！」

一瞬で目を覚ます遙緋。フン、最初から素直に起きやがれっただ。

そして寝ぼけ眼で俺に言う。

「何でお兄ちゃんがいるの？」

「お前を起こせと頼まれたから」

「一応、思春期の女の子の部屋なんだけどなあ・・・ほら、着替えとか見られたくないじゃん？」

「お前のその貧相な体に興味はない、せめて罪歌ぐらいになってからそついう事はほざけ」

「むー・・・」

膨れっ面をする遙緋。

コイツ・・・マジで性格が変わってきたな、昔は俺にビビりまくってたくせに。

そして遙緋を先頭に、俺達は部屋の外へと出た。

階段を下りて、一階へ行くと途中の廊下に親父の上半身が飛び出している。

どうやら起きようとして力尽きたらしい、駄目人間め。

「あ、お父さんおはよー」

駄目人間、もとい親父をまたいで遙緋は居間へと入って行った。

この反応って事はどうやらこれは日常的な行動らしい、この家も母さんが居なくなったら終わりだな。

俺はすやすやと廊下で寝てる親父を軽く蹴飛ばすと居間へと入った。

「母さん、もう一回飯食いたい。俺のも作ってくれるか？」

遥緋を起こしたら腹が減った。

母さんは、それを聞くと嬉しそうに俺に言う。

「わかった、目玉焼きとパンでいい？」

「うん」

俺は遥緋の正面のテーブルに着く、遥緋は熱心になってTVの占いを見ている。

全く・・・高校生にもなって新聞すら読まずに占いとは嘆かわしい。

すると、遥緋が俺の視線に気づいたらしい。

「ん？ 何？ 占いなら私達は今日最下位だよ？」

「いや・・・占いなんかよりも新聞読めよ、と思ったからな」

「新聞ねえ・・・」

フンと笑って遥緋は俺を見る。

何だこのヤロウ、喧嘩売ってんのかコラ。

新聞ナめんじゃねーよ、確かに最近の新聞はフィルターがかかりすぎてて情報メディアとは言い難いかな。

「最近の女子高生は新聞も読まないのか？」

「そうだねえ・・・TVで十分かな」

「フン、TVなんて腐った情報メディアじゃねーか、しかも占いたあくだらなすぎてかける言葉もない」

その言葉に遥緋の顔がムツとした感じになる。

どうやらお気に入りの番組だったらしいな、だが新聞を馬鹿にしたお前も同罪だ。

そして遥緋はフツとまた笑いやがると言った。

「お兄ちゃんってさ、ニートだよね？」

「ッ」

「働きもせず、学校にも行かずにご飯だけ食べるって羨ましいなあ」

くそ、このヤロウ。確信をつきやがった。

俺は言い返す言葉も無く、黙ってしまう・・・マジで二年前なら考えられない事だ。

遥緋の奴は勝者の笑みで、母さんが運んできた目玉焼きを食っている。クソが。

「ごちそーさま、お兄ちゃんもアルバイトぐらい探しなよ」

フンと笑って遥緋は居間から消えた。

あのヤロウ、いつか殺す。

「よお、ニート息子。お父さんは悲しいぞ」

更に殺意を上昇させる声が後ろからかかる。

後ろを向くと親父がパジャマ姿で、俺を見下ろし・・・いや見下していた。

だがこの程度の生物の相手は造作もない。

「うるせえよ、おっさん。ウゼーからまだ寝てろつての」

「なっ!?! お父さんに向かってそんな口を利くか!?!」

「ここで質問がある」

「おう、何だ?」

「千島蒼威さんは、俺に父親らしい事を一つでもしてくれたかな?」

「はい、一個もしてません」

「マジ死ね、父さんなんて死んでも呼ぶか」

俺の言葉にショックを受けた親父はさっきまで遥緋が座っていた席に着いた。

すると母さんが来て朝だったのに酒とつまみを置いていく、一体どんな家庭だ、この家は。

親父はプシュッとビールを開けると、一杯あおる。

「じゃあ蒼二、せめてもの罪滅ぼしにお父さんが一つだけ願いをかなえてやろつ」

「ほほ・・・」

「それと、何か働きたくなったら八神の家に行って見る、何かしら仕事はあるはずだ」

酒を飲んだ瞬間、まともな事を言い出したな。

酔ってる時のほうがまともな人間って・・・マジこいつは本当に俺の親なのか？

しかし、八神の家に行くのは悪くない。

「よし、時雨んとこ行ってくるわ」

「おう」

俺は自室へ戻り、着替えると家を出た。
そのまま電車へ乗り、一時間ほど揺られると八神家最寄の駅につく。

そこからバスで十分、都市部を抜け、閑静な住宅地から歩いて二十分ほどの場所に八神家はある。

何十年も経ってそんな年季のある家だ。

正門から入ると、門の番をしてる奴が俺を見る、そして途端に顔

が引きつった。

そいつは複雑そうな顔で俺に告げる。

「な、何の用だ？」

「時雨と罪歌達に用事があんだよ、通るぜ？」

「う・・・許可しましょう」

どうやら死罪六神だった事をまだ引きずっているようだ。

あ・・・そっぴや今の門番、御崎家の戦いの時に斬った気がするな。

まあ・・・仕方ない。

「相変わらず、広い」

そう呟く。

久しぶりに着たが全く変わってない。というよりもここは変われないんだな。

そして俺はガラガラと歩くと時雨の執務室兼自室へと向かった。

案の定というか何と言うか、途中すれ違う八神の奴らは皆俺をジロジロと見てきやがる。

これじゃあ罪歌達も相当苦労してんなああ・・・

『舞い起これ、上昇気流』

突然声が響き、大地から風が吹き上がる。

そして俺の目の前ではスカートの裾をわざとらしく押さえた命が立っていた。

何をしてるんだ、この馬鹿娘は。

「よお、今日も暑いな」

「蒼ちゃん・・・頼むからツッコんでよ・・・やった私が辛いじゃない」

「知るか」

「むー！ てか蒼ちゃん、私に会いに来てくれたの？」

「違う」

「はぁ・・・嘘でもいいから君をさらいに来た！ とか言ってよ・・・」

「TVの見すぎだ、マセガキ」

「むー！ 子供じゃないもん！」

「そうかそうか、おめでとう」

俺は心から拍手を送ってやる。

命は不満そうに、俺を見ていたがやがてらちがあかないと思ったのだろう、話題をかえた。

「んで、何しに来たの？」

「あー・・・」

ニートを脱出したいとは流石に言いにくい。

俺がそう言ったら、命は確実に爆笑するだろう、それだけは避けたかった。

「時雨と少し話しに来たんだ」

「へー！　じゃあ一緒に行こ、私も行くよー」

「・・・へ？」

自分でも間抜けな声だったと思う。

しかし、命はそれを気にした風もなく俺の手を引くと走り出した。ああ・・・何てタイミングが悪いんだろう・・・

そして命は時雨の部屋の前に立つとノックをした。

返事も聞かないうちにドアを開ける命、ノックの意味が全くない。するとメガネをかけてPCに向かっていた時雨が顔を上げる。

「やあ、命ちゃんに・・・蒼二」

「おっす」

「蒼ちゃんね、時雨さんにお話したい事があるんだってー」

「ん、わかった。まあ座ってくれ」

時雨に促されて俺と命は手前のソファーに座った。

そしてPCを待機状態にして立ち上がると、近場の冷蔵庫を開けて氷とジュースを持ってきた。

「それで、何の話かな？」

「あー・・・いや、その・・・俺に仕事をもらえねーかな・・・と」

「仕事？」

「ああ・・・俺、高校も行っていないしやる事なくてさ」

「ふむ・・・」

考え込む時雨。

俺は恥ずかしくて、やっぱりそっぽを向いてしまう。

「ぶつちやけ、八神の手は足りてるんだよね、今必要なのは経営とかに詳しい人間だし」

「そうか・・・」

「だから蒼二、君は学校に通え」

「・・・・・・ハア？」

「ちょうど命ちゃんが学校に通いたいと言い出してね、ついでだ」

「おいおい、時雨・・・何で俺が中学校に通わなきゃいけないんだよ」

「・・・!？」

俺がそう言っていると命が凄い顔で俺を睨んだ。
うわ、怖え・・・そして俺が一瞬怯むと、命は俺の体に触って一
言。

『私が良いと言っまでお座り』

体が勝手に動き、俺の体はソファーに叩き付けられる様にして座
らされる。

体を動かそうと思っても動かない、流石【言霊】敵に回すところ
まで恐ろしいとは。

そして時雨は苦笑いをしながら俺に言った。

「蒼二、命ちゃんはお前と同じ年だぞ？」

・・・・・・ハ？

俺は目線を動かして命を見る。

身長は150センチぐらいだろう、髪型はショートカット、今の
服装はひらひらしたスカートにTシャツ。

どうみても中学生にしか見えない。

しかし、命と時雨の顔が真面目な点から見ても真実なのであろう。

「・・・・・・マジなのか？」

「ああ、マジさ・・・僕も最初聞いたときは眩暈がしたけどね」

『お座り』

命の力によって時雨までもが椅子に叩き付けられる。
すると、時雨はその体勢に苦しむ風も無く会話を続けた。

「そういうわけで、命ちゃんを遥緋と同じ高校を通わせようと思う、それでついでに蒼二も通えばいい」

笑顔で言う時雨。

しかしその笑顔に騙される俺じゃない、時雨が何のメリットも無く俺を行かせるとは思えないしな。

「・・・俺に榛名と棗の護衛しろってか」

「正解、流石蒼二だね。君と遥緋、更に命ちゃんまで居れば一つの家を滅ぼせるほどの戦力だ」

「フン・・・まあいいや、あいつらを守ってやるぜ」

俺は軽く笑うとそう言った。

時雨も分かってたばかりに笑う、そして命に懇願した。

「お願いだから、もう解いてくれないかな？」

・・・どうやらかなり苦しかったらしい。

そして俺達は時雨の部屋を出た。

後日ウチに来て本格的な話を母さん達と進めるらしい。

とりあえず、俺は二ト卒業、と。さらば我が愛しの一週間よー。

「ねえ、蒼ちゃんは・・・もう帰っちゃうの？」

命が寂しそうに俺に言う。

そうだ・・・こいつにはもう帰る場所はないんだっとな。

桐生の家に幽閉されていた命は俺達が桐生家を皆殺しにした以来の仲である。

「おう」

「そう・・・ねえ、蒼ちゃん・・・私、蒼ちゃんが大好きだよ?」

突然の命の告白。

俺は大して動じる事も無く、簡潔に応える。

「そうか」

「・・・蒼ちゃんは、私の事が好き?」

「・・・好きか嫌いかで言ったら好きの部類には入るな」

「私は、愛してる。貴方の事だけをずっと見てきた」

命の顔つきが変わった。

子供ではない、女としての天美命の顔、それは中々に美しい。けど俺には

「朱音さんが一番でもいい、それでも私は貴方と共にいたい」

・・・こういうときはなんと云えばいいのだろうか?

今までこんな事がなかったから、何とも言えない。

でも俺は誓ったんだよな、コイツを守るって。それに・・・俺が一線を越えなかったのもコイツのお陰だし。

そして決意した俺は命に言った。

「命、ウチ来るか？」

「・・・行きたい、蒼ちゃんと一緒に暮らしたいけど・・・」

「けど、何だ？」

「私にはお金も何もない、戸籍すら危うい、蒼ちゃんの家になんか事で住まわせてもらえるのかな？」

俯く命。

しかし、ココであきらめては命はまた孤独へとなる。

俺だって、孤独の苦しみは痛いほど知っている、中学の時はずっと孤独だったしな。

まあ・・・いくつか俺の思い違いもあったが。あ・・・。そういえば・・・

「住ませてやるさ、やっぱり俺もお前と離れたくないわ」

「蒼ちゃん・・・」

「俺に任せとけて！ 守ってやるって約束したろ？」

「・・・うん！」

「んじゃ荷物とって来い、んで時雨にも伝えとけ・・・まあ奴はお見通しっばいけどな」

「わかった！ 少し待ってて」

駆けて行く命。

俺はそれを見送ると胸中で朱音に話しかける。

（ごめん・・・これって浮気かな？ でも・・・アイツもお前と同じくらい大切なんだよ）

「 　　ってわけで、今日からここに住む事になった天美命だ！
よろしく！」

俺は実家の居間で高らかに宣言した。

遥緋は開いた口が塞がらないという感じで俺と命を見つめ、母さんは苦笑いを浮かべている。

そして、親父は

「駄目だ」

「死ね」

修羅雪を首筋に突きつける。

親父はさっきまでの威勢はどこへいったのか、急にしばみだした。

「お、落ち着け・・・まあ住む分には構わんのだが、部屋が無いぞ

「？」

「俺の部屋で共同生活」

「私達、もう契りは交わしましたから」

「なにいいいいいいいつ！？ 蒼二！ お前はロリコンだったのかっ！？」

命の冗談に親父が過剰反応する。

俺は修羅雪の刃を回転させる事で、親父の発言を止めると改めて言い直す。

「命はこう見えてもタメだ、だから住ませろ、後命の衣食住は全て親父、アンタが払え」

「な・・・何故、俺が！？」

「何でも願いを叶えてくれるんだろう？」

「グッ・・・」

黙る親父、約束には妙に律儀な男で助かった。

そして俺は命を小突くと、挨拶をさせる。

「天美命です、炊事洗濯何でもござれです。ちなみに蒼ちゃんのお嫁さんになるのが将来の夢です」

そう、命は幽閉されていたくせに炊事洗濯がさりげなく出来た。死罪六神の炊事、食事当番は基本的に命であり、他のやつには出

来なかった。

剣菱もそれなりに出来たが、何より罪歌があそこまでやばかったとはなあ・・・

む、回想にふけっている暇はない、意見を聞いてみよう。

「母さんは、どう？」

「うーん・・・私はいいわよ、新しい娘になるんだからねー」

「そう、ありがとう」

そして今度は遥緋のほうを向く。

「お前はどうか？　ちなみに否定的だった場合お前の高校のクラスメイトがどうなるかわかってるだろうな？」

「聞いている意味ないじゃん・・・じゃあ、賛成」

「んじゃ、決まりだな」

「うん！　皆さんよろしくお願いします」

命が挨拶をすると、早速母さんは命を連れて家の中を歩き回る。

遥緋は軽いため息をつくとき、俺の方を見た。

「何だ？」

「んー・・・？　いや、お兄ちゃん笑ってるなあって思ってたさ」

遥緋に言われて俺はガラスを見た。

そこには久しぶりにニヤけた顔の俺が映っている。

どうやら、俺も命と暮らせて嬉しいらしい、と言っよりも楽しみなのだろうか？

これから始まっていく俺たちの新しい日々が

Days 2：秋月罪歌（前書き）

第二回目は秋月罪歌です。

前作は亡國覚醒カタルシスという曲を聞きながら書いてました。

DaysではFLOWの贈る言葉を聴きながら書きました。

Days 2：秋月罪歌

Days 2

私は呆然と日々を過ごしていた。

毎日朝から晩まで呆けるか、何かを考えて過ごすだけの日々。全てが終わってしまい、私は燃え尽きていたのだ。

(・・・私は、どうすればいいのだろうか?)

戸籍等、その他の経歴は正宗が全て、改竄、隠蔽をしてくれている。

だから普通に何でも出来るはずなのに、何も出来ない。

いや 怖いのだ、今まで裏の世界で十数年間復讐に生きてきた自分が今更・・・と言った思考に悩まされている。

夢とか希望とかは考えた事が無い、ただ復讐を それだけで私は生きてきた。

(もう、年も23か24だっけ?・・・数えてないからよくわからないや)

まだギリギリ人生を取り戻せる年齢。

だが、いざ何かをやらうとするにも、何も浮かばない。

「あ、姉ちゃん」

そんな思考の渦に私が陥っていると声がかかった。

顔を上げて、声のした方を見ると双子の弟の狂が立っている。

「なに？」

「これから、どうしたいか決まった？」

「ん・・・決まってるない」

狂は決まったのだろうか？

昔から、この子はあまり考えずに行動する事があるからなあ・・・

「俺は、一応秋月の長男だ・・・秋月の血を絶やさない義務があると思うんだよ」

「そう・・・やっぱそうだよな」

そう、この世に居る秋月はもう私達だけだと思う。

だから狂は長男として、妻子を持ち新たな世代へと秋月の血を受け継がせなければならぬ。

すると、狂は私に言う。

「だからさ、姉ちゃんは好きな事してもいいんだぜ」

「・・・え？」

「俺が5、6人子供作りゃ、跡継ぎには困らない、次の世代がまた5、6人作れば一族はどんどん増えていくからな」

「狂・・・」

「俺は妻や子を俺達見たいな目にはあわせたくない、呪いの子とか
そんなんで人を括りたくねえ。」

だから・・・俺はそんな因習に囚われない秋月を作って生きたい
と思うんだ」

純粹に、狂は凄いと思った。

私達の全てとも言えた復讐を果たし、私は抜け殻状態になってい
る。

だけど、狂はもう・・・新しい道を見つけて歩き始めようとして
いる。

だけど私は・・・

「姉ちゃんは、ずっと誰よりも頑張ってきたんだ・・・目標が見つ
からないのも無理も無いと思うよ」

「でも・・・」

「蒼二や命も新しい道に進んでいるけど、自分のペースでいいと思
うぜ」

「・・・うん」

「まあ、そういう事で・・・ああ、それと正宗が呼んでたんだっ」

「ん、わかった」

私と狂は八神の屋敷の中を移動し、正宗の執務室へと入った。
ノックをして、部屋に入ると正宗が笑顔で私達を迎える。ああ、
今日も変わらぬ日常だなあ、何て思う。

隅の方の椅子には息子の時雨も座っていた、何か緊張しているの
だろうか、冷や汗をかいていた。

「やあ、すまないね。そこに座ってくれ」

「わかった」

私と狂は、正宗の対面に座る。すると、早速話を切り出された。

「単刀直入に言おう、二人ともアルバイトをしてきなさい」

「・・・ハ？」

「・・・あ？」

「狂の進みたい道は大いに僕も賛成だ、罪歌はまだなんだよね？」

「まあ・・・ね」

ずっと貴方の傍に居て、貴方の手伝いをしたいとは口が裂けても
言えない。

だけど・・・これだけは本当にやってみたい事かもしれない、
い、等と思ってしまう。

八神の仕事で忙殺される正宗、それを手伝う私・・・
・フツ。

・・・いやいや、思考が乱れた、今は正宗の話に集中しよう。

「それで、何でアルバイト？」

「君達に足りない物が、そこにある。まあ、数日だけじゃ感じられ

ないかもしれないけどね」

・・・正宗の言いたい事がよくわからない。

私達は一応勉強は緋澄に命じられて多少は嗜んだと思う、交渉だ
って何度もしたし、修羅場もいくつも潜り抜けてきた。

それに、緋眼や式神と教え込まれた体術もある。力も申し分はな
いと思う。

「じゃあ三日後にこの場所へ行くように」

一枚の紙を渡された、それを読むとそこにはこう書いてある。

株式会社ヤガミ

給与時給900円以上

資格

18～30歳位迄の方 未経験者大歓迎！！

勤務時間

10:00～19:00

勤務開始日

即日勤務OK！！

仕事内容 子供用イベントの監視

子供達の安全を見守って頂くことがお仕事です。簡単な研修があり
ますので、あなたもすぐに慣れますよ。

・・・久しぶりに果てしない不安という物を味わった。

三日後、私と狂はとあるイベントの面接会場へと赴いていた。
そこは何かのアウトレットパークのような場所で、大変な賑わいを見せている。

私と狂はそんな空気に殆ど馴染むことなく、生きてきたので驚きの連続・・・というよりも驚愕に近い。

改めて自分がどれだけ世界からどれだけ外れていたのかを再認識しながら私と狂は歩く。

それにしても、この人ごみ・・・凄くウザったい。

(緋澄もそう思わない・・・?)

そう無意識のうちに声をかけてしまった。

しかし、緋澄はもう居ない・・・十数年間一緒だった大切な同胞は世界を、私を守るために散ってしまった。

だけど、いつしか人は慣れてしまっ、自分の心にフタをして、自分を保つために。

だけどそれだけは嫌だった　この心の痛みですら、私と緋澄が一緒に居たという何よりの証拠だから・・・

「姉ちゃん、あそこみたいだぜ」

狂が指を指した先には一軒の建物がある、いかにも事務所っぽい建物だ。

確か剣菱と始めて会ったのもあんな建物だった気がする。私と狂はノックをし、返事を聞くと中に入る。

扉を開けた先に居たのは初老の御婦人。どうやら彼女が私達の雇い主なようだ。

「えっと・・・秋月さんですよね？」

私達二人を見ながら初老の女性は言う。

そして私は、前に一歩踏み出し、一礼をすると応える。

「秋月罪歌です」

狂もそれに続く。

「秋月狂です、本日はよろしくお願いします」

意外な事に狂は被っていた帽子を取り、きちんと挨拶をした。

金髪も辞めて、元の黒髪に戻った狂は、やや顔つきが険しい物の普通の少年に見える。

それに比べて私はどうだろう・・・一応女性としての嗜みはしているつもりだが、それは主観であって客観ではない。

そんな事を私が考えていると、初老の女性は続ける。

「では、こちらの洋服を着てください、早速研修に入りますよ」

服の上からその会社のロゴが入ったシャツみたいな物を羽織る。

これが産まれて始めたのバイト着・・・中々可愛いじゃない。

そして私達は着替え終わると、その女性についていった。

研修は主に器具の操作の仕方や心構えについてであった。

私と狂は別々のフロアに分けられて、それぞれの持ち場のやり方、作法、その他について教わる。

私のフロアは巨大な風船の中と、外にある遊具で遊ぶ子供達の管理である。

ぶっちゃけ、私には子供を育てる才能が無いと思う、愛情を全く受けないで育ってきた子供に親が務まるとは思えない。

そこまで考えて、正宗は私にここで働かせる事を決めたのだろうか？

「あのう・・・？」

いやいや、あの正宗の事だ、何かきつと裏があるに違いない。

今でこそ正宗は温和だけど、昔は凄い策略家だった気がする。息子の時雨はさらに腹黒いし。

ああ、今思えば死罪六神時代にも八神の策略に何度か嵌められたな・・・全く、何て腹黒い。

「あ、あの！」

そういえば浅葱陸人が言っていた正宗ロリコン疑惑はどうのだからう。

・・・もし事実だとしたらかなりよくな

「もしもーし！ー！」

「は、はい？」

どうやら思考の深みにはまってしまったようだ。

私の目の前には、同じシャツを着た一人の女の子が立っていた、

多分年下であろうその少女。

中々にオシャレだった、明るく染めた髪、耳にはピアス。服装だって中々女性らしい。

純粹に　羨ましいと思った。そしてその少女は言う。

「あ、私・・・岩瀬奈央って言います。えっと・・・今日から入る方ですよね？」

「あ・・・秋月罪歌って言います。よろしく願いします」

「あきつきざいかさんですか、変わっててかつこいい名前ですねー」

そりやもう、呪いの子につけられた名前ですから・・・とは言えない。

それにしても秋月罪歌って名前を褒められたのは始めてである、まあお世辞だろうけど。

「えっと、まず子供達に話しかけられたらスマイルで、そして危ない子は優しく諭してあげてください」

「あ、はい」

「怒るのは厳禁です、なるべく諭すように言ってあげてくださいね」

・・・この仕事、絶対に狂に向いていないと思う。そして私の頭の中には嫌なビジョンが浮かぶ。

子供にキレ、神舞を発動させ狂喜乱舞している狂の姿・・・いや、流石にそこまではないだろう。

精々殴りかかるくらい・・・ってかそれもマズイわね。

「あ、あの秋月さん？」

「は、はい！」

「あの・・・そろそろ子供達の方お願いしますね」

「わ、わかりました！」

私は緊張しながらアスレチック広場の子供のほうへ向かう。

同僚の岩瀬さんは風船型ドームの中へ入ってしまっているので実質私一人。

落ち着け・・・落ち着け私・・・成せばなる、やれば出来る・・・頑張れ！

「おねーちゃん、あそぼ」

可愛らしい子供が近づいてくる、私はしゃがんで視線を合わせると男に笑いかける。

自分でも会心の笑顔だと思うほどの笑顔だ、これなら子供も懐いてくれるだろう。

「うん、何して遊ぶ？」

「皆で氷鬼しよー」

氷鬼・・・確か北のほうにでる悪鬼・・・じゃない、確か鬼に触られると凍ってしまって動けなくなるゲームだ。

すると、周囲の子供達が一斉に集まってきた、その数ざっと見た感じ十。

どの子もニコニコと笑い、私を見ている・・・もしかして

私が鬼？

「おねーちゃんが鬼だぞー」

子供がワーッと散っていく。フン……。面白い、緋眼使いの私から逃げようとするとは。

私は大地を踏みしめ、走り出す……。だがやってみると中々にこれが難しい。

アスレチックの地形を上手く利用している子供達はいろいろな場所をスルスルと抜けて、私をかく乱する。

「おにさんこーちらー」

「おねえちゃん、タッチしたよー」

周囲から子供達の声が響く、これじゃあキリがないわね。

私は一瞬目を瞑り、緋眼を発動させ、目標の子供達を一瞬で視認すると駆け出す。

アスレチックを物凄い速さで登り、子供達にタッチしていく、時には宙返りや、壁蹴りも披露し私は一気に七人タッチした。

そして地面に着地すると緋眼を解く。

「おおー！ おねえちゃんすげえ」

聴覚等が通常の状態に戻ると万来の拍手が聞こえた、周囲を見ると沢山の人が私を見ている。

しまった……。！！ どうやら私は本気を出しすぎたらしい、すると遠くから岩瀬さんが駆けて来て私に言う。

「あ、秋月さん……。？」

「う、ごめんなさい・・・ちょっと熱くなってしまつて」

「まあいいんですけど・・・安全には気をつけてくださいね？」

「わかりました・・・」

岩瀬さんが再び風船の中へと戻っていく、私はため息をつく子供達の方へと戻った。

子供達は目を輝かせ、私を見ている・・・これはこれで気分がいいかな。

「すっげー！」

「あれどうやってやるのー？」

子供達が私に纏わりついてくる、不思議と悪い気分はしない。

というよりもこういうのは始めての経験だ、私と狂は秋月にも学校にも友達は居なかった。

正宗と訓練している時が唯一の安らぎだった生活、多分・・・こちが本当の子供が遊ぶべき事だったんだ・・・

そして、私は更に見た。

「はい、マー君良い子にしてたかな？」

「うん！」

子供を愛おしそうに抱く母親の姿、私達には決して見る事の出来なかった姿。

誰に愛されるわけでもなく、呪いの子として生きてきた私達。私

はそれに多少なりの感動を覚えた。

親の愛って、力よりも、式神なんかよりもずっと大事なのかな・

「おねえちゃんどうしたのー？」

「はやく遊ぼうよー」

私もこの子達を愛してみよう、いっぱい遊んで、いっぱい笑って。私達みたいな不幸な子なんかにはしたくない、この子たちには笑っていて欲しい、心からそう思った。

そう決意し、私は元気良く返事をした。

「うん！ いっぱい遊ぼう！」

そろそろ夕方になった、子供達は私に手を振って帰っていく、中には泣きながら別れを惜しむ子まで居てくれた。かなり疲れたが、心地良い疲労感が漂っている。私にも人が愛せると知ったから心がとても清々しい。

すると、岩瀬さんがジューズを持って現れる。

「あ、今日はお疲れ様です。これどうぞ」

「ありがとうございます・・・」

岩瀬さんからジューズを受け取り私はいっぱい口に含む。

ああ、五臓六腑に染み渡るってのはこういう事なんだなあ・・・

「秋月さん、凄く楽しそうにしましたね」

「ええ、こつやって遊んだりするのは、多分産まれて初めてだから」

「ハハッ、そんなオーバーな。でも、やっぱり子供っていいですよね」

「そうですね・・・子供は良いです」

「私、お父さんが教師やってて、その影響でこんなアルバイトやってるんですよ」

「へえ・・・」

「秋月さんはどんな理由なんですか？」

「お前に足りない物があるから、ここで働いてみるって言われたんですよ」

「へえ、お父さんにですか？」

「いや・・・父親とは会話した事ないです。それにもうとっくに死んでますし」

「あ・・・ごめんなさい」

「いえ、事実ですから」

私が軽くそう笑うと、しばらく会話が途切れた、しかし、意外に気まづくなつてない。

そして私達はしばらく座りながら、黙ってジュースを飲む。

「親代わりだった人に言われたの」

「え？」

「父も母も親戚も、私達を疎んだ……でもその人だけは私達を唯一かまってくれた」

「へえ……素敵な人ですね」

「うん、ちよつと狡賢くて、腹黒くて、それでいて強い人」

「ハハハ、なんですかそれは」

私と岩瀬さんは笑いあった、歩んできた人生は多分対照的、ただどこうやって笑える。

過程なんて関係ない、今が良い状態ならばこうやって私は全く違う世界の人も関わられた。

今日はかなりの大収穫だ、これから私の人生はこうやって新しく始まっていく。

好きだの愛だのは後回しにしよう、色々な事を見て、色々な事を体験しよう。

心から、そう思った。

Days 3：天美命（前書き）

今回は命です。彼女については神々で色々書こうと思ってます。
命を書く時によく聞いた曲はさくらんぼですね。
次回は正宗、そして時雨の二本続きとなります。

Days 3：天美命

夕方の千島家のリビング、私と蒼ちゃんといもーとは一つの机で勉強をしている。

明日は編入試験、とりあえず筆記と面接があるらしい……全くめんどくさい。

ふと、時計を見ると時刻は午後六時、どうやらもう二時間も勉強してしまつたようだ。

（ねむう……）

自慢じゃないが、私は勉強なんて殆どした事が無い。

ぶつちやけ、小学校と中学校すらまともに行つてなかつた気がする、今思えばその記憶も全く無い。

私はとある事情により、五年以上前のほとんどの記憶を封じられている。

その前の自分はどうかだったのか気になるけど、今は気にしない。うん、気にしない。

そう　今はただ眠い、それが私にのこつた最後の感情……
・・とか言つて見たり。

うー！　うー！　うー！　うー！

目の前に、並ぶのは見た事のない複雑怪奇な文様、私の圧倒的な頭脳を以てしてもちつとも理解できない。

大体、何故編入に試験が必要なのかもわからない、学校行きたい人は行かせてあげればいいじゃない。

……そんな事を考え出して早十五分、さっきから全く進展していない。

そして、私は民望書房刊『これから学ぶ、中学数学の基礎』著岩瀬純也値段750円を睨む。

大体高校生の編入試験を受ける私が何で中学数学を勉強しなきゃなーらーないーのー！しかも隣ではさあ！

「ああ、ここはこの式を代入してね」

「ん……サンキュ」

蒼ちゃんといもーとが仲睦まじそうに勉強している。お前ら思春期の兄妹なんだからもつと離れるよ。

何て思うが、無論口に出せるわけも無く、私はシコシコと問題集に取り掛かった。

………しかし、五分でござーっ！ 世の中足し算割り算掛け算引き算が出来りや何とかなるのー！

「命ちゃんは出来た？」

「私の事はお義姉ちゃんと呼べー！」

「やだ」

うわ、このいもーと私のありがたきお言葉を一刀の下に切り捨てやがった。とても蒼ちゃんの妹とは………思えるね、うん。

この兄妹つてもしかして………結構似たもの同士？ だってありえないほど強いし、お互い何か根暗っぽいし。

それでも蒼ちゃんは顔とかかっこいいからいいんだけどねー………って双子だから似たような顔つきじゃん！

「何を悩んでるの？ その問題はさっき解き方教えたでしょ？」

「わからないもんはわからない！」

「命ちゃん……編入試験は明日だよ？」

「わ、わかつてるけどさあ……私が落ちるなら蒼ちゃんも落ちると思うよ？　なんたって中学二年から勉強してないんでしょ？」

私は蒼ちゃんに聞こえないように小声で言う、チラリと蒼ちゃんの方を横目で伺うと何やら黙々とやっていた。

するといもーと私に顔を寄せてきて小声で何かを喋りはじめた。

「言っておくけど……お兄ちゃんはあるえないほど、頭がいいんだよ？」

「ええっ！？　全然そうは見えない……」

蒼ちゃんは、私の中のイメージでは勉強が出来なくてドロップアウトしたヤクザ。

だって初めて会ったときが……桐生の家の人をばっさばっさと切り捨ててからねえ……

確かに怖かったけど、あの時の私はほとんど感情なんて持ってなかったからなあ。

お姉ちゃんと空我と大和が私の記憶を封じて、桐生の家に閉じ込めた真意はわからない。

あの日は凄く悲しかった気がする、ずっと泣いて、泣いて、泣いて、泣いて……お姉ちゃん達を困らせて……

（痛っ……）

頭の中に鈍い痛みが奔る、まだ思いだせないか……

「ああ見えて、中学の時は学年トップだったわ」

「信じられない……」

「人は見かけによらず、いい教訓だったでしょ？　じゃあ続きをどうぞ」

いもーとの無慈悲な宣告、いつか義姉になった時にはいびり倒してやる。

そう決意し、私は再び問題集へ向かう、すると家の電話が鳴り響き、私と蒼ちゃんは目でいもーとに出ると合図をする。

「もしもし、千島ですけど……ああ、お父さんか」

どうやら蒼威さんからの電話のようである。そういえば珍しく廊下に飛び出してないと思ったら出かけてたのか。

遥ママも見えてないって事はどうやら二人で出かけたようだね、この家って本当に放任主義だなあ……

私がここで暮らし始めて、約半月。主の蒼威さんは今まで働いた金でダラダラと生きており、遥ママはそれを容認しつつも

たまに嫌味を言ったりしている、そして子供の蒼ちゃんといもーとは毎日私と遊んだり、それぞれの暮らしをしている。

つまりは、平和って事、悪鬼討伐も全然していない、普通の子と全く変わらない生活。

「お父さんとお母さん今日は飲み会行くってー」

いもーとが私と蒼ちゃんに告げる、流石蒼威さんと遥ママ、まだ

高校生の子供を置いて二人で飲み会とは……

すると、私は蒼ちゃんの顔が固くなっているのがわかった……

この顔は何かに警戒しているような顔だ。

その表情が浮かんだのは一瞬であり、数秒後にはいつも通りの無表情に戻っている。あ、そういえば……………

「ねー、いもーと」

「ん？」

「私達の晩御飯はどうするのー？」

「何かテキトーに食料集めて食ってろって言われたけど……………」

「じゃあ、いもーとが何か晩御飯つくってよー」

「私があ？」

「この中で唯一の暇人じゃん」

「……………まあ、いいけど」

そう言つと、いもーとはキッチンの方向に向かって冷蔵庫を漁り始めた。

私は満足顔で勉強に戻ると、ふと視線を感じる……………横を見ると蒼ちゃんが無言で私を睨んでいる。何故？

……………もしかしたら勉強が進んでない私に怒っているのかもしれない、やん、もうそんなに私と一緒に高校に通いたいからね。

よっしゃあ！ 頑張つて勉強するぞー。私は脳細胞をフル稼働させて、すべての持てる知識を使い問題を解いていく。

……そんな時間が一時間半ぐらい経っただろうか？キッチンからはほんのりとした良い匂いが漂ってくる。
すると蒼ちゃんはいきなり立ち上がって、

「おい、命」

「なあに？」

「……俺、ちょっと用事思い出したからコンビニ行って来るわ」

「ん、いつてらっしゃい」

「……ガンバレよ」

そう言い残し、蒼ちゃんはリビングから出て行った。 フフ……
頑張っちゃおうかな！

ってーか、蒼ちゃんが私を励ましてくれるなんて凄く久しぶり、
何かすごく嬉しい！

いもーとの晩御飯も楽しみだ、遥ママの料理があそこまで美味し
い以上娘であるいもーにもかなり期待がもてる。

「命ちゃん、お兄ちゃん、出来たよー」

私は全速力で駆け出すと、キッチンの方へと向かう。

そこには真っ白な液体が置いてあり、中々に美味しそうなシチュ
ーがある。

いもーとはエプロンを外すと、怪訝そうな顔で私へ問う。

「あれ？ お兄ちゃんは？」

「んー？ 用事があるからコンビニへ行くって」

「ふうん……何かお兄ちゃんって昔から私が料理作る日は居ないんだよねー、突然遊びに行ったりさ」

「え……？」

いもーとの不思議そうな言葉に私はそれとなく不安を覚える、確か蒼ちゃんは食べる事が好きだったはず。

死罪六神時代は、ご飯の時間の五分前にはもう席についているという徹底っぷりだった。

その蒼ちゃんが……

「まあ、冷めちゃうから早く食べよ、今回ののはいつもより甘みが多くて美味しいはず」

甘みつ！？……天美じゃなくて甘みつ！？とか思ってしまうほど私は動転しているようだ。

確かにシチューには甘みは必要である、ただそれは野菜の甘みとかルーの自体のまるやかな甘みの事を言う。

でも、いもーとは幸せそうな顔をしてシチューを口に運んでいる、うん……あの反応なら大丈夫そうだ。

「あー、甘くて美味しい。やっぱり私は天才かも」

甘くて……？普通シチューの美味しさを表す時は他の表現ではないだろうか？

よくよく見てみると、私のスプーンを持つ手は震えていた。

「命ちゃん？ どうしたの？ 早く食べなよ」

「う、うん……」

いざ決心をして一口。

……、メー……ル……へ……ン……っ！な味がした、すなわちあ、あまままま、甘い……。

五十倍に濃縮された味のチーズケーキと、三キロはある生クリームを水と一緒にミキサーにかけて飲んだ感じ。

非っっっっっっっっっっっっ常に甘い。もう甘い、甘い、甘い、あま……い！

「この料理は甘いから、あんまり食べると太っちゃうのが難点なんだよねー」

幸せそうな顔のいもと、しかし私はそれどころではない、兎に角水が欲しい。

だが、あまりの甘さに声を出す気力すら起きない。「なんじゃこの料理はあ！ただの食物レイプじゃねーか」と言いたい。

しかし、天使のような笑顔でシチューを食べるいもと顔を見ているとそんな事は言えなかった。

「な……中々特徴的な味だね」

「お、命ちゃんはわかってくれる？時雨ちゃんとかママは生まれる時代が100年早かったとか言うんだよね？」

……時雨さん、遙ママ。多分この料理は100年経っても受け入れられないと思います。

私は意を決して再びスプーンをとり、シチューという名の暴力を胃の中に収めていく。

肝心なのは舌で味合わない事、普通に噛んで飲み込むだけならば味は感じない……………私の長い戦いが始まった。

30分後、何とか完食した私は、ソファで横になっていた。

いもーとがあんなに甘党だとは知らなかった……………今になれば蒼ちやんが私を睨んだ理由が分かる。

あのガンバレよ、は……………そういう意味だったのかチクショウ。すると、ドアが開く音がして、蒼ちやんがリビングへと入ってくる。そして、部屋の中に漂う匂いを嗅いで一瞬顔をしかめると、

「……………生きてるか？」

「ぼちぼち」

「あいつは大の甘党だ、もう半端ないぐらいな」

「体と心に刻み込み……………いや、刻み込まれました」

「ま、ドンマイ」

そう言うつと蒼ちゃんは私の頭を優しく撫でてくれた。うわ、よっぽど後ろめたいんだな。

でも……………凄く幸せ。こうやって撫でてもらえるならいもーとの殺人料理万々歳なような気もしてくる。

これはちょーっただけ、いもーとに感謝しなきゃいけないか

もね。だが体の調子は相変わらずよくないのが現実。
すると……

「あ、お兄ちゃん帰ってきたんだ」

「おう」

「お腹すいてるでしょ？ 私の作ったシチューあるけど食べる？」

「あ……いや、俺は途中クラスメイトに会ってちよっとラーメンを一緒に」

「何でクラスメイト？ 学校にもまだ通ってないくせに」

蒼ちゃんの顔に冷や汗。どうやら珍しく言い訳をミスったらしい。
少し取り乱しつつも、蒼ちゃんは慌てて言いなす。

「いや、絹柄と会ったんだよ」

「志穂？ あの子は今海外行ってるんだけど？」

「じゃ……じゃあ大野さん」

「じゃあって何よ？」

「い、いや……あのな、落ち着いてよく聞け」

「？」

本当に珍しい事に蒼ちゃんが慌てている。それを見ていて私は一

つの事を思いついた。
フッフ……愛しの彼女を見捨ててラーメン食べてきた罪は重いわよ。

「いもーと、蒼ちゃんはね。いもーとの料理を食べたいんだけど照れて上手く言えないからそんな言い訳してるんだよ」

「お、おい……命お！」

「何だ、兄妹なんだから遠慮しないでいいのにさ。んじゃこっち着て」

いもーとが蒼ちゃんを引きずってキッチンへと連れて行く。蒼ちゃんは多少の抵抗を試みてはいるが、

だが、いもーとは意に介さない、というよりも聞いてないんだと思う。恐るべし、千島遥緋。

そして壁越しにこんな声が聞こえた。

「ほら、いつまでも照れてないの」

「照れてねえっての！」

「ママからお兄ちゃんには優しくするようにつて言われてるんだから、ほらほら遠慮しないで」

「うっ……ぶほっ」

「ちょ、ちょっと汚ーいっ！！ 何でいきなり噴出すのよお！？」

壁の向こうから聞こえる騒ぎ声、蒼ちゃん、大好きだったよ……

安らかに……………

余談だが、次の日の編入試験はズタボロの体で行われた。

それでも一応合格ラインには達していたようで、私達二人は九月から高校生になれる。

ちなみに、蒼ちゃんと私のテストの結果はほとんど変わらなかったらしい。（試験後、蒼ちゃんはしばらくショックで寝込んだ）

そして私は改めて思った、千島遥緋、料理式神共に凶悪と認識。これから気をつけようと思う。

Days 4：八神正宗（前書き）

八神正宗は結構古くに作ったキャラですね。
考えた順番で良くと陸人の後に来ます。
次回は、このお話の続きで時雨です。

そろそろ神々も書き溜め終わったので、
十一月には投稿しようと思っています。

Days 4：八神正宗

とある梅雨の時期の早朝、僕は今年こそと思い朝一で墓参りにや
ってきた。

去年はギリギリだったからね、まあ、最近が悪鬼の数も減って時
雨が他の雑務をこなしてくれるから僕は結構暇なんだよ。

そろそろ八神の頭首もあの子に譲っていいのかもしれない、まあ
そんな事を考えながら僕は墓前に屈む。

墓は相変わらずそこにある、いくらそれを否定したって、もう深
雪は帰ってこないのが真実。だが、僕は語らずには居られない。

（今年も、生きてまたここにこれたよ）

今日は数年ぶりぐらいの一日オフだ。ここでしばらく回想してみ
るのも良いかもしれない。

僕がの世界が変わったあの日から、この世に絶望したあの日まで
の事を

僕の両親は、僕と兄を捨てて八神から出て行ってどこかで死んでしまっただけ。まあ、あんまり興味なかったね。

あの頃の八神は、本当に凶悪な集団だったと思う。僕の祖父はとても厳格な人で、僕と兄は厳しく、強く育てられた。

年齢70過ぎにも関わらずその力は若い僕と兄さんでも敵わないほど、それほどまでの格を有す男。

祖父は、主に力　　権力や武神についてを僕達に叩き込んだ。

その結果僕と兄の性格は歪み、僕は家の権力を誇示してやりたい放題、兄は武神という暴力を使ってやりたい放題やっていた。

だがしかし、僕と兄の仲は決して良くなかった。八神は実力を重んじる、すなわち強いほうが頭首になれるのである。

兄は日本各地を支配し、祖父に認められようとし、僕は祖父の傍で権力を使う事で認めさせようとした、今思えば馬鹿な話だが。

（まあ、今思えばあの頃の僕は馬鹿だったんだね）

そんな時、そろそろ僕も家庭を持ちたくなった、まあ僕だって健全な男子だからね。

そう　　そして祖父と浅葱要、詩歌の父親の策略により僕は浅葱詩歌と出会ったのである。

綺麗で、夢い子だったのが印象的、何故か僕は彼女に猛烈に惹き付けられ、そして結婚をしようとした。

（まあ、そこであの馬鹿達が絡んできたんだよ、深雪も知っているあの馬鹿達さ）

それが当時高校生だった高遠陸人、千島蒼威、神埼森羅の三人、今思い返しても彼らは非常識だったね。

だけど、僕には無い大切な物を沢山持っていた、馬鹿だったけど。ああ、それはもう馬鹿だったよ。

最初取るに足らないガキ共だと思って、僕は適当に痛めつけて詩歌から手を引かせようとしたんだ。

だが、あの三人はかなり強い　　というよりも高校生のレベルを超越していたと思う。

そして彼らの中の一人、千島蒼威が僕達緋眼の一族の分家の一つ、千島家の末裔だとは思ひもなかったよ。

千島は分家の中でも本当に謎が多い、二百年前から全く音沙汰無く、ほとんど一子相伝のような家だったらしい。

ああ、そういえば罪歌と狂と関わりだったのはこの後だな。

それから僕は詩歌やあいつらと関わるにつれ、人と人の心や、つながりなんかも学んだ。

それは、どんな権力よりも式神なんかよりも強く、強大な力
絆。

僕は詩歌との結婚を諦めた、不思議と祖父も反対しなかった、いやその頃あの人にはもう浅葱に興味はなかったんだ。

（千島、祖父は秋月よりも真砂よりも千島に多大な興味を示していた）

その後、僕と蒼威は緋眼使いらしく生身での決闘を試みた。

式神を使う気は全くない、今まで我流で緋眼を使ってきたチンピラに僕は負ける気はかけらもなかったんだと思う。

実質僕のほうが優勢だった、だけど蒼威はそこで千島の緋眼の昇華型、終式を発動させた。

…………… ああ、認めるよ、あれは完全に僕の負けだったね。

だけど負けて学ぶ事は数多くあったんだよ。祖父も僕達の戦いを満足そうに見つめていた。

それから僕は、己を磨き、新しい八神を作るために数多く勉強を開始。毎日が戦場みたいな感じだったね。

困難な道だったけど、今までの人生よりずっと充実していたと思う。

（そして深雪　君に出会ったんだ）

寒い冬だったと思う、再び縁談の話が来たんだ。その相手が水無瀬家の次女、小村深雪。

まあ、経歴はひたすらお嬢様な感じ、名門私立のエスカレーター式出身の子。箱入り娘、それが深雪の第一印象。

それでも一応名高い名家とあって、八神としては断る理由はない。そして、初めてのお見合いの時、

「正宗さんは、あまりお笑いになりませんかね」

「ヘラヘラしてる者に八神の頭首は務まりませんよ」

「じゃあ、私が貴方が笑顔になれるように、ついていて差し上げます」

…………… そんなやり取りがあったはず、そして僕達は結婚した。まあ…… お家の事情って奴もあったけどさ。

僕はあまり深雪の事を愛していなかった、やっぱり詩歌の事をずっと引きずっていたからね。

愛のない政略結婚、大きな家ともなればそんなのはほとんど常識

である、深雪もそれはわかっていたのだろう。
だが

「正宗さん」

「ん？」

「貴方が私を愛してない事は知っています、だけど……子供を作りませんか？」

突然の申し出、しかも愛のない事もまで深雪はわかっていてそれを望んだ。

ああ、言われなくてもわかってるよ、僕は最低の男なんだよ。それが僕、八神正宗。

翌年 時雨が産まれた。ああ年甲斐もなく久しぶりにはしゃいだね、子供って本当に可愛いと思ったよ。

そして多分そこからだ、僕が深雪を真剣に愛し始めたのは

「時雨、正宗さんみたいな子になっちゃ駄目ですよ」

「……嫌味かい？」

「あら、聞こえてました？」

「それはもう。まあ、許してくれとは言わないさ、これが僕の業だ」

「フフ……妻が夫を許さなくて誰が許すというのです？」

そんな甘い？会話が出来るほどになっていたね、ああ、僕もかなり成長したもんさ。

そう、あの時が人生で一番幸せだったと思う。何もかもが上手くいく気がして、僕は調子に乗ってたんだ。

祖父も、僕の事を認めてくれたようで実質八神は僕のもの、そして高校卒業間近だった、蒼威と陸人と詩歌が家に来ていた。

「千島と浅葱って、どんな事をしている家系なんだ？」

彼らはそう僕に問う。だから見せてあげた、世界の裏にうごめく悪鬼という名の生物を。

最初絶句するだけだった彼らだが、意外な事にこつちの世界に入る気になったようである、何故かはわからないけどね。

負けん気、体術、式神を扱う才能 全てにおいて蒼威と陸人は恵まれていた。

「これが、俺達の式神……」

そして彼らは卒業し、陸人と詩歌は浅葱の家へと行き、蒼威は蒼二と遥緋と遥さんを連れて八神へときた。

蒼二と遥緋はその頃はまだ幼児だったが、時雨とともに仲が良かったと思う。

そしてたまに罪歌と狂の相手をしに秋月へと出かけ、僕は二人の心のケアをしてあげ、僕もまた癒されていたんだと思う。

深雪も遥さんと上手くやっていたようで、僕と蒼威は安心して悪鬼討伐の使命を果していた。

（そして、あの事件が起きた……）

僕の兄、八神村雨が海外で悪鬼を狩る傭兵のような仕事から帰ってきた。

その頃の兄はもう人間が変わった様に荒れていて、まあ、無論の

事ほぼ八神頭首となっていた僕にケチをつけたわけだよ。

そして祖父は兄に言う。

「力だけが八神じゃない事を俺は知った、だから頭首は正宗とする」

「ふざけるよ……アンタが力が全てだと教えたから、俺はここまでやってきたのに……」

兄と祖父の確執。それは時雨や深雪にも多少なりの影響を及ぼしていたと思う。

その頃の時雨は、小学校低学年ながらも式神を使いこなし、多方面での才能を見せる正に天才児だったからである。

この僕ですら嫉妬するほどの才能、そして深雪の育て方がいいのだろう、性格までも人に好かれていた。

ある夜の事だ、蒼威達は家族で遙さんの実家へ行き、八神の他の者も悪鬼の集団討伐に出払っていたその夜。

時雨と深雪を寝かすと、僕はもう一仕事しようと思い、庭に出るすると……山の方から二つの式神の気配、しかもそれは兄と祖父の式神の気配、そして僕は走ったね、それはもう全力で……

「兄さんっ!」

「正宗、か……」

兄の式神【紅椿】血を操る日本刀の式神の刀身が祖父の胸へと刺さっている。

兄は虚ろな眼だが、明確な殺意を感じさせる眼で僕を見た。

「八神は、力だ……だから、お前を殺して……俺が 頭首になる

っ！」

緋眼を発走させ、兄は僕に迫る。

いつかは殺しあう、昔はそう思ってたが長い平和が僕をボケさせ　いや、安穩とさせていたんだ。

僕は久しぶりに昔の八神正宗へと戻り、その冷徹なる式神の刃で兄を引き裂こうとする。

僕と兄は怒声を上げながら、数時間殺しあった　血を分けた兄弟とは思えないほどの壮絶な殺し合い。

そして僕は勝負に出た二神風雷の最終形態、刀の柄と柄を接続した両刃の巨大な刀を構え、走る。

兄もまた、決着をつけようとしたのだろう、僕がつけた傷跡から大量の血の刃が現れ、僕らは一瞬ずれ違う。

その時の勝者は僕だった、僕は兄の左手を切り飛ばし、兄は僕に傷をつけられなかった。だが、

「俺は死ねない……いつか、いつか殺してやるぞ」

兄は最後の力を振り絞って、山へと姿を消す。

流石に追いかける気力は僕にももう無い。その場から僕は八神の屋敷へ帰ると、全ての事情を話した。

頭首の死と兄の裏切りが結果となり、僕は正式に八神頭首となる。夢にまでみた八神家頭首。

だけど、その全てを台無しにするようなニュースが舞い込んだ。

「正宗様」

「何だ？」

「秋月家が、悪鬼に一人残らず皆殺しにされました」

部下から報告を受けた時は、僕は目の前が真っ暗になったね。罪歌達とは、仕事が忙しくて一年ぐらい会えていない、その間にあった事は最近聞いた。

今でも悔やんでいる、僕はあの二人の優先順位をもっと上げるべきであつたと。

秋月家の屋敷に向かうとそこは酷い惨状であつた。

血の匂いが充満し、しかし悪鬼と戦つたので死体は食べられてしまい、ほとんど無い。

僕は必死で罪歌達を探したが、死体や子供の服の一部すら発見されなかった。

久しぶりに、絶望という物を味わつた、ひたすら、悲しい。それだけが心に残っていたんだと思う。

それから僕は、悪鬼の事や、秋月が何故滅んだのか、そして奥で見つかった不自然な死体。

それらの調査を数年かけて進めるうちに、やっと結晶まで辿り着く。

日本に散らばる八つの結晶、それを追っていけば真相に近づけるかもしれない、そう思い僕は蒼威と旅立とうとした。

そして一番記憶に新しく、最悪な絶望が僕を襲う。

変わり果て、死罪六神という組織を結成した罪歌と狂。

八神に乗り込んできた死罪六神は、その時は罪歌と狂と剣菱、そして実の兄、八神村雨までもが居た。

そして壮絶な戦いの結果、深雪は……………殺されてしまった。

あの事だけは、悔やんでも悔やんでも、悔やみきれない……………人生を最初からやり直したいくらいだ。

そうすれば今度こそ僕は……

そこまで僕が回想していたときである、不意に後ろから声がかかった。

「やあ、今年はお早いですね」

振り向くと、時雨が立っていた。

回想の時とは違い、いっぱしの大人となっている顔つき、何となく最近嫌味っぽくなってるのは気のせいだろうか？

僕は気がつかれないように、目頭を拭くと時雨の質問に応えた。

「まあ、ね」

「三十分も座りこんでいて、寝てたんですか？」

「……過去を、振り返っていた。僕の変わり始めた時から、深雪が死ぬ時までね」

「……………父さん」

「お前も、まだあの時から解放されてないようだね、一度回想でもしてみたらどうだい？」

時雨の花を持つ手に力が込められたのが見える。

この子もまたあの事件の犠牲者の一人、たまに夜一人で魘されているのも僕は知っている。

だけど、これだけは僕の力じゃどうにもならない、時雨自身で乗

り越えて欲しいと思う。

「……やってみます」

「そう、か。じゃあ僕は帰るよ……今日は久しぶりに、酒が飲みたくなったからさ」

「わかりました」

僕は息子を置いて歩き出した、そう　僕らの時代はもう終わりのかもしれない。

時雨はもう一人でやっていける。もう僕の出番はほとんど無い。戦いの痛みと愚かさを知り、尚且つ死を乗り越えられたら多分時雨は八神最高の男になってくれると思うんだ。

そうだろ？　深雪……だって僕達の大切な子供なんだからね

Days 5：八神時雨（前書き）

時雨は色々と試験的なキャラですね。
理解者、それを目指して書いたキャラです。
次回は、陸人か遙になりそうです。

Days 5：八神時雨

父さんが墓場から去っていった、多分僕が来る前からずっと居たのだろう。

あの人は何だかんだ言っで、他人に決して弱みを見せない。実の息子である僕にもね。

母さんを失って父さんはどうやってこの世界を生きてきたのだろう、誰にも弱みを見せずにたった一人ですつと……

……ふう、感傷だな。でもまあ、今日は言つとおりに関想でもしてみようか。

何もかもが上手くいく、そんな事を思っでずっと生きてきた僕、八神時雨。

小さい頃から、望むものは何でも手に入れてきたし、金で手に入らないものは全て努力で手に入れてきた。

周囲からは次代の八神として期待され、僕もまた跡目が僕しかないため、それになるつもりで頑張つてたね。

僕は基本的には、母さんと蒼二と遥緋と遥さんといつも一緒にいたと思う。もうほとんど家族のようなものだ。

（そう、あの人が居てくれたから僕は………）

蒼二はよくわからない子供だった、基本的には一人を好み、世界に興味が多くなさそうな感じ。

遥緋は遥緋でそんな蒼二と僕の後ろをチョロチョロについて周り、いつも不安げな顔をしていたね。

昔はいっぱい遊んだ。毎日家の中で追いかけてこいたり、外でボールやエアガンを使って毎日笑って、笑って、笑って……

そして、幼い頃から僕は上を見させられて生きてきた。

八神の人達は僕の事を天才だとか、八神最高の子供とか言ってく可愛がってくれたけど。

僕は満足してなかったんだよね。そう、小さい頃の僕の目標は蒼威さんと陸人さんと父さんだった。

どんな時にも冷静で、式神と緋眼終式を使いこなしどんどん名を広げていった蒼威さん。

没落していた浅葱の力を、あの真っ直ぐな性格と圧倒的な力で立て直した陸人さん。

そして……誰もが尊敬していた父さん。

（そう……僕は常に高みを見させられていたんだ）

僕は暇な時は蒼威さんと陸人さんによく付きまとった。

そういえば昔は蒼威お兄ちゃんと陸人お兄ちゃんと呼んでいたっけ、僕も可愛い子供だったな。

一緒に悪鬼を討伐しに行ったとき、囷にされたり、囷にされたり、餌にされたり、いきなり大群の中に投げ飛ばされたり……

あれ？ 今思えばあれは虐待だったのか？ 今度遥さんと詩歌さんに言いつけてやるって脅迫してみようかな。

いや……あの馬鹿みたいに愛妻家の二人の事だ、多分恐ろしい報復が待っているだろう。

今のうちに蒼二と遥緋と梨香を懐柔しとくのも将来のためかな。老後絶対いびつてやるためにもね。

……話が逸れたね。

でも僕は思うんだよ、あの二人が居なかったら今の僕は絶対に無いと思う。

あの人は僕よりも遥に勉強が出来ない、思考も馬鹿といえよう、特に陸人さん。

だけど……中身が格段に僕より上だ。それだけは認めてるさ。
そんな感じで、僕は毎日を幸せに生きてきた。

そんな生活が崩れ始めたのはあの夜からだ。

僕が確か小学校の上級生になろうかならまいかといった様な時期
だったと思う。

その日、僕はいつも通りに小学校へ行つて、いつも通り帰宅して、
蒼二と遥緋と他の八神と一緒に訓練を積んで、

母さんの隣でいつも通り明日を迎えようとしてたんだ、そう
僕は何も疑っていなかった、いつも通りの明日が来ることを。

「ん……？」

その夜、僕はトイレに行きたくなって目覚めたんだ。

僕は音を立てないように起き上がると、廊下へ出てトイレのほう
へ向かう。

八神の屋敷はその頃にはかなりの年季が入っていたため、夜中に
歩くと子供心なりにかなりの恐怖を感じた。

遥緋何かはいつも僕を起こしてトイレに行っていた気がする。蒼
二を誘えば良いのにと思っていたが、

多分あの頃から遥緋は蒼二に対して脅えていたんだろうと思う。
あまり仲もよくなかったみたいだしね。

（やっぱり怖いなあ……）

そう思いながら僕は用を足し終える。そして八神の家の周囲で爆
発的に式神の気配が高まったのを感じた。

何とも禍々しい、明確な殺意を感じさせる気配。当時十歳だった

僕は足が震えたね。

だけど、あの時の僕は動けたんだ。そして僕は恐怖を押し殺し、母さんに危険を伝えようとして走った。

「時雨君っ！」

八神の分家筋の信二さんが僕に声をかける。

その声を聞くからにどうやら状況はかなり悪いようだった。

「な、何が起きてるんです？」

「賊が侵入した……もう何人も殺されている。君は深雪様を連れて隠れてるんだ」

「で、でも……」

「冷たいようだが、君は足手まといなんだ」

そう、いくら式神の力が強く、剣術に秀でていたからって実戦で僕が役に立つわけが無い。

信二さんや父さんは人を殺した事がある。だけど僕はない。

その差は実際の殺し合いでは、かなりのハンデとなることをあの頃の僕はわかっていなかった。

そしてそんな信二さんも……二年前に真砂剣菱によって殺された。

「わかりました……」

それでも一応納得して僕は信二さんと別れて走る。そして廊下の角を曲がろうとすると悲鳴が聞こえた。

同時に空気の温度が熱くなっているという事にも気づく。そして

僕は廊下を曲がる

「……………っ！」

漆黒の長髪を持つ少女が八神の術者三人を相手にナイフを持って襲い掛かる。

その少女の目は夜の闇の中で爛々とした緋色に染まっていた。そう、それが秋月罪歌を僕がはじめた見た時。

僕よりも三つばかり年上の中学生のような外見であったが、雰囲気は完全に常人の域を超えている。

そして罪歌は鋭く疾走し、ナイフで術者達の急所を確実に切り裂いていく。一撃一撃に明らかな怒りを含んだその斬撃は、わずか数秒足らずで熟練した大人達を血の海に沈めていた。

「お前……………」

罪歌が僕を真っ直ぐに見据える。

情けない話だが、僕はその視線に射すくめられ、動く事もままならなかったね。

直前にトイレにいつてなかったら絶対に失禁していただろう。

「き、君は誰……………？」

緊張からか、そんな間抜けな質問をしてしまった僕。

すると罪歌は二秒ほど考え込んでから、僕に言う。

「秋月罪歌」

凜とした美しい声だった。

「秋月って……僕ら八神の本家じゃ……」

「……っ！うるさい」

罪歌が僕に向かって走り出した。ナイフを逆手に握り、多分僕の首筋を掻き切ろうとしたのだろう。

怖い、ただひたすらに怖かった。ゆっくりと死が迫ってくる感覚、そして僕は

「あああああああっ！」

無我夢中で悲鳴をあげ、何の手加減も制御も無く式神の力を発動させる。

荒れ狂う重力の波が、周囲一帯に破壊の力をもたらし、僕や罪歌をも巻き込んで顕現した。

だが、再び罪歌は緋眼を発動させ、重場の範囲から逃れる。そして右腕を僕に向け、

「炎帝」

そう呟く。すると罪歌の周囲に踊るような炎が現れる。

僕達が良く見ている暁闇炎帝の黒い炎ではない、真っ赤な、血のような炎だった。

そしてその炎は僕を恐怖のどん底に叩き込むには十分すぎるほどで、

「死ね」

無慈悲な宣告。爆発的な勢いで炎が僕の体を焼き尽くそうと迫った。

あの時のことは今でも思い出すと、我ながら良くやったと思う。
うん、だからこそ僕は今、ここに生きてるわけで。

そう、僕は自分にかかっている重力の力を軽くして、高く、高く
飛び上がった。

初めての事で、上手く力がコントロールできなくて、僕はかなり
の高さまで跳んだんだよね。

空へと登り、月さえも掴めそうな感じだった。そして下を見ると、
罪歌がポカンとした顔で僕を見ている。

「どうだ、ここまでこれるか」

そんな事すら口走ってしまったほどだ、さっきまで震えて死にか
けてたのにね。

僕はゆっくりと地上へと降りていく、罪歌は八神の追っ手を気に
していたのか、僕の事は放置して行ってしまった。

そしてちょうど母さんと僕の寝室の屋根の上に降り立つことがで
き、僕は部屋へと戻る。

「母さんっ！ 敵が来てるよ」

そう叫びながら、母さんの落ち着いた顔を予想しながら、僕は戸
を開けた。

しかし、そこに待ってたのは最悪の現実。ああ……足が、震えだ
してきたね、まだまだあの恐怖は根付いてるのか。

まず中に入って感じたのは血の匂い、そして赤く月明かりに輝く
日本刀、そして嫌いだった叔父の姿。

「時雨、か」

叔父が僕を見た。僕も叔父を見た。いや、その奥にあるものを

見てしまった。

それは血を流して倒れている母さんの姿。綺麗だった寝巻きや髪に血がこびり付き凄惨な姿となっている。

「あ……あ……あ……母さんっ！」

僕は母さんに駆け寄ろうとした、しかし叔父は軽く足を振って僕を蹴飛ばす。

どろりと、鉄の味が口の中に広がる。気持ち悪い。そして叔父は僕を憎悪の籠った瞳で見ると、

「俺は正宗が嫌い、八神が嫌い、だからお前も嫌い」

そう言い、刀を振るって僕を切り裂こうとした。でも、いつまで経っても痛みは襲ってこない。

僕はゆっくりと目を開け、前を見ると母さんが僕の目の前に立っている。

血塗れでも母さんは綺麗だ、何故かそんな事を思い　そして母さんの胸から銀色の刃が突き出す。

それは僕の顔の数センチ前で止まり、噴出した血が僕の顔へとかかる。

「時雨……ごめん………ね」

涙目で母さんが言った。そして叔父は次々と母さんの背を刀で切り裂く。

一発一発に母さんの顔が苦悶に歪んだ、だけど僕を見る目だけは笑っていた。

そしてついに、沈黙。

「馬鹿な女だ、抵抗しなければ楽に死ねたものを」

その言葉で、僕の中の何かが切れた。

全身が熱い、細胞の一つ一つが熱い、体が今にも焼ききれそうで、髪も逆立つような感触。

そう、それは紛れも無く僕が全てを忘れて、怒りに身を任せた初めの瞬間。

「う……あああああああああああつ！」

僕は全力で吼え、式神の力を何の躊躇いもなく、何の制御も無く周囲の空間に展開。

僕達が居た屋敷の屋根、壁、その他調度品、全てが荒れ狂う重力の嵐によつて吹き飛ばされ、砕かれ、破壊される。

それでも僕は力を止めようとしなかった、この世界が、全てが憎かったからだ。

その点において、僕は蒼二の気持ちが今なら分かる。あの子も多分こんな感じだったのだろう。

「ああああああああああああああああああああ……ああ……」

全ての力を出し尽くした僕は、全壊した屋敷の一部で母さんを抱えて座っている。

母さんはもう動かなかった、何度話しかけても、揺り動かしても全く動かない。

まだ暖かい体がだんだんと冷たくなっていくのもわかった、そしてそれと同時に僕の心も絶望に染まっていく。

「流石は、正宗の息子と言った所か」

後ろを振り向くと、血塗れの叔父が刀を振り上げて立っている。
僕はもう抵抗する気すら起きなかったね、もう世界がどうでもよ
くなってしまっていたんだ。

そして遠くから、父さんの声が聞こえた。

「時雨っ！ 深雪っ！」

「ハハッ！ どうだ正宗！ お前が俺から全てを奪ったように、俺
もお前から奪ってやったぞ！」

叔父が笑うと、父さんは唇を噛み締め、緋眼を発動させたのであ
ろう、目が赤く染まった。

だがその色は通常の緋眼よりも更に濃い、血の色。そう、八神の
緋眼墜式だね。

突如として父さんの姿が消え、叔父が吹き飛ばされる。

「なっ！？ 墜式だとっ！」

それが叔父の最後の言葉だった。次の瞬間には首が跳ね飛ばされ、
更に切り裂かれる。

どんだん人の形を無くして行く叔父、そして父さんはその死体に
雷撃を撃ち込むと、文字通り綺麗さっぱりと消した。

さっきまで自分の命を奪おうとしていた者が呆気なく居なくなっ
てしまった、そしてそれと同時に僕を気を失ったんだね。

次に僕が病院から出た時には、もう母さんの葬儀は終わっていた。
母さんの体は炎に焼かれ、僕が今立っている墓の下へと埋められ
ている。もはやどうしようもなかったんだ。

それから僕は 母さんの事を忘れようと、今まで以上に勉強に

励んだんだった。

そしてそれに追い討ちをかけるように蒼威さんと父さんは仕事で、数年間帰ってこなかった。

その間、僕の生きがいは八神の仕事を覚えるのと、蒼二と遥緋を鍛えることだけだった。

遥さんが僕を気遣って、しょっちゅう一緒に食事に招待してくれた。

多分、それがあったから僕は今も、殆ど歪む事無くこうやって今を生きてられてるんだね。

回想を終え、僕は立ち上がる。

今日ここに来て、回想できてよかったと思う、多分これで僕はまた一歩踏み出せるはずだ。

そして母さんの墓前に向かって、

「あの時はありがとうございました。貴女のお陰で僕は今日も生きています」

そう言つと、僕は踵を返して歩き出す。

これから蒼威さんの家にケーキでも持って行って見ようかな、僕をここまで育ててくれたお礼も言いたい。

それ以上に、僕はあの人達と会いたい。これもまた家族という形の一つのだろうか？

まあ、とりあえず今はケーキに集中しよう。これは結構重要。そう、あの家は好みに五月蠅い。

遥緋は激甘、蒼二と蒼威さんは酒系、遥さんはチーズケーキ。命

ちゃんは何だろう？ ま、蒼二と一緒に良いか。

Days 6：千島遥（前書き）

今回は、あまりスポットの当らないキャラ、遥です。

自分の創作では@ホーム以外全てに出てるキャラクターですね。そんなわけで次回は蒼威達が出会った時の話になると思います。

Days 6：千島遥

ええ、今日もいつも通りの日常が始まりましたとも。

私、千島遥の日常は、朝六時半に起きる事からはじまる。そう、子供達に朝ごはんを作ってあげるのだ。

長男の蒼二は私よりも早く起きて、ランニングや筋トレをしてから、朝食を取るため、いつまでもぐずぐずは寝てられない。

あの子がお風呂場でシャワーを浴びている音で、大体私は目を覚ますので、ここで寝過ぎしたら非常にまずいのよね。

「んつと……」

こういう声を出してしまうたびに、私は年老いている事を実感してしまう、ああ、永遠の十代がとても懐かしい。

高校を卒業したら、すぐに私と蒼威君は結婚したし、その数週間後に蒼二と遥緋が産まれたりもして慌しかった十代。

私の両親は私が小さい頃に他界していて、蒼威君もほとんど勘当状態だったので私達の結婚は凄くスムーズだった。

良姉ちゃん徹兄ちゃんも全く反対はしなかった、それどころか蒼威君に絡みまくって、逆に困惑してしまったぐらいである。

そして結婚式は私の生涯で一番楽しくて、嬉しかった日。空先輩や誠兄ちゃんや、夕姉さんや空音さん。様々な人が祝福してくれた。それが今は、三十五になっちゃってしまっている。お肌の張りも日に日に無くなって行くし、シミ対策もそろそろ本格的に考えなければ。

「ふむう〜」

床では相変わらず蒼威君が幸せそうな顔をして眠っている。

どうして一緒のベッドで寝ているのに蒼威君はいつも外側に出て行ってしまうのだろうか、それが一番の謎。

それにしても蒼威君、明るくなったなあ……初めて会った時はほんとど喋らない子だったのに。陸人君は何にも変わってないけど。……おっと、おっと、物思っている場合じゃない、朝ごはんを作らなきゃ。

顔を洗って髪に櫛を入れて、着替えると私はキッチンへと向かう。ああ……遥緋ったらまた変な甘い料理作って、キッチン中に妙な匂いが漂ってるじゃない。

フライパンも使ったら、ちゃんと洗つとくように言ったのに……ん、これは、甘くない……命ちゃんだなーっ！

後であの二人にはちゃんと言つとかなきゃ。全くもう。そして私がそんな事を考えていると、蒼二がドアを開けて入ってきた。

「おはよう、母さん。飯できてる？」

「あ、おはよう蒼二、もう少し待っててね」

「ん、わかった」

蒼二はそう言うのと、冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注いで机へと持っていく。

そして新聞を広げて、一ページ一ページ、じっくりと時間をかけて読む。本当に……こういう部分は誰に似たのだろう。

私は目玉焼きを焼きながら、息子の動きを観察する。近いうちに

株でもやるつもりなのか、経済欄をよく読んでいる。

……おっと、そろそろ焼き上がりだな。

「はい」

「ん、いただきます」

命ちゃんと遥緋が起きてくるまでにはまだ時間はたっぷりとある。朝のこの時間だけが、私と蒼二のコミュニケーションの時間でもあった。特にこの子は相談とかしない子だから特にね。

新聞を読み終わり、朝ごはんをあつと言う間に平らげる蒼二、暇だった私は学校の事とかを聞いてみる事にした。

「高校は、楽しい？」

「ん、まあ……神璽とか男の知り合いが居たから、何となくは溶け込めてる」

……よかった。中学校の頃の蒼二は、誰とも接せずに居たと聞いている。

やっぱりそれはとても寂しい事だと思うし、母親としても息子には笑っていてもraitai。

この子は、色々と傷ついてきたに違いない。あんまり蒼威君はそっちの事は話してくれないからよくわからないけど、

蒼二は……大切な女の子を闘いの中で失って、それで人殺し紛いになってしまったらしい。

でも、私は最後までこの子の味方で居ようとは思っている。だって昔がどうであれ、今はとても良い子だから……

「母さんの高校時代はどんなだったんだ？ あはかあやじの駄目生物も今より

もつと駄目駄目だったのか？」

「蒼威君は、クラスの中じゃかなりまともな子だって言われてたよ？ 委員長もやってた事もあるからね！」

私がそう言つと、蒼二は急に悲しそうな顔になった。え？ 何か変な事言つたかな？

すると蒼二は、一度溜息をつくつと、真っ直ぐに私の目を見ながら言う。

「母さん……そんな見え透いた嘘をつかなくてもいいんだよ」

「え……事実だけど？ 蒼威君はクールで、結構物静かな子だったよ？」

「なっ……！ ありえねえ……どうやってたらあそこまで人間墮ちれるんだ」

蒼威君が明るくなつたのはあつちの世界で、仕事をするようになってからかな。

いや、多分蒼二と遥緋が産まれてからだと思う、蒼威君も蒼威君なりに考えての事だと思うけど。

まあ……それにしても、ここまで息子の信用が無いとはね、十年も会つてなければ当たり前の話だけだよ。

そつえば、どっかに昔の写真があつたはず……どこだっけ？

「まあ、昔の事は今度教えてあげるわ、そろそろ命ちゃんと遥緋を起こしてきて」

「ん、わかつた」

返事を見ると蒼二は二階へ上がっていった。このまま蒼二は二人を起こして、自分は制服に着替えるのよね。

最近の流行だかわからないけど、蒼二の制服は沢山のアクセサリーがついている。

私達の時代は、腰パンが主流だったためあんまりそういうのは無かったなあ……まあ腰パンしなだけで十分マシだね。

そうやって、私が時代の差を感じていると、今度は命ちゃんと遥緋が降りてきた。二人とも相当眠そうである。

「おはよう」

「んー…………おはよ」

「遥ママおはよー……」

私の差し出した朝食を眠そうな顔で頼張る二人、こっちのほうが本当に姉妹っぽいね。

ああ、最近もう一人欲しいなあ…………なんて思ってしまったている。年齢的にも多分最後だと思うし。

蒼二と遥緋もやっぱりああいう生き死にの世界で生きているから、いつ居なくなってしまうともわからない。

こればかりは、蒼威君の血筋に感謝している。この家で私だけが持っていない力、緋眼。

私の血統、海野も正宗さん曰く、中々のモノらしい…………まあ、徹兄ちゃんや誠兄ちゃん何かはまさに天才といえるだろう。

昔から馬鹿みたいに強かった誠兄ちゃんだけど、徹兄ちゃんと良姉ちゃんには絶対勝てなかったな、やはり海野にも優劣はあるのかな？

「ごちそーさまー」

「あ、命ちゃん……先に洗面台使う？」

「んー……今日はいもーとが先で良いや」

「わかった」

すると命ちゃんは食器を水につけて、二階へと上がっていった。
我が家のこの時間の洗面台は正に戦場、まあ、女の子が二人も居るからしょうがないんだけどね。

遥緋ものそのそと歩くと、洗面所へ向かう。命ちゃんが着替え終わるまでは約七分。

全く、髪の毛を縛りなさいって言っても時間が無いとか、ダサいとか言う遥緋……まあ、私もそうだったけどね。

すると何やら廊下のほうが騒がしい、ああ……今日もアレか。

「おい蒼二！ お父様を蹴り飛ばすとは何事だ」

「んなとこで寝てるほうが悪いだろうが」

「この家は俺が建てたんだからな、すなわち俺の領土だ」

「ヘッ……知ってるんだぜ。この家を建てる金は八神から出たらしいじゃねーか」

「うつ……時雨か」

「十年分働いたんだから、庭付き一戸建てよこせたあ、随分出世したじゃねーかよ」

今日も今日とて、蒼威君と蒼二はいがみ合う、そういえば蒼二は昔から蒼威君には懐かなかったわね。

まあ、多分これが不器用な二人なりのコミュニケーションだと思う、ってかそう思わなきゃやってられない。

すると階段をドタドタと命ちゃんが下りてきた。

「蒼威パパさんと蒼ちゃん邪魔！『お座り』」

命ちゃんの式神の力が今日も発動したらしい。蒼威君と蒼二は横目で睨み合いながら正座をしている。

すると今度は洗面所から遥緋が飛び出してきた、蒼二と蒼威君を「またか」みたいな目で見ながら通り過ぎた。

そう、これがこの家の朝の日常……この人、達疲れないのかしら？

そんなこんなで、私が洗い物なんかをしていると、三人が学校へ行く時間となった。

玄関に出て、私が見送ると命ちゃんは元気いっぱいに行ってきたーすという、うんうん、明るい良い子だね。

しかし、最愛の息子と娘は一人は家の前で煙草を吹かしており、もう一人は寝ぼけ眼で立っている。

「いつてらっしゃい」

私は笑顔で三人を送りだすと、リビングへ戻って今度は蒼威君のお世話。全く、主婦は忙しい。

そして非常に珍しいことに、蒼威君は今日は朝っぱらからお酒を飲んでいない、それどころか着替えていも居た。

時刻はまだ八時を過ぎたばかり、いつもならこの時間は二度寝

しているのに……

「今日はどこか行くの？」

「ああ、森羅が今日休みらしいから、陸人も連れてどっか行こうと思ってるね」

「陸人君……仕事は？」

「何か今、八神と合同でやってるらしいから時雨に頼んだらしい」

「時雨君も災難ね……」

「ま、そういう星の下に生まれたような男だ、じゃあ行って来るよー！　また連絡するね」

「はい、いつてらっしゃい」

今度は蒼威君を見送ると、私はとりあえずたまった洗濯物から取り掛かる事にした。

この家は現在五大家族にしては洗濯物が少ないと思う。遥緋と命ちゃんも大半は制服で過ごす。

問題は蒼二と蒼威君。この二人は妙に服にこだわりがあるらしく選択のしかたにうるさい。

このジーンパンは洗うなだとか、このシャツは自分でやるとか注文をつけるのよね。まあ、愚痴っても仕方が無い。

洗濯物を終えると、私はソファに寝そべってしばしのお昼寝をする。

そして一時間ほど眠ると、お昼の準備をし、それから軽くストレッチ体操の時間。

昼ズバツとを見ながら、朝ごはんの残りを私が食べていると、玄関の呼び鈴を押す音が聞こえた。

「はい」

返事をして戸を開けるとそこには詩歌が控えめな笑顔で立っていた。

詩歌とは高校からの付き合いだが、最初は凄く暗くてm苦手な子だったけど、今は親友と呼べる。

私達はたまにこうやって集まって、お互いの旦那への不満や、子育ての難しさをかたっているのだ。

「陸人が逃げ出したから、時雨君から私もお暇を貰っちゃってね。今大丈夫？」

「ごめんねえ、多分それウチの蒼威君の陰謀だと思う。まあ上がって上がって」

詩歌は気の利く子で、いつも何かしらお菓子を持ってきてくれる。そして私達はTVでワイドショーを見ながら、お茶とそのお菓子を食しながら語り合う。

「それでね、陸人ったらね……また何かやってて、これは出会い系じゃない！ネットの知り合いとか嘘についてさ」

「ああ、相変わらず間抜けな言い分けだねえ」

「私、今回ばかりは本気で怒ってもう別れるって言ったの」

「おお、詩歌も言うようになったね」

「だってそれだけ怒ってたもん！　そしたら子供みたいに泣き出してさあ……やっぱずるいよ、アイツ」

これまた、詩歌も十数年経てば変わるものだ。昔は「高遠くーん、えへへ」とかデレデレだったのに

今じゃ完璧に尻にしている。まあ、あの甲斐性なしの大馬鹿者が夫ならば当然といえば当然だけどね。

「その点、ウチの蒼威君は安心だわ。蒼二が色々情報集めてるし、遥緋もよくプレッシャーかけてるからさ」

「蒼二君も遥緋ちゃんも優秀で良い子だもんねえ、ウチなんかは梨香が反抗期でね」

「あら、梨香ちゃんはウチの子の数倍は素直だと思うわよ」

「それが、親に黙ってピアス開けたり、最近なんか化粧もちよっと濃くなってきたね」

「それは女の子だもん、私だって高校生の時はあけてたじゃん」

「私は、ほら地味な女だったからさ……何ていうかね……よくわからないの」

「あはは、確かに高校の時の詩歌は地味だったわ」

「ひどーい！ それにしても、遙は昔から変わらないよね」

「何？ 私がそんな老け顔だったって言いたいのか？」

「初めて会った時、先輩かと思ったもん」

「なっ……………！？ 詩歌……っ！」

そうやって私の午後は過ぎて行った。

そして、久しぶりだったため私と詩歌は夕方まで話しこんでしまった、そろそろご飯作らなきゃ。

こういうときはお互い主婦なので、知恵を出し合い話し合う。

「どうせ蒼威君達はウチに帰ってきそうだから、今日は晩御飯一緒に食べなてかない？」

「ああ！ それ凄く助かる……でも梨香はどうしょ」

「携帯で連絡してウチに来てもらえばいいじゃない、何だったら蒼二を迎えに行かせるわ」

「うーん、じゃあそうしようか」

こうして、私達主婦の戦場が始まる。とりあえず詩歌は梨香ちゃんと連絡を取り、私も蒼威君と連絡を取る。

とりあえず、晩御飯を皆で食べようというと、蒼威君も森羅君も陸人君も乗り気であり、決定。

梨香ちゃんもどうやら学校が終わったら来るらしいよいよ本格的になってきた。

そして私と詩歌は近所のスーパーへ買い物へ行き、色々と相談しながら買い物をする事一時間。

ようやく、家に着いて私と詩歌は本格的に主婦モードへ入る。

「じゃあ、そっちの揚げ物の下ごしらえはお願い、私はツマミを作るから」

「わかった」

そんなこんなでひたすら料理を作り続ける私と詩歌。詩歌は高校の頃から料理が上手く、私はド下手だった。

しかし、千島に嫁にきてから深雪さんに沢山教えてもらったので、まあまあの腕前にはなったと思う。

「ただいまー！」

玄関のほうから蒼威君の声がした。それに続いていくつかの足跡も聞こえる。

どうやら、陸人君や森羅君も一緒らしい。すると、リビングを抜けて森羅君がキッチンへ入ってきた。

「お、詩歌ちゃん久しぶりー」

「あー久しぶりだね。神代の時も結局全然会えなかったからねえ」

「俺達はまだ浅葱とは関わりないからね、っと遙ちゃん一つ頼みがあるんだけどいいかな？」

「なあに？」

「今日、神璽と由加も呼んでやっていいかな？
ほら、やっぱたまにはこういうお袋の味みたいなのを食わせてや
りたいしさ」

「あ、全然オツケーだよ。詩歌もいいよね？」

「うん」

「悪い、助かる。じゃあ蒼二達と一緒に来るように連絡入れとくよ」
森羅君はまだ結婚はしていないが、多分あの二人の事を子供のよ
うに思っているのだろう。

それにしても粋な計らいじゃない森羅君。高校の時からこうやつ
て結構人の感情には敏感だったのよね。

神璽君と由加ちゃんもとても良い子で礼儀正しいし、森羅君も可
愛くてしょうがないのであろう。

後数十分もすれば、蒼二達がいつも帰ってくるころあいの時間。
今日は久しぶりに何か楽しい、いつも楽しいといえれば楽しいの
だがやっぱり人が多いと違う。

私以外の皆は悪鬼と関わる世界の住人、いつこの世から居なくな
ってしまうかわからない。

だから、こうやって一日一日を大切に、楽しく過ごせたらいいな
と私は年甲斐もなく思ってしまった。

D a y s 7 : 神崎森羅（前書き）

今回はいつもの倍長いです。

次回は、神璽が由加だと思っています。

Days 7：神崎森羅

今日は仕事が珍しく非番だったので、蒼威と久しぶりにどこかへ出かけることになった。

蒼威は十年間働き詰めだったらしく、ここ数年というか、俺が再会したときにはかなり自堕落な生活を送っていた。

千島蒼威と言う男は非常に掴みづらい男。陸人なんかはいい意味で馬鹿なのである程度は読める。

だけど蒼威は今でもよくわからない、遙ちゃん何かはやっぱ妻なので結構わかつてはいそうだけどな。

まあ、そんな訳で中学校から始まった友情もここまで続いている。例えば、蒼威と陸人が居なきゃ……俺は多分、もうこの世にくに見切りをつけて自殺でもしていたのだろう。

それだけ、こいつらは俺にとって重要で、大切な友達なんだ。決して口にはしないけどな。

「よし、陸人も誘おう」

「アイツ……今日は八神と仕事じゃねえの？」

「そこはまあ、時雨に頑張ってもらおう」

相変わらず無茶苦茶な奴だとは思う。灼也に比べればこれはまだ軽いほうだけだな。

灼也はホントにもう、陸人と誠一先輩を足して二倍にして魔女で

割ったような感じだった。

そして俺達はバイクを転がして、八神と浅葱の仕事先へと向かう。

俺達はある山の中腹にある場所へやってきた。

途中から通行止めとなっていたが、蒼威の顔を見た瞬間その許可が下りる。

流石、俺の部隊の危険人物リストのトップ10に入るほどの男だ。しかも顔パスとは中々できる事じゃない。

「そろそろつくぜ」

蒼威はそう言うバイクを止めて、どんどんと林の中を歩いていく。

俺もそれに続いてしばらく歩いていくと、何やら段々と人の声が聞こえてきて、同時に式神の気配を感じた。

やっぱ今日は悪鬼狩りか、最近ほとんど出ないために家同士の争いが大きくなっているらしいがな。

そして俺達は、開けた場所に出た。そこではやっぱり悪鬼狩りが行われており、あらゆる所で闘いが広がっていた。

そんな争いの渦の中を俺達はこつそりと歩き、少し離れた場所で指揮をしていた時雨を見つける。

「よお、時雨。陸人貰いにきたぜ」

「ゲッ……！？ 蒼威さんに森羅さん……何故ここに？」

「だから陸人貰いにきたんだよ」

「それは困ります。今戦ってるのは八神の次代を担う子達です。やっぱりフォローが無いと心配なんですよ」

通りで若い奴が多いと思ったが、そういう事か。ってことは全員緋眼使いと。

一族の教育に熱心だねえ……八神ってのは。まあ、俺みたいな普通の家産まれの奴にはわからんけどな。

「ふうん……テストみたいなもんか？」

「そうですね。でも、もうテストは終わってるんで、後は残りの掃討だけなんです、これが中々進んでなくて」

「んじゃ、俺がやるわ」

「ちょ、ちよつと蒼威さん!？」

突如として蒼威の周囲に式神の気配が生まれて、次の瞬間には十個の球体が現れていた。

これが蒼威の式神、【大我】銀色の球体を様々な形にして使役する中々に厄介な式神である。

俺達の部隊の情報網によると、蒼威は本気を出すと【鎧】【羽】【剣】【獣】の四つの型を作り出して戦うらしい。

俺が見たことあるのは、そのうちの羽と剣ぐらいだな。

「行け」

そう短く言うと、大我が鋭く飛んで行き、様々な武器に形を変えて悪鬼を襲つ。

まさに圧倒的。中々駆逐できていなかった悪鬼が次々と絶命して、この世から消え去っていった。

「ハア……じゃあ、僕は指示をだしてきますね」

もうどうにでもなつてしまえ、見たいな感じで時雨は下に居る八神達の下へと歩いていった。

なんていうか……時雨は大人だな。いや、こいつらが子供すぎるのか。

蒼威は蒼威でもう用はないとばかり、煙草をふかしながら黙って待っている。

「おー、お前から来てたんか」

突如として陸人の声が聞こえた。

コイツはもう赤髪は辞めてしまったが、顔つきは相変わらず変わってないので一目で分かる。

ああ、でもあの赤髪時代はともわかりやすかたつたなあ……何処で見かけても、あの馬鹿だと思えたし。

「おう、これからどっか遊びに行こうぜ」

「おーいいな！ んじゃ後は時雨に押し付けてレッツゴーだ」

「よっしゃ、行くぞ森羅。」

何の後ろめたさも感じさせる事無く歩いていく蒼威と陸人。

時雨があそこまで大人っぽいのは、こいつらとずっと一緒にやってきたからではないのだろうか……

そして俺達はバイクへ乗って、いろいろな場所へと行った。

通ってた中学校、高校跡地、そして山の上にある温泉。どれもこれもが懐かしくて、久しぶりに楽しかった。

俺は自衛隊に入ってから十数年ほとんど友達も作らず、ずっと一人で居た。

何度か結婚とかも考えたが、どの子と付き合っても長続きはしない、いや、させる気がなかったんだな。

俺がこの世で唯一愛した女性は　　母さんだけだったのかも
しれない。

いや、肉欲とかそっち方面での愛は無かったな、昔はどうだったか覚えていないが。

俺の母さんは子供の頃から病弱で、それでも一生懸命生きてきた。けど悪い男に騙されて俺が産まれ、親父は蒸発。

その後再婚したが俺のせいで結局離婚。今ではもつくとばったのかもな、あのおっさんも。

「じゃあ次は家で飲もうぜ！」

「おー遙ちゃんや蒼二と遥緋に会うのも久しぶりだな」

「相変わらず二人とも生意気だよ。お前んとこの梨香が羨ましいぜ」

「いや、梨香も梨香でうるさいんだよ……お父さん、もっと綺麗にお風呂使ってたかさ」

「あーそれは、ウチの遥緋と命にはねえな。俺のほうが先に風呂入るし」

「……お前、どんだけダラけてんだよ」

「10年間休みなしだったからな、後二年はダラける！……ん、森羅どうしたよ？」

どうやらずっと発言が無かった俺に気づいたらしい。
俺はフツと軽く笑うと、

「いや、なんでもねーよ。早く行こうぜ」

蒼威の家に着くと、何故か詩歌ちゃんが居た。そういえばずっと会ってなかったなあ。

俺らの部隊はまだ浅葱とは面識が殆ど無いし、詩歌ちゃんは内務に追われているため現場の俺と会うことは少ないからな。

まあ……この子もよくここまで変わったもんだ。最初は凄いとっつきにくい子だったのに。

そして俺は遥ちゃんに神璽と由加の分の食事を頼むと、蒼威達の居るリビングへと戻る。うわ、もう酒開けてるよ……

「ああ、やっぱり仕事の後の一杯は美味しい」

「おう、これは労働したモンにしかわからねえな」

どの口がそんな事ほざきやがる。この反社会人軍団め、俺なんか公務員だから大変なんだぞ。

全く……自衛隊つてのは金払いはいいのだが、いかんせん自由が足りない。

まあ、この部隊は特殊の中の特殊みたいなので、めんどくさい規律とかがあんまりなくていいんだけどさ。

そして、俺達がそんなこんなで話していると、

「ただいま」

「ただいまーっ!!」

高校時代の遙ちゃんと良く似た声、遙緋ちゃんと命ちゃんが帰ってきたのだろう。

そして数分後に私服に着替えた二人が、リビングへと降りてきた。なんていうか……今も昔もこの年頃の女の子の服装は代わり映えせん。

「あ、陸人さんと森羅さんこんにちはー」

「こんにちはですー!」

「ういーっす。お邪魔してます」

「お邪魔してます」

すると二人は俺達と同じテーブルに座り、俺達の酒のつまみを物色しながら一緒にTVを見る。

そんな穏やかな時間がしばらく続くと、ふと遙緋ちゃんが言い出した。

「そういえば、お父さんと森羅さんと陸人さんっていつごろ仲良くなったの？」

「んー……確か蒼威が俺らの通ってた中学校に転校してきたんだよな？」

「そうだ。俺と陸人が確か中一の秋だったかな？　確か転校してきたはずだ。」

「あの頃の蒼威は、マジで弱くてウジウジしてるもの静かな奴だった。」

「それが今では……」

「へー！　何か意外」

「確か陸人は転校初日に、灼也に二階から叩き落されたんだよな」

「ああ……まだ可愛い中学生だった俺に緋眼を使いやがって……つてかそういう森羅も肋骨折られたんじゃないか」

「そうだったか？」

「蒼威は聞こえないふりをしている。まあ、娘にあの頃の事とかはあまり知られたくないんだろうな。」

「弱かった自分を乗り越えて、今の自分へと成長した蒼威。まあそれはそれでいいのだが、」

「たまにはこういうめに合ってもいいだろう。」

「聞きたい？　蒼威と俺らが出会った頃の話」

「はい！」

「凄く興味あるよね〜どこまでここまで落ちたのか」

そして俺は話始める

全てが変わったあの日の事を。

あの頃は、それは毎日イライラしてたんだよな。
くだらねー社会。くだらねー学校。そして俺の存在と家庭の事情。
全てにイラついていた。

俺の母さんとあの時の義理の父は、あまり上手くいったとは言いがたい、俺もガキなりにそれに気づいていて、
だけど俺みたいな中坊にできる事なんてなかったんだ、だから俺は力を求めた。

最悪の場合のために、手を汚して生きるために

「テメーが三年の有働か」

「ああ？ 何だテメーは！ 二年坊のくせに三年の俺を呼び出すと
はいい度胸」

俺は有働が言い終える前に、もう奴の顔面を殴りつけていた。

一発一発に拳の痛みと、人を殴っていると言つどうしようもない
快感が襲ってくる。

そして倒れた体に更に蹴りを食らわせると、やがて有働は抵抗を
やめた。

「おいおい、三年の頭がこんなモンかよ」

「テ……テメエ………」

どうやらまだ懲りてないようである、俺はポケットからナイフを
取り出して顔に近づける。

案の定ナイフを押し付けられた有働は途端に大人しくなった。刃
物つてのは中坊にとっちゃ最強の武器だからな。

「なあに、今までどおりこの学校のトップはアンタでいいんだよ」

「……何だと」

「アンタは今まで通り威張ってりゃいい。邪魔する奴は俺が殺すか
ら安心しろ」

「何考えてやがる」

「俺は表に出る気はねえ……だから表はアンタが威張ってるが、ア
ンタは俺の舎弟だ。いいな？」

「わ、わかった」

「ああ、ちなみに……俺の正体を誰かに言っ た場合……マジで殺すから」

それだけ言うと、俺は有働の返事も聞かずに立ち去る。

これで三年は飼いならした、残りは高等部のクソ共と同学年と二年だけだ。

元よりたいした奴の居ない三年には興味ない。ぶっちゃけ同学年の方がかなりキツイ。

（そっぴや、最近A組の頭が変わったんだよなあ）

A組はそれまで柴崎って奴が威張ってたのだが、最近高遠に変わったらしい。

高遠陸人。確か小学校が一緒だった気がする、中学生離れた身長とガタイだが、基本は大人しく、

何処にでも居る普通の奴だったと記憶している。コイツがブチ切れて柴崎達を全治一ヶ月にしたらしいな。

（確かこの前A組で死人出たよな……確か宮下だったけ？）

コイツも確か小学校が一緒。んでスゲエ苛められっ子だった気がする。

まあ記憶にも残らねーどうでも良い奴だ。死んでも俺は何とも思わなかった。

そして俺はその後、順調に所属していたE組を支配し、その後C・Dの頭も片付けたんだ。

「どいつもこいつも骨がねえ……ちょっと血が出たぐらいでギヤーギヤー騒ぎやがる。」

「だったら最初っからツツパるんじゃないって話だよ。俺とテメーらじゃ覚悟が違ってたの。」

「そしてそんなある日、俺が高遠陸人をぶっ潰そうとA組に向かっていた時だった。」

「ガシャンとガラスが割れる音がして、何かが廊下に落ちる音と共に悲鳴。」

「あーあーあーあー、喚きすぎなんだよ、ウゼエ。」

「俺が人ごみを掻き分けて、ようやく事態が見える位置に行くと陸人がそいつに蹴りをくれていた。」

「おい……明が死んでどうしたってえ？」

「わ、悪かったよ高遠……た、頼むからもうやめてくれ」

「血塗れの顔で懇願するそいつ。しかし陸人は、」

「何で……何で明がいねーのに………テメーが生きてんだよ！」

「更に蹴り続ける陸人……ふうん、中々危ねえ奴だな。腹が据わってやがる。」

「その場に居る全員は、陸人の圧倒的な暴力に何も言えずに居た。そして俺がそろそろ止めようとした時、」

「コラア！ 高遠、お前何やっている！」

「ああ？ 黙ってる……殺すぞ」

A組の担任の鈴木が陸人を止めようとするが、その気迫に押されて手を出せない。

ってか、この場に居る俺以外の全員が陸人にブルツちまってるかな。まあ、無理もねーけど。

仕方ない……騒ぎが大きくなると俺も動きにくくなるし止めるか。

「おい、高……その馬鹿頭、邪魔だ」

俺の声を遮って誰かが声を上げた。

その場に居る全員が声のした方を向くと、そこには見慣れない生徒が居る。

黒髪で色白のいかにも弱そうな奴、だけど目だけが何故か軽く赤っぽくなっているそいつ。

上級生か？ と一瞬思ったが腕章を見ると俺達と同学年のようである。

「テメー……今なんつった？」

「馬鹿頭、邪魔だ」

「ああ？ テメー喧嘩売ってんのか？」

「別に？ 買いたいなら別だけどよお」

挑発するように笑うそいつ、そして陸人がキれた。

何も考えずに、腰と体の回転をいれた拳を全力でそいつに打ち込む陸人。

……ふうん、中々のパンチ持ってやがるなこいつ。

だが、そいつはそれを軽く避けて見せた。

「なっ……！？」

（避けた！？）

まさか避けられるとは思わなかった陸人。いや、俺も絶対にあのパンチ一発で終わっていたと思った。

だけ現実にそいつは避けて見せて、更に

「ハッ！ 井の中の蛙ってか？」

速い、いや……速すぎる。そんな速度でそいつは陸人の体に蹴りや拳を浴びせた。

格闘技の試合でもあんなに早い動きは見た事が無い、それほどの速さでそいつは陸人を殴りつける。

すぐに顔が腫れ、血が噴出す陸人　そしてそいつは一旦陸人から離れ、

「フィニッシュ！」

助走をつけて走り出し、陸人にドロップキックを放った。

流石にガタイの良いあいつでもその威力は消し去れなかったのだろつ、そのまま窓を突き破って下に落ちて行く。

おいおい……ここは二階だぜ。打ち所悪かったら死ぬっての。

だが、そいつはそんな事を全く気にするわけでもなく、高らかに指を掲げて勝利の余韻に浸っている。

すると、今まで呆気にとられていた鈴本が声を張り上げた。

「何をしてるんだ！　転入生　千島、千島蒼威！」

それが俺と蒼威と陸人の初めての出会いだった。

それから蒼威は一週間の停学となり、陸人も一週間の入院となった。

その間俺はというと、暇で暇でしょうがなかったため、B組の矢崎を半殺しにし、残るはA組だけとなっていた。

俺の最終目標は　この学校の十代の支配何かじゃねえ。この町の十代を全て支配するつもりだった。

暴走族やギャングだって、集会とかをビシッと決め手やりやあ…

…仕事にはなるんじゃないか？

そんな思いから、俺はそれを実現させようとしてやって頑張っているわけだ。

勿論母さんにそんな事がバレたら、多分泣くだろう……でも俺にはこの方法しか思いつかない。

まあ、今の所学校の奴らにはナンパ野郎ぐらいにしか思われていないからいいんだけどな。

そして一週間後、俺が学食で飯を食っていると、急に周囲がざわついた。

皆の視線の先を見ると、陸人と蒼威が何故か並んで歩いている…

…何故だ？

蒼威は前とは違い、弱弱しい態度で周囲にビクついているし、対照的に陸人はスッキリした顔をしている。

この一週間……あいつらに何があったんだろう？　まあ……俺には関係ない、今日潰すか。

放課後、俺は廊下を一人で歩いていた蒼威に声を見つけた、しかも幸いな事に陸人が居ない。

これはチャンスとばかりに、俺は蒼威に声をかける。

「ねえねえ、君が千島蒼威？」

「そうだけど……何？」

決して俺の方を見ることはなく、蒼威はオドオドしながら聞き返してくる。

本当に、この前陸人をぶっ飛ばした奴と同じとは思えない。

「いやさあ、ちょっと聞きたいことあるからこっち来てくれない？」

「……うん」

そして俺は蒼威を校舎裏まで連れて行き、振り返る。
もう猫を被る必要も無いだろう、こっからはマジで行くぜ。

「あ、あの……話って何？」

「ああ、お前は陸人を倒したんだよね？」

「うん……でも、アレは灼也が……」

「ああ？」

「な、なんでもないです……」

「だったらA組の頭はお前だよな？ だから俺と勝負しろ」

「い、嫌だよ……」

ああ、段々と苛々してきたぞ……何だコイツのおどおどとした性格は！

陸人をやった時、俺は素直にお前の事をスゲーと思ったんだぜ。こいつなら、こいつなら俺と互角ってな。

だけど……今のテーマは……

「あんまナめてんじゃねーぞ、コラア！」

一発殴る。それだけで蒼威は壁に叩き付けられて、そのままイタイと蹲る。

その仕草に更に苛立った俺は縮こまる蒼威に更に蹴りを浴びせ、

「おいコラア！ マジで殺しちまうぞ！」

「ごめんなさいごめんなさい」

何でコイツがこんなに卑屈なのかが分からない、俺にお前ほどの力があれば

そう、あの時の蒼威の動きは俺の中にあつた苛立ちを全てぶつ飛ばすほど清清しかった。

何一つ悪びれず、自分が望むままに生きる。それがとても眩しかったんだ。

なのに……なのに！

「おい、神崎君。苛めはよくないなあ」

あまりの怒りに我を忘れた俺は、後ろからの突然の声に反応がで

きなかった。

そして

激痛。頭を何か硬いもので殴られて、俺は地面に崩れ落ちる。

「やあやあ、あの時はよくもやってくれたなコラア！」

B組の矢崎、C組の竹中、D組の武藤が金属バットを持って俺を見下ろしている。

……チツ！ こいつら入院させとけばよかったぜ。すると、矢崎が俺の腹を思いっきり蹴り上げた。

「よお……神崎。テメーあんま調子ぶっこいてんじゃねーぞ？」

「テメーみたいな、ナンパ野郎が生意気に喧嘩してんじゃねーぞコラ」

「うるせえよ……」

更に暴力が浴びせられた、腹や顔を蹴られ、立たされてから何発も殴られる。

クソッ……これが終わったらマジでこいつら殺してやる。

そして段々と意識が朦朧としてきた時、

「やめろや、クソ共」

千島蒼威の声が聞こえた。

「ああ？ 何だテメーまだ居たぐえっ」

目にも止まらぬ速さで蒼威は拳を繰り出し、矢崎をぶっ飛ばす。

正に圧倒的な一撃、多分鼻も折れたな。

「デメエツ！」

「ぶっ殺すぞコラア！」

蒼威が更に動いた

そこまでしか俺にはわからない。

まるでビデオを早送りしているかのようなありえない速さで蒼威は動き、竹中と武藤を沈黙させる。

何だよコイツ……マジで意味がわからねえ。俺はゆっくり立ち上がると蒼威に問う。

「お前……何なんだ？」

「俺あ、千島灼也。蒼威の第二人格って奴なのかね？」

二重人格ってのはよく聞いたことがあるが、まさかこいつがそうだとはい。

それが本当なら全ての辻褄があう。蒼威と灼也、なるほど……

「そうなのか……俺は神崎森羅だ」

「お前さ……何で蒼威をいきなり殴ったわけ？」

「あいつの態度がムカついたからだ」

「蒼威はよお……お前に話しかけられて嬉しがってたんだぜ。

前の学校じゃヒデー苛め受けててよ。やっと”二人目”の友達ができるかもってな。」

「……………」

「お前はそんな蒼威の気持ちを踏みにじった」

「う、うるせえ！」

俺は蒼威、いや灼也に殴りかかった。何もかもコイツには見透かされてそうで 嫌だったからだ。

そついや、ずっと人の気持ちなんて考えた事が無かったな。母さん。それが俺の全てだったから。

俺は蒸発しやがった駄目人間の子、きっと母さんには重荷だったはず。だから だから！

「いいか、よく聞け」

乱打される拳。

「蒼威がお前に何かしたか？ お前に不快な事をしたか？」

……見えねえ。

「暴力でのし上がる気ならよ 堅気の人間や覚悟のねー奴いたぶってんじゃねーよ！」

蹴り、パンチ、頭突き、あらゆる攻撃が俺の体へと痛みを与えていく。

だけど 何故か一発一発が心地よかった。本当に、何故かはわからないが

そして胸元にアップパーを入れられ、俺は後ろに吹っ飛ぶ。

「それが最低限のルールだ！ 覚えとけ」

それだけ言うと、灼也は去って行った。俺は痛みで意識が朦朧とし、ただ思考だけを続ける。

何かアスファルトの冷たさが心地いい。秋風が気持ちいい。世界が変わって見えた。

それだけ、アイツとの喧嘩は気持ちよかった。

一週間後、病院から退院して学校へ行った。

相変わらず、学校は全く変わることがなく一見は平穏に見えている。

俺は怪我した体を引きずって学食で買ったパンを一人で食っていた。

「ここ、いいかな？」

蒼威が俺の正面の席に座った。そして俺は、

「ああ」

とだけ返事をする。……………ってか何か喋れよこの野郎。間が重
いじゃねーか。

そしてしばらく黙って飯を食っていると、

「あー！ 蒼威、俺を差し置いて一人で飯なんか食いやがって！」

「ま、待ってたんだよ？ でも、あまりにも怒られてる時間が長い

から……」

「ああ、まあでも何とか退学にはならなかったぜ。っと……お前、神崎と仲良かったのか？」

「え……あの、その……」

前の学校じゃヒデー苛め受けててよ。やっと”二人目”の友達ができるかもってな

……ああ、もう！

「そっだよ、何か文句あんのか」

「え……あ、うん。そうなんだ」

そう言つと、蒼威は笑った。そっぴや、こいつの笑顔初めて見たな……

何故、友達だって言つたのかは、よくわからない。

ただ灼也のあの言葉に俺が何かを感じ取つたのは事実。あの時確かに俺は何かを感じたんだ。

そして俺達はこの日から何となくつるむようになり、魔女や冥と刃と会つんだ。

「はい、これで出会った時の話は終わり」

俺が一通り話し終わると、遥緋ちゃんと命ちゃんはしきりに何か頷いている。

陸人はもう完全に酔っ払っており、とろんとした目でTVを見ていた。

そして蒼威は、耳元まで真っ赤にしながら、ずっと黙ってTVを見ている。

「やっぱ灼也は昔から変わらないわねえ」

ああ、そうか。遥緋ちゃんの中には灼也が居たんだった。

とりあえず、あいつが中に居たってことは遥緋ちゃんも中々苦労したと思う。

俺らの時ですら、かなり暴れまくったからな。アイツ。
すると命ちゃんが、

「蒼威パパは今はこんなに威張ってるのにヘタレだったんだあ」

「だ、駄目だよ命ちゃん。そんな本当の事言っちゃ！」

二人はそう言い会々とゲラゲラと笑い出す。それに比例して蒼威の顔も更に赤く染まる。

だが、遥緋ちゃんと命ちゃんの笑いは収まる気配が無い。
そして 蒼威がゆっくりとこちらを向いて、

「遥緋、命……………お前ら、今月小遣い抜き！」

その瞬間、二人の顔が絶望に染まり、急にガクガク震えだして懇

願し始めた。

何て大人気ない　と、思うが実際俺もあまり昔の話はしたくない。

今思えば、何て痛い人生を送ってきたんだろう、などと思っ
てしまっ。

「ちょっとお父さん！　それは横暴だよ」

「蒼威パパの意地悪ー！　鬼！　悪魔！」

「うるせー！　俺の稼いだ金だ、俺が分配方法を決める！」

「あ、蒼ちゃんにいいつけるからね！」

「フフン、蒼二の小遣いも止めるぞー？」

「お父様、本当に申し訳ございませんでした」

「親を笑った罪は重い、反省しやがれ」

「うっ」

尚も言い合う三人。何かとても楽しそうである。

こいつとは色々あったけど、あの時友達だって言っておいてよ
かったと思う。

それだけは俺は後悔の多いこの人生の中で、唯一後悔して
いない事だった。

Days 8：千島蒼威（前書き）

神璽の話は先送りにします。

今回は蒼威の罪のお話。

次回は狂のお見合いの話になります。

テンションの差が激しい二本ですがよろしくお願いします。

Days 8：千島蒼威

夏の終わりというのは俺が一番嫌いな時期でもある。

小学生の頃は、新学期の始まると苛められるから学校へ行くのが嫌だったし。

中学生の頃は、あの馬鹿共と明日から学校で絞られるのが嫌だったし。

高校生の頃は、実家に帰ってクソ親父と一緒に生活するのが嫌だったし。

そして、大人になってからは 俺が産まれて始めて人を殺した時期だからである。

俺は今、とある山奥の農村へと来ている。

過疎化とでも言うべきか建物は殆ど無く、在ったとしてももう朽ち果てているのだ。

そして、俺みたいな都会派住人が何故こんな辺鄙な所に居るのかと言うと、墓参りのため。

そう、ここが俺の 罪の始まりの場所であった。

十数年前、大我を手に入れて俺はこの世の王にでもなった気分です。居た。

正宗曰く、大して鍛えてもないのにあそこまで強い式神を見るのは初めてらしい。

それほどまでに、俺の大我は強力な式神だったと。

俺も若かったからその力に酔いしれて、戦術もクソもなく力押しだけで悪鬼を討伐していた。

そう、俺は自分なら全てを救える。何処までも行ける。そんなアホな思想で生きていたのである。

そんなある日。一本の電話が八神家に入った。

それは他の家からの通報による物で緋眼の一族の一つ、真砂家が寄生型悪鬼に取り付かれたという報。

電話を切ると、正宗はその場に居た俺に言う。

「真砂家は、僕らが討伐する。それが同じ緋眼使いとしてのせめてもの情けだ」

「時雨も行かせるのか？」

「勿論」

「　　っ！　　お前、時雨はまだ小学生だぞ！」

「戦闘にはなるべく使わない。だけど、これを見せるのが僕の八神としての義務」

「まだあんな小さい子に、親が人を殺すところを見せるのか？」

「ああ、これを知らなきゃ、時雨は八神の家の重みに耐えられない」

「そうかよ……」

「君こそ大丈夫なのか？　まだ、殺した事が無いんだろう？」

「……………」

「人との戦場では一瞬の躊躇や油断が死に繋がる。まあ、行つて見れば身を持つて分かるはずだよ」

そう、締めくくると正宗は部屋から出て行つてしまう。

一人取り残された俺は、一人蹲つて考える。 これから、

俺は人を殺すのか、と。

寄生型悪鬼は本当にタチが悪いというのは、こちらの世界で最近有名な事。

それがまさか、俺に降りかかるとは

真砂の緋眼は昔より伝わった薬で、緋眼を制御していたらしい。

その製法、材料などは俺達同じ分家にも伝わらないほどである。

だからこそ、こうなつたのかもしれない。

そして、その薬は一言で言うならほぼ毒薬らしい。飲んだ大多数の人間が薬害となり、真砂はどんどん

数を減らしていった。それ故に、こんな辺鄙な山奥に住んでいるのだと。

今回の討伐に参加したのは、俺、正宗に八神の若いのが五人と正宗の実子である時雨。

この五人は、八神の中でも有望とされている五人。正宗がつれてきた理由が俺にはなんとなくわかる。

ようするに、コイツは家が一番大事なんだって事がな。

誰一人喋る事無く、俺達は山道を進む。

そして、少し開けた場所に幾つもの家屋が並び、人の気配は全く

しない。

その代わりにむせ返る様な血の匂いだけが、いくら平穩のように見せかけていても消されていなかった。
すると、

「来るぞ」

正宗が唐突に呟く。そして、その声とほぼ同時に家屋から真砂家の面々が現れた。

老若男女ばつちりと揃っており、これからこれを殺すという事が俄に信じがたい。

そして真砂家の面々は全員 泣いていた。

「僕は、八神家頭首八神正宗。貴方達を 討ちます」

そう言うつと二神風雷を構えて、走り出す正宗。

俺や時雨や他の五人もそれぞれの式神を発動させ、実際言うつと動けなかった。

すると、真砂家の者達は次第に寄生型悪鬼の本性をさらけ出し、式神と緋眼を以て襲い来る。

「タスケテ……モウイヤ」

「殺してくれえっ!」

涙を流し、懇願する真砂家 そして、俺は見てしまった。
真砂家に憑いている寄生型悪鬼が 確かに笑ったのを。
そしてどうしようもない怒りが、俺を埋め尽くした。

「ごめん……としか言えない」

大我に念じ、刀の形を作る。俺はそれを掴むと緋眼を発動させ、走る。

久しぶりの怒りに呼吸が荒く、頭の中で火が燃え盛っているように熱い。熱い。熱い。

大我の剣を振るい、寄生された者の首を俺は斬り飛ばした。途端に吹き出る熱い血潮。

生暖かい鮮血が俺の体や顔に降りかかり、もう気が狂いそうだった。

「蒼威っ！ 油断するな！」

正宗の声が響き、俺は我に帰る。見ると、首を斬り飛ばしたはずの真砂家の者が立ち上がったのだ。

そして刀を持ち、俺に再び襲い掛かってくるが、何とか緋眼を発動させて回避。

俺は持っていた剣を槍に変えて、思いっきり殴り飛ばした。

「寄生型は二回殺せっ！ 悪鬼の部分を殺した後、人間の部分を殺すんだ」

正宗はそう言うと、二神風雷の雷の方で悪鬼の部分を切り裂き、容赦なく風の方で首を切る。

そして、更に何事も無かったかのように次の悪鬼へと切りかかっていく。

その時の俺には正宗が人間に見えなかった。何故、何故、何故、アイツは簡単に殺せるんだろう。

「死にたい……もう、死にたい！」

真砂家のまだ若い女の子が俺に向かって鉈を振るう。その目には涙。

俺はその子の右腕に憑いた寄生型悪鬼を睨むと、肘の辺りから一気に切り落とす。

またも鮮血が飛び散り、気が狂いそうになるがそれでも俺は

「本当に、すまない」

一気に首をはねた。これで……………俺は二人の人間の命を奪った。そして周囲を見渡すと時雨が泣きながら重場で、真砂の体中の骨をへし折っている所だった。

駄目だ 時雨にまだ、小学生のアイツに人を殺させるわけにはいかない。

俺は四つの大我を飛ばし、空中で刃に変形させるとそれを回転させて、バラバラに切り裂いた。

……………これで、三人か。

「時雨……………」

「つく……………ひつく……………蒼威お兄ちゃん……………何で……………何で……………」

自分でも何を言っているのかわからないのであろう。時雨はただひたすらに泣いた。

俺も時雨にかける言葉が見つからない、見ると他の八神もそれぞれが泣きながら戦っている。

死んでいく真砂の大半は俺達に礼を言って死んでいった。だが、それは俺達にとっては

まだ責めてくれたほうが嬉しい。罵られれば少しは気分が楽になるが、礼を言われると本当に狂いそうになる。

そして、もうこんな戦いは一刻も早く終わらせたかった俺は、

「【羽】を使うから、お前等下がれ！」

正宗や時雨や他の八神はその技の破壊力と規模を良く知っている。だからすぐに俺の背後へと下がり、黙って状況を静観していた。俺はというと、全ての大我を背中に集め、一対の翼に変化させるとそれをはためかせ空中へ。

眼下に見えるのは半数の死体と半数の寄生された真砂。

そして、俺は。

「恨んでくれて構わない。本当に申し訳ない」

大量の羽が地面に向かって放射され、真砂を次々と貫いていく。その余りの羽の量に、人間の体なんかは一瞬で粉々にされ血の海だけが後に残る。

そして、俺が地面に降り立つと、

「御苦労だった」

正宗が相変わらずの表情で俺に言う。その無神経さに腹が立った俺はある事に気づく。

正宗の刀を握っている柄の部分から血が滴っていた。多分これは

「じゃあ、生存者を探そう」

俺の視線に気づいたのか、正宗は手を俺に見えないように隠すと何事も無かったかのように歩く。

俺達もその後につき、生存者を探し始めた。時雨なんかは何回も

嘔吐し、もはや生ける屍状態。

だけど、あいつはあいつなりに頑張っているようで、弱音を吐かずに俺達についてきている。

そんな時雨を見てか、他の八神も必死にこの惨状に耐え、無表情で歩く。

だが俺は もう、泣きたくてしょうがなかった。

「皆、気分が悪いか？」

「はい……」

「これが、人を殺すという事だ。これが駄目なら八神から出て行ってくれても僕は一向に構わない」

誰も返事をしなかった。正宗はそれを分かっていたのか、

「人を殺せる人間は悲しいが、強い。強くなるにはこういう代償が必要なんだ」

「わかってます……」

「それがわかったなら、良い」

そんな会話を交わしていた時だった、

「助けて！ 助けてください！」

そんな声が前方から響き渡り、一人のジンベエをきた少年が走ってくる。

年は時雨よりも少し上ぐらいだろう。子供ながら中々の精悍な顔

つきだった。

どうやら、悪鬼に寄生されていない生き残りのようである。
すると、正宗は屈みこんでその子に問う。

「君、名前は？」

「剣菱……真砂剣菱」

「直系の長男だね……他に一緒に居た人は居るかい？」

「居ない……。でも、椿が！ 椿がおかしくなったんだ」

その、剣菱という子には事の状況がよくわかっていないのだろう。
正宗はそんな剣菱を優しく宥めると、

「わかった、調査に向かおう」

そう言つて俺達が歩き出した時、突然上から殺気を感じ俺達が見
上げると

女の子が斧を振りかぶつて木の上から落ちてくる所だった。まず
い、このままでは時雨が。

俺は瞬間的に大我を顕現させると、十個の球体を槍のように引き
伸ばして串刺しにする。

付近の木に礫状態にされた、その女の子はまだ十歳にも満たない
だろう。そして四つの悪鬼が寄生していた。

「つ、椿！ 椿……椿い！」

「オ……ニイ……サ……」

剣菱が絶望に染まった顔で、大声を上げた。そうか、この子が椿だったのか。

そして正宗が風雷牙を放ち、悪鬼もろとも焼き尽くされてしまう。後味の悪い……最後だった。俺は………何をしているんだろう。

「お前……よくも椿を殺したなあ！」

剣菱が俺を怒りの箆った目で睨み付ける。だが、誰も剣菱を止めようとしなない。

俺自身も、剣菱は止められない。ひたすら泣きながら俺の事を睨む剣菱をただ黙ってみていた。

そして俺の心も同時に打ち砕かれてしまった。

何が最強の式神だ。何が緋眼だ。何が千島蒼威だ。俺は、俺は結局無力じゃねえか。

真砂の者を誰一人救うこともできなく、生き残りの心すらをも傷つけた。

こつちの世界に入って 俺は、自分の偶々恵まれていた境遇に酔っていたのだ。

生まれながらの式神の才能。生まれながらの緋眼使い。それらを以てしても俺は誰も救えない。

だから だから煉も灼也も俺は救ってやれなかった。

任務が終わり、俺は八神の家に帰ると、一ヶ月くらいの休暇を言い渡された。

というよりも正宗以外のあの戦いに加わった者は全員休暇を出されている。

時雨もしばらく小学校を休み、深雪さんの実家へと行ってしまっている。

俺はと言うと、まず飯が食えなくなった。特に肉や刺身なんかは見ただけで吐き気がする。

遥ちゃんはそのような俺を心配して、色々な料理を作ってくれたがほとんど手がつけられない。

（最低だな……俺）

ここの所、全てのストレスを遥ちゃんにぶつけている気がする。遥ちゃんだって大変なのに。

それは分かっているのだが、俺の心はそれについてこれない。

あの剣菱という少年が預けられていた施設から脱走したと聞いても何も思えなかったほどだ。

人を殺したという事を忘れるためにも、俺は酒に溺れ、朝から晩までずっと飲んでいた。

それでも赤い酒をみると吐き気がするので、ほとんどビールか焼酎。

すると、部屋の障子が開いて、

「蒼威君……ご飯出来たよ」

「……………いない」

「でも、もう四日も何も食べてないじゃない……少しは食べないと」

「いないって言うてるだろ！」

俺は顔を上げてつい怒鳴ってしまった。頭では怒ってはいけないと分かっているのに。

俺は蒼二をもうちよつと、端に寄せようと触ろうとした。

「……………っ」

だが、触れない。なんていうか……人殺しの手で大切な子供に触りたくなかった。

そのまま、触るか触らないかでしばし悩んでいると、蒼二と遥緋はほぼ同時に目を覚ました。

これだから双子というものは怖い。二人は同じような動作で目を擦り、ほぼ同時に起き上がる。

「おとさん……?」

「おつとさん」

不思議そうな顔で俺を見る蒼二と遥緋。すると遥緋がハイハイしながら俺の股の上に座る。

すると、何故か蒼二がムツとしたような顔をして遥緋を押しつけながら同じく股の上に座った。

なんていうか、こいつらの力関係が立った今わかったような気がする。

だが、極自然に俺は二人の子供を抱いていた事に気づき、離そうとするが、やっぱり止めてしまう。

「おい、お前らぁ。おつかさんどこ行つた?」

「おふよ」

「といえ」

……………どっちだよ。すると、蒼二と遥緋はお互いを横目で見ると、

「おふよ！」

「といえ！」

どうやら二人とも自分の意見は譲らないつもりらしい。すると、障子が開いて洗濯籠をもった遙ちゃんが部屋に入ってきた。

「あ、蒼威君起きたんだ」

「うん……………どこ行ってたの？」

「洗濯物干しに行ってたの、ああ、やっぱり二人とも起きちゃったか」

「おいお前らゝ二人とも違うじゃねえか」

俺は蒼二と遥緋に極自然にくすぐり攻撃を仕掛けた。すると無邪気に笑う二人。

つられて、俺も口の端が吊りあがってしまうのを感じる。ああ、久しぶりに笑った気がするな。

まあ……………こいつらのお陰ってやつかね？

「蒼威君、久しぶりに笑ったね」

「うん……………何か、吹っ切れたかも」

「それはよかった。じゃあ、今日からちゃんとご飯も食べてね?」

「うん……少しずつ頑張るよ」

「じゃあ、もう一回蒼二と遥緋を寝かしつけましょう」

「え、何で?」

「蒼威君、最近私に全然構ってくれなかったから、少しだけ。ね?」

復帰一戦目にしては中々ハードだが、これも家族のためだ仕方ない。

俺を、支えてくれる大切な家族のための、な。

「あの時の遥ちゃんは今可愛かったな」

そこまで思い出して、俺はついそんな事を声に出してしまった。俺が今居る場所は、真砂家の慰霊碑の前。そしてそこには最近新しく名前が刻まれている。

真砂剣菱、と。あの子もやつとここに帰ってこれたんだ。俺が全てを狂わせてしまったあの子を。

ただ、蒼二の話だと剣菱は復讐を謳っていたが、実際には結構ためらっていたらしい。

それが事実なら、俺の罪は軽くなる事は無いが、心は中々に変わってくる。

「ウチの息子の仲間になってくれてありがとう。君は嫌がるだろうけど、それは礼を言うよ」

慰霊碑に俺は語りかける。もう彼はこの世にいないけど、語りかけた。

ウチの蒼二はもう人を殺し、一線を越えてしまったが奴は俺以上に割り切っている。

敵だから、俺を殺そうとしたから切り捨てた。そんな感じで割り切ってる事は凄いや悲しい。

遥緋は……あの子の力なら、俺や蒼二みたいにはならないかもしれない。

何よりあの子は諦めない。気は弱いけど最後の最後まで足掻いて、自分の限界を尽くす。

「全く、正反対の兄妹だな」

でも、それがきつといつか
大切な時に役立つんじゃないか。俺はそう思っている。

Days 9：秋月狂（前書き）

何とか、時間が取れて書けました。

そういえば緋色の眼の読者数が10000人突破しました。
皆さん、お読み頂きありがとうございます。

次回は遥緋です。

Days 9：秋月狂

「狂、お見合いをしてみないか？」

十一月中旬、急に正宗に呼び出された俺は本当に唐突にそんな事を言われた。

あのアルバイトをしてから何ヶ月か経ったが、姉ちゃんは保育の道に進む事にしたようである。

……史上最強の保育士になるかもしれないな。ウチの姉ちゃん。元々小さい頃から姉ちゃん泣いてばかりいた俺を、よく慰めてくれた。多分、向いてる道だろうとは思う。
だが俺は……

「相手は？」

「八神が【数の十名家】に属された事は知っているよね？」

数の十名家、かなり昔から十までの名を冠す一族が登録される組合みたいなモノ。

家柄、頭首の力量、そしてあと一個何かが必要らしいのだが。

それを満たし邪魔な数字を排除する事で属する事が出来るという事ぐらいは知っていた。

ちなみに八神は最近時雨と正宗で八頭家を倒したので、晴れて入る事ができたのである。

「ああ……八頭を倒したんだっただな」

「あの程度時雨だけでも十分だったね。そして僕が各家に挨拶に行くと、七海から縁談を持ちかけられたんだ」

「へえ……」

「時雨はまだ結婚は早いと思う。だから狂、君を推薦しておいた」

「なるほどな」

「秋月は八神よりも血が濃いからね。向こうの頭首も喜んでくれたよ」

「相手はどんな子だよ？」

「七海家の次女、七海奏……… 15歳だ」

「……そこは正宗の領分だろ」

「僕は断じてロリコンではない！ いいか狂！ あの馬鹿ニワトリや馬鹿根暗の言う事を信じてはならない」

突然怒り出す正宗。その反応から相当弄られた事が伺える。

俺も陸人とかから、話は聞いたけど23で女子高生に手を出すのは流石に犯罪だと思った。

………ん？ まてよ。ってかそれ、俺がこれから歩む道じゃん！

「じゃあ、四日後だからな。しっかりと体調整えておくように」

「………はい」

正宗の部屋から出ると、俺は八神の屋敷の中歩き、時雨の部屋へと向かう。

一年前までは色々あった俺とアイツだが、今では俺と姉ちゃんの良き相談役となっている。

というよりも、甥っ子になる可能性が非常に高く、何時の間にかよく喋るようになったんだな。

そして、アイツの部屋の前に着くとノックして中へと入る。

「おう」

「何だ、狂か」

「おー！ 珍しい奴が来たじゃねーか」

何故か陸人までもが時雨に部屋に居る。この人はホント、浅葱とが立場を気にしない人だな。

二人は何やら海外の地図を広げて書類の端々に赤い線を引きながら何かを話し合っていた。

この地図は……英国の方が。全く今度は何をたくらんでいるやら。すると陸人が俺のほうを見て、心から気の毒そうな顔をした後、

「狂……お前もロリコンだったんだな」

「ち、違えよ！」

「もしかして緋眼使いは皆ロリコンなのか？ 正宗然り、お前然り、時雨然り」

「何で僕も入ってるんですか……」

時雨の意見は黙殺しておくとして、俺は相談を始めることにした。

「お見合いって何をすればいいんだ？　ってか何なんだ？」

俺は二人に問う。

「女の子をもてなし、良い気にさせておいてその家の情報を巧みな話術で聞き出す場だよ」

「女と美味しいモン食って、気にいられたらお楽しみの一晩を過ごす場だな」

先に言ったのが時雨。後に言ったのが陸人。これだけで二人の手柄がこれ以上ないほどよくわかる。

うん……こいつらは全く当てにならないな。ああ、ごめん。こいつらに聞いた俺が馬鹿だったよ。

「服装はどんなの着て行けばいいんだ？」

「イカす服！」

「スーツだろうね」

「スーツか……俺、八神の奴しかもってねえぞ？」

「俺は無視ですか……」

「僕のを貸してあげよう。一応、狂のお陰で僕はお見合いしなくて

済んだんだからね」

まさかコイツ……自分がやるのが嫌で正宗に俺にさせるように仕向けたんじゃないやねえだろうな……

お見合い当日。俺はガチガチに緊張して、とある料亭の前に立っている。

すると居る居る。ガラの悪いヤクザみたいなのが、料亭を取り囲むようにして包囲していた。

たまに無線だかなんだかで連絡を取り合い、物々しい雰囲気となってるその料亭。

俺は意を決すると、正宗についていくようにして中へと入っていった。

ガン付けとかには自分では慣れているつもりだったが、こうも人が多いと流石に嫌だ。

中には明確な殺意をぶつけてくる奴もあり、神舞を使って苛めてやろうかと思っただが、やめた。

「なあ……お見合いってこんなに殺伐としていたのか？」

「いや、七海はヤクザと繋がりが深いからね。多分これは七海特有のものだと思う」

ヤクザと繋がりが深い……俺の頭の中に極道の妻のようなイメージが湧き上がる。

うわぁ……俺は髪が長くて大人しいタイプの女の子が好きなのに、いつもブレッシャーを与えられるような嫁は絶対に嫌だ。だが、現実には刻一刻と迫っている。

そして、一つの部屋に通された俺達。

「あちらはまだ来ていないようだね」

そこは広い和室のような場所で、人目で豪華だとわかるような造り。

俺ら死罪六神はほとんどが、アパートか、安いホテル生活だったためこういうのには全く慣れない。

剣菱なんかは昔は結構お坊ちゃんだったようで、最初は愚痴りまくってたけどな。

ああ、剣菱……お前が今でも生きていてくれたら俺は　もう少し今が楽しかったかもしれない。

そして俺がそんな感傷に入っていると、

「御待たせ致しました」

和室の扉が開き、ひ弱そうなおっさんと明らかに子供っぽい女の子が入ってきた。

多分、命とタメ張るぐらいの童顔であろう。だが、化粧などもばっちりとしていて中々に可愛い。

だが、俺の食指はちつとも動かない。年の差七歳だぜ？　正宗じやん。

「はじめまして、秋月狂さん。七海家頭首七海惣一でございます」

頭を下げるそのおっさん。うわぁ……俺みたいなガキに。

俺も正宗に習ったとおりに礼を返すと、

「はじまして、七海家頭首殿。秋月家長男、秋月狂でございます」

そして娘の奏さんも俺に挨拶をし、料理が運ばれてきて会食が始まった。

しきりに喋る正宗とおっさん。俺はたまに来る質問に「ええ」だの「はい」だな答えながら料理を口に運ぶ。

奏さんはひたすら控え目に過ごし、凄く丁寧な動作で料理を口に運んでいる。

ああ……なんていうか育ちの差というものを感じるな。そして、料理も残り少なくなった頃。

「では、これからは若い二人にお任せをして……私達は別室へ参りましょうか」

「ええ。狂、しっかりとエスコートするように」

黒い笑みを浮かべて、正宗とおっさんは出て行った。ありや、絶対別室で何か企んでやがる。

………って二人きりかよオイ！ 気まずい………気まずいぞこれ。

「ア、ハハハ……い、行っちゃいましたね」

「そ、そうですね」

奏さんが俺の方を向いて言う。うわぁ……何か完璧習えたような目をしてるぞ。

俺は何か喋ることが無いかと、お茶を一杯啜り、窓の外を見た。

「ブホオッ！」

「え、あ、秋月様？」

窓の外を見た瞬間俺は口に含んだお茶を噴出してしまった。ああ、とんでもないモン見ちまったよ。

すると、奏さんが俺におしぼりを差し出してくれた。礼を言ってお受け取ると口を拭う。

そう……窓の外に草むらに命と蒼二と神璽と遥緋と由加が居やがったのだ。あいつら……どうしてここに。

蒼二は口元を押さえて震えてやがるしよ。アイツ、マジでいつか殺す。

すると命がスケッチブックのような物を取り出して、なにやら文字を書き始めた。えーと……？

「ご趣味とかあるんですか？」

全くの棒読みではあるが、奏さんはいきなりの質問に照れながらも答えようとする。

ナイス命！ 今度アイス買ってやるからな。蒼二は処刑決定だが。

「えつとお……お菓子作りです」

何とも女の子らしい趣味である。俺の周りにはそんな女はずっと居なかった。

姉ちゃんは趣味とか無いし、命は趣味蒼ちゃんとかほざきやがったな。

遥緋のアレは、一度蒼二にハメられて食ったがアレは料理とは言いがたい。調理した砂糖だな。

「女の子らしい趣味ですねぇ……」

「いえ、そんな……」

それつきり俯いて黙ってしまふ奏さん。マズイ……またピンチだ。助けて命ちゃん！ 俺は再び外を見ると今度は遥緋が何かを書いていた。

そこに書かれていた言葉は……

「奏さんは、普段はどのような事をなされてるのですか？」

「はい、普段は高校に通っていて、休日には悪鬼討伐のお仕事などをやっております」

「へえ、高校に行ってるんですか。僕は、行けなかったですからねえ。羨ましいです」

「高校なんて面白くありませんよ。私、暗いからあんまり馴染めませんし」

「そ、そうなんですか……」

「はい」

正に藪蛇だ……くだらない事まで聞くんじゃない。でも、高

校は行つて見たかつたなあ。

つと、そんな事を考へてる場合じゃない。次頼むぜ、おい。
すると、今度は由加が文字を書き始める。うん、あの子なら真面目そうだし安心だな。

えーつと……なんて書いてあるんだ？

「好きなお野菜はなんですか？」

「……はい？」

「い、いや、失礼」

あの女~~~~っ！！ どの世界にお見合いで好きな野菜聞く男が居るんだ。

次だ次！ おっ今度は神璽か。アイツは情報によると女に関しては百戦錬磨らしい。

早くこの気まずい空気を打開せねば！ さあ、早くしてくれ。そして神璽がパツとスケッチブックを掲げた。

俺は、つい瞬間的にそれを読んでしまう。

「安産型ですね」

………おい、コラ。俺に今何を言わせやがった。

前を見ると、奏さんは顔を真っ赤にして俺の方を見ながら小さな声で言う。

「あ、あの秋月様……私達まだ知り合つたばかりですし……その、まだ子供とかは……恥ずかしい」

「す、スイマセン！ ごめんなさい！ 本当にどうかしてるんです

今日の俺!」

もはや土下座せんばかりに、俺は頭を下げ、奏さんへと謝った。横目で見ると、外では命達が腹を抱えてゲラゲラ笑ってやがる…

…ア、ハハハ、アハハハハハハ。

もうきれそうな五秒前だな。ああ。俺結構我慢したよね? うん。我慢した。そろそろキれてもよくね?

すると、蒼二がスケッチブックを掲げる。

「よろしければ、外に散歩にでも行きませんか?」

奏さんは苦笑いしながらも承諾してくれた。

そろそろ、十二月なので外は中々に寒い。だが全く歩けないほどではない。

むしろさっきまで暖かい空間に居たせいか、凄く清涼しく感じる。そんな料亭の庭を、無言で歩く俺と奏さん。ああ、外へ出ようが中へ居ようが気まずい。

『結果、効果は庭の式神の気配完全消滅』

本当に一瞬。命の声が響き渡り現れていた式神の気配も一瞬で消える。

あいつら……何を企んでやがる。すると奏さんが、

「今、式神の気配と何かの声が聞こえませんでしたか？」

「た、多分正宗のボディガードでしょう。ええ、きっとそうです」

「やっぱり八神は凄いですねえ……今の気配は凄く洗練されていた気配ですよ。凄いなあ」

「そ、そうなんですか」

「ええ……それにしても秋月様がこんなに面白い人だとは思いませんでした」

「え？」

「言いにくいんですけど……秋月様。あの……死罪六神だったじゃないですか……だから」

ああ、そういう事か。今更ながら奏さんが何故俺にビビっていたのかがわかったよ。

俺は元死罪六神の第二位秋月狂。きっとその悪名は奏さんの耳にも届いていたに違いない。

これも俺の罪だ……ああ、こつやつて償って生きていくのか。

「スイマセン……でも、俺はその事実を悔いるつもりはありません」

「え……？」

「俺達のために散っていった仲間が数多く居ます。俺がそれをないがしろにしてしまつては、あいつらに」

申し訳が立ちません。だから俺は　どんなに嫌われようと、罵られようと、死罪六神であつた事を誇りに思います」

「秋月様」

それが死んでいった村雨、暁、ナナシ、剣菱に対する俺からの弔い。

これだけは俺は死んでも譲れない。あいつらと共に戦つた日々も決して忘れない。

すると奏さんの俺を見る目が少し変わった。まあ、やっぱり嫌か。そして俺にとって気まずい沈黙が続き、庭に居るのもそろそろ限界だと思つたとき、急に冷たい空気が流れ出した。

「寒う……」

奏さんが寒そうに縮こまる。俺はスーツの上着を脱ぐと奏さんの肩にかけてやつた。

流石に俺みたいにな奴とお見合いした後に、風邪なんてひかれたら洒落にならないからな。

それにしてもこの突然の冷氣……修羅雪だな……っ！　しかも言霊によつて気配が消されてるからわからんし。

すると少しはなれた茂みから由加がまたもスケッチブックを掲げていた。

そこに書いてあつた言葉は【好きなお肉は？】だった。

「テメエは少し食い物から放れろや！」

「えっ？　私……そんながめつかったですか？」

「あ………いいや違うんですよっ！」

「秋月様……言いたいことはちゃんと言ってください。……私、先に部屋に戻ってますね」

すると、奏さんは走って行ってしまう……あーあーあーあー

あーあーあーあーあー

あーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあ

ア、
アハハ。
アハハハハハハハハハハ。

「狂……悪い。まさかこんな事になるとは！」

「神璽はシモネタが多すぎる。やはり人間は食事について語るべき」

「いや……最後の由加ちゃんのせいだと思っただけだな」

「というよりも、お茶を吹いた時点でアウトだった」

「いや、狂ちゃんドンマイ！ 帰りにラーメン奢るよ。いもーとが」

「え、何で私がっ！？ 命ちゃんが見きに行こうよって言ったんじゃない」

「覚えてないなー。それに情報源はいもーとじゃん」

「だって……時雨ちゃんがつてたんだもん」

そーかそーか、時雨もグルだったのか、あのロリコン野朗。

ハハハハハハ、やっぱり俺の味方は姉ちゃんだけだよ。どーせ、どーせ俺なんて。

「あ、あの狂ちゃん……？」

「……極点神舞」

俺は極点神舞を発動させた。昔は、囚と二人でしか出せなかったが今は違う。

周囲に白い風が舞い起こり、俺の怒りと共に世界を蹂躪していく。俺はゆつくりと後ろを向き、命達に視線を向ける。すると、奴らは途端に態度を翻す。

「ヤバ……」

「よくも、久しぶりに俺をここまでキレさせてくれたな」

殺意をぶつけるが、厄介な事にこいつらはかなりの修羅場を潜っている。だから、あまり効果は無い。

だが、俺の怒りは十分すぎるほど伝わったようで、蒼二が命を前へと差し出した。

「み、命！ 狂を止めるんだ」

「う、うん……『この世に』」

「させるかよあ！」

命の言霊は声を媒体にして世界を改変する。だから、声さえ出さなければ能力が発動しない。

俺は風を操って、命の周囲を囲むと音の伝道無くしてやるように調節する。

案の定、いくら風の結界の中で怒鳴っても世界は全く変わらない。そうすれば命は無力に等しい。

そして更に結界を操作し、空中で緩急をつけたスピードで絶叫マシンのように揺すりまくる。

「み、命ちゃんが……」

「神璽、逃げる」

「お、おう！」

「あーっ！ ちょっと榛名君に由加ちゃんズルイ！」

それぞれの鎧を纏い、空へと飛翔する神璽と由加。甘い、空はもう俺の領域だ。

極点神舞に念じ、神璽と由加が居る地点に数千発の風球を放つ。最初は二人も頑張って避けていたが、

あまりの量に次々と連続で風球当り、やがて変身が解けて、庭にあつた池の中へと墜落した。

「ククククク……後はクソ兄妹、テメーらだけだぜ」

俺が笑いながらそう言うと、蒼一と遥緋は冷や汗を垂らしながら俺を見る。

ケケケケ！ そう簡単には許してやらねえからよあ。

「お、お兄ちゃんどうする？」

「逃げられない……かといって戦っても分が悪い」

「もお、嫌あ……」

「仕方ない、最後の手段だ。……………狂、すまなかった。許してくれても構わないぞ」

蒼二が本当に珍しい事に頭を下げた、だーが！ 許すかこの馬鹿野郎。

力を練りこみ、更にイメージし。俺は白い風の巨人を作り上げる。膨大なエネルギーが固定され。今にも溢れんばかりまで貯める。

「くたばれやあ！」

「いゝやああああゝ」

「うおおおおお！」

流石に殺すのは後味が悪いので、蒼二と遥緋の居るちょうど中間地点に巨人の拳を叩き付ける。
すると瞬間的にハリケーンのような突風が吹き荒れ、蒼二と遥緋は高き空へと舞う。だがその時、

「秋月様！？ これは一体」

最強にタイミングが悪い事に、奏さんが騒ぎに気づいて戻ってきてしまったのである。

だが、今更この風のエネルギーを鎮めるにはちょっと遅い。奏さんも、空高くへと吹き飛ばされてしまった。

「や、ヤベエ」

俺は空へと飛び、奏さんを抱きかかえると、極点神舞の力を完全に鎮めた。

まだ、あまり慣れていないためこの力を使うと、俺には殆ど制御出来ないのである。

だが……怪我をさせなくてよかった。マジで洒落にならなかったからな。

「秋月様……」

「ああ、スイマセン。ちょっと馬鹿共に教育してやってたんで」

「いえ……でも空を飛ぶって気持ちいいですね」

「まあ、俺もこの式神を手に入れた時は、夢中で空を飛びまわりましたよ」

そんな取り留めの無い話をしていると、俺達は地上にゆっくりと降り立つ。

俺はそつと奏さんを下ろすと、正宗にこの騒ぎがバレないうちに、さつさとお見合いを終わらそうと決める。

いやあ、でもこれで完全に嫌われただろ。ストレス解消も出来たし、ある意味ではあいつらに感謝かもな。

そして、俺達は早足で料亭の中へと戻っていった。

正宗には軽くバレていたものの、何とか蒼二達に全ての罪を着せる事ができ、お見合いは終わった。

やっぱり俺にはまだ結婚は早いな。今回の件でそれがとてもよくわかった。

まだまだ、修行や知識が足りない。後は礼儀作法とかもちゃんと勉強しなくてはならない。後女性会話も。

そんな風に、のんびりと八神の屋敷で構えていると、俺の自室の内線で正宗から呼び出しがかかった。

「なんだあ？　もしかしたら苦情でもきたのか？」

軽くドキドキしながら、正宗の無駄にだだっ広い部屋に入ると、何故か家政婦が数人。

それは頭に三角巾、そしてエプロンをつけた命達^{クンガキ}。ははあ……罰掃除って奴か。

俺は奴らを見下しながら、正宗の執務机の前まで歩いていく。

「チクシヨウ……狂ちゃんめ」

「耐えろ、耐えるんだ俺……」

後ろからの物騒な命と蒼二のつめき声を黙殺すると、俺は正宗に問う。

「んで、どうしたんだ？」

「ああ、さつき七海家から連絡があつてね」

「苦情か？」

「いや違う……狂、どんな手を使ったんだ？ あのお堅い七海家の次女が君とお付き合いしたいと」

「……ハ？」

一瞬思考が止まった。何故？ 何で？ 何故に？ Why？

「しかも結婚を前提にだ。狂、しかも君は安産型だとかなんだとか、チエックしたそうじゃないか」

「あ、アレは……」

「まあ、何にせよ縁談がまとまって良かったよ。あ、これは彼女の連絡先だから、この後連絡しておくように」

正宗は俺に一枚のメモ用紙を渡すと、コートを着てどこかへ出かけようとする。

え？ おいおい、ちょっと待ってくれよ。だが、正宗はきびきびと支度をすると言達に言う。

「じゃあ、僕は出かけるけど。サボるんじゃないよ？」

「へーい」とヤル気のなさげなうめき声を聞くと、満足そうに正宗は部屋から出て行ってしまった。

後に残された俺は、メモ用紙を握ったままポカンとした顔で立ち尽くすしかない。すると、

「ロリコン」

命がボソリと呟く。

「ロリータ・コンプレックス」

続いて蒼二も。

「幼女性愛」

と、遥緋。

「異常性愛者」

更に神璽。

「ペド野郎」

止めの由加の一言で、俺の理性は再び爆発した。

Days 10：千島遥緋（前書き）

次回は未定です。

神璽と由加の話はまだ先送りなので、
浅葱家の話になる……かと思います。

神々の第一話にこれが追いついたら、
神々編のキャラの日常をやるかもしれません。

Days 10：千島遙緋

久しぶりに憂鬱な気分。

今日学校で貰った一枚のプリントは絶対に、お父さんには見せてはならない。

ママならまだいい。だが、お父さんは絶対駄目である。その点はお兄ちゃんも同意してくれた。

曰く、「奴を人目に晒すのなら俺は出家する」だそうなのだが、何故か同意できてしまう。

ウチのお父さんは見た目はそれなりに良い。全然若く見えるしね。だけど普通の家のお父さんとは違い、朝からお酒を飲んでグータラグータラ。

ヤル気のない日は、一日中パチスロ雑誌を読んだり、近所の野良猫のノミ取りなんかをしている。

本当に欲望のままに生きている人なのよ。だからこそ 父兄参観には絶対に呼べない。

私は家に帰ると、速攻自分のお兄ちゃんの部屋へと向かい灰皿の上にプリントを置くと、

近くにあったライターに火をつけて完全に燃やしてしまった。あ、輪廻転生使えばよかった。

でもまあ……これで、危機は去った。お兄ちゃんは命ちゃんのプリントも取り上げて処分してたし。

そして私は憑き物が落ちたような気分で、自室へと戻り、昼寝を始める。

後になって思えば、私達は一つのミスを犯した。

そう、毎日ダラダラと生きているお父さんを侮っていたのだ。

そして、当日。今日の父兄参観は五時間目・六時間目の授業である。

まあ、紙を完璧に処分し夕飯の時にも全く話題に上らなかった為、ゆったりとした気分だ。

ママには少し悪い気もするが、これも息子と娘の平和な学校生活のため。ごめんね、ママ。

ママへと心の中で謝ると、私は昼休みをゆったりと堪能する。

(ああ、学校っていいなあ……)

クラスの皆は楽しそうに談笑し、会話に加わらない者もそれぞれが思い思いの昼休みを過ごしている。

ああ、ちなみにお兄ちゃんと命ちゃんは違うクラスに編入された。流石に双子が同じクラスとかは無いため。

さらには命ちゃんまでもが他のクラスなので、騒がしくないのがある。

由加ちゃんと同じクラスだけど、昼休みはいつも睡眠の時間らしい。何やら食後の休憩にはこだわりがあるようだ。

榛名君は昼休みはいつもバスケットボールをしている。どうやらお兄ちゃんもたまに混ぜてみたい。

そして私が、そんな事を思っていると聖子と志穂が私の席へとやってきた。

「今日、ハルちゃんのお父様は来るの？」

「ううん、プリント見せてないから知らないはず」

「えーお父様に会いたかったなあ」

残念そうに言う聖子。何故？　ってかウチのお父さんとは一回しか会った事無いじゃん。

まあ、印象が強かったんだろうな、きっと。

「ハルのお父さんかつこいいからね。ウチの親父さんとは大違いよ」

「かつこいいかなあ？」

「かつこいいじゃん！　ウチの親父なんかお腹は出てるし年々体臭はキツくなってくしさ」

「いやあ、多分若いだけだと思うよ。確かまだ30代だし」

「えーっ！？　やっぱりそんな若いんだあ」

「だって、私とお兄ちゃんをママが身ごもった時はまだ高校三年生だよ？」

「うわ！　ハルのお父さん凄いな……」

「きっと何も考えてないだけだよ」

「でも結構良いお父さんだと思うけどなあ」ほら、よくウチのお店にも来てくれるし」

「え？」

聖子の言った何気ない一言に私は違和感を覚えた。確か聖子の家はうどん屋だったよね。

それにうどん屋へ行った話なんて一度も私は聞いたことが無い。いつの間に……

「いつもパチンコ帰りにきてくれるよーウチの店にはうどんの神様が降りてるってさ」

「ええっ!？」

「後たまにねー自衛隊のカッコイイお兄さんと一緒に来るかな」

多分森羅さんだ。まあ、あの人はカッコイイ。本当に何で結婚してないのが不思議。

前にお父さんから聞いたのだが、マザコンがどうだとか言ってた気がする。

「おお！　じゃあアタシも今度久しぶりに聖子の家に行こうかな」

「おいでおいで」

二人で盛り上がる聖子と志穂。しかし私はそんな会話に加わる気にはなれない。

もし、もしの話だけど。お父さんが聖子の家に行って私の言われたくない様な話をしたとしたら……！

いや、落ち着け私。ウチのお父さんだってそこまでデリカシーが無いわけじゃない。

お母さん曰く結構な紳士らしいからね。だけど……陸人さん達の

話だとお~~~~っ！

「ん？ ハルどうしたのよ？」

「別に…… ちょっと頭痛がね。 それより聖子、 お父さんに父兄参観の事言ってないわよね？」

「うーん、 どうでしょう？」

「ちょ！ それ困るって！」

「冗談だよ。 最近はウチの親が厨房に居る時間ばかりに来るから、 あんまり話せてないんだ」

「ああ…… よかった」

「ハルはそんなにお父さんが来るのが嫌なの？」

「嫌っ！」

だって あのお父さんだよ？ きっと、 何か騒ぎを起こすに違いない。

ママ曰く、 昔はもう少し静かな人だったらしいけど陸人さんの影響であんなになってしまったらしい。

ってか…… 陸人さんってあの中じゃ凄く弄られキャラだね。 皆が口を揃えて馬鹿って言うほどなもの。

そんな馬鹿かなあ……？ と思うが、 ママも常軌を逸す馬鹿と言っていたほどだ。 馬鹿なのだろう。

「結構良さそうな人なのにな」

「うん、そうだよな」

わかってない、絶対聖子と志穂はわかってない。

あの若々しくて、爽やかそうな外見に騙されちゃだめなのよ。中身はそこらの親父よりもタチが悪いし。

「まあ、いつかウチに泊まりにければわかると思うよ……嫌でもね」

「えーじゃあ、今度志穂ちゃんと行くね」

「そつえばハルの昔の家は大きなお屋敷だったわね……今度の家にも期待期待」

「いや……アレは八神のお家で……今は普通の一戸建てなんですけど」

そんな話を話していると、チャイムが鳴って昼休みの終了が告げられた。

確か五時間目は英語か……まあ、どうせお父さんとかがこないからいつも通りに受けよう。

そう思い、後ろを向くと廊下や教室の一部に数名の親らしき姿が見える。ふふん、やっぱり来てないな。

私は安心して、教科書と筆記用具を出して授業の開始を待った。

五時間目の授業は英語のコミュニケーション。英語の講師を招いて対話する授業である。

英語を使った様々なゲームや、対話の仕方を覚えていくということいかにも保護者受けしそうなその授業。

後ろに十人位の父兄が居るせいか、先生も緊張気味に授業を行っている。

私はと言うと、お父さんの姿が見えなくて気が緩んだのか、非常に眠い。というよりも意識が飛んでる。

教室を見渡すと、志穂と聖子は普通に授業を受けており、由加ちやんは……何かキョロキョロしていた。

榛名君に至っては開始数分でもはや半分夢の中である。非常に羨ましいことこの上ない。

「スーパーまで乗せていつて欲しい時は、Could you give me a ride to the supermarket? OK?」

そんな又ルい英会話をしていると、教室の後ろの扉が開いた。

一応意識しているのか、クラスの視線が入ってきた人物に集中する

あ、アレは!?

ムースで撫で付けた黒髪に、黒のジャケットに白のワイシャツとネクタイ。そして下には少し薄汚れたジーンズ。

そこには余所行きの格好のウチのお父さん 千島蒼威がコンビニの袋を提げて教室に入ってきた。

ってかお父さん! お願いだからワンカップを大量に購入したコンビニの袋なんて持ってこないでよ!

「……あー、ご父兄の方はどうぞ奥の方へ」

先生もやや面食らったのか、調子の外れた声で言う。当たり前だ、どうみても高校生の親には見えない。

中学校ならまだわかるが、流石に高校生でこの外見は若すぎるだろう、みたいな視線がお父さんに集中している。

だが、お父さんはそんな視線に気づく事無く呑気に手を振り替えていた。 って誰に？

見ると、私から少し離れた右の席では聖子がお父さんに手を振っていた。 おいおい…… 何時の間にこんなに仲良く。

するとドアがまた開いて講師のケビンが入ってきた しか
も今度は森羅さんを連れて。

「オー！ ソーリイ。 こちらの方を案内してたのデス。 どうぞ、
後ろで見学してください」

ケビンは日本語は結構喋れる方だが、まだ発音がいまいち上手くない。

しかも中々にお茶目な性格であり、男女問わず人気がある二十代後半ぐらいの教師である。

森羅さんは森羅さんでノソノソとお父さんの隣まで歩いていくと、早速何やら二人で話し始めた。

ああ…… お願いだからお兄ちゃんの方へ行つてよ。 私がチラチラと視線を送るが全く気づかない二人。

「お、遥緋ちゃん。 ちゃんと授業中起きてるじゃん」

「当たり前だ。 俺と遥ちゃんの娘だぞ？」

「お前と遥ちゃん、授業ほとんど出てなかったじゃねーかよ」

「出てはいなかったが、ちゃんと起きていたぞ！」

「威張んなよ……」

ちよー！！ 馬鹿！　せめて皆に聞こえないような声で言つてよ。後私の名前を出さないで！さつきから、クラスの皆がお父さんと森羅さんの方気にしてるんだから。

と心の中で喋ってみるが、あの人達には通じないだろう。いや、通じたら通じたで嫌だけどさ。

私は何とか助けてもらおうと、榛名君と由加ちゃんの方を向いたが、もうとうの昔に寝ているようだ。
いよいよ万策も尽きた……ああ、最悪。

その後は、滞りなく授業は進んだ。今はプリントを配られ各自項目を埋めていつている。

その時、ケビンが父兄のほうへ近づいていつて何やら話しかけ始めた。

標的は……お父さんの方！？　ケビンやめてー！　あの人に近づかないでー！

「オーウ！　お父さんお若いすねえ！Who is your child？」

私の願いも空しく、お父さんに話しかけるケビン。ってか……お父さん英語喋れるのかな？

これは少し気になる。お父さんに勉強とか教えてもらったこと無いしね。

そつえばママにも無い……いつも私達の宿題を見てくれたのは時雨ちゃんだったっけ。

「おい森羅！ 何て言ってるんだ？」

「テメーの子供はどいつだって言ってるんだよ」

「お、俺の子供は日本人だぞ？」

「馬鹿！ そのドイツじゃねえ！ お前の子供は誰だって話だよ」

教室中に起こる失笑。ケビンも苦笑いしながらお父さんの答えを待つ。

うつ……お父さんって日本語すら危うい。本当にもう嫌。するとお父さん。納得がいったようにポンと手を打ちケビンに向かってヘラヘラしながら、

「オーウ！ マイベイビーズハルヒ！ ウェンツ！」

馬鹿だ………ベイビーって。陸人さんの方がずっとまともかもしれない。

それにウェンツって何よ！ もしかしてセンキューの事？ 意味わかんない！
するとケビンが私の方を向いて、

「オー！ ハルヒのお父さん。お若いネ」

「は、はあ………そうですか」

教室中の視線が私に向かっている。本当にもう嫌あ……早くお兄ちゃんのトコ行ってよ。

森羅さんは森羅さんで苦笑いしながら私の方を見ているし、榛名

君は寝てるし！

由加ちゃんも寝てる！それに志穂！ 遠くの席で笑いすぎだから！
ってか皆！ ヒソヒソ話しながら私の方を見ないで！

「ハイハイ、お喋りはそこまで！」

先生の手を叩きながらの一声によって、再び授業へと集中し始める私達生徒。

お父さんは何かホツとしたような顔をしている。一番ホツとしてるのは私だつての！

だが、それ以降ケ빈は父兄達に話しかけるわけでもなく、私達の周りをうろろしながら質問に答えていた。

ふう……これでやっと、私も授業に集中できる。

数十分後チャイムが鳴り、授業が終了した。親が居る子達は恥ずかしがりながらも、親元へと行っている。

私はといえば、疲れ果てていてもはや動く気力すらない。ああ……志穂と聖子と美穂とかがお父さんに話しかけてるよ。

すると森羅さんが突然動き出し、榛名君と由加ちゃんの席の近くまでいくと、

「おい、神璽、由加」

その一言で目覚める二人。すると、段々と二人の顔が青ざめていくのが見える。

珍しいな……あの二人の顔が青ざめるなんて。

「し、森羅さん……来てたんですか」

「……………うつ」

「お前らやっぱり寝てたな。これで、お前らの学校の経費削減申請
が出来る」

「あ、アハハハッ！　じよ、冗談でしょう？」

「いや。杉谷さんが結構上に嫌味言われてるんでなーマジで、お
前らの学校交友費は減るから覚悟しとけ」

「そ、そんなあゝ」

なるほど……森羅さんは査定に来てたわけなのね。それに暇だか
らお父さんはついてきたと。

いや……ワンカップの袋持つてるから、多分途中のコンビニで会
ったのだろ。悪運強いなあ……

そして頂垂れる榛名君と由加ちゃん。アハハ、私を見捨てた天罰
だ。そして私が心の力でせせら笑っていると、

「よお、遥緋」

後ろを向くと、さっきまでとは違いいつもの表情のお父さん。

「あ、あはは……………」

「お父さんとお母さんに授業参観を隠すとはいい度胸だな」

「お、お兄ちゃんの発案なんだよ」

何とかお兄ちゃんに罪をかぶせようとする私。まあ、いつも振り回されてるからこれくらい良いよね。

うん、OK。後の事は考えるのはよそう。そんな算段をしていると、急に不安そうな顔になるお父さん。

はじめて見た……こんな顔のお父さん。いつも威張って笑っているお父さんが……

「やっぱり、俺みたいな親は嫌なのか？」

いきなりそんな事を言い出した。いや……嫌ってわけじゃないけど。うーん……

なんていうか私は慣れてないんだと思う。小学校も中学校も、お父さんはこういう行事には一回も来なかったから。

いつも居たのは時雨ちゃんとママとお兄ちゃん。それが千島家の常識だった。ああ……なるほど、お父さんは

「嫌じゃないけど……まあ、普通はワンカップ持って学校には来ないよね」

「う……」

「後は問題ないかな。私もお兄ちゃんもずっとお父さんが居なかったから、いまいちよくわからないんだ」

「そうか……」

お父さんは、父親らしい事をしてみたかったんじゃないのだろう

か。

私達が小学校に上がったか上がらなかったぐらいに家を出て行ったお父さん。

でもやっと、悪鬼のほうの仕事のめどがついてダラけているお父さん。

確かに父親らしい事は何一つしてもらっていない。だからこそ、今日は来てくれたのではないのか。

いや、来てくれたというよりも多分、森羅さんから授業参観の報告を聞いて少なからずショックを受けたのかもしれない。

何か……悪い事しちゃったな。お兄ちゃんは毛ほどもそんな事を思わないだろうけど。

「でもまあ……来てくれて嬉しいよ」

「お、そうかそうか」

「お兄ちゃんも喜ぶんじゃないのかな？ 保障は出来ないけどね」

「ああ、蒼二と命の教室は六時間目に行く予定なんだ」

「命ちゃんは絶対喜ぶね」

「ある意味、あいつの方が実の子供らしい気がしてきた……っと、俺もう行くわ」

「うん」

そういうと、お父さんは手を振りながら私達の教室から出て行った。

なんとなく、今日はあの掴みどころのないお父さんの一面が見え

た気がする。

お父さんは、何か”親”というものに非常にこだわりがあるようだ。おじいちゃんやおばあちゃんの事とかも

関係しているのかな？ そう、お父さんの親に私達は会った事が無かった。

ママの両親は、ずっと昔に死んじゃったらしいから会えないけど、お父さんの方は生きているらしい。

「おう！ それじゃあ六時限はじめるぞー」

あ……いつの間にか休み時間は終わり、六時限の先生が来ていた。何か今日は色々考えたからもう眠い……この時間は寝ちゃおうかな、と思った時にはもう半分夢の中……

結局、六時限は全て寝てしまった。寝ぼけ眼で学校を出ると、何か校門にお兄ちゃん。

命ちゃんも一緒に居て、私の姿を見つけると手を振ってきた。何だろう？

「どうしたの？」

「……………お、親父が保護者会に出てっから待つてようぜ。腹減ったから何か奢らせてーんだよ！」

何ともまあ……素直じゃないお兄ちゃんだ。多分、お兄ちゃんも

嬉しかったのだろう。

お父さんが今日来てくれた事がね。それと、隠してたことへの罪悪感も出てきたのかな？

「蒼ちゃん、何か今日の日本史寝なかったんだよ！ 何でかな？」

「何でだろうねえ？」

私と命ちゃんは理由をわかってながらも、わからないフリをした。それと同時にお兄ちゃんの機嫌がどんどん悪くなっていくのがわかる。本当に、意地っ張り。

そして、私達三人は校門の傍の鉄柵に寄りかかって保護者会が終わるのを待っていると、

「お、お前ら何してんだ？」

父兄達の間からお父さんがひよっこり顔を出した。すると命ちゃんが、

「蒼ちゃんが蒼威パパさんと一緒に手を繋いで帰りたいって言うから待ってたんだよー！」

「言ってねえよ！ ぶっ殺すぞ！」

「蒼二……さすがにそれは俺も嫌だぞ」

「だから言ってねえっての！」

「まあ……遅くなっちゃったからな。今日はパーツと焼肉でも行くかぁー！」

「おーいいねー！ 遙ママが後で絶対怒るだらうけど」

「肉か……まあ、待つてた甲斐があるな」

「んじゃ、遙ちゃんに連絡しろ！ 代金は時雨に経費で落とさせる」

相変わらずの極悪人だ。時雨ちゃんが大人びて見えるのはお父さんと一緒に居たからかもね。

命ちゃんがママに電話すると、ママは何故か快諾してくれた。

もしかしたら、今日は晩御飯作る気がなかったのかもしれない。

そして私達は、多分生まれて始めて家族全員で焼肉を食べに行く。

それは、今までで一番楽しい食卓だった。

Days 11：浅葱陸人（前書き）

次回、神璽と由加をやって緋色の眼から神々にかけての話は終わります。

その次からは神々のキャラの短編が出てくるかと思っています。
とりあえずトップバッターは、九我山律です（多分）

Days 11：浅葱陸人

浅葱家の婿養子になって十数年。そういえば、俺が婿養子になるつった時、家族の誰一人として反対しなかったな。

というよりも親父とお袋は詩歌に土下座してたな……何が「こんな馬鹿息子と結婚してくれてありがとう」だ。

俺の妹の時は結構モめたくせにな、そーいや……姪っ子の裕美にも長く会ってない。ってーか、高遠家途切れてんじゃん。

……思考が逸れた。そうそう、俺は浅葱家に入ってからほぼ毎年新年は八神家新年会に参加してきたんだ。

すなわち、新年の初っ端から蒼威の不景気なツラと正宗の怪しい作り笑顔を毎年見てるって事だ。

でも、蒼威と正宗が居るのは久しぶりだな。そんなわけで、今年も例に漏れず八神家新年会会場に俺達家族は向かっていった。

時刻は夕方から夜になろうという所。腹の減り具合も中々にちよーうどいい。

「ハル姉ちゃん達もう来てるって」

「へえ、相変わらず遥の所は行動が早いわねえ」

詩歌も梨香もなにやら楽しそうである。梨香なんか昨日までは死にそうなツラして大掃除してたくせによ。

まあ……あの馬鹿でかい浅葱家を掃除するのはかなりの労力だったと思う。

その間、俺はと言うと邪魔になるからという理由で外の掃除ばかりやらされていた。後はバイクの整備。

あのクソ寒い中草むしりやらやらされたわけである。なんていう

か、家での俺の地位が本格的に危ない。

犬でも飼われたりしてみろ。あつと言う間に俺の居場所は浅葱家から消えうせるだろう。

そんな事を考えながら、俺は車を走らせ八神家の指定された場所に車を止めた。

新年早々だったのに、妙に騒がしく明るいい八神家。所々では酒飲んで馬鹿みたいに暴れてる奴もおり、なんともまあ。

「陸人、降りないの？」

「ああ、今降りる」

詩歌に促されて俺は車を降りる。そして三人で並んでしばらく歩くと時雨を見つけた。

どうやら来賓客に挨拶をしているようでいつもの俺様に向ける笑顔とは違い、微笑を携えていた。

そして俺らに気づいたらしく足早に近寄ってきて、

「陸人さん、詩歌さん、梨香ちゃん。あけましておめでとうございます」

「「「あけましておめでとうございます」「」「」

俺達三人も習慣に習って時雨へと頭を下げた。すると、時雨が懐から何か白い物を取り出して、

「はい、梨香ちゃん。お年玉」

「あ、ありがとうございます」

「ごめんなさいね、時雨君」

「いえ、一応二十歳は超えていますしこれぐらいは当然ですよ。詩歌さんも昔僕に下さいましたしね」

「そうねえ……何時の間にか時雨君もこんなに大きくなったのねえ」

何とも心温まる会話が交わされている。そういや……俺と蒼威は

「あはは……でも、陸人さんと蒼威さんは僕が生まれてから一度もくれませんでしたけどね」

「まあ……ごめんなさい。陸人と蒼威君には常識とかモラルとかその他様々が壊滅的だから」

心外だ。一度くらいあげた事あるっての！ そう確かアレは

「おい時雨！ 十三年ぐらい前に何かやったじゃねーか！」

「……ああ、蒼威さんと陸人さんが僕を騙してパチンコ屋に連れて行ったときですね。」

そうそう、確か僕が貰ったお年玉を全額スって泣き出した僕の下に落ちていた玉を渡して

「ほらーこれがホントの落とし玉だぞ」とか白々しい事言ってたよな」

あれー………そうだったっけ？ た、多分蒼威がやったんだよそれは。

ってかお前ら何だその目は！ そのゴミ虫を見るような目は！

お父さん泣いちゃうゾ。

「相変わらず最低だね。時雨さん、本当にごめんなさい」

「子供からお年玉を巻き上げるなんて大人の風上にも置けないわ。ごめんね時雨君」

「いえ……もう慣れました。とにかく、父の所まで案内しますよ」

そう言つと、時雨は梨香と詩歌を引き連れて歩き出した。うつ……何かついていき難い。

仕方が無いので、俺は一人方向転換をすると蒼威や他の知り合いを探して歩き始めた。

八神のおっちゃんやら、若い衆に挨拶しつつ進んでいくと蒼二と遥緋と命が恐るべき勢いで飯を食ってるのが見えた。

もはや皿にかぶりつくような感じ。流石蒼威の子供と居候。

「よお、あけましておめでとう……随分と食ってるな」

「あけおめ陸人さん！あのね。私達大晦日から何も食ってなかったの」

「あけましておめでとうございます。実は、お父さんが大晦日の食事をパチンコ代にいれて、見事惨敗しまして」

「あけおめ、陸人のおっさん。んで、母さんが久しぶりにプツンして親父半殺しにした後、家出しちまったんだよ」

相変わらず蒼威も馬鹿だな。……ん？俺らの中で一番まともなのは森羅な気がしてきたぞ。

「って事は遙ちゃん今日もキれてるわけ？」

「命の”探知”でやっと見つけ出して、俺ら三人で説得してやっと機嫌なおしてくれたんだよ」

「お前らも大変なんだな……」

「ってーワケで、陸人さんお年玉ちょーだい」

「下さい」

「あ、お願いします」

手を出してくる三人。ヤベエ……こんな事想定してなかったから金がねえよ。

財布の中に一応三万ほど入っているが、これは翡翠の改造費につぎ込もうとしてるんだけどな……

うん、今回は間が悪かったと思って一万円を三人で分けてもらう。割れないけど。

「んじゃあ……一万やるからそれを三人でわけなさい」

すると、三人表情が微妙に変化した。そして一瞬でアイコンタクトをすると遥緋ちゃんが、

「そういえば、梨香ちゃんが最近気になっている人がいるんですけどねー？」

「ああ、そーそー。アタシもあの子はカッコイイと思うよ」

なぬ……こいつら今なんと言った？

「でも結構遊び人って噂だよな」

「なにいいいい！？ そいつの名前は！ 住所と電話番号は！？」

「何かド忘れしちゃったー」

「福沢諭吉っぽかったよねー。皆で諭吉を見れば思い出すかもねー」

どんなイケメンだ。

「ああ、そうだな」

こ、こいつら足元見やがって……………！ だ、だが翡翠の改造はいつでもできる。来月だって出来るしな。

しかし、梨香がヘンな男に酷い目にあってからでは遅い。それに時雨の反省もあるし。

俺は財布から万札をもう二枚取り出すと、遥緋と命に渡した。それを受け取ると二人とも凄い良い笑顔になった。

蒼二は蒼二でいつも通りの表情だけだな。流石は煉を十数年宿していただけの事はある。

「んで、そのヤロオは誰よ？」

「ジョニーズの藤崎君」

「裏で百人斬りの藤崎って言われてる新人アイドルの事っすよ」

「梨香ちゃん。その人に最近御執心なんですよね」

「ハ、ハハハ……そうか。そーなのか」

……………この辺は遙ちゃんの血筋だと心から思った。命も順調に千島の毒に侵されているようだな。

蒼二達と別れた後、蒼威や森羅を探して再びうつく俺。この家広すぎだつーの。

ただ、こういう雰囲気は嫌いじゃない。誰もが楽しんで、飲んで騒ぐ空間。素晴らしいね。

そーいや、梨香達は何してるんだろうか。と、そんな事を考えていると、前方では隠し芸大会が行われていた。

この大会……ここ十数年ずっとやってるな。確か昨年の大賞は時雨と蒼二だったなあ。

敢闘賞は確か正宗。あいつは何か色々と間違っていた。さて、今年はどうなのかなー？

「続いては、エントリナンバー19番 秋月姉弟による漫才です！」

久しぶりに腰が砕けそうになる虚脱感。ハア？ あの二人が漫才？すると正月らしく晴れ着を着た罪歌とスーツを着込んだ狂が引きつつ笑いでステージの横から

「どうもー」とか感情の籠っていない口ぶりで歩いて行き、マイクの前に立つ。

そういえば、この隠し芸大会は若い衆は強制参加だったな。やらなきゃ、スゲー怒られるらしいし。

俺も昔は蒼威と組んでバーチャルセックスの芸をやり、見事敢闘賞をとった。

それを見て詩歌は卒倒し、遙ちゃんは蒼威に殴りかかってその暴れっぷりから大賞を貰っていたけどな。

……………うん、もう思い出すのは止めよう。

「いやー新年明けましたね、お姉ちゃん。今年もヨロシクお願いします」

「そうだねー今年もよろしく。そういえば狂ちゃんは今年の抱負とあるのかなー？」

「僕はアレだな。うん、やっぱり今年はアレだよ」

「そうかアレかー……………ってアレってなんやねーん！」

ズビシツと入る罪歌の突っこみ……………うん、お前等にしては凄く頑張ったと思うよ。

周囲は完全に冷え切った空気となっており、シーンと静まり返ってただ壇上で狂と罪歌が恥ずかしそうに俯いている。

だが 奴らは諦めなかった。再び泣きそんな表情で声を絞り出すと、

「そ、そういえばお姉ちゃん。僕、最近凝ってる事があるんだ」

「へー。私にも教えてよ」

「んとね……………仕事しすぎて肩がこってるんだよー」

「へえ、じゃあ後で奏ちゃんに揉んで貰えばいいよ……って趣味じゃないんかい！」

極寒地とはこの場所の事を言うのだろう。完璧に白けきってしまった。

もう見てられないよ。という事で俺は隠し芸大会の会場からそくさと抜け出そうと人ごみを掻き分ける。

後ろからは”何故か”冬だというのに熱風を感じ「笑えよ……笑えよコラア！」とか「何で私達が……」とかいう声も聞こえなくもない。

でも無視無視。どんなに悲鳴が聞こえようが無視無視。俺は関係ありません……ん。

折角の晴れ着の後ろが少し焦げてしまった事を気にしつつ。俺は会場を練り歩く。

するとまあ……やっと発見できましたよ。蒼威と遥ちゃんは、宴会場の隅の方に二人で居た。

俺は安住の地を見つけたような足取りで二人の下へと行くと、

「おつす。あけおめい」

「おー……あけおめ」

「あけましてコケッコー」

ちなみに先に言ったのが蒼威、次に言ったのが遥ちゃんな。殺すわ。

だが、どうやら相当出来上がっているようで、二人の周囲には大量の酒瓶の空が投げ捨てられている。

流石の俺も酔っ払いにはキれない。遙ちゃんの酒癖が悪いのは十数年前に嫌と言うほど知ったからな。

「聞いたぜ蒼威。またパチンコかよ」

「う、うるせえ……イベントだったからつい……な、わかるだろ？
この気持ち」

ああ、嫌というほどわかるよその気持ち。俺も実は一昨年未遂に終わったがやろうとした。

そして俺が中学校からの親友の問いに答えようとした時、

「わかったら、殺すからな？」

遙ちゃんのドスの利いた声。だが顔はいつも通りの笑顔。マジ怖
い……

しかも片手に持っている酒瓶は俺の頭部を血に染めるのは最適だろうというような形。

俺の爆轟が先か、遙ちゃんの酒瓶が先かといった所。さて……そろそろ逃げようかな。

「おい、旦那。酒が足りない」

「あ……すぐ持ってくるよ」

「一分以内な。遅れたらその秒数×一時間の間口きいてあげないから」

「そ、速攻行つて来ます！」

子供か、お前らは。蒼威は緋眼を発動させているのだろう、目にも止まらぬ速さで消え去った。

すると遙ちゃん。手持ち無沙汰になったのか俺の顔をジッと見てきて、

「相変わらずのアホ面だな……羨ましいよ。その能天気で何も考えてないような表情が」

「ハハハ……どこぞの従兄弟のお兄さんには負けるけどな。あのこそ能天気の擬人化だろ」

「……うう。古傷をお……」

「まだ引きずってたのかよっ!？」

「女の子にとって、初恋は特別なんだよね」

「いや……君ってか俺もだけど、そろそろ40でしょ？ 女の子とか言われても」

「うるさい、馬鹿」

酒瓶の一撃。クソ痛え……どうでもいいけど、遙ちゃんは酔っ払うと男口調になるのだ。

「詩歌を大切にしていられよな。いつまでも馬鹿やつてられる年はず終わってたんだ」

「まあ……美津子ちゃん事件の時は御迷惑おかけいたしました」

「ああ、アレね。君の口くでもない人生で一番の汚点だろうな。そんな売女のガツバガバがいいのか？」

追記、シモネタも激しくなります。

「ハハハ……いや、生活に刺激が欲しくて」

「性活だろ？ まあ……奥手な詩歌にそれを求めるのは厳しいだろうと思うけどな」

「そうなんだよなー」

「ウチの場合は逆だけどな」

「……ハ？」

「忘れる、馬鹿野郎」

はい、もう一発酒瓶が脳天に叩きつけられました。いい加減キレてもよくね？

ってか、それにしても蒼威の野郎は遅いな。もうとっくに一分は経っただろうに。

「うう……蒼威のバカヤロー……」

飲みすぎたのか、遙ちゃんは酒瓶を枕にして机に突っ伏してしまっただ。

なんていうか、女ってスゲー理不尽。俺の散々頭を叩かれた痛み

の怒りはどうすればいいんだよ。

そんな事を思いながら一息つくつと、蒼威がコソコソと入り口のほうから歩いてきて、

「やつと寝たか……」

「テメエ……俺を罠にしやがったな？」

「悪いな……だが、ここからは俺の手腕を発揮しようと思う！」

「どーすんだよ？」

「ん？ 一緒に寝る」

「それだけかよ！？」

「馬鹿だなあ……酔っ払って記憶がないのに起きたら愛する夫が抱きしめて寝ていてくれる。」

女だったら誰もがときめくだろう？ これぞ俺の完璧な仲直りプランよ。完全新作千島蒼威オリジナルストーリーだ！」

こいつも酔っているのか、ちょっとウザい。そーいや、昔から夜だけテンション高い男だったよな。

「まあ……朴念仁と呼ばれたお前がよくそこまで考えたもんだ」

「元ネタは遙緋の持っていた少女マンガだけだな」

「パクリじゃねーか」

「ハハハ、細かいと詩歌ちゃんに嫌われるぞ」

そんな勝者の笑みをかまして、蒼威は遙ちゃんを抱き上げると部屋から出て行った。

うん……俺は今非常に怖い物を見てしまったよ。勿論蒼威ではない。

それは……遙ちゃんの手がピースサインになっていたという事……
…女ってホント怖えわ。

そんなこんなでその後も色々とあり、俺の今年の八神家新年会も終わろうとしている。

毎年色々とトラブルが起こるが、今年は色々と疲れたような、疲れていないような……

現在はまあ、これも毎年恒例の行事なのだが、参加者の酔いつぶれていない者全てが庭に集まり輪を囲んでいる。

中心に居るのは勿論頭首である正宗。新年初っ端から凜とした振る舞いでマイクを取り、

「では……今年も、皆最後まで諦めずに生き残るように。全員が幸せな一年を送れます様に」

そっいい、手を叩いて目を瞑る。その場に居る全員代俺も漏れずに手を合わせると目を瞑る。

本当に今年は色々な事があった。遥緋ちゃんと時雨が俺を訪ねてきたときには本当にビックリしたわ。

小さい頃から可愛げが無かった蒼二も、更に可愛げが無くなっており、本当に荒れ果てていたよな。

でも　今はこうして皆で今年一年の門出を祈っている。まあ、

本当に激動の一年だった事が伺えるよな。

「今年も、皆幸せでありますように」

俺は、一度声を出して再び目をを瞑った。

D a y s 1 2 : 榛名神璽 (前書き)

久しぶりの投稿です。今回は二本連続で^^

Days 12：榛名神璽

そろそろ三月。俺も高校二年生へとついになる。

高校二年といえば、一生で一番楽しい時期なのではないかと思う。俺は限定されるけどな。

都からは出れない。これはまあ……いいとしよう。俺が結晶を否定したら先生はどうなっちまうんだよ。

だが……これだけは我慢できないというのがある。それは 女遊び。

大阪に居た頃は自由だった。毎晩夜遅くまで遊び呆け、色んな女と知り合った。

一番燃えたのは女を寝取る事。それまで他の男の女だったモノを自分のモノにしてしまう背徳感。

……そのお陰で男からは嫌われまくったけどな、俺。

遥緋ちゃんと知り合う前からも、今の高校で先輩を二人ほど食った。全部寝取りでな。それも来月には卒業！ バイバイ！

「だけどさあ……」

と、つい口に漏らしてしまう。幸い聞こえてないようではあるが。俺の目下最大の悩みは 現在、とある女と同棲しているという事。しかも知らない女ならまだいい。

問題はそいつが俺の幼馴染にして、俺と同じ結晶使いであり、昔の榛名神璽おれを知っているという事である。

名前は棗由加……言いたくないのであるが、実は俺の初恋の人。絶対これだけは言えないけどな。

それにしたってもう吹っ切れたわ。なんたって、まだ先生と暮ら

していた頃の話だからな。

「ねえ、神璽」

と、少し離れたソファで何かの雑誌を読んでいた由加が俺を呼ぶ。

「ん？ どうした？」

「神璽、変わったよね。昔はこんないやらしい雑誌見なかったよね？」

由加が読んでいたのは俺の秘蔵コレクションの一つ。しかも一番お世話になったものでもある。

どこからどう見ても裏モノであるそれは当然モザイクがかかっているわけが無く全てが丸見え。

身内に しかも初恋の人にエロ本しかも裏モノを見られた俺。

一瞬思考が停止してしまった。

「あ……いや……ああ………」

「神璽の変態」

想像してみ？ 好きだった女の子にして、姉のような存在に自分が一番見られたくないモノを見られる気持ち。

まあ……アレだ。よくある母親にエロ本が見つかった時のような心境。親の事覚えてないけど。

そんなわけで、俺は慌てて由加からエロ本を奪おうと詰め寄るが逆に足を引っ掛けられて転ばされてしまう。

……相変わらず、体術だけは半端無く強いな。

「駄目、これは私が預かる」

力では絶対になわれない。大体由加が俺と一緒に住むのは最初未
来さんが猛反対した。

男女の貞操がどうのこうのとか長々と言っていたが、森羅さんが
一言。

「例え神璽が由加に夜這いをかけたとしても一瞬で殺されるのが
オチですよ」の一言によって可決された。

男としては悔しい限りだが、それが現実なので仕方が無い。蒼二
だつて由加に勝てるかわからんと言ってたし。

だからこそ、悔しいので俺はささやかな反撃を試みた。

「ほほお……由加も中々エロエロ淫乱すな。それを使ってナニか
する気ですか？」

俺としては、軽いジョークのつもりだったんだ。だが、由加は顔
をトマトのように真っ赤にして、

「……………っ！馬鹿！」

由加が俺のエロ本を手で引き裂き、更にはゴミ箱にそれを押し込
んで火をつけやがった。

メラメラと燃えるあいりちゃんの肢体……を写したページ。俺は
それを拾い上げ心のそこから叫ぶ。

「あいりちゃーーーーーん！ ああ……あいりちゃ
ん！」

「神璽何か知らない！」

そう言い捨てて部屋から出て行く由加。それと同時に部屋の煙探知機が作動し音を立てる。

突然の事に慌てる俺。すると一分もしないうちに、血相を変えた未来さんがすっ飛んできて何事か

みたいな顔をする。そして、最悪な事にその時の未来さんの視界には俺はこう映ったであろう。

『エロ本を部屋の中で燃やす榛名神璽』……ああ、案の定その日一日は説教で終わっちまったよ。

結局、その日由加は帰ってこなかった。どうせ行き先は蒼二の家だろう。遙さんに迷惑がかかるっつーの。

あの家はなんともまあ……居心地が良いんだわ。常に誰かが騒いでいるしな。

逆にウチは静かなもんだ。由加は夜はTVをずっと見ているし、俺はずっと携帯を弄っている。

会話をすると言えばするが、それは取りとめも無いもの。昔みたいにずっと隣で一緒に居るなんて事は無い。

そんな事を考えながら、学校へ向かっていると前の方で蒼二が一人歩いていた。

「よお！ 今日一人か？」

「ああ……あの連中と居ると騒がしすぎて頭がおかしくなる」

「やっぱ由加が行ってたのか」

「散々遥緋と命と喋っていたぞ。それこそ一晩中な……だから奴らは寝坊した」

「ふうん……」

「エロ本が見つかったそうだな。ちゃんとそういうものは隠しておくのが礼儀だぞ」

「ずっと一人暮らしだったからよ。つか、お前は隠してあるのかよ?」

冗談めかして俺は聞いてみた。まさか、蒼二がエロ本を持っているとはイメージできない。

性欲なんてかけらもなさそうな涼しげな男というのが俺の蒼二のイメージ。だが……

「ああ。取り出すのに五分ぐらいかかる」

「ええっ!? 持ってるのか!」

「当たり前だろう。俺だって男だ」

「いや……何かイメージが出来ない」

「そうか……ま、勝手に頑張れや」

そう軽く言う蒼二。いつその事命ちゃんにバラしちまおうかと思う。

だが、蒼二も俺の秘密を色々知ってる。特に由加に知られたくない事を沢山な。

すなわちお互い何もできないという事。蒼二は俺をせせら笑い。

俺は何もできずに歯噛みする事だけ。

うつー！ 悔しい！ チクショウ、千島蒼二に不幸が起きますように！ そう神様に祈った。

……………そう、後になって思えば、まさか現実になるとは思わなかった。

教室に入って早速お昼寝タイムに入る俺。すると始業時間ギリギリに遥緋ちゃんと由加が入ってきた。

遥緋ちゃん俺と由加を気まずそうに見つめ、由加は完璧シカトこきやがった。フン、ガキめ。

エロ本ぐらいいいじゃん。AVだって俺は腐るほど持ってるし。ウチのクラスの男も全員持ってるんだよ。

なのにあんな些細な事で目くじら立てやがって、もういい。あのアホには愛想が尽きたわ。

そんなこんなで、午前中の授業が終わり昼休み。いつもだったら一緒に学食行ったりもするが今日は行かない。

由加は由加で授業が終わるとさっさと出て行っちゃったしな。仕方ない、蒼二とかと食うか。

俺は席から立ち上がると、隣のクラスに居る蒼二の下へと歩く。そして教室を出た辺りで聞き覚えのある声。

「み……………命！ すまない。許してくれ！」

「……………やだ。エロ本持ってるなんて信じられない！」

廊下では小柄な命ちゃんが蒼二の首を掴んで引きずっていた。そ

れも、片手で。

きつと式神の力を使っているのであろう。大柄な蒼二を苦も無く引きずっていく命ちゃん。

俺の存在にも気がつかないほど怒っているようであり、何となくドナドナが聞こえてきそうなその風景。

フフン、朝俺を見捨てた天罰だ。酷い目に合いやがれ！

「ち、違うんだ命！ あの本は神璽が……っ！」

「神璽ちゃんが？」

いきなり振り向く命ちゃん。どーやら俺の存在には気がついていたいみたいです。

しかし蒼二君。俺の所為にするとはいいい度胸だね。

「命ちゃん。蒼二は嘘をついてるよ」

「そうなの……？ でも神璽ちゃんも持ってるんでしょ？」

「それは認める。でも蒼二のは超過激な裏モノでド変態が見るようなヤツなのさ」

でまかせだけどな。

「なっ！？」

「蒼ちゃん……最低。やつば言霊で意識改革しなきゃ」

「ま、待て！ 神璽iiiiiiii！ 覚えてろよお！」

そのまま引きずられて屋上の方へと消えていった蒼二と命ちゃん。アデュー、君の事は忘れない。

心がすつきりとした俺は満足した表情で学食へ向かおうとする。するとまあ……目の前に由加が居た。

大方学食でたんまりと食ってきたのだろう。心なしか昨日よりも表情が柔らかい。これなら仲直りできそうな雰囲気。

だが 俺の口から出てしまったのはただの憎まれ口。

「何見てんだよ」

ああ、俺の馬鹿馬鹿。すると由加もムツとした表情になり。

「別に見てないもん。自意識過剰過ぎ」

「あれれー？ 俺君に言ったんじゃないよー？ 独り言言っただけなんだけどな？」

「……馬鹿じゃない？」

「この前の数学で因数分解って何？ とか聞いた人に言われたくないですなー」

ああ、更に由加を傷つける事を言ってしまった。由加は俺と違ってほとんど学校には行っていない。

由加の方が結晶を扱うのが上手い為、ずっとアイツは研究施設に閉じ込められていた。

だから高校の勉強にはあまりついていけない。だからこそ、それだけは馬鹿にしちゃいけない事だった。

「……………っ」

由加は俺から目を逸らすと、教室の中へと入って行ってしまった。ふう、俺ってマジ最悪だわ。

俺がずっと遊んで暮らせていたのも由加のお陰なのにな。……クソッ！ こんなはずじゃなかったのによ！

めんどくさくなったので、そのままカバンをこっそりと取りに行つて学校をサボつた。

ああ……今日は由加は帰ってきてくれるのだろうか。あんな酷い事言つちまつたからな。

今まで俺は女なんてオモチャのように扱ってきた。酷い事もしたし、弄んだ事も数え切れないほどある。

別に失つてもいい。世界の半分は女なんだから。そんな気持ちで生きてきた俺。だけど、由加だけは失いたくない。

我ながら自分勝手だとは思つが、失いたくない。でも、素直になれない。

「はあ……帰るかあ」

トボトボと歩いて家に帰ると、中では何故か森羅さんが座っていた。

今日は非番なのだろう。いつもとは違う私服姿でのんびりと構えている。

「お帰り」

「ただいまっす」

「サボりか？」

「……はい」

それっきり特に何も言わない森羅さん。何か妙に気まずい。無言の圧力とでも言うのだろうか。

たまに森羅さんは休日返上で俺達の面倒を見てくれる。本当にこの人が上の人でよかった。

部隊が結成されてから、俺達の扱いは飛躍的に上がった。それも単に部隊の皆さんのお陰なのであろう。

そして、あんまり黙ってるのが苦手な俺は、とりあえず森羅さんに相談してみる事にした。

「森羅さんは一番大切な女の人を傷つけた事がありますか？」

「ああ」

「良ければ……話してくれませんかね？」

「俺は、実の母親を殺した」

「え……」

「俺が警察に捕まらなきゃ、多分母さんは生きていたのかもしれない」

「……そうなんすか」

「ああ、俺は母さんに最後まで謝れなかった。自分がやっていた事を最後まで言えなかった。

それが、俺の唯一の心残り。だから神璽、言いたい事は早めに伝えておけよ。人間何時死ぬかわからないからな」

「……………俺、ちょっと出てきます」

「そうか。晩飯までには帰ってこいよ。今日は俺が作ってやる」

「ういつす」

俺はアパートの外に出ると、すぐに意識を集中させた。すると、商店街の方に由加の結晶の気配。

こういうときには非常に便利な能力である。だが、俺はこれの所為で旅行にするいけない。

でも由加が居る。一人じゃない。俺の苦しみを分かってくれる人が居るんだ。何で俺は気がつかなかったんだ

全力で走って俺は商店街の方へと向かった。由加に会いたい。すぐに会いたい。その思いだけ。

そして由加の気配がどんどん近くなり、ちょうど由加が顔を真っ赤にして本屋から出てきたところに遭遇。

「神璽……………」

「由加……………」

ええい！ 素直になれよ榛名^{おれ}神璽。今こそ本心を伝えるべきだ。だが、先に切り出したのは由加。頭を下げた俺に持っていた本屋の紙袋を渡す。

「神璽、ごめんね」

袋を開けるとあいりちゃんの写真集。ま、まさか……こいつこれを買ったのか！？

年頃の女がこんなエロ本を買うなんて相当勇気のいる行動だと思う。男の俺だつて緊張するのに。

……そういえば、由加はこういう奴だった。昔から怒る時は全力で怒ったが、謝る時は全力で謝る奴だった。

俺は由加顔を上げた由加の顔を見ると、頭を下げた。

「由加。俺も酷い事言つてゴメンな」

「神璽………うん、いいよ」

「そうか……じゃあ、仲直りな」

俺と由加は笑いあうと握手をした。握った由加の手は暖かくて柔らかいけど、少し表面が硬い。

何度も何度も戦ったため、手の皮が厚くなっているのだろう。だが、それすらも何故か愛おしい。

正面には薄く笑っている由加の顔。子供の頃からずっと変わらないその笑い方。

でも何時の間にかその顔は大人の表情。なんていうか……その……綺麗だった。自然に頬が赤くなってしまう。

この俺がだぜ？ あらゆる女を食ってきた俺が一人の女を見て顔を赤らめている。ああ、このまま色々したい！

「帰ろうか」

「あ、ああ……」

普通の俺だったら、カラオケかホテルに連れ込むのだが由加はそうはいかない。

大体どんな顔をして誘って良いのかが分からない。この俺がだ。本当に由加は攻略が難しい。

そして俺達は色々な話をしながらアパートまで帰った。帰ると丁度森羅さんが晩飯の準備を始めた所。

俺も由加も手伝って、その晩の料理はいくつか失敗したものの、凄く美味しかった。

だけどもあ……俺の期待していたような展開は何一つ起きてないんだけどな。ああ、俺達はどうせ幼馴染だよ。

うん、きつとそれが一番の良い形なんだ。由加もいつか誰かと結婚する。勿論くだらん男だったら殺すけどさ。

「神璽、お休み」

「ああ、お休み」

そう言うのと由加は自分の寝室へと入って行った。追いかければ追いかけられるのだが、それはしない。

何故かそのドアは凄く遠い場所に見える。絶対入っては行けない様な禁断の場所。

何となく、俺はそんな事を思い一回欠伸をすると自分の寝室に入ってさつさと夢の世界へと旅立ってしまった。

余談ではあるが、屋上に連れ去られた蒼二は命ちゃんに散々意識改革をされたらしい。

翌日の通学路では俺と由加と千島さんの目の前で、二人の熱い会話が交わされていた。

「命、愛している。命、アイラブユー。俺はもう命の事しか考えられないんだ！」

「わ、わかったから蒼ちゃん……人前だから静かにね？」

「命……好きだよ。ずっと俺達是一緒だ」

うわ言の様に呟く蒼二。どうやら言霊で頭の中を少し書き換えられたらしい。

あのクールな千島蒼二が情熱的になり、愛の言葉をこのクソ寒いつつーのに、朝から喋り捲っていた。

ぶっちゃけ、キモい。それは千島さんも同じようであり、

「こんなのお兄ちゃんじゃないよ……」

「ああ……これは誰なんだ」

「いもーとお！ 助けてー！ 蒼ちゃんに犯されるう」

「もお、仕方ないなあ」

小走りでじゃれあう二人の下へと向かう千島さん。後に取り残される俺と由加。

何か凄い穏やかな空気だ。由加と居るとこんなに落ち着くなんて

今まで気がつかなかったぜ。

すると由加がいつも通り薄く笑みを浮かべ、

「楽しいね。神璽」

「ああ　楽しいな」

その時、気持ちのよい春風が舞った。俺と由加は髪を押さえて空を何気なく見あげる。

いつも通りの晴天。それを見ていると、自分達は何ら変わらない普通の高校生のように見えてくる。

空は今日も青い。俺達は今日も楽しい。そんな事を思うと俺達は今だじゃれ合う三人の下へと走り出した。

ここから を読む上での注意 + ボツ短編（前書き）

はい、注意書きとおまけページみたいなモンです。
キャラの由来とかボツ短編とがあります。

ここから　読む上での注意＋ボツ短編

ここから　に投稿する作品は緋色の眼の神々の黄昏の時の短編です。

神々の黄昏を最新話まで読み進めていないとわからないかもしれないのでご注意ください。

というわけで、今回はおまけページという事で蒼威の一日で投稿しようと思ったけど、

何かめんどくさくなったり、色々テンションが落ちて投稿しなかった作品です。

駄目親父千島蒼威の苦悩する父親の姿を書いてみました。

書いてみて、気づいたんですけどウチの親父より蒼威はまともだなあ……何て思った作品です。

後おまけなのでキャラの由来とかその他設定を書いて見ましようかな。書けるキャラ限定で。

【キャラ】

千島蒼二　蒼威の息子だから二代目の蒼って事で蒼二でいいや。性格は昔の蒼威を暗くしたのがベース。

千島遙緋　やっぱ遥はつきたいよなあ……んじゃ、ハルヒでいいか。無理矢理だけど流行りだしという理由から。

八神時雨　ま、親父が正宗だし、何となく時雨で良いんじゃない？
兄キャラが欲しかったので生まれた。

秋月罪歌　今思うと、スゲエ名前。でもさり気なく出番が多いキャラ。実はかなり強い。戦ったのは鬼神ばかりですからね。

秋月狂　うん、何も思いつかなくて泣く泣く狂でいいや。とちなみに結構エロい。

浅葱梨香　陸人の詩歌の子だから、りかでいいや。漢字は適當。

神々ではかなり扱いが大きい。

御崎朱音　アカネ。何か響きがいい。ちなみに、暁と戦っていないかったら瞬を殺していたほど強い。

御崎暁　何か朱音って夕暮れっぽいから暁でいいや。何だかんだ言って結構シスコン。

真砂剣菱　真砂は失敗だったなあ……色々。でもキャラとしては好き。暁とはシスコン同士仲が良かった。

八神村雨　時雨と同じく。力に溺れた阿呆。だが、さり気なく面倒見はいい正宗の兄貴。

榛名神璽　御崎家編で緋色の眼を終わらせるつもりが失敗したため作った。名前の由来は入れ物

棗　由加　神璽と同じく残った設定を使って作った。名前の由来はこれまた入れ物。

神代此方　実はナナシって名前だけで終わらせるキャラだった。

神代彼方　ナナシが名前を持ったため、急遽緋色の眼用に作成。

神代瞬　同じく、実は他の作品でこいつらだそうかと思っただけでしたのよ。

神代刹那　同じく。ちなみに刹那達は偽名です。母がつけた本名はついに明かされなかった。

天美命　五分で考えたキャラ。ここまで重要なキャラになるとは誰も期待しなかった不遇な子。

天美運命　命がヒロイン級になったので、最強の壁を置いてみた。名前の由来は”命”の漢字がついてるから。

有馬空我　空我って名前は素直にカッコイイと思ったから。ちなみに有馬は偽名

石動大和 空我と一緒に運命を守る騎士のような役割だったが、ただのサンドバッグ化。石動は偽名。

神崎森羅 昔やってた小説から出演。ちなみに十五分で考え付いた。結婚させてようかどうかかなり迷った。

浅葱陸人 同じく。相変わらず馬鹿を貫いてるので一番書きやすい。ちなみに婿養子になる前は高遠。

浅葱詩歌 同じく。明るくなった詩歌を出すのも悪くは無いな、と思い書いた。ちなみに親父はまだ生きてます。

千島蒼威 同じく。微妙な優等生から駄目人間へと変貌。15年間で人は堕ちる。いつのまにか最強へ。

千島遥 同じく。緋色の眼の女の中では二番目に凶悪。旧姓海野。四季シリーズの妹です

八神正宗 同じく。ロリコンと散々弄られたため、割かし明るくなった。しかし戦いでは鬼。

海野誠一 同じく。なんとなくゲストキャラで出してみた。@ホームどうしようかな……

海野夕 同じく。この世界最凶キャラ。さり気なく緋色の眼エピソードにセリフだけ出演。

戌亥空 同じく。名前だけ出演。前作では主人公だった…相変わらず誠一のツツコミ役。ゲイボルグは錆びていない。

戌亥空音 同じく。名前だけ出演。腹黒さが消え、普通の主婦に空に空音は安直過ぎたと今更ながらに反省。

岩瀬純也 同じく。Daysに名前だけ出演。大学で出来ちゃった婚。ヤクザの親に妻の面倒を見てもらい卒業して教師へ。

岩瀬奈央 純也の娘。罪歌のバイトの同僚。年の離れた弟が居る。夢は罪歌と同じ。

戌亥翔 @ホームのキャラ。空の息子。緋色の眼エピソードで命と追いかけてっこしている。やはり親に似て女顔。

海野友一 翔と同じく。名前の由来は誠一の願いを込めて、友達を一番大事にする男。愛という妹が居る。

大野聖子 遥緋の友達でも作つとくか。みたいな勢いで作られた。実家はうどん屋。

絹塚志穂 蒼二と遥緋と幼稚園から一緒。ちなみに中々のお嬢様。昔は三人でよく遊んだという設定。

伊達英輔 蒼二達の友達。修学旅行編で初登場。ちなみに、Daysで短編今書いてます。

村松信吾 同じく。ちなみに英輔とは幼馴染。神璽のナンパ術の弟子第一号。

と、まあ基本的にはこんな感じですね。

それではボツ短編、ボツ短編とある父親の一日をどうぞ。

まあ、平和だ。

俺、千島蒼威は今日は珍しく朝早く起きたので、TVを見ながらのんびりと日曜を堪能している。

二年ほど前まではばば休み無しでずっと働いてきたので俺にはしばしの休養が必要だった。

……いやいや、別に働きたくないわけじゃない。ただね。なんて

いうの？ メリハリってやつだよ。

人間ほどよく頑張ったら、ほどよく休憩しなきゃ駄目なのよ。

そんな言い訳を頭の中でしつつ、俺は本日二本目のビールに手をかけ、

「全国のお父さん。お酒はほどほどにね」

ちょうどつけていた某チャンネルに出演していた猿みたいな爺さんが言いやがった。

何やらこの男、最近では視聴率王などと呼ばれていてこの時間帯のニュース番組の顔だな。

ちなみに何でこのニュースを見ているかというと、息子の蒼二が大好きで千島家の朝はいつもこればかりなのである。

すると酒のコーナーが終わり、今度は美人で巨乳のアナが出てきた。やっぱりジジイよかこっちだな。

「続いては、荒れる子供達。家庭での親の責任と教育の特集です」

すると様々なVTRが流れた。

高校生で恋人が妊娠してしまい、転落人生を送った男とその親の悲惨な未来。

大人しい優等生の子供がある日、キレて両親を刺し殺してしまうという未来。

……………そして特集の締めには再びジジイが出てきて言う。

「全国のお父さん。もっと子供とコミュニケーションを取ってあげてあげてください。子供はいつもSOS信号を出していますよ」

そうやって番組は締めくくられました……コミュニケーションですか。

ハッ！ 何で俺がいきなり弱気の敬語モードになってんだよ。ウチの子に限ってそれは……
そこで俺は、ちょーっと後ろ向きに想像をしてみた。

「蒼威パパさん！ 私、蒼ちゃんの子供を妊娠してしまいました！」

「まあ……そういうことだ親父」

「なっ！？ おいおい、お前らこれからどうするんだよ！」

「私は産みますよ。だって私と蒼ちゃんの愛の結晶だもん」

「まあ、そうするわな」

「そ、そうなのか……？」

「あ、そういえば蒼威パパさん。ウチのお姉ちゃんかなり怒ってるんで、挨拶にこいと言ってるんですけど」

「え……俺が行くのか？」

「子の不始末は親の責任だそうだ。ま、よろしく頼むぜ」

「なにいいいいい！？」

現れる数千もの悪鬼の大群。そして【九尾の狐】の全幹部に囲まれ、リンチされる俺……

賠償金一億。そして蒼二と命は子供を連れて蒸発……更に遙ちゃんも遥緋を連れて俺と離婚……

「い、い、嫌だああああああア！」

おのれ蒼二！。お父さんはそんな子に育てた覚えは無いぞ！

大体アイツは昔から親の俺にも考えている事がよくわからなかった。ま、数年しか一緒に居なかったけど。

しかしそれを差し引いても、奴の行動や言動は尊敬する父に対するものじゃない！

一発ガツンとやってやらなきゃいかな。

「ん？ 駄目親父、こんな朝早くにどうした？」

苦悩していた俺の背後から声がかかる。そしてその声の主は俺の息子、千島蒼二。

振り向くと奴はネクタイにジャケットを着用した私服で俺を見下ろしていた。

俺はコホンと咳払いをして、姿勢を正すと、

「蒼二、ここに座りなさい」

「ざける」

そつきたか……このクソガキアツ！

「……来月の小遣いは要らない様だな」

「チツ……」

渋々と心から嫌そうな顔で俺の正面に座る蒼二。全く、この人に礼を尽くせない態度は誰に似たんだ？

遥ちゃんはある程度見えて、かなり作法は厳しくされたらしく俺よりも心得ている。

じゃあ……誰に似たんだ？ まあ、きっと先祖の誰かにこういう奴がいたんだろうな。

「お前、SOS信号出してないか？」

俺がそう言うと、蒼二は心から気の毒そうな顔で俺の事を見やがった。

そして、一息つくとも真正面から俺を見据えて言う。

「ついに脳みそまでアルコールにやられたか……よし、これからテ

「メーは禁酒だ。決定。」

「違えよ！」

「んじゃ、何だ？ 俺に世界を大いに盛り下げる千島蒼二の団でも作れってか？」

「それも違うっ！ ってか下げるなよ！」

「じゃあ、早く言えよ。もう二分もアンタのために浪費してしまっただろうが」

こんつのクソガキ……本気で大我でぶちのめしてやろうかと思う。いやいや、子供がムカついたから式神で半殺しにしましたーなんてことが知れたら俺の名声は確実に低くなるだろう。

ただでさえ、ここ数年まともに働いてないのに。こうやって人って埋もれてくんだな。……話が逸れた、じゃあ言ってやろう。

「お前、命とするときは避妊はしろよな！」

チクシヨウ、あのクソガキ。お父様を全力でしばき倒しやがって。あの後、俺は怒り狂った蒼二に完膚なきまでに叩きのめされて意識を失ってしまったようだ。

しかし、大いなる収穫もあった。そう、蒼二はシモ系の話に免疫が無い。

だからこそあそこまで過剰な反応をしたのであろう。クククク……大人びてはいるがまだ中坊だな。

あの様子だとまだしてはないようだ。とりあえず安心。

「お父さん、お兄ちゃん凄いい怒ってたよ？ 何か言ったの？」

また、キッチンで何か得体のしれない食い物を作っていたのだらう。

エプロンを外しながら、遥緋が俺のほうに向かってきて言う。

この甘党は誰に似たんだか。遥ちゃんは甘いものがあまり好きではない。だとしたらまた誰かであらう。

それにしても遥緋は蒼二と違って素直に育ってくれたようだ。俺に生意気な事は言わない。素晴らしいね。

「いや、性教育の話だ。アイツも命とほぼ同棲してるからな」

「ふうん……そういえばたまに、命ちゃんの甘える声とか聞こえるからねえ」

「な、何だと!？」

「命ちゃん積極的だし」

「命めくく俺を離婚に追い込む気か」

「何の話？」

「いや、なんでもない……そういえばお前、何か悩みとかないか？」

「悩み？」

「ああ、お前みたいな根暗女は溜め込みやすいからな。お父さんが話を聞いてあげよう」

「失礼ね！ 強いて言うならお小遣いが少ないぐらいかなあ？」

……なるほど、確かこいつらの小遣いは月に八千円だったはず。高校生としては妥当だろう。

しかし、俺の時にはもう少し貰ってた気がするな？ いや、俺はカツアゲしまくったからだ。

ああ、そうそう。そういえば、この前俺の部屋のタンスの後ろに封筒に入った金があったな。

「よし、遥緋！ 俺の部屋のタンスの裏に封筒があるから取ってこい」

「え、あ……うん！」

遥緋は大急ぎで、部屋から出て行く
あ、アイツ緋眼使ってやがる、何て女だ。

遥ちゃん俺が居ない間どんな教育をしていたのだろう。いや、俺が会った時はもう少し大人しかったな。

でもアイツもいつか嫁に行っちゃうんだよねあ……まさか時雨とかじゃないよな……。

「ただいまっ！ あったよ」

遥緋から封筒を受け取ると、中にあった金を取り出す。1、2、3、4……………おお！ 二万五千もある。

俺はそこから五千円札を三枚取り出すと、遥緋に渡した。

「これを三人で分ける」

「やったあゝゝっ！ お父さん大好き！」

……ほほお、これが父親の喜びかもしれない。娘が楽しそうにしているのは中々気分が良い。

これの究極版が陸人になるんだろうな。少しは奴の気持ちが分かったかもしれない。

いや……馬鹿の気持ちは俺みたいな天才には分かるはずが無いアツハツハツハ。

「んじゃ、クラスの子とカラオケに行く事になってたから行ってくるね！」

「おう！ 声帯潰れるまで歌ってこいやあ」

「はいはい」

そう言つと遥緋は支度をして物凄いスピードで家から出て行つた。だから無闇に緋眼使うなつての！

それにしてもまあ……久しぶりに父親らしい事をした。これで遥

絆は大丈夫だろうな。

「ただいまー」

おつ遙ちゃんが帰ってきた。たまには父親らしい事をしたと自慢してやるうじゃないか。

最近、俺はどうも遙ちゃんの信頼を失って気がするな。これで一気に挽回できるはず。

俺は急いで立ち上がると玄関へ向かう。

「お帰り、遙ちゃん」

「あ、うん……ただいま？」

「荷物重いでしょ？　俺が持つよ」

「あ、ありがとう」

買い物袋を持ってキッチンまで行くと、荷物を置いた。

遙ちゃんは、ポカンとした顔で俺の行動を見つめている。フッフ、次で止めだ。

「蒼威君……どうしたの？」

よし来た。俺は遙ちゃんを優しく抱きしめると、耳元で囁く。

「いつも頑張ってもらってるからさ、たまには俺がこういう事しないと」

「え……いいよそんな……私は好きでやってるんだし」

クツクツクツ、このやり方で落ちない女は居ない。正に空先輩の行ったとおり。

女は幾つになっても愛されることや、大切にされる事がとても嬉しい。

遥ちゃんは久しぶりに耳まで真っ赤にして、上目遣いに俺を見つめて、「えへへ」と笑う。

可愛い……おっとこれで準備は整った。

「遥ちゃん、俺今日は子供達に初めてお小遣いあげてみた」

「へえゝ喜んだでしょう？」

「うん。遥緋にあげただけどさ、凄い喜んでくれた。この封筒様だよ」

俺は手に持っていたさっきの封筒をヒラヒラと振って見せた。
すると、それと同時に遥ちゃん的笑顔が硬直する。…………アレ？

「蒼威君？」

「な、何？」

「その封筒はねえ……来月のデート費用だよお？」

「へ？」

「蒼威君がよくパチンコですって来るから、ずっと前からコツコツコツ貯めてたアタシのヘソクリなの」

「あ、あ、あ……………」

「蒼威君、そこに正座」

「はい……………」

日本最強と言われた式神使いの俺でも脅えてしまうほどの威圧感。そういえば遙ちゃんの説教は滅多にしない分長いんだよね……………それこそ全ての不満が出てくる。

そして、

「蒼威君ってさ昔から思ってたんだけどお金に凄いルーズだし、女心分かってないよね？ 女にとってはデートは幾つになっても大切なものなんだよ？ これ、昔も言ったよね？ それに、二年前だってさあマツサージ師の美穂ちゃんだっけ？ あの事もまだちゃんとした弁明聞いてないよね？ 陸人君の美津子ちゃんの事それじゃ笑えないよ。大体さあ、朝からお酒って体と子供達の教育上よろしくないんだよ。想像してごらん。自分のお父さんが

朝からビール缶開けて、仕事もせずに新聞読んでるの。

嫌だよね？ それにさあ……………最近夜はすぐに寝ちゃってアタシの事全然構ってくれないしさあ。聞してる？ ねえ聞してるのー？」

火責めのような二時間が終了した。俺の陸人達に聞かれたら元気よく屋上から飛び降りたくなる演説と、

空先輩の言っていた困ったらキスで口を塞げ作戦が功を奏し、何とか許しを貰えた。

しかし、来月は高級温泉旅館に連れて行くことになってしまっている。

そしてガキ共のその間の食も確保しなければ、ああ……金もないしどうしよう……。

ん、そういえば俺には便利な時雨^{けぼく}が居たじゃないか！

俺は早速廊下に出て、八神の時雨直通の番号を押す。……………4
コール目で時雨が出る。

「はい、時雨ですけど」

「おっ！ 時雨か？ 俺だ！」

「……オレなんて知りあいじゃ居ません。では失礼します」

「そうか、そんなに部屋に大我を打ち落とされたいか」

「あ、蒼威さんですか。どうも、お久しぶりです」

「白々しい……さて、用件だが仕事を回してくれ！」

「蒼威さんが出来るような仕事は無いです」

「ざけるコラアッ！」

「神代との戦い以降、結晶が安定してますからね。悪鬼の数が結構減ってるんですよ」

「ぬう……」

「だから八神は経済方面に力を入れてるんです。蒼威さんは算数すら危ういでしょ？ だから無いんですよ」

「な、ナめんな！」

「要人暗殺なら腐るほどありますよ。例えば――」

「いや……もういい」

「そうですか。まあ……何か適当なのがあつたら回してみますよ」

「お願いします……」

俺は意気消沈をして電話を置く、時雨^{げほく}が駄目だとすると後は陸人達だ。

陸人は浅葱じゃ権力低いし……詩歌ちゃんは遙ちゃんの耳に入る恐れがある。

森羅や先輩は公務員か……くつそ！！ここに来て知り合いが少ないのが裏目に出るとは。

ちなみに正宗の野郎は論外だ。絶対に俺が苦勞する道を選択しやがるからな。

すると、落ち込む俺の目の前にニコニコ笑った命が現れた。

「よお……電話使うのか？」

「蒼威パパさん、さつきは随分盛ってましたねえ」

「　　　つ!?!」

「俺を花とするならば君は太陽だ!君が居るから俺は咲き誇れる。
……普通は女性を花に例えませんか?」

「うつ……望みは何だ?」

「流石お話が早い!　実はちょっと御相談が」

「な、何だ?」

「いやねえ……実はーさつきの五千円にもう二千円プラスしてもら
いたいなーなんて?」

「うつ……」

「蒼ちゃんとお揃のピアスが欲しいんですけど、後二千円!　お願い
します!」

「バ、バイトでもなんでもすればいいだろ」

「心から君だけを愛している。僕はもう君無しじゃ　　」

「わかったわかった!　持ってけ泥棒!」

俺のサイフから飛んで行く1000円札が二枚。
そして命は軽くスキップしながら家から出て行った……あの悪魔
め。

やはり俺には……あそこしかないかつ！

二時間後、俺は行きつけのパチンコ屋の目の前で蹲っていた。
財布の中の残金は五百三十二円。さっきまで一万円以上はあったのにこの低落。

ま ンちゃんなんか大嫌いだ……！ やっぱ女の子は黒髪の遙ちゃんみたいなタイプに限る。

ヘン！ あんな金髪ビキニ女なんかもう知らん！

「……はあ」

しかしそんな事を言っても、財布が軽いという事実は全く変わらない。

そして俺はこの世の全てを恨みながら、町をトボトボと歩く。

ここに住むようになってから約二年とちょっと、中々良い所だがいまいち道がよくわからない。

だが、こんな気分の中にはちょうどいい。俺は適当な道を歩いていく。

「……？」

すると、珍しい事に老舗っばいうどん屋が立っているのを見つけた。

俺らが子供の頃には結構あったのだが、それも時の流れなのだろう。今では全く見かけない。

そう思うと、急に懐かしくなって俺の足は自然とうどん屋へと向かった。

そして、カウンターに近づくと、

「親父さん、かけそば一つ」

「あ、はーい。いらっしやいませ」

店の奥のほうからどこかで聞いたような声が聞こえた。
すると現れたのは、遥緋の同級生の………聖子ちゃんだったかな？

ふんわりとした雰囲気の子だが、今は頭にバンダナを巻いてエプロンをしているので、
なんていうか、凄くこの前見たときよりも大人っぽく見えた。

「あれ？ ハルちゃんのお父様じゃないですかあ」

「あ、娘がいつもお世話になってるね」

「いえいえ、私こそ、ハルちゃんとソージ君とミコちゃんにはお世話になりっぱなしなんですよ」

「そ、そうかい……いやね。親としても蒼二の傍若無人っぷりには手を焼いているんだよ」

「え？ ソージ君は学校じゃ静かな子ですよ？ あんまり喋らないし、でも可愛いんですよね」

「ハハハ、あのガキのどこが」

「そうですねえ、実はここだけの話一週間前にですね」

それから聖子ちゃん……いや、聖子様による子供達の近況が語られること十分。

……ククククククククククク！ これであのクソガキ共の鼻っ柱をへし折れるってモノよ。

そして俺がうどんの代金を払おうとすると、聖様が言った。

「あ、今日は私が奢ります！ 今後ともウチのうどん屋をどうぞ御贔屓に〜！」

「ありがとう！ ああ、家の手伝いなんだ」

「あ、はい。ウチは兄弟が結構多いのでお父さんもお母さんも忙しいんですよ」

「偉い！ ウチの馬鹿娘何かは今日はカラオケになんて行ってやがるのに……君は偉いよ！」

今度陸人や森羅をだまくらかしてここのうどんを五十杯ぐらい食べさせよう。

味もさることながら値段もリーズナブル。素晴らしいね。このうどん屋。正にうどんの神様が光臨してるよ。

「そんな事ないですよ〜では、また御来店くださいませ」

その後、本屋とかへ寄って俺が家に戻ると千島家では夕食が始まっていた。

我が家のルールとして、食事に遅れたものはいくらおかずが少なくても文句は言えないのが鉄則。

さすがに食べ盛りが三人も居るせいかな、俺が帰ったときにはもうほとんど無い。

だが、俺には聖子様のうどんがまだ胃の中に残っているため、十分すぎる量であった。

そして、俺は昼までの復讐を果たす。

「なあ、蒼二……お前の学校に藤島京子ちゃんって居るか？」

俺のその問いに、遙ちゃん以外のメンバーの箸が一瞬止まる。

命は俯いてジッと蒼二を睨んでいるし、遥緋は気まずそうにお茶を一杯啜った。

だが、まだまだだ。

「何だ、お父さんには話してくれないのか。じゃあ命、二年生に杉村君って子は居ないか？」

再びピリッとした空気が流れる。今度は逆に命が俯き、蒼二が命を睨み始める。

ケケケケケケケケッ！ お父様を張り倒し、脅迫した罪は重いぞ貴様等。

そして、遙ちゃんだけが頭に？マークを浮かべながら成り行きを見守っていた。

「ハハハハハハ、お前達も青春してるじゃないか。結構結構」

そして、俺は笑いながら食器を下げると最高の気分で風呂へと浸かり、上がった。

やはり風呂上りの一杯は美味い。これでは面白いTVでも見て今日は寝ようかな。

俺はTVのリモコンのボタンを押すと、適当にチャンネルを変え始める。

すると、朝のジジイがまたTVに出ていた。どうやら、夜の討論番組らしい。

「今、問題になっている少年問題ってありますよね。私も朝の番組で紹介したんですが深刻ですよね」

「やっぱり、家庭でのコミュニケーションも重要ですよね」

おーおー！俺は今日子供達とコミュニケーション取りまくったぜ。

やっぱり重要なのはそこだよな。

「だけど、最近の子は敏感ですからねえ……些細な一言でも結構傷つく事が……」

「やはり程々に、それで居て重要な所はしっかり愛してあげないと」

「子供のプライバシーの侵害とかはマズイですね。全国のお父さん、気をつけてくださいね」

そう言っただけ番組は終了した。………何か朝と言ってる事違くない？ってかなんだろ？……さっきから後ろに感じるこの異様な殺気のようなものは。

そして俺が振り向くと

千島蒼威 全治一週間の軽症。

Days 13：伊達英輔（前書き）

本当にサブキャラの話となっております今回。

本当に勢いとノリだけで、考え付いた作品です。

そして次回こそは律です！ もうほとんど書けました。

神々の次話投稿ですが、また長期で出かけるので

24日か25日に二話連続投稿します。

Days 13：伊達英輔

人生とは、常に敵が居る物なのかもしれない。

小学校の頃は目の上のたんこぶである上級生達と喧嘩ばかりしていたし。

中学校の頃は親や教師 果ては他行の生徒とばかり喧嘩をしていた。

同胞と言ってよかったのは、書籍と幼稚園から一緒に村松信吾と少数の友人だけである。

そして今、高校時代の敵は何とも我ながら数奇な人生を歩んでいると思う それは親友の父親であった。

俺は一昨年、恋をした。それは激しい恋。もうその子が好きで好きで堪らない。

好きな子の名前は大野聖子という、この街の中学出身の女の子。ちなみに実家は老舗つばいうどん屋。

俺はたまたま入学式であの子と喋り、一瞬で恋に落ちたんだよ。早い話がヒトメボレ。

だが、その恋は前途を極めた。まず、クラスが違ったので親しくなる機会がまったく無い。

放課後に待ち伏せとかも考えたが、いつも千島遥緋と絹塚志穂と一緒にため内気な俺は話しかけることができない。

信吾だったら玉砕覚悟で突っこむのだろうが、生憎俺はそういうキヤラじゃないのだ。だからそんな感じで夏休み突入。

夏休みが終わった九月の始業式。奇妙な転校生が三人ほどウチの

学年に来た。

隣のクラスに編入された棗由加、そして俺のクラスには天美命と、千島蒼二という転校生がやってきた。

まず話題になったのが、隣のクラスの千島遥緋の双子の兄だという事。まあ、顔は良く似ていたな。

そして天美命と何やら付き合っているような雰囲気があった。

だが、浴びせられる質問に段々と嫌気が差したのか千島蒼二は全然喋らない。

それと引き換えとばかりに天美命はべらべらと一日中喋りまわしている。本当に、奇妙な連中だった。

そこまでは良いんだ。良い奴なら話すし、悪い奴なら付き合わないければ良いだけの話。

だが 俺が一番許せなかったのが、

「あ、やっぱりソージさんだあ！ お久しぶりですー」

「えっと……大野さんだよね？」

「聖子でいいですよー。隣のクラスに編入したんですか？」

「ああ……まあ、これから妹共々よろしく」

「任せてください！ じゃあ、早速学校の中でも案内しましょうか？」

「え……？ ああ……頼むよ」

そのまま蒼二の腕を取り、隣の校舎へと消えていく二人を俺は黙って見つめていた。

……久しぶりに人を殴りたいと思った。そして、何となく泣きそうにもなる。

流石にその日は一日へこんだまま無為に過ごし、放課後も教室で最後の一人になるまで呆けていた。

すると我が親友村松信吾も鈍いなりに俺の異変に気づき、相談に乗るという。

しばらく迷ったが、信吾は口は結構堅いので全部話す事にする。そして、十分ぐらいかけて全てを話すと、

「千島が恋敵か……」

「ああ……」

「俺もあの野郎は気に食わなかったんだよな。女はべらかして何時もス力してやがるしよ」

「おお。お前も同じ気持ちだったのか」

「当たり前だぜ。つつーわけで、久しぶりにちよつとシメて見る？」

「シめるのはやめようぜ……ただ、軽く脅すとか」

俺達は中学の頃は恐喝とかイジメもやっていたのだが、とある事件をきっかけに止めた。

恥ずかしくて後輩にも馬鹿にされたが、まさか二人組の小学生にタコ殴りにされるなんて……

その後輩達も今ではその小学生にズツタズタにされたけどな。ああ、あの小悪魔とはもう関わりあいたくない。

確か名前はなんだっけ……確か犬だとか海だとか何だかだったな。すると信吾も思い出したのか顔を青くして、

「そ、そうするか」

後になって思えば、やはりあの小学生達の教訓を生かして止めておくべきだった。

翌日、千島蒼二を呼び出した俺達は完膚なきまでに叩きのめされた。触る事すら出来なかったんだ。

殴り合いになった瞬間。背筋も凍るような殺気が充満したのだけは覚えている。

そう、そんな奴に俺達が勝てるわけがなかったのであった

「ふう」

物思いに耽るのを止め、俺は溜息をつく。アレからもう一年か……
今では蒼二や聖子ちゃんとも何故か友達になり、毎日楽しい生活を送っている。

本当に人生何があるかわからない。信吾に至っては、もう昔の事何か丸つきり覚えていない感じだ。

友達になれたのは良いが、それつきり俺達の関係はまるで進展していない。

というよりも、下手に動いてこの関係を崩すのが怖い。もしふられでもしてみる、二度と友達には戻れない。

それぐらい、この恋にはリスクがある。そして、同時に最強のラ

イバルも同時に存在していた。

「ねえねえ、今度ハルちゃんのお父様はいつ来るのー？」

「いや、授業参観以外であの人が学校なんかに来ると思う？」

「それはほら、愛する娘と息子の様子を見にとかあ？」

「あの人に限ってそれは無いよ。きっと今頃、野良猫のノミ取りかいいともー」とかテレビに向かって言ってるはず」

「残念」

「聖子……何でそんなにウチのお父さんにこだわるの？」

「だってかつこいいし、お話は面白いし。パーフェクトなお父様じゃない？ 私の理想の男性なの」

千島蒼威……去年、ホストみたいな人と授業参観で蒼二をからかっただ人だ。

命ちゃんは何が楽しいのかブンブン手を振り回していたっけ……

「まともな仕事してればいいかもね。あの人組織には合わないらしくて、フリーみたいなものなのよ」

「そこがいいのよあ！ 孤高の男っていうか、女は近づくなーみたいな？」

「ああ、だって浮気なんかしたらママに殺されるしね。キャバクラ行って帰ってきた日には、

ママは包丁投げつけるわ、関節技決めるわ、本当に大変だったんだから……」

スゲエ母親すな、おい。

「あはは……何か可哀想」

「自業自得だよ。どーしてママが居るのにキャバクラ何か行くんだろ？」

「それは男だからでしょーお父様本当に可愛い」

「そんなモンなのかなあ……」

遥緋ちゃんと楽しそうに千島蒼威のクソツたれについて語る聖子ちゃん。今日も可愛いね。うん。

ただ好きな女の子が他の男の話をするのって結構心にくるんだ。さてどうしたもんかな……

その晩、俺は悩みに悩んだ。それはもう悩んだ。酒も飲みまくった。そうしなきゃ堂々巡りにしかならない。

嫌がらせで信吾にも電話をかけた。そして部屋で一人で叫んだ。妹はゴミをみるような目で俺を見た。

そして 明け方頃。ついに俺は一念発起し、夏祭りに誘う事に決めたんだ！

そうなればやる事は早いほうがいい。そーいや、神璽はまだ病院で寝てるらしいけど大丈夫なのかな？

まあいい。アイツがその程度でくたばるわけ無いからな。千人の女と寝るまで死なないらしいし。由加ちゃんも可哀想に。

そんなわけで一旦俺は寝て起きたらシャワーを浴びて、勝負服に着替えるとリビングに居る妹に、

「どうよ。マイシスター？」

「おかあさーん！ またおにいちやんがくるったー」

たつたと駆けて行く我が妹（十歳）……………いかん。俺は何をし
てるんだ。これじゃあまるで信吾だ。

いくらテンションをあげる必要があるからってこれじゃあいつもの俺じゃない。

落ち着け、落ち着けよ俺。……………よし、これでいつもの伊達英輔だ。うん、変な奴を思い出した所為でおかしくなったよ。

そして俺は電車に乗り、いつもの通学路を歩くと途中で方向を変えて決戦の地のうどん屋へ。

かなり緊張している。だがここまできたらもうヤケだ！ 俺は震える手でドアを開けて中へと入った。

「いらっしやいませー……………あ、英輔君だあ！」

幸いな事に聖子ちゃんが居た。神様ありがとう！ 愛してる！
だが、心臓が高鳴りまくる。

「少し近くに来たから、ちょっと寄って見たんだよ」

「今日は信吾君と一緒にじゃないの？」

「ああ、アイツは……まあ、どっかで遊んでるんじゃないかな？」

「ふうーん。じゃあ、御注文は何に致しますかー？」

「あ。きつね一つ。大盛りで」

「はいはい！ きつね大一つー！」

厨房の奥からお袋さんの声が聞こえた。今は親父さんは居ないのか。よし、好都合。

俺は差し出されたお冷を飲み、喉を潤す。現在聖子ちゃんは暇そうに店内をウロウロしている。チャンスだ。

俺のこの一年の思いの全てをこめてええええつ
と、
！
する

「ういーす！」

「こんにちはー」

「うおっす」

突然ドアが開いて現れる傍目にも堅気とは言い難そうな強持の男達。しかも数は三人。

全員俺が見上げるぐらいの長身で、全員私服。革ジャンを着込んだ大柄な男とアロハシャツのホストみたいな男。

そして最後に ポロシャツにジーンズ姿の千島蒼威がそこに居た。うわ、これが本当に父親かよ。超若いじゃん。

すると聖子ちゃんは営業スマイルで三人を出迎えた。

「こんにちはー蒼威さんに陸人さんに森羅さん」

「こんにちは聖子様。今日は馬鹿二人も連れて来たんでよろしく。俺はいつものセットね!」

「馬鹿は陸人だけだろ……あ、俺は生中と肉うどん大盛りで」

「ヘッ! マザコンと女に頭のあがらねえオタクがよく言うぜ。俺も生中と枝豆とざるを大盛りでー」

仲が悪いんだか良いんだかわからない三人は、俺の座っている力ウンター席傍にドスドスと腰掛けた。

早速聖子ちゃんが頼んだ酒やらツマミを持ってくると、おっさん達はわいわい騒ぎながら談笑を始める。

すると聖子ちゃん。何を思ったのか俺の方を向くと、

「あ、そういえばそこに居る英輔君も蒼二君達のお友達ですよー」

ええええええ!?! 何故俺を紹介する必要があるの!?! すると千島蒼威が俺の方を向き、

「おお! いつもウチのクソガキ共がお世話になってます」

「あ……いえ、俺も仲良くしていただけで光栄です」

「またそんなあ! 遥緋はともかく蒼二のクソつたれには手を焼かされるでしょう」

何だこの人。何でこんなに軽いノリなんだアー!? つか、息子をクソつたれって……

千島蒼威氏は何か変な父親だ。この人が蒼二と遥緋ちゃんの親と言うのが凄く納得できる。

俺は「はぁ……」とか適当にお茶を濁して何とか会話からの脱出を図ろうとしたが、

「蒼威、息子のダチに何のもてなしをしねえってのは、少しどうかと思うぜ」

突然意味が分からない事を言い出した革ジャン。ええ、何か俺一人状況に置いてかれてんだけど……

「確かに……よし、英輔君。こっちにおいて」

「い、いや……そんな、いいですよ」

「ああ？」

革ジャンを着込んだ大柄な男が俺を見た。うわぁ……絶対この人ヤクザだよ。助けて聖子ちゃん！

だが聖子ちゃんは厨房に入っていてしまっているようで、姿は無い。他に客の姿も無い。

全ての救援が断たれた俺は、なるべく生存確率を上げるために千島蒼威氏達のテーブルにつく。

「今日は俺の奢りだ！　じゃんじゃん食って飲んでくれたまえ！」

「いや……悪いですよ」

「安心しなさい。俺達は今日偉大な錬金術師へとなり大きな成功を掴んだのだよ英輔君！」

完璧酔ってるなこの人。千島蒼威氏は懷から大量の諭吉を取り出すとそれで自分の頬を叩き始めた。

すると、他の二人のうちのまだ堅気っぽい方　確か聖子ちゃん
は森羅さんと呼んでいた人が、

「すまないな。こいつら酒に酔うと人に絡みまくるんだ……しばらく付き合ってくれないか？」

「あ……はい」

「俺は神崎森羅。その馬鹿面が浅葱陸人。よろしく」

「あ、はい……伊達英輔です」

「一応、由加と神璽の保護者代わりのような訳だから、そんなに警戒しなくて良いよ」

「由加ちゃんと神璽の保護者だったんですか。初耳です」

「まあ……特に血縁とかは無いんだけどね。良かったらあの二人の話とかも聞かせて欲しい」

「いいですよ。俺が知っているような事でよければ」

森羅さんは何か凄いとまな人だった。俺が由加ちゃんと神璽の話をするとかかなり真剣に、

そして笑いながらよく聞いてくれた。それだけで、この人の神璽と由加ちゃんへの愛のようなものを感じる。

蒼威氏はひたすら愚痴ばっか、どうやら家で相当激しい事をやっ

ているらしくブツブツ呟くように喋った。

陸人さんは……何か奥さんと娘さんに冷遇されているようであり、酒を飲みながら一人で泣いている。

時折聖子ちゃんも会話に参加し、目的と違ってはしまったがそれなりに楽しい食事のひと時。

酒も「高校生ならノマノマイエイ」とか意味不明な理由で大量に流し込まれた。そして会話は子供について再び語られ始めた。

「やべえ……命が妊娠なんてしてみる。俺はどうすればいいんだ」

「梨香あ……詩歌あ……お願いだから、俺の誕生日くらい覚えてて
」

「蒼二にも常識くらいあるだろ。高校生なんだし」

「馬鹿野郎！俺だって高校で出来ちゃった婚だぞ！お前んとこの由加だっていきなり妊娠するかもしれないんだぞ」

「そんな馬鹿な……ハハハ……でも神璽の奴が……」

「神璽って女好きだろ？男と女ってのは何があるかわからないからなあ」

「……っ！お前の遥緋ちゃんだってそうじゃねーかよ」

「ああ、その前に彼氏八つ裂きにすりゃいいんだよ」

「うわあ……お前も陸人と一緒か」

「詩歌……違うんだ。アレは会員制の日記サイトで……」

「お前だって由加がそうになったら八つ裂きにするだろ?」

「梨香……………な、何だその目は」

「……………まあ、わからん」

「梨香ああああアツ!!! 詩歌ああああアツ! お父さんを……………
お父さんを許してくれえ!」

「うるせーニワトリ!」

「人の会話遮ってんじゃねーよ!」

ボコボコに殴られる陸人さん。二人とも子供達の将来について深く悩んでいるようです。

周囲にはかなりの量の酒瓶。うええ……………気持ち悪い。蒼威さん達はまだ全然平気そうなんですけど……………

この人達の胃袋と肝臓はどうなってるんだ。全く。これじゃあ……………俺の目的がいつまでも、

「おいおい、英輔君。君には好きな女の子とかいないのかい?」

「君ぐらいの年ぐらいだと、一人ぐらいは居るだろう?」

今度は俺が絡まりました。はい、森羅さんも完全に酔っ払ってますね。うわあ、もう駄目だ。

「まさかウチの梨香じゃねーだろうな!」

り、陸人さんの娘さんなんて知りませんよ……つか、厨房で洗物してる女の子ですよ……

「じゃあ、遥緋なのか!？」

何でそうなるんですか。

「ち、違いますよ」

「ウチの娘のどこに不満があるんだ……アッ！」

ぐいぐいと締め付けてくる蒼威さん。完全に冤罪だ。理不尽だ。

「不満なんて無いですよぉ」

「じゃ、じゃあ由加なのか!？　おい、英輔君。由加なのか!？」

だから、何でそうなるんですか!？　他にも女の子いっぱい居るでしょうが。

「ゆ、由加ちゃんは怖いですよ……昼ごはんの時に話かけると鬼ですぅう」

「なにい？　由加だって優しい所とかあるんだよぉ！」

もはや滅茶苦茶であった。俺を含め全員が悪酔いし、まともに呂律が回っていない。

すると由加で……いや、床でシクシクと一人泣いていた陸人さんがむくりと起き上がり一言。

「なるほど、聖子様か」

にっこりと最高のスマイルでそう言った。途端に俺の顔は真っ赤に染まり、何も言えなくなってしまう。

その反応を見て蒼威さん達は急に真顔になると、テキパキと片づけを始めた。何だ、このいきなりの変わりようは。

散らかっていたテーブルの上を片付け終わると、妙に真面目な顔で蒼威さんは一万円札を一枚テーブルに置き、

「すまない、英輔君。調子に乗りすぎた」

「頑張ってくれ。無論、由加達には内緒にしておこう」

「恋は渾身の右ストレート。by浅葱陸人」

それを言うつと嵐のようにお店の外へと出て行ってしまう蒼威さん一行。本当に、テンションで生きている人達である。

この一時間ほどの付き合いでもそれだけはわかった。ついでに、かなり良い人達であった事も。

なんていうか、馬鹿なんだよね。いい意味で、何となくその教育方針やら考え方にも尊敬できるような所もあったし
やっぱり俺達みたいな子供とは違うと思った。

「あ、蒼威君達やっと思つけたー！」

「ヤ、ヤベエ……遥ちゃんだ。逃げるぞ！」

「待ちなさい！ 蒼二、遥緋、命ちゃん。そっちにいったわよ」

「ぎゃあああ！ 蒼二デメエ！ お父さんに蹴りくればがったな」

「命お！ 噛むなよお、マジ痛いからあ！」

「OK、遥緋ちゃん。俺は素直に降伏しよう」

店の外からそんな声が聞こえた……………うん、軽く前言撤回。そして何かが殴打されるような音。

掠れた悲鳴だけが、静かになった店に響き渡った。ああ、何か一気に空しくなってきたよ。

そして何かが引きずられていくような音がした後、店の静かさに気がついたのか聖子ちゃんが出てきた。

「あれ？ 蒼威さん達食い逃げ？」

「いや、お代なら置いてったよ」

「あ、ホントだ……………それにしても、今日は楽しかったねえ」

「ああ、凄い人達だった……………」

「英輔君があんなに必死になってる顔始めてみたよ」

「ハハハ……………お恥ずかしい」

それつきり少しの間会話が途切れた。今なら言える。いけ、伊達英輔、男だろ。

それに陸人さんも言ってたじゃないか、恋は渾身の右ストレートだつてさ。すなわち直球つて事だよね？

俺はそう勝手に解釈すると、声を絞り出すようにして喋りだす。

「あのさ……来月って何か大きな用事ある？」

「ん？ 特に無いなあ……」

「じゃあさ……夏祭り、一緒に行こうよ」

言ったああああ！ ついに言っちゃったよ俺。だが、聖子ちゃん
は特に何の反応もせずに、

「いいよ？ ってかどうせ神璽君辺りが皆で行こうって言っでし
よ」

「いや……そうじゃなくて、その……二人で……」

「え……」

明らかに聖子ちゃんの顔が変化した。うはあ……これで俺はもう
後戻りは出来ない。

嫌だった。この心地いい友達関係を崩すのが嫌だった。嫌だった。
何もせずに卒業してしまうのが嫌だった。

でも、これで俺は一歩進めた。なのも出来なかった一年前とは違
う。ついに一歩前へと進めた。

「いいよ」

「……………え？」

我ながら間抜けな声だったと思う。

「一緒に、二人で行ってもいいよ」

「ま、マジで!?!」

「うん」

「じゃ……じゃ、じゃじゃあ、あ、後でメールか電話しても良いかな?」

「うん……待ってる」

うはあ……照れる聖子ちゃん可愛いぜえ。やったよ! やったよ皆! うん、脈アリって事じゃん。

このぎこちなさがいい! この照れてお互いが喋れない空気がいい。すると聖子ちゃん、気まずさを解消するためか。

「じゃ、お会計しちゃうか」

「うん」

そう言いテーブルの上にあった酒瓶を数えて、領収書をジッと見てかかった金額を計算していく。

「お会計、一万と三千五百八十円になりまーす」

「え……?」

足りてませんよぉ！
蒼威さん。

Days 14：九我山律（前書き）

メッセにアドが入ってなかったのでここで返信します。

>つよしさん

現在、過去の小説は自分のPCに残っている程度です。

投稿した場所も迷惑書き込みのせいで、かなり後ろになってしまってます。そして一番の問題が、それは某ゲームの二次創作なんですよね。

だから、それを知らない人には全く意味がわからないと思うんです。一応緋色の眼は、それと同じ登場人物と過去の出来事があったけど、そのゲームとは関係がないようなパラレルでの話みたいな感じで書いてます。自分のオリジナル？の部分だけ引き継いで書いてるんですよ。

現状では過去作を読む事は自分で検索して探してもらうしかないですね。千島蒼威とかで検索すれば結構ヒットしますので。

というわけで、次回は梨香です。

Days 14：九我山律

それは、僕の十歳の誕生会の時の話。
まだ僕が私という一人称だった頃の話。僕が初めて恋を知った時の話。

あの頃の九我山の期待は全て僕に注ぎ込まれていた。やっと生まれた跡継ぎ、だけど女。それでも跡継ぎ。

その為、僕は幼い頃から徹底的に厳しく育て上げられた。普通の女の子みたいに綺麗な服を着れる事は滅多に無い。

それでもその日は、私の十歳の誕生日だという事で普通の女の子の服を着させてもらえたんだ。

（そして、時雨と出会った）

父は色々な家の者を私の誕生パーティに呼んだ。それこそ、家の使用人を総動員するほどの規模。

僕は知らない大人や知らない子供にずっと頭を下げさせられ、大した感情が込められていない

「おめでとう」をそれこそうんざりするほど浴びせられた。そんなこんなで僕が疲れてジュースを飲んでいた時、

会場が一瞬「ざわっ」という音を立てて静まり返った。気になつて私が見るとこちらへ歩いてくる数人の男達。

「おい……八神だぞ」

「千島と浅葱も居るじゃんか……」

「アレが緋眼の一族か……」

「後ろの子供が、あの八神の次代か……いいか？ 顔を忘れるなよ？」

「珍しいな……あの家がこういう場に出張ってくるのは」

私も顔ぐらい一人の子供を除く、全員の顔と簡単な経歴は知っていた。

八神家頭首八神正宗。あの八神の現頭首であり、その武勇も耳に届くほど。

その後ろを歩くのが浅葱陸人。浅葱の当主の夫であり、浅葱の力を僅か数年で立て直した立役者。

最後尾が千島蒼威。最強最悪の式神使いとして最近名を馳せている男。

最近では、八神に戦いを挑んだ土倉をたった一人で全員叩きのめしたという情報まである。

だけど、その蒼威と陸人の後ろを凜とした姿勢であるく少年は見た事が無かった。すると父が、

「やあ、ようこそいらつしました」

「お招きに預かり光栄です。九我山さん」

「それで、あの……後ろのお三方は……」

「ああ、後ろの二人は非常に凶悪な殺人犯のような目つきをしています。息子の世話係なので安心してください」

「はあ……」

笑いの感情を感じさせない笑顔で言う八神正宗。後ろの二人は少しムスツとしたが何も言わない。

すると、一番後ろに居た子供が一步前に出て父の前で頭を下げると、

「はじめまして、八神正宗の息子の八神時雨と申します」

「ああ、君が八神の次代か。まあ、ウチの子とも仲良くしてやってくれると在り難いよ」

「ええ、僕も仲良くさせて頂ける事を光栄に思います」

もう一度恭しく頭を下げて僕の方を見る時雨。後ろの二人は何故か笑いを堪えていたがな。

すると時雨は僕の方へと歩いてくると、

「お誕生日おめでとうございます」

ああ……僕だって女の子なんだ。一人の男性にときめくなんてのは良くある。

信じるよ。僕だって結構女の子らしいんだぞ？今では少女マンガはこっそりと集めてるし、恋愛小説を書いたりもする。

主人公僕。相手は理想の男性な。我ながら痛い。まあ、僕は本当に不覚にも八神時雨の笑顔に一目惚れしてしまったのだ。

「あ……ありがとうございます」

「これ、プレゼントです。良かったら受け取ってください」

渡されたのは指輪。それも大して高い物でもないし安くもないもの。

「だけど、あの頃の私にはそれが、まあ……その……婚約指輪？…

…ああ、婚約指輪に見えて仕方が無かったんだよ！

そして思わず赤面して私は気の利いた挨拶も出来ないまま　ただ、ドキドキしていたんだ。

決して私は年下が好きというわけではないんだぞ？　ただ時雨がかつこよかっただけで……ああ、何を考えてるんだ僕は。

「では、また後で」

それだけ言うと時雨はスツツと立ち去ってしまった。僕は何の声もかけれない。

追いかけようとしたが、使用人にお色直しの時間だと止められてしまう。ああ……時雨。

そんなわけで、僕は太急ぎでお色直しを終わらせると時雨を探して会場を歩き回った。

「どこだろう……？」

正宗さんなら見かけたのだが、肝心の息子が居ない。もしかしたら、どこか一人になっているのかもしれない。

そんな予想をした私は、階段を上がった所にあるテラスのような場所へと足を進めた。

すると、案の定時雨はそこに居た。それも浅葱と千島と一緒に。何を話しているのかと僕が聞き耳を立ててみると、

「今日は疲れたなあ……もう帰りたいわあ。それで一緒に梨香と寝

るんだ！」

「オメーの巨体と一緒に寝たら潰れちまうよ」

「ハン！ お前なんか最近息子に冷たくされてるくせに」

「うつ……でも遥緋が懐いてくれるから良いんだよ」

「今度、僕から蒼二に何で嫌いなのか聞いておきましょうか？」

「時雨……ってか嫌いが前提で話を進めるなっつーの！」

「蒼二は僕にも少し余所余所しいですからね。僕としても話してみるだけ得がありますから」

「うわぁ……まだガキのくせに、生意気な事を」

「そーいや。確か九我山の女の子に指輪あげてたよな？ このマセガキ」

「ああ……あの男っばい子ですか。まあ、九我山のご機嫌も取れて、どこかの変な女から

無理矢理渡された指輪ユビワも処分できて正に一石二鳥でしたね。それに、どうでも良いことです。」

「……………え？」

「うわぁ……将来の女泣かせがここに居る」

「絶対口クな大人にならねーな」

「まあ……一緒に居る大人達がロクな人じゃないですからねえ」

「ためコラア！ 陸人はまだしも俺までいれるんじゃないやねえ！」

「蒼威、これはお仕置きが必要だぜ……」

「おう！ ……あつ！ 逃げるな時雨！ 待ちやがれ！」

その後、私は………生まれて始めて本気で泣いた。三日間ほどずっと泣いた。

まず男っばいと思われた事が本当に悲しくて、そして指輪に関しては心に深い傷を負った。

舞い上がっていた自分が馬鹿馬鹿しくて、滑稽で、本当に悲しくて。

それから僕は 一人称の私を辞めて僕と言いはじめる。理由は酷く陳腐な物。

いつか時雨を見返してやる。アイツよりも強くなって、アイツが惚れるぐらい綺麗になって、

アイツの心を弄んでゴミのように捨ててやる。そう決意して僕は女と見てくれなかったアイツへの皮肉として

僕と名乗る。これは一種の決意なのだ。そして僕は式神の修練を積み、様々な勉強をして、”鬼憑”の力を高めていく。

幸いな事に弟も生まれてくれた。これで僕はもう九我山の跡継ぎになる必要は無い。

そして、数年後「九我山の戦姫」と呼ばれるほど強くなった僕は、女性としての美しさも運が良い事に兼ね備えていた。

そりやもう、縁談は断るのがめんどくさい位来たし、言い寄ってくる男も掃いて捨てるほど。

僕はその間さり気なく、情報屋を使って八神の情報をそれこそ逐

一集める。

二年前に起きた神代との戦いの時には、少し協力してやろうと思ったが”十文字”から何故か禁止が出てしまう。

元々僕らの特区には関係なかったし、家の者も危険には晒せない。莉王は警告を無視して一人で行ったけどな。

数の十名家では十文字が一番強い。それこそ、他の家が結託しても奴らは余裕で返り討ちにするだろう。

あいつらは何か気味が悪い。あいつらの取り巻きの一族も何か気味が悪い。

だからこそ、数の十名家は五家に分離して今では十文字派と四条派に真つ二つ。ちなみに僕らは四条側である。

そして神代戦争終結後、八神は八頭を倒して八の名を冠する数の十名家へと入ってくるのだった。

あの八頭を倒すとは時雨も中々強くなったものである、すると八神側から連絡があり近々挨拶に行くとの事。

「やったあ！」

と思うわず使用人の前でガッツポーズしてしまった僕。これが、後の律様御乱心事件の発端となった。

まあ……それはおいといて、挨拶の話。数年ぶりに舞い上がった僕は一番自信のある服を着て、下着も一番可愛いのにした。

……いや、深い意味はないんだ。どーせ、どーせ僕なんて男してしか見られてなかったんだし。

そして、八神が九我山の屋敷に着た。ちなみに僕は緊張しすぎて明け方まで一人布団の中でクスクス笑っていたのである。

「お久しぶりでございます。九我山さん」

「ええ、律の誕生会以来ですね。まさか貴方達も数の十名家に所属

なさるとは」

「八神の力にも限界が見えてね。これからは、特区を中心に色々やっていこうかと」

「宜しく願います。私はもう病弱の身でございまして、家の方は律にまかせつきりなのですよ」

「ほお……そういえば、随分とお綺麗になりましたな」

「ええ、今では自慢の娘ですよ……ん？ どうした律？」

「……え？ ああ……すいません」

固まってしまった。私の視線は、今正宗氏ではなく後ろの時雨に釘付け。

相変わらずカッコイイ……っ！ もう意地悪するとかそんな考えは全て吹き飛び、愛して欲しい。ただそれだけ。

だが、私の熱烈な視線には全く気づかずに時雨はただ、後ろで黙って座っていた。

「……ぼ……私の事、覚えてる？」

僕は時雨にそう聞いてみた。だが、時雨は眠そうに目を擦り一言。

「えっと……まだ私としても小さかったものでよく覚えてないんですよ」

……何だと？

「あの頃、時雨殿は小学校に上がったぐらいでしたからな。覚えてないのも無理は無い」

「お恥ずかしい限りでございます」

そのまま、用はないとばかりにまた後ろへ下がってしまう時雨。僕の心は再び絶望へと染まる。僕の数年間は一体なんだったというのか、僕は何のために

時雨が僕を見ていた時間は数秒ほど。この数秒のために僕は僕は数年間も 頑張ってきたのに。

何の感慨とばかりに俯く時雨。僕はただずっと貴方を見てきたのに、酷い……

結局その日はそれで時雨達は帰ってしまい。僕は一人傷ついて、しばらく引きこもりがちになった。

そんな現状を打開すべく、三ヶ月後に僕は気分転換も兼ねて出かけることにした。

しばらく落ち込んでいる間にもめんどくさい仕事が入ったため、こうやって休日を満喫するのは久しぶりの事。

「やあ……颯太はいるかい？」

やってきたのは五月の 事情があつて颯太だけの屋敷。幼少時からこの家とは親しくさせてもらっている。

すると、使用人が出てきて「颯太様はいつもの場所です」と伝えられた。僕はそのいつもの場所へと向かう。

少し離れた場所にある、大きめの体育館のような施設。中に入るといつも通り金属バットを振っている颯太の姿。

バッテリーセンターが入っているその場所は、昔から颯太や僕達が集まる一種の秘密基地のような場所。

大人になった今でもよく来ている。すると、颯太が私の姿に気づ

いたのかバットを振るのを止め、

「律、よく来た」

「ああ……お邪魔させてもらっているよ」

「問題無し。莉王も来ている」

「何？」

颯太の視線の先には、ソファーにどっかりと座り込んで偉そうにしている金色の髪をした男。

本人曰く、「金髪って何か王っぽいじゃん」と、家に規定に逆らってまでもその色を維持しているその男。

名前は四条莉王。変人揃いの数の十名家でも一番の変態と称される男。

「莉王も居たのか……」

「ハハハ、新時代の王はアウトドア派なんだ。屋敷に引きこもってばかりじゃ民の状態もわからん」

「ここは室内だろ……」

この偉そうな態度は相変わらず。自分の事を【王】と称し、また常に王であろうとする男。それが四条莉王。

まあ……偉そうで変人なのだが中身は中々に出来た人間であり、颯太を含め僕の幼い頃からの数少ない友達の一人。

すると莉王は、手招きをしてこちらに来いと示す。僕は溜息をつくと、莉王の正面のソファーへと座った。

「フン、それにしても相変わらず不景気なツラだな」

「余計なお世話だ」

「それよりも、聞いたぞ律。少し前に八神がきたんだってな？」

「……………ああ」

「その様子だと、見向きもされてないようだな」

「うるさい……………」

「俺様は幼い頃からお前の努力を見てきた。女でありながら、強く、美しくあろうとするその姿勢。

お前は素晴らしい女だと俺様は思っている。だが、肝心の思い人の態度は全くつれないのが現実だよな」

「……………何が言いたい？」

「美貌は駄目だった。だが、もう一つの方は試したのか？」

「あ……………」

「力で、お前は八神時雨とまだ勝負をしていないだろう」

確かにそうだった。僕の外見は見向きもされなかったが、まだ力の方は試していない。

そして、力の方は美貌よりも遙に自信がある。絶対に時雨に負ける気はしなかった。

僕はそんな自信を持てるほど頑張ってきたし、それを知っているからこそ莉王も僕にそう提案したのだと思う。

「……負けないさ」

「その意気だ。そして何と俺様達四条は、近々八神潰しの計画を練っている。わー凄い偶然」

「……何だと？」

「俺様は人類の王。そして剣術にしても王。王とは頂点。俺は、全ての剣士の頂点に立たなければならぬ」

「はあ……？」

「聞いた所によると、八神正宗は中々の剣豪らしい。だからこそ、俺様は引くわけにはいかない」

相変わらず、破綻した理屈だ。だがこれが莉王。あの帝さんの事件から、こいつはこうなってしまった。

王、頂点。懐かしい、いつも帝さんはそんな事ばかり喋っていたな。

「しかし……いきなり攻撃するのもどうかと思うぞ。確実に他の家や世論を敵に回すだろうしな」

「安心しろ馬鹿者。一応は復讐心に駆られた八頭の頭首からの依頼だ。八神を叩きのめせとのな。」

王としては下の者の意見を聞き流す事はできない。やはり、民の事情に目を向けてこそその王であろう」

「ふうん……」

「ま、他にも色々とは打つけどな。その辺はお前や颯太に動いてもらう」

「御意」

「なるほどな……四条、五月、九我山ならばたとえ浅葱や千島が介入してきてもあまり問題は無い」

「二階堂も居るぜ。あの雨龍が協力を申し出てきた」

「あの男がかつ！？ 下手すれば僕達が滅ぶぞ」

「安心しろ。そう簡単には裏切らせない。王として家臣の事も監視はするぞ」

……二階堂雨龍は数の十名家の中でも危険な男。奴に齒向かって破滅したのも居るが、

一番多いのは奴に裏切られて破滅した者が一番多い。それ程に自分勝手な奴なのである。

自分中心という考え方では莉王と似ているが、アイツは情のカケラも無い。だから僕は嫌いなんだ。

「というわけだ、律。乗るか乗らないかはお前次第だ。さあ、どうする？」

莉王が意地悪そうな顔で僕を見た……ちえっ僕の答えなんて当に予想できているし、

心眼で知ってるくせに。だが、莉王は何も言わずにじつと僕を見つめている。颯太もさり気なく視線を送ってきた。

……ああもう、お前達はそんな僕に喋らせたいのか。

「答えは、Yesだ。これで満足だろう」

莉王の顔に薄い笑みが張り付き、少しはなれた場所に居る颯太も軽く笑ったのを感じた。

そしてこの日から、僕の運命は大きく変わったんだ。

Days 15：浅葱梨香（前書き）

今回は結構長いです。

今までのdaysの中じゃ一番長かったと思います。

色々と詰め込みすぎたのかもしれない。

そんなわけで次回はファーストコンタクトですね。

神々の黄昏が蒼二達の話になってからの話ですが。

とりあえず、剣菱、暁、ナナシが再登場し雨龍も絡んでいきます。

Days 15：浅葱梨香

「え〜……来月にある体育祭について、議論したいと思います」

時刻は放課後。私達三年B組のホームルームの時間。

教壇に立つのはクラス委員長のマツンこと、松島楓君。スポーツ万能、勉強壊滅といった微妙な委員長。

修学旅行が終わったら、すぐに体育祭がある我が学校。お父さん曰く、昔からそうらしい。

中高一貫教育のこの学校は蒼威さんや森羅さんやお父さんの母校でもあり、その三人で悪名を町中に轟かしたらしい。

だが、私は浅葱陸人の娘であるので高遠陸人とは完全に無関係だと先生達は思ってくれている。ホントありがたい。

お父さんも浅葱の一員なので、かなり情報は隠蔽されているのでその辺は大丈夫だろう。うん。

「まあ、最後の体育祭だからね。優勝の美？ 何だかそんな勢いのモンでも飾ろうかなー」と思いました、

こうやってクラス一致団結して、優勝を狙おうかと思ひましてホームルームの時間を割いたわけなのですが……」

「競技何あるのー？」

「俺、100メートル出る！」

「私綱引きやりたーい」

「え……ああ、まあ、その辺も今からね」

そうやって議題は進行していく。本当にノリの良いクラスで助か
ると思うよ。私は適当に何かやろう。

大体中学三年にもなつて、体育祭ぐらいで盛り上がるのは素直
に羨ましい。

私だって昔はこういうイベントが好きだった。でも……何か今は
正直気乗りがしないね。何でだろう？

「浅葱っち。何か出るー？」

少し離れた席から竜胆ちゃんが話しかけてきた。いつもと変わら
ぬ能天気な竜胆ちゃん。

だが、何か違和感がある。修学旅行が終わってから妙に色っぽい
というか、何というか。

竜胆ちゃんと並んで歩くと自分が凄くガキっぽく見える。それは
クラスの皆も同感なようで、よく話題がでる。

最近では高等部の先輩までもが、竜胆ちゃんに告ったというのだ。
本当に雰囲気は今までは違っていた。

「いや……私は、綱引きにでも出るよ」

「ふうん……アタシは郁人と二人三脚出るんだあー！」

「相変わらず仲いいね」

「そりやもう！ こい……家族だからねえ」

「ん？ 何か言いかけた？」

「ごめん。ちょい、噛んじったあ」

そんな感じで時間は過ぎて行き、私はクラスリレーと綱引きに出る事が決定した。

うん、凄い無難。お父さんは残念がるだろうけど、私はこう見えてどうかそのまんまだけどかなりの赤面症。

これはきつとお母さんの遺伝なんだろうな。お母さん、今でも蒼威さんとか遥さんに押され気味だし。

私もあんまり目立つのは好きじゃない。せめて、こういう日常ぐらい慎ましかに生きたいのよね。

だが、ここで一つ問題が発生した。とある競技が埋まらないのだ。その競技とは三人三脚。ちなみにかなり恥ずい競技だ。

何せ、父親と先生と生徒でやる競技なのだ。全く、誰がこんな恥ずかしい競技考えたんだろうね。

「佐藤やれよー。目立つの大好きだろー」

「あー俺、そういうのパス」

「誰かやろうよー。つか、出てる競技少ない奴が普通でねえ？」

「はあ？ んなら、テメーが出るよ」

押し付け合いが始まった。男は男同士でなすりつけあい、女はもはや他の話題へと移っている。

これがこのクラスのいつものパターン。「きっと誰かが何とかするだろう」そういうスタンスなのだ。

そのしわ寄せがいつもくるのがマッスン。本当にかわいそうだと思うが、ドンマイとしかいいようが無いね。

するとマッスン。しばらく俯いたかと思うと、急に顔を上げて黒板を殴った。

「お前らア！ 少し俺の話を聞け！」

普段温厚なマッスンがキれた。流石に無駄話は収まる。そして、マッスンは咳払いをすると、

「実はな…… 鈴本先生は今年で先生辞めるんだってよ」

鈴本先生というのは、私達のクラスの担任の先生。年はそろそろ定年が近いのではないか。

白髪にメガネの丸っこい体系。凄くおっとりとした先生で、怒った時なんて見た事が無い。

諭すように注意するのが特徴で、相談とかにも真面目に答えてくれるので生徒の人気は高い。

私も嫌いじゃない。授業は分かりやすいし融通は結構利くしね。でも…… 先生が辞めるなんて知らなかったなあ。

「だからよ…… 俺ら鈴本先生の最後の生徒として、先生を優勝に導いてやるっぜ！」

マツツンは熱い人だ。それはもう、羨ましいぐらいに熱血。そしてウチのクラスもさり気なく熱血。

気分が乗らないと究極にダラけるが、気分が乗ると異常な爆発力を発揮するこのクラス。

少なくとも、マツツンの怒鳴り声によって何人かはヤル気を出したようだ。だが……

「でもさあ……ウチの親父腰が悪くてさあ」

「アタシんち、店やってるから親これないよー？」

「ウチなんか、ぜってーこねえよ。どーせ、男と遊んでんだろっな」

「うわ、岩田んち怖いなー」

「うるせえよ」

「そうかあ……やっぱそんな、凄くガタイがよくて運動神経のある親なんて居るわけないよなあ……」

絶望したようなマツツンの声。確かマツツンの家は親が離婚しているのだ、これないだろう。

そうやって時間だけが無為に過ぎていった……うん、これは今日中に決まりそうに無いね。

私はそう考え、さり気なく帰り支度を始めようとしていると……

「確かさー。浅葱の親父ってスゲー強そうじゃなかったっけ？」

小学校から一緒の藤井が唐突にそんな事を言い始めた。しまった……こいつは見た事あるんだった。

そう思った時にはもう既に時遅し、クラス中の視線が私に向いていた。もう逃げ場が無い

そしてスイマセン……マツンの瞳がさっきからずっと私を捉えて離さないんですけど。

「浅葱……お前の父親の身長いくつ？」

「ひゃ……百八十七ぐらい」

そう、ガタイは素晴らしい。頭も素晴らしく悪いけど。

「親父さん、体育祭にこれないかなあ？」

結局私はマツンの視線から逃れる事ができずに、三人三脚に出場する事になってしまった。

いや、まだ決定じゃない。お父さんが運よく浅葱の仕事でも入ってくればそこで終わりだ。

お父さん達は私が中学に入ってから、体育祭に来たことが無い。

まあ、叔母さんとか来てくれたけどさ。

それに、浅葱だって暇じゃない。お母さんは帰ってこない日は一週間ぐらい帰ってこないし、

お父さんは……………毎日七時には家に居る気がする。まあ、ハル姉ちゃんの家よりはマシかも。

蒼威さんはほぼ一年中、働いてないらしいし。でも、あの八神のバックアップがあるから当然か。

お父さん曰く、蒼威さんは本当に群を抜いて強いらしい。だから、あんなに自堕落な生活が送れると。

蒼二さんもハル姉ちゃんもすごい強い。本当に千島は凄い家系だ。でも浅葱は復興したばかり。

ああ、でもお父さんとお母さんで頑張って立て直したんだから、娘として比べるのは良くないな。

そんな事を考えていると、もう家の前。「ただいまー」と返事が無いのはわかってはいたが、言ってしまう。

「お帰りー」

……………珍しい。お父さんがソファーに座っている。今日は非番だったのかな？

「お父さん、お仕事は？」

「今日は半ドン。明日からしばらく帰れないけどな」

やった。多分長期のお仕事だ。これで、体育祭には出れないだろう。

私は答えがわかっているのに、お父さんに聞いてみる事にした。

「じゃあお父さん、私の体育祭これないよね？ 残念だなあ……………出

て欲しい競技あったのに」

「出れるよ？」

「三人三脚なんだけど……………え？」

「お前の体育祭は行くよ？ だからこそ、めんどくさい仕事を終わらせるために明日から泊まりなのさ！」

「……………マジ？」

「マジだ。ちなみに詩歌も行くからな。悪いがしばらくは蒼威の家に泊まるか、晩飯は一人でやってくれ」

「あはは……………はは……………」

「三人三脚か。まだあの競技あったんだなあ。お前の担任誰だっけ？」

娘の担任の名前ぐらい知つとけよ、と思つのは私だけだろうか？

「鈴木先生だよ、数学の」

その瞬間、お父さんの顔が強張った。この顔は何か嫌な事を思い出してる時の顔だ。

そのまましばらくお父さんは喋らない。ただじっと、何かを思い出しているような顔で居る。

何を考えているんだろう？ 本当にワケがわからない。たまにこういう顔をするのだ、お父さんは。

すると、お父さんは私の視線に気づいたのか、表情を緩めると、

「……絶対行くわ、お前の体育祭」

久しぶりに聞く、浅葱陸人あさぎりくじんの心からの真面目な声。

呆氣に取られた私は何の反論も出来ずに、そのままソファから立ち上がって部屋に行つて

しまつたお父さんの後姿をただ呆然と見つめていた。

次の日から、お父さんとお母さんは大きな荷物を持って浅葱の家へと行つてしまつた。

お母さんは終始機嫌がよく、出かける時には手なんか繋いでいた。全く、恥ずかしい。

ただお父さんは何か考えているような感じ。でも私は何か拾い食いでもしたのだろうと思ひ氣に留めない。

それからもう！ パラダイスみたいな？ 遅くまで起きてても怒られないし、何を食べても良い。

最高！ つてな感じで竜胆ちゃんとかと朝まで遊んだり、週末には千島家に泊りにも行つた。

相変わらず楽しい楽しい千島家。ただ、蒼威さんも何か妙に思ひつめた表情をしていた。

蒼二さんとハル姉ちゃんが「何か拾い食いでもしたんでしょ（だろ）」と言つて完全に放置だつたため、

私はその意味を深く考える事が無く、由加さんや神璽さんや命ねーさんとかも一緒に、カラオケ行つたり色々遊んだ。

「そーいや、森羅さん何か最近元気ねえよな」

「拾い食いでもしたんじゃない？」

「由加じゃあるまいし……」

「……黙れ」

由加さんのボディブローをモロに喰らって悶絶する神璽さん。本当に、良いカップル？だ。

いつか私もこんな相方が欲しいなあ、とは思いつつも知り合いの顔を思い出しては消えていく。

理想は高いほうじゃないんだけどなあ……藤崎君ももうスッパリ諦めたし！　つか、誰がお父さんにバラしたんだろ？

そして楽しい時ほど、時間はあつと言う間に過ぎ去ってしまい、今日は体育祭当日。

昨日は何故かお母さんだけ帰ってきた。何か知らないけど、お父さんは一日実家に帰ったらしい。市内なのにね。

現在は午前中の序盤とも言える競技が終わり、私達のクラスは中々の成績を出していた。

ちなみに、私はというと綱引きに出ただけ。後は後半のクラスリレーと……はい、三人三脚ですよ。

「浅葱っちー！　お昼ごはんどうするの？」

「お母さん達が来てるから、そっちで食べるよ」

「ういつす！　アタシと郁人はこっそり抜け出して吉田屋行ってくるー！」

ああ、そういえば郁人君と竜胆ちゃんは勘当されてるんだっけ。
やっぱりこういう家族の和気藹々とした空気は苦手なのかもしれない。

「……良かったら、ウチの一緒に食べる？」

一瞬、竜胆ちゃんの目に迷いの感情が出たのを私は見逃さなかった。

「……うん。郁人が、待ってるから」

「わかった。じゃあ、また午後から」

「うん……ありがとう。じゃあねえ」

そう言つと竜胆ちゃんは人ごみの中へと消えていった。

私は何故か溜息をつくど、家族の待っている場所へと向かう。
ええと……あ、居た。

今日は遙さんと蒼二さんとハル姉ちゃんと命ねーさんまで居た。

……この人達学校は？

それと……おお、珍しい人が居る！

「お、梨香。久しぶり」

「あ、こんにちは、海里叔母さん」

私の目の前に居る人はお父さんの妹の、海里叔母さん。本当に良い叔母さんなの。

お父さんの妹って言うのが信じられない。どうやってたら、ここま

で似てない兄妹が出来るんだろ。

おじいちゃんやおばあちゃんも全然普通の人だしね。しかも、めっちゃ優しいときた。

「馬鹿兄貴に苦勞してるでしょ、義姉さんもさっきまでずっと愚痴ってたわ」

「御迷惑おかけします。海里叔母さんには本当に迷惑をおかけしてばっかで」

「いやいや、あの馬鹿のお陰でこんな良い義姉ちゃんと姪が出来たから万々歳よ」

「海里叔母さんにそう言つて貰えると、心が軽くなるよ」

海里おばさんの隣ではお母さんが寝息を立てていた。ああ、飲んだんだね。

お母さんはしばらく飲むと寝ちやうか、意識が混濁する。それでお父さんはその隙に乗じて私を作ったらしい。

娘にそんな話をするなと言いたかったが、その前にお母さんの式神がお父さんに迫っていたので何も言わなかった思い出がある。

「梨香ちゃん！ 詩歌ママの料理美味しいね！」

「うん。これはママを超えるかも……」

「味付けのバランスが素晴らしい。母さんのは親父の趣味に合わせて少し濃いめだからな」

どうやら蒼二さん達のお目当てはお母さんの作ったお弁当らしい。

たったそれだけの理由で学校を休むのかこの人達は。私がそんな感情を込めて遥さんを見ると、

「いやね……私も蒼威君も高校時代は出席日数ギリギリだったから強く言えなくてね」

「何してたんですか……」

「やん。梨香ちゃんにはまだ早いわよお」

「そうですか……」

その後は、私もすっかりとお弁当を食べた。蒼二さんなんかは、私がかから揚げを食べるところそりと

悲しそうな顔で私の事を見る。……そんなに食べたいんですか。というわけで、お箸で口に運んであげたら

嫉妬した命ねーさんから揚げを叩き落され、それに激怒したハル姉ちゃんがねーさんと喧嘩になり、

最終的には遥さんのゲンコツで二人とも大人しくなった後、蒼二さんは二人から無言の重圧を浴びていた。

そんな楽しい食事が終わり、更には昼休みが終わってもお父さんの姿は見えない。

……お父さん、どうしたのかな？ 性格上、逃げたって事は確実に無い。お腹でも壊したのかな？

「じゃあ、午後の部に出てきますー」

「梨香！ 女は気合だぜ！ ねえ、遥さん」

「そうね。ナめられたらそこで終わりよ！」

妙にテンションの高い海里叔母さんと遙さんに後押しされて私はクラスの輪へと戻っていった。

そして始まる午後の部。クラスリレーは一生懸命走ったが、結局二位。私は一人抜かしたぐらい。

海里叔母さんの「行け！ 梨香あ！ させーっ！」が無かったら、もう少し早く走れたかもしれないが。

今は竜胆ちゃんと郁人君が二人三脚で走っている。何か竜胆ちゃん、凄く楽しそう。

郁人君もあんまり笑ったりしない人だけど、今は口元を緩めながら走っていた。でも、何か寂しそう。

「浅葱さん。ご父兄の方は……？」

「あ、先生。それがまだ来てなくて……」

「ほっほ。まあ、気長に待ちましょう」

「はあ……」

鈴本先生は、のほほんとした表情で笑った。本当に、穏かな先生だ。

だが、それでも昔はかなり厳しい先生だったらしい。英語の国松先生が確かそう言ってた。

それが今では……と考えていた時、見覚えのある頭が視界をよぎった。

その色は、紛れも無い赤。ツンツンに立てた長髪。ま、まさか……

……

「高遠……高遠なのか？」

呆然とした、何か幻でも見ているような口調で鈴元先生は呟いた。

「よっ！ 先生、老けたなあ」

「……この馬鹿者が！ 俺はお前らが中学卒業してから心配で……心配で！ 結構真面目に探したんだぞ。」

どうしても高校卒業した後の記録は見つからないし！ お前の親御さんは知らないの一点張りだし！」

鈴本先生が本気で怒鳴っていた。うわぁ……こんな先生始めて見た。

だが、肝心のお父さんは相変わらずヘラヘラと笑いながら、

「悪いな。ちよっち、国家レベルの仕事についててな。ああ、ちなみに梨香は俺の娘だから」

「な……浅葱さんがか？」

「おう、元高遠陸人は、現在は浅葱陸人なのだーあはは。簡単に言えば婿養子になったってワケよ」

「そうか……千島や神崎とは未だに連絡取ってるのか？ あいつらは生きてるのか？」

先生は心から心配そうに、お父さんを問い詰める。何か良いなあ……こっこの。

今の学校は生徒のために必死になってくれる先生はそう多くはない。

でも、鈴本先生の今の気持ちに偽りは無い。それほどの必死さを

私は感じた。

「まあまあ、まずは勝つこと考えようや」

そう言つとお父さんは私と先生の間で立つて、紐でお互いの足を縛り始めた。

先生は何も語らない。ただ、嬉しそうに顔を綻ばせてお父さんを見ている。

……昔、何かあったのだろうか。兎に角、問題児だったらしいし。そして私達は、そのまま前の二人三脚が終わるまで黙って待機し、ついに番が来た。

「っしやあ！ 先生、梨香！ 行くぜ」

「うん」

「高遠……」

お父さんのガツシリとした腕が私の背中に回された。いつもは嫌で仕方が無いが、

それでも今は凄く頼もしい力強さ。お父さんの視線はもう前しか見てない。本気で集中していた。

この競技で1位を取れば、多分総合クラス優勝が出来る。だからここは何としても頑張らなくてはいけない。

私も戦闘時と同じくらい集中したただ前だけを見据え
ツという音と共に走り出した。 パン

「おらあああ！」

いきなりもの凄い勢いで引つ張られた。ちょ、馬鹿！ 足並みぐ

らい合わせようよ。

……と思ったが、ついていけないのは私だった。先生はお父さんの足並みについていつている。

まさか先生がこんな……トロい先生だと思っていたのに。だが、まだレースは始まったばかり、

後続にも大した距離は出ていなく、全員の速さが拮抗していた。うわ、皆必死だよ。

そして、私達が始めのカーブに差し掛かったとき、

「先生、久しぶり！」

観客席から蒼威さんの声が聞こえた。見ると、千島家全員勢揃いで私達を見ている。

先生の顔が一瞬驚愕に染まり、だがすぐに穏かな表情に戻った。

「蒼威はもう結婚していて、双子の子供が居る。もう一人の女の子は居候な。」

病気つつーか、人格ももうアイツだけで毎日楽しく酒飲んで暮らしてやがるよ」

「そうか……良かった。アイツは……親とも折り合いが悪かったし」

「今でも悪いけどな。でも、アイツはとても良い家庭を作ったぜ」

「ああ……わかるよ。一瞬見てアイツの成長がわかったよ」

何時の間にか、私達の組は後続を追い放していた。だが、まだ他の二クラスが並んでいる。

私も、お父さんも、先生も一生懸命歩幅をあわせて走るが、中々差は変わらない。

そして、二度目のカーブに差し掛かったときまた大きな怒鳴り声
が一つ。

「先生！」

客席から森羅さんが吼えた。何か絵になるなあ……

今度は予想していたのであろう、先生は手を振り返す余裕まであ
ったようだ。

「森羅は自衛隊のちよーつと危険な部隊に所属してる。ま、でも俺
らと同じような仕事なんだけどな。

ちなみに結婚はしてねえ……多分、一生しないかもな。アイツは
まだ真里菜さんの事引きずってると思う」

「神崎のお母さんか……本当に、俺はあの時アイツやお前らの力に
なってやれなかった」

「いや、自業自得さ。でも先生ただで、俺らにビビらずに何度も
注意してくれたの。

今になって思えば、凄い感謝している。あの時はウザくてしょう
がなかったけど、今ならわかるよ」

「高遠……」

「さっ！ ラストスパート行くぜ！」

更に速度が上がった。もう息が苦しい。足が重い。走りたくない。
それでもお父さんや先生は諦めていない。汗を浮かべて走ってい
る。

私も負けられない。それに、やっぱり先生には優勝を上げたい。

それは私の心からの本心。

走れ、走れ、走れ、体にそう命じて一歩一歩進んでいく。そして

体育祭は終わった。私達のクラスは結果的に総合優勝した。ま、去年もしたんだけどね。

三人三脚は最後まで頑張ったおかげか、何とか一位になる事ができた。その後が大変だったんだけどね。先生は感激して泣いちゃうし、お父さんは勝利のポーズしたり、

本当に、恥ずかしくて疲れた一日。でも、悪くは無い。そして、これからは打上だあ！

クラス全員で、晩御飯食べに行つてその後カラオケに行くというオーソドックスなスタイル。

とりあえず、私はシャワーを浴びたかったので途中まで一緒に竜胆ちゃんとかうって下校していた。

そして道の分岐点で竜胆ちゃんは立ち止まると、

「ごめん。アタシと郁人今日は用事があって行けないの」

「え、ああ……うん、皆に言っておくね」

「ありがとう」

「うん……じゃあ、また来週ね」

「……うん、さよなら」

またね、じゃなくさよなら。いつもの竜胆ちゃんと何かが違う。私が疑問を持った時には竜胆ちゃんは今もう振り返る事無く、走って行ってしまった。

まあ事情は来週聞けばいいだろう。私はそう納得して家へと向かう。

……そして、月並みだが今になって思えば、ここが私達の未来の分岐点だったのかもしれない。

Days 16：名も無き鬼神（前書き）

パソコンが復帰と思ったらOSが消えてると。リアルが死ぬほど忙しいので復帰は8月かな…

暇すぎて続編のプロットの原型ができてしまいました。

とりあえず、今のところの予定では神々から10年後の時代でやります。

主要キャラの一人は律の弟です。

携帯からなのでメッセージの返信は厳しいです。すいません。

評価のほうは近日中に返信させていただきます。

Days 16：名も無き鬼神

「じゃあ、つまらない話でもしてみようか」

物心ついたときには、僕等はまだ人間じゃなかった。

一体いつ、この体になってしまったのかはわからないし、知る気もない。

それでも幸運だったのは、僕が一人でないこと。

僕の周りにはバケモノを受け入れてくれる人間、そして兄弟がいた。

血は繋がっていないらしい。現に僕と兄とでは、バケモノになった時の姿が違う。

兄の姿はケンタウロスと呼ばれる類のもの。でも、僕の姿は何なのかわからない。

学者さん達も、僕の姿の名前はわからないと言った。でも、そんなのどうでもいい。

僕は僕。それは変わらない。学者さん達もそう言ってくれた。今思えば、あそこは樂園だった。

今でこそ鬼神と人間は敵同士。でも、あの頃の世界　僕の居場所
所は共存できていたんだ。

「なあ、僕達の力は神様から与えられたものなんだ。それで、もつともつと皆で幸せになろうよ」

兄はそういった。僕も賛成だった。この町にいる人は温かい。人間と鬼神だけどわかりあえる。

だからこそ、僕も自分の力を存分に発揮して皆の為に生きていきたい。そう思った。

でもね。それは違ったんだ。僕の居た世界は、世界中その他の人から見たら異端でしかなかったんだ。

僕らが居た町は、指名手配されているような人間が集う町。遥か遠くの城下町から逃げ出してきた学者達。

その頃の世界は、一部のモノしか知ることが許されない時代。他の思想や知識は危険と称される時代。

この町に居る学者は皆。世界の在り方に異議を唱えて追放された人間ばかり。

だからこそ、僕らは受け入れられたのかもしれない。常識。そんなモノを覆そうとしていた人達ばかりだからさ。

「おはよう。教会の人間がこの辺りをうろついているから、これを持って早く帰りなさい」

ある日。いつもの習慣で学者さんから本を借りた僕らは、学者さんの真剣な表情から

危険性を感じ取って、その本　北欧神話の本を借りると早々に住処へと帰った。

薄暗い部屋で一ページ一ページを二人でゆっくりと読んでいると、広場のほうが騒がしい。

何かを感じた僕らは、古びたロープを纏って広場へと向かった。

「この者を危険思想につき、神の名の下に処刑を行う！」

僕らがついた頃、教会の兵士が一人の学者へと剣を向けていた。そして振り下ろされる。血がドバツと噴出して、さっきまでついていた首がごろりと転がった。

でも、皆悔しそうに俯いてはいるが、誰もそれに異議を唱えない。そう、逆らえば殺される。

僕は思っんだ。宗教は神様を信仰している。何故、人が神様を信仰するのかというと、救われるから。

あの学者さんも神様を信じていた。でも死んだ。こんな広場で無残に殺された。しかも同じ神を

信じる者に。それって何かがおかしくない？

何で、神様は学者さんを救わなかったの？

考えても考えても分らない。日に日に答えは遠ざかっていく。何

故、何故と。

この国は皆同じ宗教を信仰している。でも、幸せな人と幸せじゃない人が居る。

なら、神様なんていらないんじゃないか？　だけど、皆それを考えずにただ信仰している。

いい加減に詰まってきたので、僕は兄へと問う。

「神様っているのかな？」

「僕は信じてないよ」

「なんで？」

「見えもしないモノを信じるより、見える自分を信じて行動したほうが楽しいからさ」

「でも、皆信じてるよ？」

「皆が信じてるから信じなきゃいけないルールなんてないよ」

「……………」

「それよりもさ。僕らもそろそろここを出て行こう。これからこの国中を周って、

僕らの仲間を探しにいこう。僕とお前が居るんだ。この国にはもつと僕らの仲間が居るはずだよ」

「うん」

そうして、次の日に僕らは最低限の荷物をもって旅立った。そし

て一年。僕らは国中を周った。

時に殺されそうになり、時に笑い。世界がこんなにも楽しかった
と思いながら旅をする。

兄の仮説はやはり当たっていたようで、何人かの仲間とも出会え
た。

ヴィクトルとレナードとリーシャ。少し年下の兄妹のような感じ
がした。

そして当初の予定通り、自分達が住んでいた町へと五人で帰ると、
そこにもう町は無い。

建物は全て焼かれ、更に酷い腐臭まで漂っている。町へ入るとそ
こには死体の数々。

パン屋のおじさん。酒場のお姉さん。知り合いの学者の子供。全
てが体中切り刻まれ、

縄をかけられて吊るされている。そこはもう、地獄のような場所
だったよ。

「酷い……」

「教会の仕業だね……」

「僕らが住んでいた傍の町でも同じような事があったよ」

三人は悲しそうにそうつぶやいた。僕は僕で声すら出なかった。

何で、何で。

本当にわからない。僕らを怖がって殺すのならまだいい。だけど、
何で同じ人間で殺しあうの？

何でお互いを認められないの。僕たちには言葉があるじゃないか。
何で話し合いで解決できないの？

そして僕らは自分達の住处を見つけた。やはり火で焼き尽くされ
ており、跡形も無い。

兄は跪いて、瓦礫を腕で払う。何もでてこないだろう。そう思った時、兄が突然手を掲げた。

「神々の黄昏だ……」

そこにあつた本は学者さんから貰った最後の本。奇跡的に炎から逃れ、焼かれなかった唯一の遺品。

兄はしばらく黙って、ページをめくっていた。どれくらい経ったかはわからない。

それでも僕らは待ち続け、ようやく兄は立ち上がり、

「神が居なければ、僕らがなればいい。僕らが人間を救ってあげるんだ」

それが、ラグナロクの始まり。僕の人生が変わった瞬間。

僕らはラグナロクという組織を作った。まず求めたのは力。力が無くても人は救えない。

伝承や聞き込みから様々な事を調べ、森の奥に住んでいたおじいさんから、僕らはコンセプトを習得。

不思議な紋様。この世界に反する力だとおじいさんは言った。

「コンセプトは反する力の一端に過ぎない。力は一つじゃないのだよ」

そう最後に教えてくれた。多分、その言葉があつたから僕らは反意思を知れたんだと思う。

普通の人間には反意思は使えない。でも、僕らはある程度使える。これが、奇跡という力。

人間達が神を信仰する理由。そのおかげで、ラグナロクは規模が大きくなり、段々と鬼神が増えていった。

その間僕は何をしていたのかというと、世界を見ていた。

国を出て、あらゆる場所へと行った。必要ならば、言語もたくさん勉強した。

だけど、僕に待っていたのは過酷な世界の現状。親を殺す子供。子供を虐待する親。

人を平気で殺す者。人を平気で陥れる者。年端の行かない少年少女に乱暴する者。

奴隷呼ばれる人間。黒人と白人。宗教戦争。部族戦争。快楽殺人。享楽殺人。

世界は美しくなんか無い。少し視点を変えればそこは地獄絵図だった。

くだらない自尊心。腐敗した権力者。力あるものが弱いものを守るわけではなく

搾取し苦しめている。それでも、僕は希望を捨てなかった。

視線に入るものは全て守ろうとしたし、食事や寝る間も惜しんで僕は救おうとした。

だけど、それは無駄でしかなかった。人間の悪意はどんどん膨らんで行き、

最早際限が無い。世界には毎日誰かの泣き声が響き渡り、他では悪がほくそ笑んでいる。

これだけ救えた？ いいや、これだけしか救えなかったんだ僕は。僕は誰にも泣いて欲しくない。僕達を受け入れてくれた人間には笑っていて欲しい。

僕はただ、誰かの笑顔を守りたかったんだ。悲しみの涙が要らない世界が欲しかった。

でもさ……いくら救っても救っても悲しみの声は何時までも世界から消えなかった。

そして　僕は一つの結論を出した。

人は救えない。

そのうち、人は人を傷つけるだけでなく、地球をも傷つけ始めた。あらゆる生物が泣いた。無念だったろう、悲しかったろう。同じ人でない僕には気持ち痛いほどわかる。

人間は愚かだ。滅ぶことが分っていてもそれをやめない。誰もが後先考えない。

今の自分がよければ、自分程度が何をしても　と、頭が良いかわかってしまっている。

そんな生き物達をこのままに置いていいのか？　このまま滅びを待つのかい？

そして、僕は兄に話してみた。すると兄は悲しそうな顔をして、

「そうだね。でも、可能性は0じゃないと思うよ」

「でも、限りなく0に近いよ」

「でも0じゃない」

「そう。じゃあ、僕は0だと思って生きるから」

そして僕ら是对立し、滅びあった。最愛の兄も死んでしまった。いや、僕が殺した。

僕らは人を救えない。そして僕らも救われない。だから、一回リセツトしてしまおう。

人の痛みを知り、悪意の愚かさを知る、優しい心を持つ人間だけを残して

しばらく探すと、適任のような存在を知った。それはガルムの一族の研究成果。

だが、その実験は最低だった。人と結晶の融合。僕が一番嫌いな人体実験。

六道を滅ばしたくなったね。だけど、六道は世界に貢献している。彼らの実験によって僕らのルーツや様々な事がわかっている。だから、僕は責めれない。

被験者で生き残ったのは二人だけ。本当はもう一人居るのだけど、彼は事情的に不可だろう。

三名の被験者のうち、二人は誘拐されとある男に結晶を移植された。それが

被験者番号1 榛名勇一

被験者番号2 棗亜矢子

の二人の日本人。六道が密売ルートから手に入れた二人の少年少女。

色々と六道のお陰で二人の事を知れた。二人とも、優しい子だった。

親に捨てられた事を恨まず、健気に実験に耐えている。お互いを励ましあっていたりもした。

そして僕は思った。人間でも鬼神でも救えなかった。でも、人間でも鬼神でもない

新しい種ならどうであろうか。幸いな事にこの二人は心の痛みを

知っている。

これから六道でまともな教育をしてもらえば、いつか救いの神になれるかもしれない。

そして僕はそう期待して、この二人の為に世界を一回リセットしようと思った。

「それが、君達だよ」

ここから を読む上での注意 + おまけ編 (前書き)

そつえば、久しぶりのDaysだ……

とりあえず、予定としては・

次回、時雨と律。

陸人だいありー

ネタがあつたら、何かひとつ。

続編連載開始&ファーストコンタクト

みたいな予定で行こうかと思ってます。

Daysの方は結構方式が違っていて不安なので、
ご意見、ご感想、短編リクエストがあつたら
評価欄かメッセにてお願いします。

ここから を読む上での注意＋おまけ編

ここから の小説を読む場合は、神々の黄昏を最終話まで読んでからみないと、意味が分らないかも知れません。

というわけで、おまけ編スタートですよ。

今回は神々の新キャラについて色々と。

牧島郁人・竜胆

神々の黄昏、裏の主人公。郁人と竜胆については全て書けたと思います。

個人的に一番好きなキャラなのですよ。蒼二や遥緋は強い主人公だったんで、

逆に今度は最弱にしてみようと思い、こつやって作ってみました。

結果的にラストで強くなったのですが、郁人仕様になったフラガラ

ッハは、

郁人の（約束）や（決意）から生まれた反意思が起動の鍵となるので、

まあ、それを失ったならまた最弱へと逆戻りです。竜胆が愛想を尽かしたらもう一般人w

二階堂雨龍

投票でめっさ嫌われてる彼。とりあえず、彼については続編で色々明かされるかと。
ただの快樂殺人者では終わりそうに無いキャラです。蒼二と少し似ているのかも。

二階堂家は長男、次男、三男の構成。雨龍は末っ子です。

四条莉王

王を目指して作ってみたキャラ。帝と何があったのかは何時かの機会に。

家族構成は祖父と祖母と莉王のみが直系。父と母とは死別。兄は出家。

莉王は兄の居場所をつきとめてはいるものの、会いに行くのが怖く行けていない。

ちなみに帝は@ホームの住人の設定だがカケテナイOTZ

五月颯太

無口キャラ。Daysで一人称が書き難かったり、全てわかってる系のキャラなので扱い辛くて影が薄くなっていた。

五月家の家族構成は、長女、次女、三女 長男。

律と莉王も恐れる姉が二人。口が悪い妹が一人。それが苦手ではほとんど家出状態。

七海奏

出る前に色々と設定が一番変わった不遇な子。式神すらも二転三転。初期プロットでは緋色の眼史上最強電波女でした。

家族構成は今は、父、母、次女、三女。長女（遠音）の話は七海家ではタブー。
幼い頃姉妹三人が誘拐事件にあい、七海家の運命が狂ったのは有名な話。

九我山律

一歩間違えばストーカーなキャラ。八神時雨の嫁候補。
女性としての嗜みは全て通っていた高校で厳しく躰けられた為、ほぼ完璧。

趣味はドライブ。家族構成は父、母、長女、長男

弟の令に対しては時に厳しく、時に甘く。続編では弟の方が活躍しそうな気配。

ロキ

本名不明の鬼神。とある宗教国家にて生まれる。

ロキの狂化状態は新種。といっても遥昔に存在していた種類の生き物です。

半狂化状態がその後の天使のモチーフとなったという設定。

ロキの世界に対する思いは、少し自分の思いもいれてみましたので、好きなキャラです。

ガルム

六道家の実験により生まれた鬼神。六道家は非人道的実験も数多くするが、

同時に全てを受け入れる家。鬼神だろうが、悪鬼だろうが、新種の生物であろうが

分け隔てなく接するのが六道流。継承の力は六道同士でしか使えないが、

紡が異端なだけです。継承の具体的な能力については続編で。

ヘル、ヨルムンガルド、フェンリル

ロキと同じ国で生まれた鬼神。一番年上はフェンリル。次がヨルムンガルド。ヘル。

フェンリルとヨルムンガルドは同じ村で生まれた極めて特異な鬼神。ヘルは二人に凄く可愛がられた。その為か、少しお互いを依存しすぎていた。

この子達はもっと出番作りたかったなあ、とか思ってます。

第一次ラグナロクの話でもかけば、出せるのですが、何か長くなりそう・・・

スルト（千島藍）

千島最強の男。藍が一番難しくて、色々悩んだキャラでした。

緋色の眼の時に勢いで出してしまって、どーしたもんかと考えていたのですが

上手くまとまったかと・・・。鬼神の中では間違いなく古代鬼神並に強い。

鬼神としての能力は運命やロキ以下ですが、レヴァティーンが大きな差となってますw

神々の黄昏ではあまり触れなかったのですが、藍は青鬼の鬼神です。赤鬼の鬼神である刹那達と妙に仲が良かった理由は、やはり同属だからでしょうか。

まあ、最初は青竜って設定だったのですが、少し続編で紛らわしくなるので変わりました。

全体的な反省点としては、結構無計画に進めたので、初期プロットとは全くEDが違ってお話となっていました。

大きな変更点としては。

運命、空我、大和の死亡。

新しい千島の存在。で名前が明らかに。

この辺りが、続編を意識したら消えました。とりあえず、続編に関しては

ちゃんとストーリー練ったのでここまでは変わらないと思ってます。最終話の構想は前から固まってるので。千島蒼二の全ての答えが出ると思います。

それでは、おまけ短編、【終わらなかった世界】をどうぞ。

夏特有の強い日差しが差し込む、四条家の大きな庭の一角。五月
颯太はのんびりと麦茶を啜りながら、

目の前で行われている、夏だと言つのに非常に見ていて暑苦しい
こと極まりない風景を見ていた。

少し離れた場所では、剣王を構えた莉王が一人のまだ中学生ぐら
いの外見の少年を追いかけていた。

「令い……。貴様、何が超生理だ！」

「ち、違っただよ。莉王兄ちゃん。僕じゃなくて、紫ちゃんゆかりがね？」

「問答無用！ 貴様は律の弟として少し根性が足らん！ 俺様がみ
つちりとしごいてやる」

令と呼ばれた少年の名は九我山令。九我山家の長男にして律の弟。
颯太と莉王は令を赤ん坊の頃から知っているため、もはや弟のよ
うなもの。男の兄弟が居ない颯太にとっては
かけがえのない友であり、また兄を失った莉王にとっても大切な
兄弟のようなものであった。

「お、お姉ちゃん！ 助けてええ」

「フッフ、無駄だぞ令。律は一年ほど所要で帰ってこないだろうに、
紫も連れて行ったしな」

「うう……何で僕がこんな目に。紫ちゃんが行きたくなーいって言
ったからなのにい！」

「過去は変えられないぞ令。さあ、存分に半殺しあおうじゃないか
」！」

「いやあああつ！ 颯太兄ちゃんも笑ってないで助けてえ！」

再び追いかけてこを始めた二人を笑って見守りつつ、颯太は久し
ぶりに平穏が戻ってきたことを悟った。

千島家のリビングで千島蒼二は緊張した面持ちでとある一点を見ている。その時間、かれこれ三十分ほど。

蒼二の視線の先には安らかな顔で眠る天使　最近生まれた弟の千島光希。生後三ヶ月。

部屋には数々の子供用品。遥緋や命が物凄い勢いで光希の世話を始めた為、蒼二はずっと光希を構えなかった。

だが、今父と母は居ない。遥緋と命は二階に居る。これは絶好の好機と蒼二は光希を抱こうとするのだが。

（寝ている……）

穏やかな寝息を立てている弟。余りにも可愛くて、つい光希のほっぺをツンとつついてみる蒼二。

弾力性があつて、柔らかく。少し湿っている感覚。正直、病み付きになりそうだった。

（あのダメ親父には似ませんように）

と心から願いつつ、蒼二は光希のほっぺをプニプニとつつく。すると、

「お兄ちゃん……？」

その声に声も出ないほど驚く蒼二。つい、体が反射的に反応してしまい修羅雪を抜きいつでも動ける体勢へ。

廊下の入り口からそれを見ていた遥緋はやや呆れながら、笑うと

「ふーん。お兄ちゃんも光っちゃんに触りたかったんだあ」

「ち、ちちちち、ちげえよ！　ぶっ殺すぞコラア！」

つい、反射的に怒鳴ってしまう蒼二。すると、その声に驚いたのか。

光希が目覚まし、しゃくり上げる様に泣き出す。マズイ、マズイ、マズイ。

慌てて何とかしようとするも、何も思いつかない。そんな蒼二を邪魔そうにどかすと、遥緋は優しく光希を抱き上げて、

「おーよしよし。怖い怖いお兄ちゃんですねえ」

「グ……ッ！」

だが、光希が泣き止む気配は無い。段々と遥緋の顔に焦りの感情が浮かぶ。

すると今度は蒼二がニヤニヤと笑い、

「ハッ！　テメーの硬い胸に抱かれたくねーってよ。さっさと俺に渡しな」

「か、硬くなんかないもん！」

「いや、硬いね。もうアレじゃん。お前の胸って強化ガラス並みじゃね？」

「言っただなあゝっ！ 触ったことも無いくせに！」

二人が正面からにらみ合っていると、不意に二階から騒ぎを聞きつけてきた命が現れた。

千島家から出ていき、運命達と暮らしているものの、よくこの家に入り浸っている。

スタスタと蒼二と遥緋の所まで歩いた命は、光希を遥緋から優しく取り上げると、

「おーよしよし。蒼ちゃんといもーとは怖いですねえ」

すると光希が急に泣き止み。けらけらと甘えるようにして笑う。

何故だ。何故だ。何故だ。

実の姉と兄より他人を選ぶのかと言った表情をしている蒼二と遥緋。だが、笑っている。

結局その日も蒼二は光希を抱くことができなかった。

由加と神璽が住んでいるアパートの向かいの高級マンション。そこで、運命と大和と空我と命は生活していた。

金の蓄えは十分にあった。一族の住んでいた場所に戻れば、過去に人間から奪った財宝があるので

それを裏のルートに流して運命達は金を作っていたのである。

そんな生活が始まって半年近く、空我と大和は街のホストクラブで働いており、運命は毎日ダラけていた。

ある日、大和が買い物から帰宅すると空我の姿が無い。お気に入りバイクも無かったので出かけたのだろうと判断すると大和は部屋の中に声をかけた。

「運命ちゃん。ミコちゃん。ただいまー」

反応が無い。玄関を見るとそこにあるのは運命の靴だけ。二人とも居ないのか。

そんな思いで、リビングへ入ると大きなソファで運命が昼寝をしていた。

「全くもう、暖房もつけないで」

こっそり、毛布をかけてやろうとすると違和感に気づいた。自分の足元に黒い塊。

しかも動物。犬のような形だ。だが、見た事が無い種類の犬だった。

「おお？ お前どうしたんだ？」

荷物を置いて頭を撫でようとすると、犬は露骨にそれを嫌がり運命へと飛び乗ると、

その上ですわり、安らかな顔で大和の事を見る。言いたい事は目

でわかった。

「こ、の……！ 僕ですらそこに座った事が無いのに！」

怒りに身を震わせた大和は、犬を掴んで床に置くと息を呑んで運命に寄り添うように

寝転がった。他の女の子にはよくやる行動なのに、今は凄く緊張している。

だが、紙幅の時。心から安らかな表情で大和が運命の髪の毛の匂いを堪能していると、

「おい、クソ鬼」

突然、犬が喋った。余りの事に驚き、声を出してしまいそうになるが、運命が起きたら

殺されてしまうかもしれないので、ゆっくりと息をつき、ソファーから降りる。

「あ、あれれ？ 何で犬が喋るのかなー？」

「チツ。人様の娘にちよっかい出しやがってよ。やっぱ、頼んで出してもらった甲斐があるぜえ」

「ま、まさか……！」

「おう、俺様は九尾の狐だ。宿主の結晶から意思だけを抽出し、反意思で新しい体を構成して貰っている。

力は微弱だし、移動範囲も限られてるけどなあ！」

「お、お父様でしたか！ 失礼しました！」

「娘には内緒だぜ。いいか、テメエがあいつらから貰って来た事にしろ。」

「何時か、俺から正体話すからよお……もし、バレたらその瞬間テメエを噛み殺す」

「は、はい。でも、何で会ってあげないんですか？　きっと喜ぶと思いますけど」

「今更どのツラ下げて会えつつーんだ。俺が死んだ所為で、こいつをあんな目にあわせちゃった。」

「女房にもちゃんと育てろつつといたんだけどよお……俺様を追って自殺しちまったらしくてな。」

「いやははは。モテる悪鬼は辛いぜ」

「……わかりました。」

「ここで狐に取り入って置くのは悪い話ではない。いつか、いつか結婚を承諾してもらう時」

「のためにポイントを稼いでおく必要がある。それに、父としての言葉に胸を打たれた。」

「自分の父は自分の事など、どうでも良かったようで殆ど本能のままに生きていた悪鬼。」

「だからこそ、少し羨ましいと思うてしまう。」

「すると、玄関の戸が開く音がし、命が帰ってきた。狐はすぐに嫌そうな顔から媚びた犬の表情へと顔を変え、」

「一目散に命の足元まで走っていく。」

「あー！　犬だあ！　これ、大和が買ってきたの？」

「あ、ああうん。まあ……知人から貰ったのさ。名前はキュウちゃん。よろしくね」

「うん！ よろしくねキュウちゃん」

屈んだ命のももや膝を嘗め回す狐。更には飛び掛って押し倒すと、顔をなめ始めた。

くすぐつたいよーと笑う命。狐はひたすら舐めている。

それを見て、大和は「犬って良いなあ」という思いと共に、一つの事を連想してしまう。

（もしかして……運命ちゃんにバレるとああいう事が出来なくなるから言わないのか？）

結局、真相は闇のまま。大和はすやすやと眠る運命を見て、気にしない事に決めた。

その頃、無事に九尾を運命達の住居へと追いやった神璽は、部屋で一人ほくそ笑んでいた。

あの戦いの後から、何が起きたのか自分の中で九尾がとても騒がしくなったのである。

由加の方にも居る分たれた九尾も同じようで、いい加減ウンザリした二人は、お互いの中から

どうにか九尾の意思だけを抽出し、新しく体を作ってやって、運命達の方に行くように仕向けたのであった。

ただ、一定の距離を離れてしまうと反意思の供給が出来なくなる為、さほど離れては行動できない。

そして、結晶の力を上手く使う為には九尾の意思が絶対的に必要である事もわかった。

普通の人間では耐えられない膨大な反意思を二人が制御できていたのは、偏に九尾の存在によるもの。

かつて、圧倒的な力を持っていた九尾の狐が制御の大半を請け負っていてくれるからである。

（やっと出て行ったか。ふふふ、これでまた由加と二人つきり）

由加は中に居なければどうでもいいようで、外に出た九尾を妙に可愛がっている節があった。

しかも、九尾も九尾でかなりの女好き。それが、神璽には面白くない。

だが、もう居ない。これで、元の生活が戻ってきた。清々とした気分で神璽がソファアーの上で転がっていると、

玄関のドアが開く音がし、九尾をマンションに置きに行った由加が帰ってきた。

「よお、お帰り」

「ただいま。運命、寝てたし命も居ないからそのまま置いてきたよ」

「ういー！ お疲れさん」

「やっぱり、あいつも嬉しいみたい。当たり前か、実の娘と暮らせるんだもんね」

「そりゃそうだ。俺だって、出来るなら本当の家族に会ってみたい

しな」

「……私ね、考えたんだ」

「何を？」

突然表情を引き締めた由加の変化を悟ると、神璽はソファから起き上がって、

正面から由加を見据えた。何かを決意したような瞳の輝き。神璽は息を吞んで、由加の言葉を待つ。

「高校卒業したらさ。私、一課から脱走して家族と六道紡を探しに行く」

「え？……つて！ お前もかよ！？」

「え……神璽も行く気だったの！？」

「当たり前よ。ガルムが言ってたんだ、紡って奴が全てを知ってるつてな。」

……親は、まあ、そのついでぐらいで。一度俺らを捨てた奴らだからな。ロクでもねえんだろうけど」

「そう。じゃあ……後、一年後ぐらいか。皆と一緒に居れるのは」

「そうだな……でも、一人じゃない。俺には由加が居る。由加には俺が居る。」

少し寂しいけどよ。一人じゃないんだ。我慢できるか？」

「うん。寂しいけど、我慢する」

「俺も、我慢だ。おんにやのこと会えねえええええ！　けど、我慢してやるよ」

そういうと、由加と神璽は笑って外を見つめた。何時の間にか、見慣れた町。

自分達にまともな生活は無理だと思っていた。腹を割って話せる友人なんて出来ないと思っていた。

でも、この町に来てから全てが変わった。自分たちは運が良い、心からそう思う。

二人はしばらくの間、住んでからずっと変わらない窓の景色を眺めた。

いつか、旅立った時に絶対に忘れないために

Days 17：八神時雨の困惑（前書き）

時雨と律の話は、これで一応の纏まりがつきました。

次回の陸人だいありーは今までと少し違った、

浅葱陸人の日記形式になってます。

とりあえず、それで神々から新作までに何があったのかが少しわかると思います。

Days 17：八神時雨の困惑

困った事になった。僕　　八神時雨は今、人生の岐路に立たされている。

部屋に飾ってある母親の写真に目をむけ、母さん、僕はどうしたらいいのでしょうか？と問いかけるも、

母親はいつもと変わらず微笑んでいるだけ。そう、わかっていたんだ。助けは無いんだと。

これは僕自身の過去の償いであり、僕自身の存在の責任であると思う。

僕の無駄に広い私室に次から次へと運ばれる荷物。それを見て、僕はため息をつくと、

「どうしてこんな事に……」

とつぶやいた。

全ての始まりは、昨日の仕事が終わった時。僕は、全ての神々の黄昏事件の事後処理を終えた事に一人感動し、

これから最近少しハマっている、遥緋から教えてもらったサイトへとアクセスしようとした。

オンラインゲームという少しお金のかかるゲームなのだが、これが何気に面白い。

最近では睡眠時間を削ってまで一日一回はログインしている。ちなみに一番強いのが蒼威さん。

流石に二ートには勝てない。だが、この前遙さんにメチャメチャ怒られたらしくあまりログインしなくなっていた。ざまあみろ。

ネットと現実。両方で蒼威さんにイジめられた僕としては二ヤニヤ笑いが止らない。

この隙を突いて蒼威さんよりもレベルを高くして、後で散々いじめてやろうと思っている。

そんな事を思っていると、不意に父さんが僕の執務室に現れた。

「少しいいかな？」

「なんですか？」

「頭首命令だ。時雨、お前に明日から約一年。お前に休暇を出そう」

「……は？」

「僕もずっと考えてたんだ。お前みたいな若い者が朝から晩まで休み無しで働いててどうする。

お前は高校の頃からロクに友達も作らず、遊びにも行かずに八神の仕事をしてきたよね。

そこで僕は思いついたわけだ。これを僕の八神の最後の一年とし、来年からお前に頭首を譲ろうと思う」

「いや、でも僕は仕事が楽しいですし……」

「つべこべ言うな。いいか、これは頭首命令だ。明日から一切の仕事につく事を禁じる！」

そう言う。父さんは満足そうにして部屋から出ていった。拍子抜けしてしまった僕は、

そのまま二時間ほど椅子に座りっぱなしで、何時の間にか寝てしまっていた。

翌朝目覚めて、皆で食事をとっている最中、父さんが全員の前で昨日の事を発表した。

皆の顔は明るい。そうか、そんなに僕が居ないのが嬉しいのか。

「時雨様。一年間私達にお任せ下さい」

「日本を離れて、海外旅行などされてきては如何ですか？」

「いやいや、まずはお疲れを癒しに温泉などは……」

皆に様々なパンフレットや雑誌を渡され、僕は困惑しながらそれを持って自室へと入った。

執務室とは違い、僕の自室には特に何もない。パソコンとベッドと本棚。

壁には蒼二や遥緋と写っている写真。それ以外は何もない。簡素で無駄に広い部屋。

とりあえず、パソコンをつけてネットゲームへとログインする。すると、早速誰かがチャットで話し掛けてきた。

掃除「よあ。お前が昼間から居るなんて珍しいな」

相手は戦士の掃除。すなわち、僕の弟分の千島蒼二である。名前は変換をミスしたらしい。

ちなみに遥緋は ハル で蒼威さんはタイガー。陸人さんは翡翠。全く芸がない。

由加は何故か亜矢子という名前でやっていた。理由は秘密のとこ
と。意味がわからない。

シグレ「一年間休暇を出された」

掃除「うおwwwお前もついに親父の仲間入りかwww」

シグレ「勘弁してくれ。それと、その無駄な英字はなんだい？ 皆
使ってるようだ」

掃除「笑いつて意味だwとりあえず、暇できたらこっちにこいよ」

シグレ「わかった。久しぶりに皆にも会いたいしね。そっちは元気
なのかい？」

掃除「母さんは親父と病院。あの駄目人間。やっと車買ってさー。
これで、母さんも楽になるだろうよ」

二ヶ月前の謎の車両運搬具の計上はこれが原因だったのかもしれ
ない。全くもう。

掃除「んで、遥緋は四条の奴とどっか遊びに行った。命は運命の家」

シグレ「何！？ 何故、莉王と遥緋が遊びに行くんだい！」

掃除「何か、九我山のねーちゃんの紹介らしいぜ。あいつの強さに
一目惚れだよ」

あの十名家最強の変人め。僕の大事な妹分に手を出しやがって、
いや。遥緋も来年は18歳だ。

そろそろ僕が口出しするような年じゃないだろう。あの子も立派に成長したもんだ。胸以外。

遙さんはあんなに豊満なのに、何故伝わらないのだろうね。ああ、蒼威さんの影響か。

可哀想に。そして、莉王には釘をさしておこう。無論、体に。

掃除「あ、そーいや。お前もついに九我山のねーちゃんと同棲始めんだよな？」

シグレ「は？」

掃除「親父とか正宗さんがそう言ってたぜwww おめでとう!!!」

嫌な予感がした。自慢じゃないが、僕の悪い予感というのはほぼ確実に当たる。

幼い頃から非常識二人組と一緒に居た所為か、こんな悲しい能力が身についてしまった。

すると外の方でトラックの音。珍しい、戦闘も無いのにトラックが来るなんて。

シグレ「すまない。少し怖くなってきたから、一回落ちる」

掃除「ういー お疲れノシ」

ノシとは何なんだろう、と思いつつ僕はパソコンの電源を切った。そして早足で外へと向かおうとし、

ドアを開けた瞬間、信じ難い光景が広がっていた。そこに在ったのは中型のトラック。

運転手の姿を見ると、まだ若い高校生ぐらいの女の子だ。ど

う考えても似合っていない。

そして 助手席から降りてきたのはきつちりと着物をきた、律の姿。

「やあ、時雨。花嫁修業に来たよ！」

その瞬間、僕の背筋が凍りついたのは言うまでも無い。というか、意識を失いかけた。

そして、現在。僕の何も無かった私室が物凄い勢いで蹂躪されていく。荷物運びの女の子は

本人曰く「律ねーさんの舎弟の鳴神紫っす。よろしゅうお願いします」だそう。

その子は良く働く子で、律を部屋に通して十五分で全ての荷物を運び終わると、

僕らに手を振って再びトラックに乗って帰ってしまった。正に疾風迅雷。

すると、律が一本のDVDを僕へと渡す。部屋のパソコンで早速再生してみると、

そこに映っていたのは九我山の直系。それも、律の家族の父と母と弟らしい。

「おねーちゃんを、よろしく願います」

と弟。律の弟にしてはかなりの常識人だ。

「八神さん。この子をどうかよろしく願います。律ちゃんはこの見えても、尽くすタイプでして。

女性としての嗜みもほぼ完璧に叩き込んであります。どうぞ、味見でもなさってくださいな」

とお母さん。天使のような笑顔でそんな事を言われても困ります。律も隣で「お母様ったら」とか赤くならないで欲しい。困ります。困ります。

そして、中心に居た大柄な男性　律のお父さんが一歩前に出てきて、

「よろしく！」

とお父さん。絶対律はこの人似だ！　それが終わると、映像は途切れた。

なんとも気まずい沈黙が流れる。律は妄想の世界に逝ってるしね。ああ、気が狂いそうだ。

「……花嫁修業つて一体何をする気なんだい？」

「ん？　まあ、時雨の事がよく知りたいんだ。」

「それを、何故家で……」

「だって、将来の旦那様の好みの味付けとか知っておきたいじゃないか」

「……そうかい」

そう言われては何も言い返せない。それに、僕と律は本当に結婚してしまうのだろうか。

律は僕の事が好きらしい。でも、僕はわからない。そもそも、本気で好きになったのは

昔一回だけ。高校の頃に三人付とき合ったが、全員に「人間の屑」と罵られ、あえなく終了。

そんな僕が、人に好かれる資格があるのだろうかね。

次の日から僕と律の共同生活が始まった。しかも、初日から寝不足という最悪なスタートで。

律はとんでもない格好で寝る女だ。僕がいくら注意しても寝にくいと言ってそのまま寝てしまう。

僕だって男なんだ。性欲だってある。仕方が無いので僕は自身の式神【重場】を使って

自分を一晩中布団に固定してひたすら円周率の暗記をしていた。

3 . 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3
2 7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1 6 9 3 9 3 7 5 1 0 5 8 2 0 9 7 4
9 4 4 5 9 2 3 0 7 8 1 6 4

0 6 2 8 6 2 0 8 9 9 8 6 2 8 0 3 4 8 2 5 3 4 2 1 1 7 0 6 7
9 8 2 1 4 8 0 8 6 5 1 3 2 8 2 3 0 6 6 4 7 0 9 3 8 4 4 6 0 9
5 5 0 5 8 2 2 3 1 7 2

5 3 5 9 4 0 8 1 2 8 4 8 1 1 7 4 5 0 2 8 4 1 0 2 7 0 1 9
3 8 5 2 1 1 0 5 5 5 9 6 4 4 6 2 2 9 4 8 9 5 4 9 3 0 3 8 1 9
6 4 4 2 8 8 1 0 9 7 5

6 6 5 9 3 3 4 4 6 1 2 8 4 7 5 6 4 8 2 3 3 7 8 6 7 8 3 1 6
5 2 7 1 2 0 1 9 0 9 1 4 5 6 4 8 5 6 6 9 2 3 4 6 0 3 4 8 6 1
0 4 5 4 3 2 6 6 4 8 2

1 3 3 9 3 6 0 7 2 6 0 2 4 9 1 4 1 2 7 3 7 2 4 5 8 7 0 0 6
6 0 6 3 1 5 5 8 8 1 7 4 8 8 1 5 2 0 9 2 0 9 6 2 8 2 9 2 5 4
0 9 1 7 1 5 3 6 4 3 6

7 8 9 2 5 9 0 3 6 0 0 1 1 3 3 0 5 3 0 5 4 8 8 2 0 4 6 6 5
2 1 3 8 4 1 4 6 9 5 1 9 4 1 5 1 1 6 0 9 4 3 3 0 5 7 2 7 0 3

6 5 7 5 9 5 9 1 9 5 3

0 9 2 1 8 6 1 1 7 3 8 1 9 3 2 6 1 1 7 9 3 1 0 5 1 1 8 5 4

8 0 7 4 4 6 2 3 7 9 9 6 2 7 4 9 5 6 7 3 5 1 8 8 5 7 5 2 7 2

4 8 9 1 2 2 7 9 3 8 1

8 3 0 1 1 9 4 9 1 2 ……

朝日がこれほど待ち遠しかった日は無い。やがて、律が目覚めて着替えを終えると

僕はホツと一息つき、式神を解除した。

「やあ、時雨！ 良い朝だね」

「この二十一年間で最低の目覚めだよ。ああ駄目だ……頭の中に数字が溢れて覚醒状態だ」

「……？ まあいいや。とりあえず、僕が君の朝ごはんを作ってるから少し待ってろ」

「ちょ！ 勝手に家の中を」

はい、律は僕を黙殺 とうか耳に入っていないのだろう。そのまま部屋を出て行った。

それから約一時間と少し。僕が必死に円周率を頭から叩き出そうと努力していると、

ドタドタと音を立て、部屋の障子を破壊せんばかりの勢いで開けて律が帰ってきた。

その手には朝だというのに、一晩中寝てないというのに、何故かハンバーグ。

「僕の全てを込めて作ったハンバーグだ。食ってみてくれ」

「うつ……わかった」

……………美味いぞ、これ。久しぶりに、美味しいと言う物を食べた気がする。

律はそんな僕の表情を見て、満足したのかニコニコ笑っている。何か淒く負けた気分だった。

「美味しいだろ？」

「ああ、認める。美味しいよ」

正直、遙さん級に美味しかった。口には出さないけど。

それから、僕と律は殆ど同棲と言っても言い位の生活を始めた。と言っても、毎日遊んでいるだけ。

律は九我山のお嬢様な筈なのに、僕よりも俗っぽい人間だった。まさかラーメン屋に替え玉なんてシステムがあるとは……

それから服のセンスがなつてないと駄目だしまでされた。仕方ないじゃん。年中スーツなんだから。

一番律が驚いていたのが、僕の無趣味さ。正直「時雨、人生楽しいか？」と聞かれた時には泣きそうになったね。

律は車が趣味らしい。後日届いた煌びやかなスポーツカーは彼女の宝物らしく、毎日掃除をしている。

僕も手伝わされた。車を掃除するなんて初めてで、半ば悪戦苦闘しながらも最後には綺麗になった。

「どうだ。こういうのも楽しいだろう？」

……認めるよ。楽しかった。今までこんな事は経験したことが無い。

その後も、僕は色々と教わった。九我山家の新年は大麻雀大会が開かれるらしく、僕もルールを叩き込まれる羽目に。

しかし、こういうのは得意だ。一ヶ月が経つ頃には僕はもう負けが無い。八神が廃業したら雀荘にでも就職しようと思う。

そんな日々が半年ほど経っただろうか。時に喧嘩し、時に笑いあった僕と律。

……… 本当に、認めたくは無いのだが、僕は律に次第に惹かれて行っただ。

律は何時も本気だった。僕に対して、何に対しても。それが、とても僕には嬉しく、羨ましい。

律は僕に足りないものを沢山教えてくれた気がする。

そして、ある日僕は庭で律と向かい合い、一つ真剣な話を振る事にした。

「律。僕は、八神の跡継ぎだ。だから、何時かは誰かと結婚して子孫を残さなくてはいけない」

「……うん」

「でも、僕らは混血同士。君も知っているだろ？ 混血と混血で子供を作った場合の事を。」

僕ら八神ではずっと前から純血の子をもらって、子孫を作っていた。

勿論、僕の母さんもそう。僕らは、八神の緋眼を絶えずに後世へ

と残す義務がある」

「わかってるよ。確か、混血と混血で子を作ると力の強い方が引き継がれるんだったよね。

しかも、それについては何ら科学的根拠も示されていない。正に運次第というやつだ。

後、極稀だが二つの力が合わさって、新しい力となる場合もあるらしいね」

「うん。正直、緋眼と鬼憑はほぼ互角だろうと思う。だから、どちらがくるかわからない。

もし、鬼憑が生まれたらその子は八神を継げない。きっと辛い思いをしてしまうだろう。

それに、もし君が子を産めなくなったり、緋眼使いが生まれなかったら、僕は君と別れて他の誰かと子を作るしかないんだ」

「……………」

「それが嫌なら、ここではっきりと別れよう。それが、九我山律と八神時雨が生まれた時に

背負った宿命なんだ。混血同士の結婚は難しい。千島みたいな家なら別だが、

僕ら八神や九我山は違う。下手をすれば、家族まで敵に回してしまうかもしれない結婚なんだ」

「…………時雨は、僕の事好きか？」

「…………正直に言うと、好きだよ。少し前までは苦手だったけどね」

「じゃあ、”私”はそれだけで十分。全ての犠牲を背負ってでも、

私は君と結婚したい。

子供だってちゃんと私が育てる。一人でも、たとえ君が居なくなるうとも」

「君がそうなら僕は 律、君を絶対に幸せにすると約束するよ」

ああ、恥ずかしい。だけど、きっとこれが僕の本音。半年間一緒に居た律は、僕に色々な事を教えてくれた。

それは、昔の僕だったらどうでもいいと切り捨てたような事が多い。

でも、今では全てが大切な思い出。僕は律を抱きしめた。生まれて初めて、本当に好きな女の子を抱きしめた

翌日、僕らは一緒に目を覚ますと律曰く「漫画でよくあるおはよの儀式」をして、食堂へと向かった。

昨日あれだけしたというのに、鬼憑使いの体力は底なしか。と思いつつも、実は僕もしたかったというのは一生の秘密。

蒼威さん達に知られでもしてみろ。死ぬ寸前までその事で僕をからかうに違いない。

二人でこっそり手を繋いで、食堂へと行って見るとおかしな事に人の姿が無い。

それどころか、給仕の係までいない。そして 裏手の方から聞こえる妙な歓声。

僕らがその方向へと向かうと、想像を絶する光景。何故、何故、宴会が行われてるの!?

「おお、時雨様がお目覚めになられたぞおおおっ！」

八神でも調子の良い人柄の宗助が僕らに気づいて声を張り上げた。
何だ、何だ、何なんだ？

何時も使われる宴会場のステージを見ると、何か変な事が看板に書いてある。

「き、み、が、そうなら僕は 律、君を絶対に幸せにすると約束するよ？」

……ま、まさかと思い、その下に視線をやる。

「し、ぐ、れ、様、ご結婚決意、おめでとunggございますう？」

全員がニヤニヤしながら僕と律を見ている。クソ、昨日の会話は皆に聞かれてしまったのか。

ああ……僕の威厳が……八神の立場が……ああ、あは、あはははははっ。

いいよ。いいよ別に。どうせ、僕はこうやって弄られる運命なんだ。あはは。あはは。

すると、鼻眼鏡をした父さんが僕に向かって歩いてきた。この人は、真面目なのか、不真面目なのか。どっちなんだ。

「お前達が進む道は八神の今までの主義に反する行為だよ」

「わかってます。でも」

「言うな。息子の結婚を祝福しない親が何処にいる？ それに、過去の八神がどうした！」

お前達は、今しか生きられない。だから、後悔しないようにな。精一杯頑張って見るといいさ」

「はい！」

「お父様。これから、宜しくお願い致します」

「いやあ。可愛げのカケラの無い息子と違って、可愛い義娘が出来て僕も嬉しいよ」

珍しく、父さんのテンションが高い。この人、もしかして女の子がほしかったのか？

だから、蒼威さんや陸人さんにロリコンロリコン馬鹿にされるんだ。

「時雨、どうしたの？」

「早く来い。お前には今から、皆の前で挨拶してもらうんだから」

「あ、はい。今行きます」

そして、僕と律は手を繋いで宴会の輪へと加わった。

Days 18：陸人だいありー（前書き）

今回は結構重要な話です。

時間軸上では、緋色の眼新作の時期のお話というか。

その時期までの陸人の日記です。

神々の黄昏から九年間。何があつたかが、大体語られています。

そして、新作は土曜日に投稿する予定です。

こちらにもよろしくお願いいたします。

後、朱音人気が高いので短編一本書き始めてます。

こちらにも完成したら、投稿致しますのでよろしくお願いします。

Days 18：陸人だいありー

2022年

・十一月

何か、詩歌にボケ防止のために日記帳を貰った。そんなにボケてるか、俺？

蒼威や梨香や遙ちゃんや森羅にその事を話したら、

蒼威は、

「ニワトリだから所詮三日坊主だろ。いや、三歩歩いたら忘れちゃうかなーわはははは」

こついいやがった。チクショウ、いつか大怪我すればいいのに。

梨香は、

「え……お父さんって十文字以上の文章作れるんだ」

と言いやがった。お前はお父さんを何だと思ってるんだ。

遙ちゃんは、

「詩歌から物を貰えるなんて奇跡じゃない。良かったわねえ」

と言いやがった。いやいや、悲しい事言つなよ。しばらく落ち込んだのは言つまでも無い。

森羅は、

「それよりもよ、大人の女性つて何を貰ったりしたら嬉しいかな？」

と言いやがった。はいはい、完璧俺の話は無視ですねー。ムカつきますねー。

何か色々言われて悔しかったので、今日から毎日記をつけてやるぜ！

2023年

・二月

いきなり間があいてしまった。クソ、蒼威の言つたとおり三歩歩いたら忘れちゃった。

昨日、蒼威の家に次男が生まれた。40近くになつても盛りやがって。だが、可愛かった。

名前は光希とつけるそうだ。蒼二と遥緋で考えたらしい。あの二人も良いセンスしてやがる。

夜、詩歌にもう一人作ってみるかと思つてみたら「冗談じゃない」と言われた。泣いた。

何か子供のような奴が居るのにもう一人とか無理らしい。梨香つて子供っぽくないと思うのだが、

梨香じゃないらしい。じゃあ、誰の事？ ま、まさか隠し子！？

・五月

時雨と律が結婚した。正宗は終始笑顔だった、気持ち悪い。時雨は幸せそうだった。

ただ、皆の前で俺と蒼威がお前にした事はなさないでくれ。お陰で遥ちゃんと詩歌に

二人して怒られた。しかし、遥ちゃんってある意味魔性だよな。

時雨軽く泣きそうだったし。

律はもう時雨にベタベタ。結婚式で舌を絡ます奴始めて見た。可愛い俺の娘は顔真つ赤にして見てた。

2024年

・六月

もう日記を書く回数は気にしない。ようは何年書いたかが重要なのよ。

蒼二と命が結婚した。最後の最後まで大反対していた運命は、俺の隣で号泣してたよ。

お願いだから二度と人の隣で日本刀をブンブンと振り回さないでほしい。

切れたから。さりげなく首の皮が切れちゃったから！

後、大和が詩歌口説いてたから、殴ってやった。詩歌もまんざらでもないような顔をしないでほしい。

あ、蒼二の結婚式は普通だったぞ。うん、料理がめっちゃ美味しかった。

・八月

森羅が未来と駆け落ちしたり、神璽や由加もそれに合わせて消えちまうし、色々混乱したわ。

とりあえず、一課はほぼ解散。森羅と未来は一課を退職して、浅葱と八神で雇うらしい。

ちよつち国との関係が悪くなったが、そこは十名家の八神さん。色々と金を動かしたらしい。

・十月

時雨に子供が生まれた。しかも、双子の男。名前は北斗ほくとと南斗みなと。これから八神は面白くなりそうだぜ。

しかし、あの時雨が子供ねえ……ガキの頃からアイツを知っている身としては、しみじみとくる。おめでとう、時雨！

2025年

・三月

遥緋と莉王の結婚式だった。泣いた花嫁姿が遥ちゃんと似てて少し驚いた。あの子も変わったね。

蒼威は光希を膝に抱いて苦虫を噛み潰したような顔をしていた。そんな蒼威を見て

遥ちゃんは苦笑い状態。ちなみに、ブーケを取ったのは梨香だ。

昔は近づく男全てを殺すつもり

満々だったが、彼氏一人いない娘の将来に少し不安を覚えた俺が居た。

・五月

またも結婚式。最近多いね。どいつもこいつも盛りやがって、俺なんか詩歌と四日以上口

きいてもらってないっつーのに。しかし、おめでとう。狂と奏。スゲ ヤクザが多い結婚式で無駄に血が騒いだ。俺らで狂に口リコンコールしたら

罪歌に燃やされかけたよ。ま、時雨を人柱にしたから無事だったけどね。結婚して子供が生まれても不幸な奴だ。

・七月

梨香に彼氏が出来た。昔だったら五秒で殺してただろうが、今は違う。

相手は俺と同じ堅気の少年。うん……長くは続かない気がするよ。俺らの世界は異常だからね。

そろそろ詩歌と話し合ってお見合いでも持ってこようと思う。

2026年

・一月

蒼二と遥緋の子供が生まれた。二人とも女の子。名前は蒼華そうかと莉り那。^な

蒼威が孫バカになってしまい気色悪い事この上ない。そういや、光希とは叔父と姪なのに

三歳差なんだよな。なんか驚いた。俺もそろそろ孫とか欲しいな

あ……

女系一族なんで、多分生まれるの女の子だろうけど。野球とかやらせたいなあ。

2027年

・三月

梨香が別れたらしい。やっぱり、一般人とは無理らしく一日中泣いてた。

その晩その意味では私は恵まれて居たと詩歌が俺に言った。久しぶりに感動して泣きそうになった。

そして梨香が高校を卒業したので浅葱の頭首へ。俺は大学まで遊ばせてやろうと思ったけど

梨香の決意は固い。だったら、親として何も言つまい。

・四月

梨香が頭首になってから一月。霜月の家は浅葱をナめやがった。やっぱり頭首が若いと

こつちの世界はナめられちまう。梨香は泣かなかった。それどころか、口で霜月を圧倒。

俺にできる事は何か無いかな　と考えた結果、郁人を拉致って霜月の家に殴りこみをした。

結果は圧勝。梨香はあんまり喜んでくれない。だが、

「次はお父さんに頼らなくても何とかして見せるんだからね!」

とガッツを見せた。流石俺の娘。詩歌もババアも笑ってた。

・五月

遥緋に子供がまた生まれた。名前は灼汰^{あらた}。……アイツみたいな奴になってほしいと思う。

・六月

蒼二に子供がまた生まれた。名前は煉次^{れんじ}。……アイツは嫌味な奴だったからな。捻くれなければいいけど。

2028年

・五月

何気に狂の子供が生まれた。男の子だ。名前は善^{ぜん}。かつこいいね。

。罪歌と正宗はどうなるのだろうか……

ついでに森羅の子供も生まれた。女の子、名前は……あれれ？
忘れた！

……ごめんなさい。実は漢字が難しくて読めなかったんです。
皆の前では、わかってるフリしてたけどな。

・七月

罪歌、告る 正宗としばらく何処かへ 式は挙げずに籍だけ入れ

ることに。

美雪姐さんの事もあるだろうが、俺はこれで良いと思う。

正宗の事をロリコンと呼ぶと罪歌が可哀想なので、2代目ロリコン緋眼使いは狂に進呈。

今度休日に蒼威と一緒にトロフィーを買いにいくつもりだ。

……あ、そっぴやあいつらが子供作ったら時雨の弟になるのか！
？ でも、俺は応援するぜ！

2029年

・三月

蒼威が完全に孫バカになった……もうね、見てて気色悪い。

余りにも気色悪すぎて、ビデオに蒼威の孫バカっぷりを記録して詩歌に見せてみた。

すると詩歌。家の奥の方を漁って一本のビデオテープをデッキにセツト。

そこには梨香に対して蒼威と全く同じような行動や発言をしているイケメン（俺）の姿。

誰か俺を殺してくれええええっ！！！！！！！！

・五月

蒼二、浮気疑惑。千島戦争開始。何故か俺も巻き込まれた。

命はワンワンと喚き、運命は「殺してやる」と阿修羅姫を振り回していて、恐ろしい事この上ない。

・六月

遙ちゃん、暴走。第二次千島戦争開始。ちなみにこの日記は病院から書いている。

蒼威は隣で包帯グルグル巻きの状態。そんな蒼威の傍では、莉那と蒼華が

つきつきりで「おじーたん。おじーたん」と……スゲー負けた気分。

・七月

ついに終戦。犠牲が多かった……光希のセンスは神だわ。

2030年

・二月

浅葱のババアがついに死んじゃった。婿入りした時から散々いびつてくれたババア。

詩歌とイチヤイチャしようとするエアガン乱射してきたババア。やっと居なくなつて清々すると思っただけど、現実が違う。やっぱり、人の死は悲しい。

とりあえず、なんだかんだ言つて世話になつたからな。天国で梨香の事見守つてやってください。

・四月

蒼二がついにユニオン設立計画を始めた。スゲエ、あいつはマジで凄いと思う。

下手すりゃ、十名家に次ぐ日本最大級の組織になるかもしれない。勿論、そうなったら浅葱も傘下に入る。

まあ、神々の黄昏事件で作られたアイツの理想の世界、見せてもらおうじゃねーか。

トップは五人。純血の郁人。鬼神の運命。混血の蒼二。新しい種の神璽と由加。

この五人の視点から色々考えてユニオンの方針を決めていくらしい。

時雨も乗り気なようで、八神も傘下に入るのだから、必然的に十名家の半分もユニオンに加わる。それだけでも大戦力だ。

鬼神、純血、混血を区別しない共存の組織か。俺ら前の世代から見ると、それは夢物語にしか聞こえない

今まで俺も何回も同じ事を思った。だけど、現実には世知辛い。力無い者は在る者を恐れ、

力有る者は無き者を見下す。これが俺達の世界の常識だった。

だけど、俺と蒼威と森羅は純血と混血だけど親友といえる。あいつみたいな根暗と分かり合えたんだ。

多分、差のある純血と混血と鬼神は分かり合えるのであろうと思うんだ。

・八月

蒼二からユニオンの学校の計画を聞かされた。次代を担う何とかの育成がどーたら。

んで、何か教員だか何だか指導者が必要で俺とか蒼威とか、暇そうな熟練者に声をかけてるんだと。

ぬはははははは。まあ、俺みたいな最強の男にスカウトがくるのは当然かぁ！！

だけど……やるなら専門機関で講習とレッスン受けてこいだって……どうしようかなあ。
金は向こう持ちらしいー。

Days 19：牧島竜胆（前書き）

日が開いちやって赤文字が出たので投下。

今回は時間を遡って九年前へ。

次回は郁人視点のホワイトデー編です。

男性陣が中心となります。

長編の息抜きに書いたので、軽めのお話です。

Days 19：牧島竜胆

二月十三日、この日は女の子にとって勝負の日だ。明日は某お菓子企業の陰謀の日。

モテない男達の家から出ないと言い張る日。そう、明日はバレンタインデー。

そんなわけで、アタシは諸般事情からここ八神家の巨大な厨房をお借りしている。

ちなみに、メンバーはアタシだけじゃない。アタシ、梨香、遥緋さん、奏さん、罪歌さん、

由加さん、命さん、律さん、運命さんの九人。正直、ありえない面子であると思う。

どいつもこいつもが、名家のお嬢様。そーですよ。どーせ、アタシは牧島産の式神ですよ。

「嘆かわしいな……これだけ女が居て、誰もまともなチョコが作れないとは」

「あのー……私は作れるんですけど」

律さんの言葉に奏さんが恐る恐る反論するが、全員に黙殺された。義姉になる罪歌さんまで無視していた。

奏さんはオロオロと困ったように周囲を見渡している。可愛いなあ……この人。

ちなみにアタシもまともに作れる　がこの面子でそんなKYな発言をしてみる。アタシなんか一瞬でひき肉。

それほどまでに凶悪で強力な女達の集会。奏さんはまだその辺りの処世術が駄目だねえ。

「とりあえず、失敗作を持ってきた奴は出してみろ」

司会進行の律さんが全員にそう伝えると、まずゴソゴソと袋から何かを取り出したのは罪歌さん。

テーブルの上におかれたのは消し炭。きつとチョコレートなのだろう。

というか、何でチョコレートな筈なのに、溶けずに形が残っているかが疑問である。

「一瞬強く焼いて、後は弱火でじっくりって方法があったから、炎帝でやってみたの。そしたら……この有様よ」

「あ、これ木炭じゃなかったんだー」

「食べ物に見えない」

「罪ちゃん。お菓子作りド下手だもんねー」

遥緋さん。由加さん。命さん。もう少しオブラートにね。

「お、お義姉様。何故……強力な炎を使ったのに形が残ってらっしゃるんですか？」

「何って……これは型だよ。中のチョコなんか一瞬で蒸発しちゃったよ」

罪歌さんの式神に耐える型とか……一体何で出来てるんだらう。そして、皆の視線が語っていた「ああ、自分は罪歌（こいつ）よりマシだろう」と。

どんぐりの背比べだとアタシは思っんですけどねえ……

罪歌さんの失敗作で皆さん、妙な自身をつけたのか次の由加さんはやけに自信満々にチョコを出した。

……………何故に、緑？ 由加さんが出したチョコレートは茶色ではなく、緑。

「名づけて、健康チョコ。少し味見をしてみしてほしい」

由加さんが全員を見た、というか睨んだ。まるで、食わなかったらお前を殺すと言っているような目で。

恐る恐る口にしてみる皆さん。アタシは少し危険な匂いがしたので、食べたフリをして様子を伺う。

「うえ……………」

「おえ……………」

「げえ……………」

「……………っ！！」

発せられた擬音からわかるように、すごぶる不味いらしい。皆、ティッシュに吐き出している。

だが、吐き出さなかった勇氣ある人物が居た。その名は、七海奏さん。流石お嬢様。

人前で口に入れた物を吐き出すなんて出来ないのだろう。運命さんなんてゴミ箱に吐き捨ててたのにね。

そして、それだけでは終わらなかった。

「……………えへっ。……………うふふっん……………にゃあああああ！」

奏さんに何があつたのだろうか、とろんとした目でなにやら楽しそうに笑い始めた。

「いかん！ 奏が狂ったか……可哀想に、麻薬中毒者のような目をしている」

律さんが奏さんを抱え、血相を変えてそう怒鳴る。いや、幾らなんでもそんな……

「見えます！ 見えます！ 遥緋先輩の顔が肉まんみたいに……あはははははははははは」

完全に我を失っている……こんな奏さんを見るのは初めてだ。そして、遥緋さんが顔を引きたらせ、

「……殴って良いかな？」

「うにやらば……あれ、何で私、鬼に抱えられてるの？ うわ、しかも周りはゴリラばかり。」

あっちのほうじゃ、絶滅種だつていうのに……やーい！ やーい！ ゴリラ共ーバナナ食ってるい」

奏さんが狂ったのに伴い、全員の殺意が爆発的に膨れ上がった。み、皆顔が笑ってない。

このままじゃ、戦争が起きてしまう。そう判断したアタシは、奏さんまでこっそり近づき、

首筋に結構力を込めて、手刀を入れてみた。……おお、本当に意識を失ったよお。

すると律さん、気を取り直して、

「尊い犠牲が出たが……我々は前に進もう。とりあえず、由加！君は何を入れたんだ！」

「ローヤルゼリー。野菜各種。山菜、蓬、山椒、蜂蜜、ドリアン、漢方とか薬とか。」

「確実にこれは健康になる。そう思って入れてみたのだが……駄目だったか」

「とりあえず、君はもう何も入れるな。少し味付けをする程度でいい」

「で、でも……私らしく、オリジナル要素を……」

「その有様が、これだぞ！」

ピクピクと痙攣する奏さんを指差して、律さんが告げた。流石の由加さんも何も言い返せるわけも無く、

黙って緑色の産業廃棄物をゴミ箱へと捨てた。そして、次は自信満々の顔で遥緋さんがチョコをテーブルの上に出した。

だが、皆さん冷たい表情で

「オチが読めるからこれは遠慮しておこう」

「私、死ぬ程味見させられたし……糖尿病になったらどうしよう」

「いもーと、どーせ甘いんでしょ……？ わかってるからさっさと捨てて」

「芸が無い」

笑顔は一瞬で消えうせ、遙緋さんはすごすごとゴミ箱へと砂糖の塊を捨てた。そして、その後は、大分まともだった。

梨香は純粹に失敗。基礎が出来てないねえ。運命さんはそもそもチョコレートを作った事すらないらしい。

律さんは律さんで、

「僕は、女子高だったので常に貰う側だったのさ」

とカツコいい事を言いのけた。女子高〓レズが多いと言うのはどうやら本当らしい。何回か寝込みを襲われたそう。

まあ、それはただの言い訳でしかなく、律さんは料理は作れるがお菓子系は壊滅との事。

そんなこんなで、私達のチョコレート作りはようやくスタートした。

律さんが「猿でも出来るチョコレートの作り方」を手に持ちながら、全員に指示を出していく。

元々バレンタインのチョコなんて、簡単なもんだ。溶かして、好きなように味付けをして、

再び固めるだけ。だが、この人達は個性が強すぎる為に失敗していた。しかも我流。

成功するはずが無い。だが、今は律さんの本に群がるようにして、私達は好みのレシピを見ながら作っている。

失敗するはずが無い。そんな自信がついてきたのか、段々とお喋りの方が多くなっていった。

「それにしても、律さんと時雨ちゃんが本当に結婚するとは、思わなかったですよ」

「……どういう意味だい？」

「だって、時雨ちゃんって。実はホモなんじゃないかなあ〜とか思ってたんですよ。」

私がバスタオル一枚で前を通っても、軽くスルーするだけでなし、昔付き合ってた女の子とは

キスはおろか、手すら繋いでませんからね。更に、お兄ちゃんと妙に絡むしね〜」

正直、時雨さんが可哀想になった。そして、何となく笑ってしまふ。

「時雨はホモじゃないぞ。というか、僕がバスタオル一枚で歩いた時なんて、顔を真っ赤にして服を投げつけてきたもんだが……うーむ。やはり、君が妹分だからじゃないかな？」

「そんなもんなんですかねえ」

「……単純に胸が平たいから蒼二さんと間違えてたりして」

梨香がボソッと呟いた。そして全員が、「ああ、あり得る」みたいな表情を見ると、遥緋さんの眉が釣りあがる。

梨香も失言に気づいたのか、慌ててフォローしようとするも、上手い言葉が見つからないらしい。

一応、親友なので私は助け舟を出してやる事にした。

「そーいえば、遥緋さん。莉王さんとデートしたらしいですねえ？」

「……え、ああ、うん。律さんにお呼ばれして行ってみたらねー。何か勢いでそういう事に」

遥緋さんの意識が私に向いた。視界の隅では、梨香が涙目で親指を立てている。

フフン。貸しだからね。後で、きっちり返してもらってから。

「正直、僕も戸惑ったよ。小さい頃からの付き合いだが、莉王が生身の女性に此処までの

関心を示したのは、初めての経験だ。一体、遥緋はどんな手を使ってあの変人を骨抜きにしたんだい？」

「骨抜きって……。何か、良く分からないけど。女にぶん殴られたのは、生まれて初めてだ！」

とか叫んだと思ったら、私の殴るフォームの美しさについて、二十分ぐらい語られて、

正直何なんだろう……。とか思ってたなら、何かデートしたいとか言われてそのまま流されるように……」

あの人はマゾだったのか。ホント、アタシ達の常識では考えられない事やってのける。

馬鹿と天才は紙一重。という諺があるけど、あの言葉は莉王さんの為にあるようなものだろう。

「でも、良い事じゃない。遥緋は女の私から見ても可愛いし、莉王も悪人ではないし。お似合いだと思うわよ」

「僕個人としても賛成だよ。どうか、あの馬鹿をよろしく頼む」

「はあ……。まあ、なるようになります」

そこで一旦会話が途切れ、再びアタシ達は作業に集中した。と言っても、アタシのはもう完成した。

郁人と散々お世話になった蒼二さんに渡す為に、わざわざ二つも作った。我ながら良い女である。

……ここで、ふと気になった事がある。この中のメンバーで、誰が誰に渡すのかは大体わかる。

だが、一人だけわからない。それは

「運命さんは、誰に上げるんですかあ？」

気がつけば、アタシは【九尾の狐】最強の鬼神にそんな事を聞いていた。

好奇心は身を滅ぼすというが、言ってからまさにその通りだと気づく。だが、運命さんは別段気分を害することも無く、

「ん。大和と空我だよ。そもそも、運命にはそれぐらいしか男性の知り合いは居ないしね」

「ああ、あの人達ですかあ。二人とも、カッコいい方ですよね」

「カッコいいかな？ ……大和なんか、私と初めて会った時、おしっこちびってたし。」

空我なんかは、お母さんにピーピー泣き付いてたんだから。……それを知ってるよね」

「そ、そうなんですか……」

酒吞童子と大天狗の息子を泣かせるなんて……どれだけこの人は怖かったんだろう。

だが、命さんはそんな運命さんに臆するわけでもなく、普通に接している。

鬼神と人間の姉妹。アタシと郁人だって式神と人間でも上手くや

ってるし、結局はそんなもんなのだろうか。

「ふんふんふーんふーん」

「……………」

運命さん達の所から離れると、何時の間にか復活した奏さんと罪歌さんが作業をしている。

奏さんは軽やかな手つきで次々とチョコを完成させていくのに対し、罪歌さんは腕を組んで唸っている。

よくよく見てみると、奏さんにはクリームやチョコで狂さんの名前が入っているのに対し、罪歌さんのは何も書かれていない、別に変哲のないチョコ。それを気にしているのか、

先程から奏さんのをチラ見しては、顔を真っ赤に染め、またチラ見をするを繰り返している。

「やっぱり、大人にはスタンダードに行くのが常套よね……………ああ、でも年寄り臭いチョコとか思われたら……………」

でも、奏ちゃんみたいに可愛い文字なんてかけないし……………何より正宗には似合わないし。

またそれが原因で陸人とかにロリコンって苛められたら可哀想だし……………うーん……………やっぱり、

ああ、でも……………でも、可愛いねチョコだねって言って欲しいなあ」

何やら海より深そうな悩みに入っている罪歌さん。話しかけると殺られそうなので、アタシはそそくさとその場から退散した。

今度向かったのは、遥緋さんと梨香の場所。……………何か、梨香泣いてない？

「ハル姉ちゃん。だから、甘すぎて無理だつてば……………」

「こ、これでもまだ駄目なの……………」

「だーからー！ 砂糖禁止だつてば！」

「駄目よ梨香ちゃん。砂糖は地球が生み出した最大の恩恵なの。私達は、日々それに感謝して

毎日甘いものを食べなければいけないのが、人間の使命だと私は思ってる。だから、使わなきゃ駄目」

「竜胆、ハル姉ちゃんを止めて！」

遥緋さん理論展開中な所申し訳ないけど、アタシを巻き込まないで欲しい。すると遥緋さん。

目をカッと開き、アタシを正面から見据えると、

「竜胆ちゃん……………しょっぱいってのはね。何時でも人は味わえるの！」

「は、はあ……………」

「人は汗をかく。それを舐めれば、しょっぱいって感覚は何時でも得られるじゃない。

でもね！ 甘いつてのは人間の体じゃ不可能なの！ だから、甘いつてのはとっても重要なの」

もうわけがわからん。アタシは愛想笑いをしながらバックステッ
プで遥緋さんから離れて行った。

その結果、遥緋理論のターゲットは再び梨香へと戻り、遥緋さん
の講釈は続く。

そしてついに、遥緋さんが調理台の隅においてあった砂糖を梨香
と遥緋さんのチョコが入った鍋へとブチまけた。

「嫌あああああッ！」

「ふう。これで安心安心」

アレを食べることになる方々に、心からのご冥福をお祈り致しま
す。

最期に向かったのは由加さんと律さんが何時の間にか共同作業し
ている場所。

由加さんの方はもう完成したようで、包み紙に包まれ無駄に綺麗
に包装されていた。

だが、その周囲に散らばるビーカーやフラスコが妙な不安をそそ
るのも事実。

そして、律さんは律さんで、なんかおかしな事をやっていた。

「ふむ……これで、角度はOKかな？」

「うん。でも流石、律。普通はこんな事思いつかない。これで、時
雨は律のモノだね」

「フフフ、そう褒めるな。照れてしまっだろう」

何なんだろう……まさか媚薬でも盛ったんじゃないか？　だが、違うようで。

律さんはセーターを脱いで、タンクトップ一枚になると、由加さんが一度指を鳴らす。

すると、律さんの正面にあつたチヨコの鍋が爆発を起こし、中身が律さんに大量にかかった。

「ちょーり、律さん大丈夫ですか！？　今タオルを」

「いや。いいんだ竜胆。我に、秘策アリ」

律さんはチヨコ塗れの顔で綺麗に微笑むと、親指を立てた。

一応アタシ達のチヨコが別室で待機していた男性陣にどうとって貰ったかについて言って置こう。

まずは、運命さんと命さんから。渡す相手は、運命さんは大和さんと空我さん。命さんは言うまでもないだろうが、蒼二さん。

「ねえ、空我！　運命ちゃんが僕達にチヨコくれたよ！？　明日は世界が滅ぶんじゃない？」

「いや……それだけじゃねえ。下手すりゃ、俺らの世界だけでなく、全ての世界が」

とまで言った所で、顔を真つ赤にした運命さんに殴られて、二人は沈黙した。蒼二さんは蒼二さんで、

「はい。蒼ちゃん。愛してるよ」

「あ……ああ。ありがと……うん……美味しいです」

「嬉しいーありがとう!」

運命さんの阿修羅姫を背中に突きつけられて、蒼二さんは冷や汗を垂らしながら命さんのチヨコを頬張っていた。

次は由加さんの番。渡す相手は、森羅さんと神璽さん。二人とも、本当に青い顔をしている。

試作チヨコで狂わされた奏さん何かは罪歌さんの後ろに隠れているほどだ。

二人に差し出されたチヨコは、茶色で普通の形をしているものの、得体が知れない。

「……食べて、くれないの?」

「も、勿論食うさ! なあ、神璽!」

「……へ? ああ、うん。凄く美味そうな香りがしてたから、ボーっとしちまったよ!」

森羅さんと神璽さんは一口でチョコを口に詰め込むと、物凄い勢いで噛んですぐに飲み込んだ。

そして、同時に「美味かった」というと廊下を出て、ドタドタと何処かへ走っていった。

あの分ではしばらくは帰ってこないだろう。

その後は、狂さんに奏さんと罪歌さんが何の変哲も無く渡し、正宗さんは仕事で居ない為に

罪歌さんは今晚泊まって、正宗さんの帰りを待ってから渡すらしい。……何て一途な人なんだろう。何か涙が出そうに。

そして、今度は遥緋さんが心からニコニコとした表情で、莉王さんと蒼二さんにチョコを渡した。

蒼二さんは先程までよりも更に青い顔をしており、逆に何も知らない莉王さんは、妙に機嫌がいい。

「ちょっと、私好みの味付けになっちゃってるんですけど」

「全然構わんぞ。こう見えても俺様はチョコに目が無くてな」

蒼二さんがそれを見てボソツと「馬鹿め……」と呟いた。アタシも正直、そう思った。

莉王さんがチョコを一口齧る。……お、変化が無い。そのままニコ目へ。

それを見た蒼二さんは、今回は大丈夫なのかな？と思ったのだろう。徐に一口噛むと。

「てめえ！　また砂糖の塊じゃねーか！」

「ひ、酷い……。チョコなのに……」

蒼二さんと遥緋さんが言い合いをする中、相変わらず無表情でチ

チョコを食べ続ける莉王さん。

食べ終わった後は、放心状態。というのが相応しいぐらいにポケ
ーっと立っている。

一番早く異変に気づいたのは、運命さんだった。走りよって、莉
王さんの目の前で手を振ると、

「……立ったまま気絶している」

「莉王……アンタ、意識が無いのに食べ続けたのか。スゲエ、スゲ
エよアンタ」

「いや、私としては凄い複雑な心境なんだけど……」

運命さんが気絶した莉王さんを担いで、部屋から出て行く。後に
残ったのは、アタシと梨香。

律さんはさつきから何処かへと行ってしまっている。凄まじく嫌
な予感がした。

律さん………本気で、あのチョコを時雨さんに渡すつもりなの
だろうか。

時雨さんも何か嫌な予感がしているようで、さつきから世話しな
く部屋を見渡している。

そして、障子が開き、黒いベールのようなモノを纏った律さんが
現れた。

「り、律……？ その格好は一体……」

「時雨……私の気持ちだ。受け取ってくれ」

由加さんがツカツカと歩み寄り、律さんのベールを剥いだ。その
下から現れたのは、

さつきと同じタンクトップにチョコ塗れの律さんの姿。……ああ、本当にこの人がやる気だ。色々な意味で。

「僕ごと、召し上げれ」

精一杯媚びた笑顔と声で律さんは時雨さんにそう言った。だが、当の時雨さんはというと、

顔を真っ赤にしたと思ったら、急に青ざめていき、また真っ赤になったと思ったら、

今度はちよつと危険な色に染まり　やがて、ボタンと床に倒れて動かなくなった。

本人なりに、様々な葛藤があつたんだと思う。頭の回転が速すぎて、体と心がついていかなかったようだ。

こうして　アタシ達が始めて共同で作ったバレンタインは、重傷者数名という結果を残して終わったとき。めでたし、めでたし。

余談ではあるが、アタシと梨香のチョコは皆から異常な程の評価を受けた。そりゃ、あの面子ではそうなるに決まっている。

梨香は遥緋さんに内緒で、最低限の分だけは隠しておいたらしく、それを応用して普通のチョコを作っていた。

一番嬉しかったのが、郁人が凄く美味しいと言ってくれた事。それだけで、アタシは凄い幸せな気分。

ちなみに、時雨さんはその日からストレス性腸炎になってしまい、

一週間ほど入院。

後に時雨さんはお見舞いに行ったアタシと郁人にボソツと語った。

「チヨコは何処まで行っても食べ物なんだよ。彼女たちは、少しその辺を履き違えてる気がするんだ……」

……………ごもつともで。

Days 20：牧島郁人（前書き）

というわけで、ホワイトデー編。
過去例にないほど長いです。

投票してくださった皆様。ありがとうございます。
千島勢の人気の強さに郁人が泣いた。

次回はよくわかりません。
年末短編と年始短編とかやりたいのですが。
時間的にどうも微妙です。

上手くいけばやると思うので、
暇だから読んでやんよ。みたいな姿勢で見ただけだとよろしい
かと。

Days 20：牧島郁人

先月のバレンタインデー。俺は竜胆と梨香ちゃんからチョコを貰い、人生の喜びをかみしめていた。

二人の女の子に手作りのチョコを貰えたのは凄く嬉しい。しかも、片方は好きな子の手作り。

今思えば、あの時は幸せだったなあ……だが、その一カ月後の今、俺は酷く緊張した面持ちで八神家の厨房に居た。

メンバーは俺、蒼二さん、時雨さん、莉王さん、狂さん、神璽さん、陸人さんの六人。

他にも颯太さんや空我さんや大和さんや令君を誘ったのだが、全員忙しいらしくこれなかった。

大和さんと空我さんは物凄い数を貰ったらしく、とても手作りで返しきれないので

どうやら業者に大量発注して、一軒一軒配り歩いてるらしい。

颯太さんと令君は一緒に旅に出て連絡がつかなかった。一体、何をしているのやら。

森羅さんは来週の休みに由加さんを有名な焼肉店へ連れて行くそうな。

「ったくよお……今時のガキはホワイトデーに返すチョコも一人で作れねえのかよ」

そう呟いたのは陸人さん。”偶々”八神に着ていて、そのついでにこの集まりに参加したと聞いている。

だが、それは陸人さんが喋って居た事であり、他の皆さんは信じていないようで、

「うるせーよおっさん！ どうせ、詩歌さんに邪魔だからって追い

出されてここにきたんだろ！」

「ハッ、それとまた何か愚か極まりない事やって、今年は詩歌さんから貰えなかったらしいじゃないですか」

「相変わらず駄目だねえ……陸人さん。今度こそ、離婚かもねー」

「っーか。詩歌さんもよくこんな馬鹿と結婚する気になったよな」

「師匠……流石の俺も今回ばかりはフォロー出来ません」

凄まじい集中砲火が陸人さんに炸裂した。そうか……またこの人何かやらしたのか。

梨香ちゃんには心から同情できるのと同時に、羨ましさを俺は覚えた。

俺の親父がもしも陸人さんみたいに破天荒な人だったら、俺はいや、もういいか。

てか、莉王さんは何故に陸人さんを師匠と呼ぶのだろう。あの偉そうな人らしくない。

「ち、違うもん！　ちよつとエロDVD借りてきただけだもん！」

「ジャンルは？」

蒼二さん、反応する所がおかしいですよ。

「女子高生ハメ撮り・貧乳厳選集」

「そらアンタが悪い」

蒼二さんは身も蓋も無い。心から呆れたような目で陸人さんを見ている。狂さん何かは達観の域だ。

莉王さんはフォローに回るかどうかで迷っているらしく、珍しく頭を抱えていた。

とても気持ちよさそうなのが時雨さん。いつもの倍ニコニコしながら、陸人さんへと言葉を浴びせる。

「何で奥さんが居るのにそういう類の物を借りるのか理解に苦しみますね。

あんな卑猥な物を借りるなんて、どうかしてるんじゃないですか？」

だが、この一言が時雨さんの失敗だった。全員、驚いたような顔で時雨さんを見ている。

どうやら、全員レンタルした事があるようである。公には言えないが俺もある。

竜胆には絶対に内緒だが。もうね、バレた時の事を考えると恐ろしくてたまらないので、

最近ではパソコンに隠しフォルダを作って、ネットで拾った動画を全てそこに隠している。

「時雨兄ちゃん。まさか、借りた事が無いの？ てか、見た事ないとか？」

「言ってやるな神璽。それが、八神の宿命なんだよ。きっとデリヘルでも呼んでるのさ」

「うわぁ……時雨。弟分として少し幻滅したぜ」

「同じ十名家の俺様でも使用するのに……なんたる道楽息子だ」

時雨さんはどうやらデリヘルの常習者という事にされてしまったようだ。恐ろしい。

当の時雨さんは顔を真っ赤にして、俺達の方をにらむと、

「呼んだ事なんて無いですよ！　そ、それに僕だって、ちゃんと見た事がありますから！」

「ほほお。どんなのを見たのかな？」

「そ、そんなの陸人さんに関係ないじゃないですか！」

ここで終わらないのが、陸人さんの凄い所でもあり、怖い所でもある。

「へえー。やつば嘘なんだな。ぎやははは！　八神のお坊ちゃまはAVすら見た事ないんでちゅか」

「だから、あるって言うてるじゃないか！」

「ほおー？　じゃ、どんなに見たんだよ」

「お、女教師モノですよ！」

「うっははははは！　ただの女教師モノとか、中坊かよデメエは。時雨ちゃんかわゆいねー」

陸人さんの嫌味な笑いは続く。時雨さんは怒りが収まらないように、更に声を荒らげ、怒鳴るようにして、こう宣言した。

「ただのじゃありません！ 緊縛系の女教師モノです！」

「……おお！ お前SMとか好きなのか？」

「ちょっとは興味ありますよ！ あの縄が食い込んだ時の表情がな
んとも言えないんですよ！」

もうヤケクソだと言わんばかりに怒鳴る時雨さん。完璧に我を忘れてしまっている。

流石の蒼二さん達もいつもと違う時雨さんの様子に声を出せない
ようだ。

俺だつて驚いている。”あの八神時雨”がアダルトビデオについ
て語っているのだ。

多分、こんな事は一生無いだろう。これを聞いただけで、わざわざ
此処まで来た甲斐というものを感じた。

「いやー時雨。すまなかった。うん、お前は俺達と同じ健全な男だ」

陸人さんはそういうと、頭を下げた。うわ、珍しい。

「陸人さん……」

時雨さんも何か感極まったような表情で陸人さんを見つめた。それ
と同時に、莉王さんの拍手。

それに釣られるようにして、俺や神璽さんや蒼二さんや狂さんも
二人に向かって拍手をした。

両手を挙げて応える陸人さん。そして、俺は一つの違和感に気づ
いた。

陸人さんの手には、八神の家の中にある内線の子機が握られてい

る。……嫌な予感がした

「とゆーわけで、八神時雨君の性癖のページの報告でした」

陸人さんが手に持っていた子機に向かって、笑いながら言つと、
「時雨ちゃんえっち」と遥緋さんの涙交じりであろう、笑い声が静かに部屋に響いた。

そう、今日は三月十四日。すぐに渡す為にも女性陣には、他の部屋に待機してもらっている。

「……あ。ま、まさか……………」

時雨さんが口をパクパクと何度か開く。「時雨、男は皆変態って本に書いてあった」

「まさか縛るのが好きとはねえ……………」「ぶぷつ。あ、お父さんがごめんなさい」「八神の頭首がこんな変態なんて世も末ね」

「すまない……………」ずっと君の異常な性癖に気づいてあげられなかった」と立て続けに女性陣からの声が部屋に響く。

時雨さんの目にうつすらと涙のようなものが見えた気がした。そして、次の瞬間。

「うああああああああああああああああああああ」

奇声をあげて厨房から飛び出していく時雨さん。それを大爆笑で見送る陸人さん。

鬼だ。悪魔だ。この人だけは絶対に敵に回さないようにしよう、そう心に誓つ。

しばらく、気まずい沈黙が流れた。無理も無い。ここに居る人の大半はさつき陸人さんの悪口を言いまくった。

蒼二さんと狂さんと神璽さんは「自分がもしもやられていたら…

……」とも思っているのだろう。

青い顔で陸人さんの様子を伺っている。

「さて、皆。チョコレート作りを始めようか」

「は、はい！」と全員の声が揃い、陸人さんに向かって何故か敬礼をした。そして始まるチョコレート作り、

俺はこっそりと練習していたので、皆さんが本を見たりしている中、頭に叩き込んだレシピを思い出しながらやっている。

調子が良いのが陸人さんと狂さんと莉王さん。イライラしているのが、蒼二さんと神璽さん。

「チツ……中々碎けねエ」

普通、チョコはお湯で温めながら溶かすものだ。蒼二さんはそれを知らないらしく、棒で殴って割っていた。

その地味な作業に段々嫌気がさしてきたのか、いきなり式神を顕現すると修羅雪の刃で碎き始めた。

……しばらく待ってみたが。誰もツツコまない。

「チツ……蒼二の奴。上手い事考えやがって」

………神璽さん。貴方って人は……。俺がそう思っていると神璽さんは手に意識を集中。

チョコの入ったボウルを抱きしめるようにして抱えると、ドロリと”容器が”溶けた。

「やべえ……ボウルまで溶かしちゃった！」

神璽さんは特殊な人だ。結晶を持っている為に、そこいらの混血

よりも凄い力を持っている。

きつと、反意思を集めて膨大な熱を発生させたんだろう。問題は
おつむが力についていけなかった事だろうか。

俺は年上二人を冷めた目つきで見ながら自分の作業を進める。こ
の一ヶ月というもの。

竜胆と梨香ちゃんに美味しいチョコを食べさせてあげたい一心で、
こつそりとレシピを調べたり、試作品を作ってきた。

全ては今日の為。先輩方には悪いが、そろそろツツコミはやめて
作業に集中させてもらいます。そう考えていると

「うつわ、陸人。お前こんな梨香が食って喜ぶと思ってんのか？」

狂さんが陸人さんのチョコを舐めたようで、顔を顰めながらそう
言った。

「ああ？　おいコラ。俺の作ったチョコに文句でもあんのかよ？」

「大有りだ。酒が強すぎる。確実にテメーの趣味の洋酒ブチこんだ
る？」

「う……！　良いんだよ。これで、詩歌は喜んでくれたんだもん！」

「詩歌さん。確か酒弱かったよな？　まさかテメエ……」

狂さんがそう言ってジロリと睨むと、陸人さんから余裕が無くな
った。……まさかこの人、

と俺が見たように全員がジトつとした目つきで陸人さんの事を見
ている。

「いや、違つぞ。ここだけの話、酔っ払った詩歌はそりやもう積極

的な女の子なんだ。

もうね。陸人好き好き大好きーみたいな。アニメのような可愛い詩歌になるんだ。

……うう。偶には良いだろ。あの頃の詩歌はめっちゃ消極的な子だったんだから！」

言い訳が本音になってますよ。とは誰もツッコまない。流石の狂さんも追求しすぎたと

思ったのかそれ以上は何も言わなかった。何か見てて可哀想になってきた。

俺の場合は竜胆は色々可愛い子なんで、陸人さんの気持ちはよくわからないし、

消極的な竜胆………と考えると、それはそれで可愛い気もする。

「……ま、こんな馬鹿は放っておいて俺は俺の作業すっかな」

そう吐き捨てると、狂さんは自分のチョコレート作成に戻った。

といっても、作りながら

俺や蒼二さんや神璽さんの方を偶にチラ見を見ると、何かを言うてくる。

俺はアドバイスをもらえて嬉しかったのだが、蒼二さんと神璽さんは駄目だしをくらいまくっていた。

莉王さんは淡々とチョコを作っているために、声すら届かない。

だが、やはり、人のに意見をするだけあって、

狂さんのチョコはとても美味しそうだった。この人も結構影で努力したのだろう。

手つきに淀みが無いし、何より香りが素晴らしい。きっと、良いブランドーを使っているのだろう。

「さーってと。時雨……は居ないのか。蒼二、お前包装紙とかある

場所知らねえ？」

「あー……知らん。八神の婦長さんに聞けばわかると思うぜ」

「お、そうか」

狂さんは丁寧チョコを白い箱の中へと納めると、扉を開けて厨房から出て行った。

……しばらく黙って全員が作業に集中した。そして、俺がほぼ全工程を終えて、一息つくと、

蒼二さんと神璽さんと陸人さんが狂さんのチョコをまじまじと見ていた。

「やろお……何時の間にかこんな美味そうなモン作りやがって……」

「シスコンパワーは恐ろしいな……だが、今回ばかりはム力つく」

「狂兄ちゃん。完璧に俺らの事馬鹿にしてたよな……」

三人の背後にドス黒いオーラのようなモノが見える。こ、これが悪意 反意思って奴なのか。

すると、まず陸人さんがまだ中途半端に固まっているチョコの角度を触って変えた。

狂さんのチョコは二層になっている棒のような細長いチョコだ。

次に神璽さんが触り、蒼二さんが微妙に修羅雪の冷氣で硬さを調節していく。

知らないぞ……と俺が関わり合いになるのを恐れていると、突然三人はゲラゲラと笑い出した。

「うわ……」

狂さんのチョコレートは二つ。一つはちょっと先っぽが太くなっている。

まるで、股間のように。そしてまた随分と造詣が細かい。これはマズイだろう……。

そしてもう一つは、蛇のようにとぐろを巻かされている。陸人さんの無駄な才能と、

蒼二さんの修羅雪の力が合わさって出来た最低の一品だ。

「こ、これ流石にマズくないっすか？」

「んー？ 郁人、お前はこれが見えるんだー？」

「いや、これってどう見てもアレでしょ……」

「どーみても蛇だよなあ？ あ？ 郁人。まさかお前何か変なモン想像してんじゃねーのか？」

「蒼二。言つてやるなよ。この年頃の子はシモネタしか考えられないのさ。うん」

もう駄目だ。完全に悪ふざけモードに入っている。陸人さん達は笑いを堪えながら、

包みを元に戻すと、各々の場所へと戻り、何事も無かったかのようには振舞い始める。

そして、狂さんが帰ってきた。鼻歌交じりにちゃっちゃんと包装紙で箱を包み、最後に色違いのリボンを巻くと、

「んじゃ、俺はお先に渡してくるぜ。テメーらも精々頑張るんだな」

「お、おう。頑張れよ……ぶふっ」

「……いつてこい。……ぷっ」

「~~~~っ！」

三人は笑いを堪えながら狂さんを見送った後、ドアの影から狂さんの成り行きを見守る。

女性陣が待機しているのはここから見える離れのような場所。

俺も殆ど作業が終わったので、どうなるのか見てみたい。非常に不謹慎ではあるがね。

「うむ。素晴らしい出来だ」

俺が陸人さん達の方へと歩いていこうとすると、ずっと黙っていた莉王さんが顔をあげた。

莉王さんの手元には精巧なチョコレートで作った細工物が置いてある。

絵本に出てきそうな城だ。一つ一つがとても丁寧に作られていて、芸術品にも見える。

「へえ、凄いですね」

「うむ。これで遙緋も少しは俺様の事をまともな人間だと思っただろう」

……果たして、それがまともだと思われる要素になるのかどうかはわかりません。

「それで、師匠達は何をしておられるのだ？」

「狂さんのチヨコの成り行きを見守ってるらしいですよ」

「ほお……流石師匠、素晴らしい心がけだ。どれ、俺様達も行くでしょうっ」

莉王さんと一緒に陸人さんの向かい側のドアに体を貼り付けると、離れの様子を伺う。

丁度十秒ぐらい前に入って行ったそうなの。さて、どうなるやら……。

そして 二十秒くらい経過した頃だろうか。物凄い爆音が鳴り響き、離れの障子から真っ黒な炎が噴出した。

その爆発に巻き込まれていたのは紛れもなく狂さんだった。きりもみしながら池の中へ墜落すると、水しぶきを上げたまま上がってこない。

離れから出てきた罪歌さんは、顔を真っ赤にして狂さんに何かを言った後、その後ろを通過していった奏さんを追いかけていつてしまった。

「ギャハハハハハハ。見た？ 今の見た？ めっちゃ吹っ飛んでやがんのー！」

「ぶはっ。狂の奴しばらく立ち直れないだろうぜ」

「狂兄ちゃんざまあ！」

「はっは。中々面白い姉弟だな」

……もうこの人達にはついていけない。莉王さんは高笑いをしながら、チヨコを持って厨房を出てっちゃうし。

狂さんが未だに上がってこない池を何事も無かったかのように通過し、離れへと入る。

あの神経の図太さは偶に羨ましく思うよ。ホント。そして俺がしばらく待っていると。

「ふええええ~~~~っ！ 苦いよ~~~~っ！」

遥緋さんが緋眼を発動させたのだろう、物凄い速さで離れから飛び出していった。

「は、遥緋いいイツ！」

それを腰を落として手を伸ばしながら見送る莉王さん。何か、メロドラマみたいだ。

そういえば遥緋さんは物凄い甘党だったな。前に梨香ちゃんから相談された事があったっけ。

陸人さん達はもう大爆笑。蒼二さんも何時ものクールな態度は何処へ行ったのか、腹を抱えて笑っている。

肩を落としてとぼとぼ歩きながら莉王さんが帰ってきた。陸人さん達は莉王さんの肩を叩いて未だに笑い続けている。

そのまま莉王さんは厨房の隅まで歩いて行くと、膝を抱えて座り込んでしまった。

「俺はクズだ。俺は駄目人間だ。俺はウンコ以下だ……………」

莉王さんはそうブツブツ呟いている。うん、そろそろヤバイ。何か色々な人が壊れている。

そろそろ一旦空気を締め直さなければならぬ。そう判断した俺が、陸人さんに声をかけようとする、

ざっぱーん。と物凄い勢いで池の水が上昇した。

「デメエらあアアッ！　よくもくだらねー細工なんぞしてくれやがったなあ！」

狂さんが式神、極点神舞を発動させ、そう怒鳴った。うわあ……マジで怖い。

流石あの死罪六神の第二位と言うべきか。式神の気配の凶悪さが並みじゃない。

だが、この人達には大した効果は無いようだ。平然と笑みを崩さずに狂さんを見ている。

「狂。今回ばかりは、君に力を貸そうと思う」

ガチャリ。そんな音が廊下の隅から聞こえた。音がした方向を向くと、鎧武者　いや、鎧を着込んだ時雨さんが居た。

戦国武将のような格好をしている時雨さんの目は緋色に染まり、背中や腰には大量の日本刀。

「陸人さん……いや、馬鹿ニワトリ。今回ばかりは、僕も本気で怒りましたから」

馬鹿ニワトリ。と言われて陸人さんのこめかみに青筋が浮かんだ。顔がピクピクと痙攣もしている。

………ていうか、今の時雨さんの格好で馬鹿って言われたら相当ショックだわ。

「……おい、クソガキ。デメー今なんつった？」

「頭の軽い馬鹿ニワトリって言ったんだよ。養鶏場に送り込んでやつから覚悟しやがれえ！」

「ぶつ殺す！」

陸人さんが爆轟を顕現させ、時雨さんに襲い掛かると同時に、狂さんの風玉が俺達に向かって大量に降り注ぐ。

全員横っ飛びで避けたが、狂さんはゲラゲラ狂ったように笑いながら更に威力の高い風玉を繰り出した。

「貴様等……俺様がこんなにも心を痛めているというのに、騒々しいんだよオオ！」

隅で蹲っていた莉王さんもついに爆発し、剣王を振って辺り一体を力任せになぎ払う。

食器や鍋や溶けかけのチョコが大量に神璽さんと蒼二さんに降り注いだ。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。もう洒落にならない。

「あー……このシャツ。一万三千円もしたのに………」

「やってくれるじゃねーか。コラ」

神璽さんの体に黒いコートと仮面が纏わり付き、手には拳銃が握られた。

蒼二さんは蒼二さんで黒の禍々しいチェンソーを二本ぶら下げて、打ち付けている。

そして

「もうめんどくせえから全員かかってこいやあ！ クソつたれのガキ共オ！」

陸人さんの発した一言により、その場全員が全力で式神の力を放出した。

後日談になるが、あの戦いは本当に酷かった。俺はチョコを守るのに必死で、

フラガラッハを顕現させてしまい、それを挑発と受け取った皆さんに狙われまくった。

本当に、酷い戦いだった。結局女性陣の声も最終的には届かなくなってしまう、三時間たつぷりと式神や体をぶつけ合うと、

最後は何事かとかけつけてきた正宗さんの恫喝によって、何とか場は収まった。

八神の屋敷の厨房部分はほぼ全壊。これはあの場に居た全員に均等に修理代の請求が来た。

「はぁ……」

そんなわけで、俺達は今同じ病室でそれぞれのベッドでぐったり

としている。

遥緋さんに治して貰えばすぐなのだが、今回の事には流石の遥緋さんも呆れてしまったらしい。

自力で治せと蒼二さんをはじめ、俺達全員に冷たく言い放つと病室に来る事は無くなった。

これには莉王さんが相当堪えたようで、一時期魂が抜けたかのようになり、

最近では何か妙に怒りっぽくなってしまっている。特にカップルに対する嫉妬が酷い。

「時雨。お前の大好きな桃を持ってきたぞ」

「ああ、ありがとう。それと……ホワイトデーはごめんよ」

「気にするな。時雨の傷が無事に治ってくればそれでいい。一番大事なのは時雨だからね」

時雨さんと陸人さんは何時の間にか仲直りしていた。良くも悪くも、お互い好きあっているのだろう。

誤解の無いように言っておくが、上の会話は現在病室で行われている時雨さんと律さんの会話だ。決して陸人さんと時雨さんの会話ではない。

そして、律さんが包丁と手を洗ってくると言って、病室を出て行くと、俺以外の皆さんからあらゆる病室の凶器が時雨さんに投げつけられた。

「あ、危ないじゃないですか！」

「うるせー！ お前だけ良い思いしやがって。俺なんか詩歌に一生帰ってこなくていいよって言われたんだぞ！」

「俺様なんか遥緋にメールを送ってもあつそしか返事が無いのだぞ！」

「俺なんか本当なら今日、命と温泉行く予定だったんだからな！」

「アンタらしいじゃん。俺なんか、由加が一回も見舞いに来てくれないんだぜ」

「姉ちゃんに変態のレッテルを貼られ、奏さんに変態プレイは無理ですって言われた俺はどうしろってんだよ……」

皆さん、相当ストレスが溜まってるようです。この物凄く不毛で醜い言い争いは入院したその日から続いている。

でも、こういう生活も結構楽しい。まず、話し相手には困らないし、晩御飯争奪の看護婦さんの下着の色当てゲームは中々燃える。

そんな事を思っていると、突然扉が開き、竜胆がバスケットを持って入ってきた。

「皆さんこんちわー。通い妻でーす」

ふざけたように言う竜胆。だが、今回に限り洒落にならない。莉王さんは突然フォークを磨きだし、

陸人さんは何故か持っている灰皿を手を取った。時雨さんは壁に刺さった包丁を引き抜き、

蒼二さんと神璽さんはゴミ箱を何気なく抱え始めた。

「いーくと。今日はねー。サンドイッチ作ってきたんだよー。ホワイトデーのおかえしってやつ？」

竜胆が居なくなった瞬間、俺の命は消えるだろう。そんな事を思いながら、俺は大好きなサンドイッチを涙目で口にした。

Days 21：大晦日特別短編（前書き）

大晦日ですね。

今年はフツーに暇だったので、つい書いてしまった。

一日には新年短編も投稿する予定です。

というわけで、それぞれの大晦日の過ごし方を書いてみました。

一応、時間軸上は神々の黄昏から二年後ぐらいの正月ですね。

Days 21：大晦日特別短編

12月31日。大晦日。その日、天美運命は昼間からこたつに座り、蜜柑を食べながら年末の特番を見ていた。

家には今、誰も居ない。年末の大掃除や買出しも昨日までに全て終わらせてあるのだ。

空我と大和は仕事場の方で何かトラブルがあったらしく、朝からずっと家に居ない。

命は学校の友達と夕方まで忘年会兼カラオケ大会に行っている。

「……………暇」

本日38個目の蜜柑を口に入れて租借した後、運命は一人そう呟いた。

今までの年末はどうしていたか？と思い出そうとするも、ずっと気にせず寝てた気がする。

今までは十数年一人でも平気だったのに、何故今はこんなに人恋しいのだろう。

弱くなったのだろうか。いや、逆に強くなっている。昔の自分と今の自分は全然違う。

冷静に分析してみると、益々分からなくなった。

「はぁ……………何か、面白い事ないかなー？」

周囲を見渡してみても、特に面白そうな物は転がっていない。

すると、廊下の方から何かがトタトタと歩く音が聞こえた。見ると、少し前に大和が貰ってきた犬が歩いてきた。

キユウと名づけられたその犬はあまり運命に寄り付こうとしない。大体命か大和にいつもついており、自分の事を遠くから良

く見ているのだけは知っていた。

「…………お前も、食うか？」

傍によつてきたキュウに、蜜柑ではなく食べかけのジャーキーを差し出す。

キュウはやや迷ったそぶりを見せた後、運命の手からジャーキーを口にとると、目を細めた。

優しくゆっくりと頭を撫でてやると、何故かくすぐったそうに頭を振り払う。

何か照れているような感じた。一瞬、訝しげな顔をした運命だが、すぐに気を取り直し、

「暇だね」

と声をかけた。すると、キュウは運命を見上げ、

「わっふ」

とこれまた何か恥ずかしそうに返事のような動作をした。すると、そんなキュウを運命は優しく抱き上げ、

「キュウ。誰も居ない家って寂しいね。運命は、今まで家族なんて持った事が無かった。

父上の事も母上の事も殆ど覚えていない。だから、家族の温もりとか全然知らなかった」

「…………わふ」

「うん。でも、今は違ふの。空我や大和と出会って、運命は少し変

わった。

命と出会って凄く変わった。……認めたくないけど、蒼二達とも出会ってまた変わった。

そうしてこの家を手に入れた。キュウとも出会えた。これが、家族ってやつなんだね」

運命はキュウを持ち上げて、笑いながら言った。伝わったとは思えないが、何か無性に喋りかけた気分だった。

一方のキュウは犬とは思えないような瞳でしばらく運命の方を見た後、やがて身を揺らして運命の手から逃れると、

テーブルの上に飛び乗り、正面から運命の事をジッと見つめた。

机の上に置いた運命の携帯が、振動したが二人はそれに気にしない。しばらく見つめ合った後、キュウ　九尾の狐は体内で反意思を練り、体の構成を改変。

身を少し膨らませ、一本だった尻尾が次第に増えて、美しい九本の尾へと変わった。

「……………ちちうえ」

懐かしい気配だった。ずっと昔、少しだけ感じた事のある大きくて逞しい気配。

自然と涙が零れた。ずっと会いたかった。この世にたった一人の自分の産みの親。

運命と会話する事なく人間に滅ぼされてしまったと聞いていた父に初めて会えた。

「俺あ……………お前になんて弁解したらいいのかわからねえけど……………」

「父上え……………生きてたんだね。ずっと、ずっと運命の事見守ってくれてたんだね」

「……すまねえ。だが、お前の事はいつも気にかけていた。最悪、神璽と由加を乗っ取って

でもお前の所に何時かは行くつもりだった。だから、お前があいづらと会った時から、

俺は……お前の事を見守っていた。愛していた。流石に青鬼の小僧の時は本気であせったけどな」

「あの時……父上は居てくれたんだ。うん、運命にはその気持ちだけで十分。

今、こうやって会えてだけど死ぬほど嬉しい。父上……父上え！」

運命は九尾に顔を埋める様にして抱きついた。九尾もそれを拒まない。親として娘を支えてやりたい一心からの行動だ。

そして 数百年ぶりに、バラバラに離れていた親子が、ついに出会えた。

「あれれ？ 運命姉ちゃん電話に出ないなあ」

現在大掃除の真っ只中ではあるが、少し用事があった為に運命に電話をかけた遥緋。

仕方が無いので携帯を閉じて、再び部屋の大掃除を始めた。遥緋の部屋はとても汚い。

蒼二の部屋が綺麗に整頓されているのに対して、遥緋の部屋は服以外殆ど投げ出されている。

それを十分ほどまとめると出てくる出てくる。過去のどうでもいいプリントの山が。

慎重に重ねて行ってみると、自分の身長と同じくらいの高さになってしまった。

流石に溜めすぎたか……と後悔し、これからこれを纏めるのがとても億劫な気分になる。

「おお。良い事思いついた！」

プリントの山を半分にわけ、そしてさっき空になったばかりのゴミ箱を近くにもってくる。

次に、そのプリントをゴミ箱に積めて行き、さっきと同じように身長と同じくらいの山を作った。

「よっし、これでは輪廻転生で……」

と手を離して空間から意識だけで構成を読み込もうとすると、支えを失った山が崩れた。

このままでも粒子状に分解できるが、それでは折角綺麗にした床が汚れてしまう。

また山を作り直すと、ゆっくりと手を離す。が、まだ体勢がおぼつかない。

「はあっ！」

手に力を込めて、止まれ。止まれ。と念をプリント込める。する

と、プリントがやや安定したかのように見えた。

後は……分解するだけ。と思っていると再び山が崩れてしまう。だが、諦めの悪い遥緋は再び山を作り直し、

「ほぁー！」

と再び念を込めてゆっくりと山から手を離すと、今度はグラついていない。

これをチャンスだ。とばかりに輪廻転生の分解を発動。一瞬にして粒子状になったプリントがゴミ箱の中に入っていく。

と予想していたのだが、土台の方から粒子化していった為、結局粒子は周囲に散らばってしまった。

「やー！ ちょっと待つてよー！」

慌てて空中で粒子を掬おうとしていると、ドアの方から視線を感じた。

遥緋がその方向を向くと、そこには可哀想な子を見るような目をした蒼二が立っており、

「……これで、吸えばいいと思うぜ」

そう言つて掃除機を差し出してきた。

「お、お兄ちゃん……どこから見てたの？」

「はぁっ！ 辺りかな……うん。なんていうか、お前って結構心が幼い子なのな」

そう言つと蒼二は掃除機を置いてそそくさと出て行ってしまった。

後に残ったのは、見られた事による羞恥心と、大量に散らばった粒子。

「もう嫌あゝゝ！」

と遥緋は部屋の真ん中で座り込んでそう叫んだ。

遥緋の部屋を出ると蒼二は1階へと向かった。自分の部屋の掃除はとつくに終わらせてある。

大晦日ぐらいゆっくりとしたい。そんな思いから、蒼二は定期的に部屋の片づけをしていた為である。

これから、餅でも焼いて食べながら年末特集を見るのもいいかもしれない。

微妙に薄ら笑いを浮かべながら、リビングへと向かうと、蒼威や遥も一階の掃除は全て終わらせたようで、

寝ている光希を膝に抱きながら、三人でこたつに座って何か本のようなものを見ていた。

「あら、蒼二。片付けはもう終わったの？」

「ああ、遥緋は当分終わりそうにないけどね。とりあえず、アイツの部屋以外は完璧だよ。

……ん。何を見てるの？」

「アルバムよ。さつき掃除してたら結構出てきてね。面白いから今見てるのよ」

蒼二が視線をやると、そこにはまだ若い。十代後半ぐらいの遥や蒼威や陸人が写っていた。

どこかの学校の前だろうか。女の子みたいな顔をした男の人や、無駄にテンションの高そうな男達と一緒に写っている。

陸人は話に聞いていた通り、真っ赤な髪。森羅は今からは想像できないほどの金髪だった。

「うわぁ……母さんとか随分若い。お、この一番隅っこに居る子は結構可愛いな……」

「それは詩歌だよ」

「ほぉ、やっぱり何となく梨香に似てるなあ。……で、この真ん中で笑っているのが親父か」

蒼威に問いかけるも、光希の頬をぶにぶにとつついて返事をしない。

顔が微妙に赤い所から見ても、多分気づいていて恥ずかしいのだろうと蒼二は思った。

「そっぴや、母さんって何で親父と付き合いはじめたの？ まさか、親父が初恋の人ってオチはないよな。母さん結構モテそうだし」

「初恋の人はねー。その蒼威君に抱きついてる人。蒼二は会った事あったかしら？

誠一おじさんってわかる？ 友一君のお父さんの。その人がお母さんの初恋の人」

「名前だけ……友一は知ってるけどね。へえ、じゃあ何でこの人と付き合わなかったのさ」

「従兄妹だもん。最後まで妹としか見られてなかった。誠兄ちゃん
はほら、後ろで笑ってる

夕先輩って人の事が好きで好きでたまらなくてね。私には勝ち目が
なかったってわけ」

遥は妙に懐かしそうにそう呟いた。楽しかった、人生で一番輝い
ていた高校時代。

色々あったけど、今はこうして三人も子供が生まれて、毎日が幸
せに包まれている。

遥はそれだけは自分でも運が良いと思っていた。

「ふうん……何か腹黒そうな女の人だけだね」

「実際怒らすと相当怖いわよ。蒼威君でも一回しか勝てなかった誠
兄ちゃんが毎回気絶するぐらいの罠を仕掛ける人だもん」

「え、親父……まさか、緋眼使いの癖に一般人に負けたの？」

蒼二がそう問うと、蒼威は肩をガクガクと震わせながら振り向い
た。

「ば、馬鹿野郎。誠一先輩とガチで殴りあった事がねえからんな事
言えるんだ。

実際戦ってみろ。緋眼に追いついてくるわ。殴ったら倍の威力で
殴り返してくるわ。

木を蹴って飛び上がったりとかな。もう、身体能力が人間の幅を

超えてんだよ！」

「そ、そんな奴が居たのか……」

蒼威は高校時代に正宗を倒すほど強かったと聞いている。その蒼威に一度しか勝たせなかった男、海野誠一。

式神使いになっていれば蒼威よりも強くなっていたのかもしれない。

正直、身震いした。自分と蒼威が戦っても勝つのは正直、かなり厳しい。それ以上なんて考えたくも無い。

「ちなみにな。徹宵義兄さんと良子義姉さん何かは、もっと凄いぞ。素手で悪鬼をぶっ飛ばしたり

誠一先輩と徹宵兄さんを張り手一発で気絶させたりな。海野の血統は恐ろしいんだ。

遥ちゃんもさー。たまーに、めっちゃめっちゃ強い力で俺をぶん殴るしね」

「自業自得よ。こんな良い嫁さんが居るのに、他の女に現をぬかすからね」

「そうだぜ。正直、親父には母さんは勿体無い」

「ぐぬぬ……」

形勢が不利だと判断した蒼威は、光希を蒼二に手渡し、逃げるようにして机付近から脱出。

何か食べようと思い、冷蔵庫を物色しようとする。冷蔵庫に張られたメモに目が留まる。

そして、今年の八神の新年会の事とある用件を思い出した。

蒼威はそのまま電話のところまで歩くと、時雨の携帯に電話をかけはじめた。

「ええ、そうです。今年はアレやりますよ。ええ、はい。では、明日また」

蒼威からかかってきた電話を切ると、八神時雨はふう……と一息ついた。

年末までの決算やら報告書を先程やっと仕上げ、父親に提出し、今度は嫁の実家に挨拶に行く。

今年もハードな一年だった。と何となく思いながら助手席に身を預けていると、

「誰だっただんだい？ まさか……浮気相手とかじゃないよな。当日とかなんとか言っていたが」

「ご心配なく。蒼威さんだよ。八神の新年会の行事について確認をとっただけだ。」

それに……まあ、アレだ。今の僕は君以外の女性には全く興味がわからないから……」

「偶には嬉しい事を言ってくれるね。それをもっと皆の前でも言うて欲しいもんだよ」

「君こそ。まさか浮気してるんじゃないかな？」

「そんなわけないだろ。お腹の中に君との子供が居るんだ。馬鹿を言うもんじゃない」

「そうだったね………って、ええっ！？ ええ！？ ぼ、ぼぼぼ僕、初耳なんだけど！」

時雨は飲んでいたコーヒーを危うく噴出しそうになりながら、そう言った。

律は律で頬を少し赤らめながら、相変わらずの速度で運転をしている。正直、今年で一番驚いた事だった。

「だって、言っていないもん。お父様は大変喜んでおいでだったよ」

「と、父さんめ……だから、最近妙に機嫌が良かったのか。というか律、運転して大丈夫なのかい？」

「ぼ、僕が代わるのか？ こうみえても、結構車の運転には自信があるんだ」

「気張るなって。君にはもう少ししたらいっぱい甘えるんだから。体力は温存しとくといい。」

それに………多分、時雨じゃこのじゃじゃ馬を乗りこなせないと思うよ」

そう言うと、律は自分専用のスポーツカーのギアを入れ替え、更にスピードを上げた。

それから一時間ほどすると、今回の目的地である九我山特区へと辿り着いた。

結婚前に数回来た事がある九我山特区だが、何回来てもいい場所だなあ……と思う。

山の上であり、少し下へと下れば中々に大きな都市もある。景色が良く、不便の無いいい特区であった。

「時雨は……令と紫には会ったんだっけか？」

「会ったよ。君の弟と妹分だっけか？ 随分と可愛らしい子達だったね」

「成る程……じゃあ、太郎達にはまだ会ってないわけだ」

「まだ、弟分が何かが居るのかい？」

「ああ。まあ、後で紹介するよ。これから、ちょっと私は寄る所があるから。」

時雨は先に屋敷に入っていてくれ。父も母も居るはずだから、すぐにわかんと思う」

そう言うと律はさっさと車を降りて物々しい建物の中へと入ってしまった。

しばらくぽかんと口を開けていた時雨だが、やがてため息と共に車を降りると、鍵をかけて九我山の屋敷へと歩を進める。

八神と同じような日本家屋だ。大体こういう場所の構造は何処も同じなので、迷っても平気かもしれない。

そんな思いと共に、屋敷の中へと入ると妙にがらんとしている。年末なのに、人の気配を感じない。

仕方ないので「お邪魔します」と言っただけで靴を脱いで家の中へと上がった。返事は返ってこない。

「こんにちはー。どなたかいらっしゃいませんかー？」

すると、

「おーう。こっちだこっちー」

少し離れた部屋から男性の声が聞こえた。随分フレンドリーな声だ。

律の父親はこんな声だったか？と記憶の中を探りながら、その部屋の扉を開けると。

悪鬼が居た。しかも、鬼族のどうみても上位な悪鬼。一瞬、頭の中が真っ白になった。

「……ん？ アンタ、見ねえ顔だな。警備に新しく入った小僧か何か？」

しかも喋った。過去に何百という数の悪鬼を見てきた時雨だが、喋る悪鬼は見た事がない。

上級悪鬼は知能が異状に高い。という話は聞いた事があったが、まさか会話が出来るとは。

「……や、八神時雨です」

「お。アンタが律姉えの旦那さんか。はじめましてだな、俺は火鬼の太郎。」

結婚式にはよお。流石にこんなナリだから行けなかったけど、アンタ達の結婚は喜んで祝福するぜ」

「どうも……あの、きぐるみか何かじゃないですよね？」

「当たり前だ。そう思つのも仕方ねえけどよ。九我山の理念は悪鬼と良き隣人として

付き合うつて事らしいんだ。まあ色々あつて、俺は律姉えに散々ボコられて、

仲間と一緒に九我山の家に連れてこられ、今はこうやつて名前まで貰つてゐるってわけよ」

太郎は快活に笑いながら、机の上においてあつた煙草を一本口にくわえると、

指を一度鳴らただけで火をつけて、ゆっくりと紫煙を吐き出した。ここまでくると、もう人間と殆ど変わらない。

外見は髪の間から角が飛び出していたり、指の先が異状に尖つていたりと変わつてはいるが。

こうして普通に服を着ていれば、それなりの人間に見えない事もない。

この外見は鬼族の上位だからなのだが。流石に蛇とか他の上位悪鬼は人間とは程遠い。

「そうなんですか。何か……凄いですね」

「まあな。つか、ンなとこ突つ立ってないで座ってくれよ。こつちまで緊張しちまう」

しばらく太郎と雑談しながら、部屋で待っていると律の父親と母親がやってきた。

時雨は土下座せんばかりの勢いで頭を下げると、何故か面白そうに笑われ。

それから、律の弟の令と妹分の紫と一緒に二時間ほど遊び、全員で食事を取った。

「んで。時雨にーさんはもう。律ねーさんと毎日やりまくりなんですか？」

酔っ払いまくった紫に、バシバシと背中を叩かれながら時雨は「はあ……」とだけ返した。

父親と母親が居る前でこういう会話は勘弁して貰いたかったが、何故か父親と母親も

乗り気で思春期の令だけが顔を真っ赤にしながら黙々と食事をしていた。

年下にかかわれたのが、ショックだった時雨だったが。しばらくした後の紫のともんでもない

カミングアウトに時雨は本日二回目の度肝を抜かれた。九我山はともでもない家なんだと心から思った。

そして 食事や風呂やお年玉争奪、大富豪大会を終えると全員で新年の挨拶をしてその日は解散となる。

紫や太郎はまだ飲むらしいのだが、時雨と律は早々に引き上げて部屋へと戻った。

「時雨、疲れたかい？」

「まあね。でも こんなに楽しい大晦日は生まれて初めてかもしれない。

去年まではもう、毎日てんやわんやの大忙し。新年会が終わってようやく一息つけてた気がする」

「それは良かった。九我山は君も知っただろう。色々変わった家なんだ。」

それでも、君が嫌わずに楽しんでくれて、私は心から嬉しいよ」

「うん。太郎くんや紫ちゃんには驚いたけど……まあ、見習う所は多かったね。」

とりあえず、明日も早いからもう寝よう。来年もよろしくね、律。愛してる」

「うん。来年もよろしく、時雨。私も愛してる」

律はそういうと、電灯の灯りを消した。

Days22：元旦特別短編（前書き）

あけましておめでとうございます！

早速初詣行ってきた、現在部屋で一杯やってます。
というわけで、

今年もこの作品をよろしく願います。

と言ってもPASTが終わったらもう終わりですけどね。

今後の予定はちと厳しめです。

四月まで多忙になる為、投稿頻度が減るんじゃないかなと思います。

自分の人生でもかなり重要な時期なので察して頂ければ幸いです。

Days 22：元旦特別短編

「師匠、あけましておめでとうございます」

そんな声で、浅葱陸人は目を覚ました。目の前には髪を金色に染めた偉そうな男が一人。

最愛の妻を手探りで探す、そこには誰も居ない。目を擦りながら陸人は、半覚醒の状態で男に問う。

「……詩歌は？」

「奥様なら、既に朝食の支度をしています。梨香ちゃんも既に食卓についてらっしゃるので、

不肖、私が起こしにきました。というわけで、早く起きてください。師匠」

何か違和感を感じる。すると、ボケにボケた陸人の頭がようやく覚醒を始め、

珍しく極めて常識的な言葉を口にした。

「つか、莉王。何でお前が此処に居るんだ？」

莉王に引つ張られるようにして陸人は寝室からリビングへと向かう。

大きな欠伸をしながら二人でリビングへと入ると、既に朝食は出来ており、梨香と詩歌がテレビを見ながら既に食べ始めていた。

「……お、奥様。お連れ致しました」

「あら。ありがとうね莉王君。お客さんにこんな事してもらって申し訳ないわ。」

莉王君も確か朝食まだだったよね？　口にあうかわからないけど、良かったら食べて」

「い、いえ。ありがたく頂きます」

莉王は何故か顔を赤らめて、詩歌の方を見ようとしない。梨香と陸人はそれを訝しげな目で　見つ　つ陸人は「ういーっす」と適当な挨拶をして席につき、梨香は新たに餅を一つ掴んだ。

「んでさ。莉王、何でお前が此処に居るんだ？」

「八神から頼まれましてね。本日行われる新年会に浅葱家をこちらに向かうついでに

迎えに行つてやつて欲しいと。前は大変迷惑をおかけしてしまいましたからね。

このぐらいは師匠を尊敬する人間として、当然の事としてやろうと伺ったわけです」

「ほお、流石四条の人間だな。良い心がけだぞ。わっはっは」

「別にそんな事までしてくださなくなつて良かったのに………そういえば今年の新年会は

十名家の四条派の全ての家の方がくるんだよね」

詩歌は微笑を浮かべながら莉王へと聞くが、またも莉王は顔を赤

らめてそつぽを向いた。

「え、ええ。神々の黄昏事件の少し前に抗争を行いまして。結果、我ら四条は敗北しました。」

これからは十名家の八神派ですね。まあ、二階堂と違って八神は良心的です。

支配ではなく、相互扶助という名目で関係をあくまで非公式に結んでくれました。

だから、今年ぐらいは全ての家で集まり新年の挨拶をしよう。という話になりましたね」

「良い事だと思うわ。仲間は多い方がいいもんね」

「確かに。十名家ってお前を初めとして、変な奴がいっぱい居るしな」

「はっは。確かにそうですね。律や颯太も子供の頃からの付き合いですが、本当に変な子になってしまつて」

陸人は心の中で「お前が一番変なんだよ……」と思つても、口には出さなかった。

真の変人は変人と一生自覚しないもの。これは陸人の人生経験から出した答えだ。

そして、しばらく食器の音だけがリビングに鳴り響く。すると、今度は梨香が話題を振った。

「ねえ、莉王さん」

「む。なんだい？」

「何で、さつきからお母さんの顔見ると顔を赤くするのー？」

ブフツツと莉王はすすっていた味噌汁を危うく外に噴出しそうになった。

梨香のその発言と、莉王のその態度にいち早く危機感を覚えたのは陸人だった。

「て、てめえ、莉王。ま、まさかお前……詩歌の事をお！」

「い、いえ。違いますよ師匠！」

「ムキになって否定する所がかなり怪しい。つか、詩歌も顔赤らめないでよ！」

こいつ、お前より20ぐらい年下だよ？ 俺の方が絶対ダンディズム溢れてるよ！？」

「あらあ……莉王君。おばさん照れちゃうわ。陸人はうつさい」

詩歌にそう言われてしょーんと頂垂れる陸人。梨香はわくわくしたような目で状況を伺っている。

流石に不味い。普段空気の読めない莉王でもこの空気は危険だと思った。

「た、確かに綺麗だとは思いますが。これには海より深い事情があるんですよ！」

「んじゃ、話してみる。その海より深い事情ってやつをよ」

「ついでに、何でお父さんの事を師匠と呼んでるのかも聞きたいなあ」

陸人と梨香に詰め寄られて、莉王は困惑した。それと同時に、似たものの親子だなと思う。

外見は詩歌に似ているが、中身はどちらかというと陸人に近い。そんな感想を抱く。

そして、ふう……とため息をつき。

「わかりました。両方お話しします。ですが、一つだけ約束してください。師匠、絶対に怒らないでくださいね」

「怒らねえよ。いいから早く言ってみろ」

「はい。では 私の家の力。心眼の事は知っていますね。相手の心を読む。嫌な力です。

ですが、私は何故か。普通の心眼よりも強い力が使えます。簡単に言うなら、

相手の心だけでなく、相手の想像してる事も見えるようになっていくのです」

「なるほど……思春期の男の中身なんか読んだら大変だな」

「ええ……。で、私は八神戦争の時に、師匠と戦って敗北しましたよね。

実はあの時もその力を使っていたのですが、師匠は兎に角凄かったです。

普通なら殺し合いをする時は、常に勝利へのビジョンや作戦の成功のビジョンが見えるのです」

「へえ。そこから逆算してけば、完全に相手の動きも明確に読めますね」

「そうなんだ。だが、師匠があの時考えて居たのは。梨香ちゃんの事だった。」

梨香ちゃんの幼稚園の頃からの姿。あの時の戦っていた姿。師匠は梨香ちゃんの身の安全だけをただ考えていました」

莉王がそう言うと、詩歌は感心したように陸人を見て、陸人と梨香はお互い恥ずかしいのか、顔を赤くして顔を伏せた。

「それが尊敬し、師匠と呼ばせていただく理由です」

「お、おい。照れるじゃねーかよ。んで、詩歌を見ると顔を赤らめる理由は何なんだ？」

「本当に言っんですか……？」

「当たり前だ。むしろそっちの方が知りたい！」

「莉王君。私も知りたいな」

詩歌と陸人はそう言うと、お互いを見詰め合って笑った。莉王は最後まで言うべきかどうか

迷ったが、陸人には何か考えがあるのだと勝手に思い込み、やがて言った。

「実は梨香ちゃんのイメージが終わると……その、奥様のビジョンが見えたんです。」

奥様の今の状態や若い頃までの奥様が……」

「まあ」

「は？ 何で、それで赤くなんだよ」

「実は……その奥様の格好が半裸でしたり……なんというか、非常に官能的とでも申しましようか。」

簡単に言えば、奥様のエロい想像のビジョンが大量に私に流れ込んできたんです。

赤子のように甘える奥様。師匠の事をお兄ちゃんと呼ぶ奥様。その他色々の奥様が……」

莉王が言い終わるとリビングが一瞬、凍りついた。陸人はガクガク震えているし、

詩歌は妙に冷たい笑みを浮かべている。梨香は梨香でこの後の予想がついたのか、携帯電話を取り出して弄り始めた。そして

「し、詩歌。ご、ごめん！ ごめんなさあああい！」

「お、奥様！？ 落ち着いてください」

「うるさあああああいつ！ 今日という今日は絶対に許さないから！」

何かが倒れたり投げつけられたりする音がした後、詩歌の怒鳴り声が響き渡った。

新年会の準備に追われている八神家は兎に角騒がしかった。家政婦達はてきぱきと動き

周り、厨房では全ての機能を使って調理の作業を進めている。

そんな中、秋月罪歌はたまに声をかけてくる人達に挨拶を返しつつ、屋敷の中を歩いていた。

すると、携帯にメールが届いた。開いてみると、梨香からで浅葱は少し遅くなるかもしれないとの事。

きつと陸人辺りがまた馬鹿をやらかしたのだらうと予想すると、返事を返して再び歩き始めた。

しばらく歩いていとお目当ての人物を見つけた。そう　八神

新年会の最終チエツクを行っている正宗は何処か忙しそうだったが、それでも罪歌は何か会話したかった。

「ま、正宗」

ややはにかみながら声をかけると、正宗はすぐに振り向き何時もの曖昧な笑顔を浮かべる。

この辺りはやはり時雨の父親だなあ……と思い、何か変な気分になった。

「やあ、罪歌。久しぶりだね。学校はもうそろそろ卒業だね」

「うん。でもまだ就職で迷ってて……」

「成る程。こっちの世界に残るか。あっちの世界に行くかだね」

「……凄い、何でもお見通しなんだ」

「君は僕の大切な”娘”のようなものだ。それぐらい、お見通しさ。実はそうだろうと考えて幾つかね候補を絞っておいた。実はこっちの世界関連の保育所
のようなモノもあるんだ。あくまで、ほぼ非公式のようなものだ
が」

「そうなんだ……」

大切なのは嬉しいけど、娘という言葉にやや消沈してしまう罪歌。いつその事、ずっと秘めてきた思いを伝えるべきかもしれない。だが、この忙しい時に正宗に余計な心労を増やしていいのだろうか。そんな葛藤も生まれた。

すると正宗。何か微妙な空気を悟ったのか、

「む、無理につてわけじゃないよ。それに、結婚するって考え方もある。

君は外見も中身も血統も素晴らしい子だ。お見合いの募集をすれば引く手数多だと思う。

そつだ。なんだったら、今度僕が誰か
」

とまで正宗が言った所で、ついに罪歌の堪忍袋の緒が切れた。半分涙目で正宗を睨みつけ、

「もういいよ！ 正宗の馬鹿！ 鈍感！ だからロリコンって陸人みたいな馬鹿に馬鹿にされるんだ！」

我ながら酷い言い草だと思いつつも、流石にこればかりは我慢できなかつた罪歌。

これだから八神は とか、その他様々な憤りを心中で吐きつつ、

踵を返して歩いていく。

後に残された正宗は、一体自分の何処に落ち度があったのかを真剣に考えてみたが、

やはり何も思いつかない。年頃の女性は難しいなあ……と呑気な事を思いつつ、再び仕事へと戻った。

ここ二時間ほど、牧島竜胆は硬直していた。部屋は暖房が効いて暖かいのだが、妙な冷たさがある。

原因は少し離れた場所で居眠りをこいている秋月罪歌。彼女の周りにはかなりの量の酒瓶。

先程まで、罪歌は散々偶々見つけた竜胆に色々愚痴りながら酒に溺れていた。

冷静な人だと今の今まで思っていたが、結構子供っぽい所もあるんだなあと、認識を改める。

「ふう、やつと寝たかあ……」

ようやく硬直を解いて、体をほぐすと途端に暇になってしまった。郁人は、蒼二と遥緋と一緒に訓練場でフラガラッハの訓練に行っ

てしまっているし、梨香はまだ到着していない。

一緒に訓練について行っても良かったのだが、流石にあの面子との訓練は洒落にならない。

そんなわけで、竜胆は暇を持て余していた。だが、黙って座って

いても何も変わらない。

仕方が無いので、竜胆は罪歌に郁人の置いて行った上着をかけてやると、部屋から出て外へと向かう。

「わぁ……」

人が多かった。今年は十名家の四条派の直系がほぼ全員来るらしく、例年よりもかなり人が多いらしい。

遠くのステージでは蒼威が腕相撲大会を行っており、上のパネルの表示を見ると、既に二十人抜きをしているようだ。

華奢に見えて、結構力があるんだなぁ……なんて思っていると、

「お、マッキーだ」

急に後ろから声がかかった。振り向くと、そこには年始だというのに革ジャンを着込んだ命がへらへら笑いながら立っていた。

「あ、命さん。こんちわー。あけおめっす」

「あけおめー。蒼ちゃんといもーと見なかった？」

「郁人と特訓してますよお。ほら、あの山の中腹辺りで何か木が揺れてるじゃないですか」

「あー……アレか。全く、よくやるよね」

「本当ですよお」

「とゆーわけで、マッキー。私とお姉ちゃんと一緒に、カラオケ大会に出よう」

命は相変わらずの表情で竜胆の服の袖を掴んだ。 強い。 かなりの力が込められている。

命も命で凶悪な式神を使える。 姉の運命何かは命より更に強い力を持っている。

このまま抗えば、少しマズい事になるかもしれない。 と考えた時には、もう既に遅し。

『会場に転移』

そう命が呟いた瞬間。 抗う暇も無く、 竜胆と命の姿は廊下から消えた。

その頃、 有馬空我と石動大和は途方にくれていた。 八神家新年会に行く筈だったのに、

何故自分達はこんな場所でこんな事をしているのだろうと思うも、 現実是不変。

命や運命は今頃八神家について美味しいものを沢山食べているのだろう。

だが自分達は とまで考え、 周囲の状況を見て笑った。

「うつわ。君達見るのも久しぶりだよ」

「しかも元旦にくるたあ……相変わらず、空気読めねえみてーだよ」

大和と空我を囲んでいるのは白い儀礼服のようなものを着た。十数人の外国人。

俗に【教会】と呼ばれる組織の一員で。海外ではもっとも有名な悪鬼討伐集団の一つ。

教会は悪鬼汚らしい生き物として認識し、その中間である鬼神は世界への冒流として扱っている。

数年前までは積極的に海外で活動していた空我と大和は、彼らにとつては仇敵であり、また賞金首でもある。

すると、一人豪華な儀礼服を着ていた男が、紙束を大和に向かって投げつけた。

「わお。僕ら、また賞金が上がったよ。運命ちゃんが150万ドル。空我が、80万ドル。

……え。ゆかりんが75万ドルのみどりんが115万ドルで……何で僕が60万ドル!？」

「おお、下の方見てみい。お前の所にフルだとか何とか書いてあるぜ」

「フルって何の意味だっけ？」

「愚かとか、馬鹿とか。そんな感じだったと思うぜい」

「ぬあああ！　こんなランキングなんてえええ！」

大和は一瞬で狂化すると、儀礼服達に襲い掛かり始めた。見た感じ、大した腕では無さそうだ。

本当の執行者なら大和達に紙すら見せずにひたすら殺そうと襲い掛かってくるだろう。

もうその時点で勝敗は見えていたのかもしれない。空我は翼をはためかせ、空へと飛翔。

（そうすると……あの二人はまだ生きてるっつゝ事だな）

雷神の鬼神　鳴神紫。風神の鬼神　風早碧。十年程前に、運命と大喧嘩して九尾の狐から出て行ってしまった二人の鬼神。

未だに賞金首として登録されているという事は、一応の目撃証言はあるという事。

碧なんかは賞金額が倍以上に跳ね上がっている事から、派手にやっっているのだろうと思う。

もしかしたら意外と近くに居たりするのもかも知れない。空我は、そんな夢物語を想像し、微笑を作ると、

「行っつっつくぜえい！」

自身式神・小鳥を顕現させて儀礼服達に思い切り投げつけた。

そろそろ日付が変わる時間になった頃。八神家での新年会の熱気

は相変わらず冷めていない。

蒼威や陸人や森羅は、固まって酒を酌み交わしながらチビチビと語り合っていた。

陸人の顔には沢山の引っかき傷や手形が残っていおり、大体何があつたのかは聞かなくても分かる。

「何か最近虐げられるのが気持ちよくなってきた気がするんだ……」

「お前、マゾだったのか……」

「というよりも、調教されたというのが正しいだろう」

そこから少し離れた野外に設置されたテーブルでは、ムスツとした顔の詩歌がジューズを飲みながら、遙に愚痴を漏らしていた。

遙は光希を暖かそうな毛布でくるみ、未だ寝る気配が無い息子をあやししながら、それに応えている。

「何で、あんな大馬鹿者に惚れちゃったんだろ……」

「恋は盲目って言うからねえ。あの高遠君好き好きーな詩歌が懐かしいわ」

「うつ……昔はもうちょい賢かった気がするんだけどなあ」

庭に設置されたステージでは、莉王と颯太と時雨の飲み比べ対決を大勢のギャラリーが見守っている。

「ふっふ。まだ22杯目だ。貴様ら、俺様に負けたらその池を全裸で泳ぐのだぞ」

「……負けない。正義は勝つ」

「ふん。じゃあ、莉王。君が負けたら、遥緋の前で裸踊りでもやってもらおうかな」

ステージの隅の方では完全に酔いつぶれた紫が仰向けになって倒れている。

流石に放って置くとマズいと判断したのか、令が駆け寄って紫を重そうに背負うと、家の中にある休憩スペースの布団へと持っていく。

「よっこいせ」と自分よりまだ身長の高い紫を、布団に寝かすとその重さに引っ張られ、そのまま押し倒すような形になってしまった。

しかも、最悪な事にその衝撃で紫の目が覚めてしまうというおまけつきで。

「……令、アンタ。何しとん？」

「ぼ、僕は善意から紫ちゃんをつて……ああ、あばばばばっ！」

「こんの！ エロガキがあああっ！ 変な知識ばかりつけおってえ！」

凄まじい電流が令の体を襲い。冤罪だ。誤解なんだ。と心の中で呟き、令の意識は闇に消えた。

その隣の部屋では、暗闇の中。鍋がぐつぐつと煮える音だけが響いていた。

部屋の中に居るのは、蒼二、遥緋、神璽、由加、命、運命、郁人の七人。

誰もが無言で、茶碗と箸を持ちながら鍋の具合を待っている。すると、運命が鍋の蓋を開け、

「うん。そろそろ平気。じゃあ、まずは蒼二から」

「お、俺からだよ」

現在行われているのは闇鍋。しかも食に関しては最悪なメンツと言える。

お玉で一掬いし、ドロリとした嫌な感触のものを茶碗に入れると、蒼二は意を決して口に入れた。

「……美味い。これは、餅か！」

「あ、それ俺が入れた奴ですね」

「なーいす！ 郁人なーいす！」

相当嬉しかったのか、蒼二は気持ち悪いぐらいはしゃいだ。そして、次に郁人がお玉で掬い、茶碗の中の物を口に入れると、

「……………うげえ。ぶよぶよして気持ち悪い。おえ」

「ああ、多分それ運命が入れた蛙だと思う。さっき、近くの田んぼで見つけたの。昔食べたけど、美味しかったよ」

全員に激震が走った。次の番の命が涙目で全員を見るが、誰も目をあわせようとしない。

そして闇鍋はどんどんと続いていく。

宴もそろそろ終わりが近づいてきた。今は全員が大きな広場に集まっており、八神の直系である正宗と時雨が中心に立っている。先程までの、「ロリコン引っ込めー」とか「消えうせるニワトリ」とかいう某二名による罵詈雑言の合戦はようやくの終局を見せ、今は厳かな雰囲気の中、全員が壇上に上がった時雨を見つめていた。

「はい。というわけで、今年の八神家新年会も終わりが近づいてきました。神々の黄昏事件から二年が経ち、こうしていつもの面子に加え、今年は他の十名家とも合同で新年会を開催出来た事を嬉しく思います」

蒼二達のすぐ傍で時雨の挨拶を聞いていた律はうつとりとしていて、もはや意識が他の場所へと移っていた。

「人は一人では生きていきません。誰かに支えられて、誰かを支えて、生きていきます。」

それは何処の世界でも同じです。こっちの世界だろうが、一般の世界だろうが変わりません。

願わくば、このような何処の世界でもありえる平穏が続くように祈りつつ、今年の新年会の終了を宣言させていただきます」

時雨の言葉が終わると、花火が上がった。それと同時に拍手の嵐。そして、それぞれの一族が挨拶をしつつ帰路へとついていく。この時ばかりは皆笑っていた。誰もが楽しそうに今を生きている。

それは人として当たり前の事。

こうして、異能の力を持つ式神使い達の元旦の夜は更けて行つた。

Days 23：七海奏（前書き）

三ヶ月ぶりのdaysですね。

奏はこの時、秋月姓になっているのですが。

まあ、daysは結構時間軸に差があるので。

一応、タイトルだけは初期登場時の名前にしようかと。

次回は紡かなあ……

数話PASTが進んだら投稿しようと思ってます。

Days 23：七海奏

私の人生は、中々に上手く行っていたんだと思います。

子供の頃にはお姉さまの悲しい事件がありましたけど、高校生ぐらいでしょうか。あの頃から大きく

私の人生は変わったのではないかと思います。あの、八神主催のお見合いの日。

狂さんと初めて出会った日。あの日からですね。私が楽しそうに、心から笑えるようになったのは。

私と狂さんは数年前に結婚し、今では子供が一人居ます。善という男の子です。毎日成長していくわが子の

顔を見ているだけで、一日の疲れなんて吹っ飛んでしまいます。子供って本当に安らぎますよね。

最近では、言葉を覚えてきて少し生意気になっているのですが、こういうのは嬉しいです。親馬鹿ですかね？

ですが……不満が無いというわけではありません。これは……結婚した女の宿命なのでしょうか。

ここ最近ずっと、狂さんの帰りが遅いんですよ。そりゃ、ユニオンの重役なんですから、忙しいのは当たり前です。

七海の仕事は、かぐちゃんが全部引き継いでくれているので、私は善がもう少し大きくなるまでは

家事に従事し、しばらくしたらユニオンに復帰する事になっています。

神璽先輩がキチンとそのような人材へのユニオン側の対応をしっかりとしてくれているお陰で、現在はこのような生活をおくれています。

話が逸れましたね。狂さんの事です。ええ、忙しいのはわかるんですよ。ですけどね……

もう少し、私へのサービスとでもいうのでしょうか。コミュニケーションをとって貰いたいなーなんて。

わかってます。我俣だというのはわかってるんです。でもね。お風呂入ってご飯食べたらそのまま

食卓で寝る事ないじゃないですか。知ってます？ 私が念動で毎日ベッドまで運んでるんですよ。

それで朝起きたら私に「おはよう」といい、お風呂に籠って二十分ぐらいしたらキッチリとした格好で出てきます。

ええ、狂さん。お風呂場にスーツを置いておくんですよ。勿論、頼まれて私が置いてるんですけどね。

新婚当初からそうなので、私が折角練習したネクタイ結びの技術も未だに日の光を浴びてません。

そして、狂さんは朝ごはんを食べません。煙草を一本吸ったらお弁当を持って「いつてきます」といい、出ていつちやいます。

いいんです。いいんです。煙草ぐらい吸ったって。善が居る前では絶対に吸いませんし。私の傍で吸う時も絶対に許可をとり、窓の傍か、換気扇の下で吸うんですよ。私が言いたいのはそうじゃなくてですね。私の作った朝ごはんを偶には食べてはどうですかと。

我俣ですね。仕事に支障が出ちゃうから食べないんですよ。いいんです。お弁当は全部食べてくれますし。

そしてお昼頃ですかね。ユニオンにも当然お昼の休憩があります。その時間を見計らって私は狂さんにメールを出します。

電話はしません。話したい事がいっぱいありますし。迷惑でしょうね。メールの内容は簡単なものです。

今日のお昼はどうでした？ とか晩御飯何か食べたいものありますか？ とかそういう内容。

でもあまり返事は返ってきません。お昼はお昼で部下の相談に乗ったり、陸人さんや時雨さんに何処かへ拉致されてしまうようです

から。

話しながらでもメールを返せると思うのですが、狂さんはそういう事をあまりしません。

話す時はどんなにくだらない話題でも会話に集中する人なんです。そんな所も大好きなんですけどね。

でもですね。その会話すらどんどん減っている私はどうすればいいんでしょうね。馬鹿。

ああ、狂さんの生活を話そうとしていたら愚痴ばかりなっちゃいましたね。はい、すいません。

「……と、こんな感じなのですが、どうでしょうか？」

私は今まで喋ってきた事を眼前の二人 遥緋先輩と命先輩にそう聞いてみました。

遥緋先輩と命先輩は私と同じくもう結婚して子供まで居ます。子供達は現在少し離れたリビングで楽しそうに遊んでいますね。

兄弟がいないウチの善は蒼華ちゃんや莉那ちゃんや煉次君や灼汰君と遊べるのがとても嬉しいらしく、いつも以上にはしゃいでます。そんな善を優しく見守る莉那ちゃん。兎に角暴れまくる蒼華ちゃん。流されるままの煉次君。一人テレビでやってるアニメに夢中な灼汰君。

そんな微笑ましい日常の風景を見てみると、まずは命先輩が口を開きました。

死罪六神の頃から狂さんの事を知っているのです、この中では一番狂さんの事に詳しいのです。

「狂ちゃんもなんとというか……相変わらずというか。うん、奏ちゃんの意見は痛い程わかるよ。」

ウチだつてそうだもん。蒼ちゃんなんか、私や子供達の事ずつと放置でさ。

もう仕事と結婚しやがれバカヤローって感じなのね。休みなんかあってもないようなものだし。

最後に家族全員で晩御飯食べたのって、もう半年以上前な気がするよ」

流石にそれは壮絶な気がします。私だったら悲しみのあまり、変な宗教に入っちゃいそうです。

まあ……ユニオンの長ですからね。たった数年でここまで組織拡大をした蒼二さんは本当に凄いと思います。

ウチの父も、蒼二さんの協力要請を頼まれた時に完全に吞まれましたからね。私なんか、緊張しすぎて次の日熱を出しちゃいましたし。

そんな命さんの壮絶な語りに、私は少し気分が楽になった。上には上が居るって事ですな。

だが、遥緋先輩はなんとも曖昧で幸せそうな笑顔を浮かべながら、「ウチはそうでもないかなあ。共働きだけど、莉王さんも私も戦闘専門だから、二週間に一回ぐらいしかこうやって、本部にこないしね。」

だからどちらか一人は四条に居るから子供達の世話はできるし、何より莉王さんは家族の為なら仕事を物凄い勢いで完璧に終わらせる人だからさ。

すれ違いとかコミュニケーション不足ってのはそんなに感じた事はないね。夜も四人で一緒に寝る日もあるし」

遥緋先輩を羨ましそうな目で見る私と命先輩。だが、それはあの四条莉王さんだからこそ可能な事なのです。

莉王さんの事は子供の頃から知っています。人格以外は歴代の四条でも最高の男と、褒めてるんだかけなしてるんだかわからない風評もよく耳にしました。

「ってかさ。奏ちゃんもいもーとも浮気とかちゃんと気をつけてる？ 蒼ちゃんもまさかしないだろうと

思っていたけどあの人結構流されやすいからね。この前なんかキヤバ嬢の名刺もってたんだよー！」

「あ、それウチもあつた。ユニオンの神璽君主催の接待に参加したら無理やりとか、言い訳してたけどさ。

無理やりなのに、財布の中に名刺入ってたんだよ。そんな無理やり渡してくるような女の子の前で財布なんか取り出すかな？」

「うわ。莉王ちゃんもやつぱり男なんだねー」

「そついえば私……そんなの全く確認した覚えがありません……」

「確認した方がいいよ。それでさー。郁人君締め上げたら、その莉王さんに名刺渡した女凄い巨乳だったらしいのよ。

何それ。私じゃやつぱり不満ってわけ？ っていったらね。普通そこはすぐに否定するじゃん？

間が空いたのよ。それも三秒ぐらい！ あんまりにもム力ついたから、三日ぐらい無視してやったけどさ」

遥緋先輩の胸は確かに出ているとは言い難いです。今みたいな体のラインがでるインナーを着ていれば尚更です。

私と命先輩は大体同じくらいでしょう。そこまで大きくはないが無いというわけではない。女にとってはかなりの問題ですが。

私からしてみれば、かえって遥緋先輩のような細身の体型が羨ましかった。最近、子育てしかしていない所為か、前よりもお腹が少し出てきているんですね。

「まあ、いもーと落ち着いて。どこにだって需要はあるもんだし」

「そうですよ。貧乳はステータスなんですよ」

私達がそうフォローしますが、段々と遥緋先輩の目が据わってきたので、私は話題を変える事にしました。

「そういえば……もう一つ相談したい事があるんです」

と私が先輩達に言った瞬間、莉那ちゃんが涙目でこちらの部屋に飛び込んできました。可愛いですね。

「お、おかあさん。蒼華ちゃんが……蒼華ちゃんが……」

何かを訴えたいのだが、それを言うのが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしたまま喋らない莉那ちゃん。

遥緋先輩がどうしたの？ と心配そうな顔で言っても、顔を伏せて何も言いません。

そして、命先輩の表情がひきつり、立ち上がろうとした時です。

「やっべ。これ、すっごくやばーい。ほら、お前らも見ろって」

およそ女の子とは思えない口調の蒼華ちゃんの声が聞こえました。どうやら、廊下にいるようです。

私は念動で戸を開けて、何をしているかを見ました。すると、ここでは蒼華ちゃんが善と煉次君にご本を読んでいてくれるようです。

ですが……その本が問題でした。そして、それこそが私のこれらの相談内容の物だったのです。

私の次にそれに気づいたのは、命先輩でした。すると、徐々に顔

を赤くしながら命先輩は口を開き、

「蒼華ああッ！」

と怒鳴り声を発しました。

それから三十分、こつてりと蒼華ちゃんは絞られ、死にそうな顔で子供達が遊んでいる部屋へと帰っていきました。

ちなみに、今子供達はおやつを食べています。蒼華ちゃんは罰として、命先輩に半分食べられてしまいました。

……おっと、莉那ちゃんの泣声が聞こえてきますね。多分、蒼華ちゃんももぎ取ろうとしているのでしょう。

再び命先輩のカミナリが落ちました。おっと蒼華ちゃん泣いてます。泣いてます。煉次君がかばってます。美しきかな姉弟愛。

「全く……！ 何であんな子になっちゃったのかしら」

「楽しそうでいいじゃない。アレだけ元気がある子もある意味羨ましいよ」

「そうですね。ウチの善なんか、幼稚園のお泊り会にも緊張して参加できない子だったんですから」

すると命先輩、疲れたように再び座ると、

「蒼華はそんなの全くないけどね。あの年で、もう近所の高学年の

子と混ぜって野球やってるんだから。

本当に、蒼華だけは将来が恐ろしくて堪らない。まだ小学校に上がったばかりなのにさ」

わかります。わかりますよその気持ち。子供って本当に成長が早いですよね。うん。うん。

と、私が一人頷いていると遥緋先輩は例の本をペラペラとめくりながら、信じられないというような顔をしていた。

そうなんです……これが、狂さんの帰りが遅い事に続く私の悩みなんです。

「これ……エロ本だよね？ しかも、漫画ちつくの」

遥緋先輩の言葉に私は立ち上がると、奥の狂さんの部屋に行き、蒼華ちゃん達が開けたであろうクローゼットに

意識を集中。念動の力を使い、そこに収納されていた全てのエロ本を、遥緋先輩達が居る部屋に持っていった。

その数、約数百冊。何時の間にこんなものをこんなに集めたのでしょうか？ 私はずっと家にいますのにね。

「凄いね……これ」

「全部狂ちゃんの部屋にあったの？」

「はい……これは、どうしたらいいのでしょうか？ 狂さんも男子ですからね。こういうのに興味はありだと思います。

無理に規制をするのは出来ればしたくないのですが……この量は流石に……。」

多分、全てが狂さんの所有物なのではないと思います。面倒見の良い人ですから、誰かのを隠してあげてるのかもしれないし」

改めて見返してみると物凄い量です。しかも、ジャンルが様々。年上、年下、人妻、女子高生、中には流石に

警察に捕まってしまっんじゃないかなあ……なんて思ってしまう程のモノがあります。

思い返してみれば、狂さんって結構エッチな方なんですよね。昔のバレンタインとか、お見合いの時とか……

すると、暫くじつと本を読んでいた遥緋先輩が突然顔を上げ、

「私だったら全部捨てるね！」

と言いました。ちなみに、遥緋先輩が読んでいた本は巨乳人妻狩りという本です。ああ、嫉妬ですか。

命先輩は腕を組んで何かジツと考え込んでいますね。何を考えているのでしょうか。

そのまま沈黙が五分ほど続いた頃合いでしょうか、今度は命先輩がいきなり顔を上げ、

「良い事思いついた！ 私の式神にちよつと任せてみなよ」

「はあ……」

「何をするの？」

「このエロ本の山を購入者の下に返すんだよ。私の式神ならきつと出来る」

そういえば最近、忘れがちなのですが、命先輩って物凄い式神を使えるんですね。

蒼二さんがユニオンを動かしているので、夫婦共働きになると、

子育ては出来なくなっちゃいます。

だから、命先輩はユニオン側でも最高峰の式神使いなのに、ユニオンには所属してないんですよ。

そして、命先輩はエロ本の山に軽く触ると、

『購入者の下に戻れ』

と口にした。すると、エロ本の山達が神々しく輝きだしました。シュールすぎです。遥緋先輩はもう笑ってます。

そして ドカンツと轟音を立てて部屋の壁を容赦なく破壊し、エロ本達はユニオンの本部へと飛んでいきました。

「あー……そ、そろそろ晩御飯の支度しなきゃね。う、うん。いもと。後よろしく」

「ちょ！ そんな殺生な！」

「てゆーか壁直してくださいよ。ウチ、最近財政が厳しいんですからあー……」

私が涙目でそう言うと、遥緋先輩が一瞬で輪廻転生の力を使って、壁を元通りに復元してくれました。

流石です！ その間にもう命先輩は台所へと逃げてしまったようです。何て、無責任な。

ですが、遥緋先輩に台所を任せるよりは百倍安心できます。命先輩ってお料理が凄い上手なんですよね。

私と遥緋先輩は一度顔を見合わせると、

「……行きましょか」

「最高に気乗りしないけどね……」

ユニオン本部まで私達が走っていくと、パツと見た感じでは相変わらず荘厳な建物でした。

ですが、窓ガラスが幾つか割れています。何やら、悲鳴のような声も聞こえた気がします。

冷や汗を浮かべながら、本部へ入っていく私達。今日は隊員の方
があまり多くないようで、閑散としています。

そういえば、この前に協会と小さな小競り合いがあったんですね。その埋め合わせの休暇でしょうか。

「狂さんのオフィスは確か……五階だったわよね？」

「は、はい。五階の一番奥の部屋です」

被害状況を確認める為に、階段を使って一階つつチェックしていく事にしました。一階は特に異状は無いようで

続いて二階へ。確か、ここは情報課の一部があったような気がします。慎重に一部屋一部屋回って行くと、

「うっ……」

半ば予想は出来ていましたが、陸人さんが本に埋もれて倒れています。貧乳やら幼い系が好きなんですか。はい。

テーブルを見ると、コーヒークップが三つあります。きっと、詩

歌さんと梨香ちゃんも一緒に居たのでしょう。

「これは……何時ものお決まりのパターンね」

「ですね。陸人さんはこれだから陸人さん何ですよね」

そのまま私達は部屋を出て三階へ。陸人さんだから大丈夫でしょうとの判断からです。見捨てたわけではございません。

三階には特に異状は無いみたいでした。皆さん真面目にお仕事に取り組んでいらっしゃってます。ご苦労様です。

そのまま歩いていると、休憩所で律さんと時雨さんが二人で和やかに話し合ってます。流石前年度ユニオンスト夫婦ですね。

「む。奏と遥緋じゃないか。珍しい組み合わせだね。何かあったのかい？」

「いえー……ちょっと、パトロールを」

遥緋先輩……

「怪しいな。昔から遥緋は嘘をつく時は、わけがわからない事を言い出すんだよね。さ、僕に言ってみなさい。

今なら怒らないし、何だったらその罪を陸人さんと蒼威さんに被せる協力だつてするよ」

「もう！ 何時までも子ども扱いしないでよー！」

いや、ツッコむべき所はそこなんでしょうか遥緋先輩。と、口にはとても出せないのでも心中で呟いていると、

一冊の本がフラフラとこちらへと飛んできた。そして、時雨さん

の頭の上辺りまでくると、ぽとつと時雨さんの膝の上に落ちました。タイトルは「OL緊縛特集」時雨さんの顔から笑顔が消えました。逆に、律さんは恐い位の笑顔を作っています。

「な、何だこれは！？ ま、また陸人さんと蒼威さんの仕業か！ 全くもう！ 怒ってこなきゃ！」

わざとらしく声を上げ立ち上がるうとした時雨さんの服を律さんが相変わらずの笑顔で掴みます。そして

「遥緋。時雨が嘘をつく時の癖を知っているかい？」

「まず、お父さんが陸人さんに罪を着せようと思います」

律さんはそのまま体を巧みに入れ替え、時雨さんを羽交い絞めにします。とても、痛そうですが私も狂さんに偶にはあんな事をされてみたいと思っています。……私も変態さんなんでしょうかね。

「時雨。夫婦会議だ。しっかり話し合おうな」

「な、何で……わざ……わざ隣の県まで買いに行つて……データ化したら狂に押し付けたのに……」

時雨さんはそのまま近くにあつた空き会議室へと連れ込まれてしまいました。

遥緋先輩と二人でそのまま暫く耳を澄ましていますと、

「時雨、言ったよな。私はお前しか見ない。だから、お前も私だけを見ていろ！」

大体いい年してなんなんだ君は。こんな盛りのついたウチの弟が買うような本をのこのこと買いやがって。

それでもお前は2児の父親かい？ 全く、私を幻滅させてくれるなよ。このド阿呆が！」

「じ、ごめんなさいい……」

というお二人のやり取りが聞こえてきました。それを聞いて遥緋先輩はフツと笑うと、

「時雨ちゃんも段々陸人さんと似てきたね……昔はあんなキャラじゃなかったんだけどなあ」

「ですね。なんだかんだいって仲良いですから……根本が似てらっしゃるのではないでしょうか」

そんなやり取りをかわしながら、四階に上がると廊下に十字架が立っていました。しかも神璽先輩が架刑にされています。

これもいつも通りの事なので、私達は当然の如くスルー。

「ちょおおおツ！？ 見捨てないでよぉ！」

と声が聞こえてきたので、助けてあげようかと思いましたが、遥緋先輩の「甘やかすとつけあがる」という言葉に

妙に納得してしまい、五階へ。ついに狂さんのオフィスがある階です！ お願いですから、百冊位であってください。

私は怒りませんから。どんな狂さんだって受け入れますから。と、願いを込めながら五階に辿り着きました。

「何も……無いわね」

「ええ……オフィスへ行って見ましょうか」

そーつと何故か足音を立てずに、狂さんのオフィスのドアをノックします。

「か、奏です」

「ん？ どうした。入ってくれ」

許可が出たので、ドアを開けて中に入ると驚いた顔をしている狂さんの顔が見えました。きゃあ、カッコいいです。

遥緋先輩は気を使っているのか、ドアの外で待っていてくれるようです。……きつと違うと思いますが、そうしておきます。

狂さんは嬉しいのか、よくわからないのか曖昧な笑顔を浮かべています。

「で、どうした？」

「い、いえ……さ、最近お話してないので、つ、つい着てしまっています……」ご迷惑でしたよね」

「あー……ま、偶にはいいんじゃないかな。俺だって、最近忙しくてお前の事構ってやれてないしね。

それも多分、今日までだから安心してくれ。教会との小競り合いもやっと事後処理が終わった事だし。

しばらくは定時上がりにさせて貰えるからさ。後給料は期待しとけよ！ 残業手当がガッポリでるからさ！」

子供のように笑う狂さん。それだけで、これまで生きていて良か

ったと思える程心が温くなりました。

エロ本？ 別に何千冊持っていようがどうでもいいです。私はそんな狂さんを心から愛しているんですけどから。

すると、不意に狂さんが私を抱きしめてくれました。私も、手を回して思い切り甘えます。偶にはいいでしょう。

暫く頭を撫でられて至福の状態に入っていると、突然狂さんは思っ出したように話し始めました。

「そっいや、本部内に今、エロ本がバラまかれる事件が起きたらしい。どうせ、犯人は陸人が蒼威か神璽。」

……後は、奴等の悪乗りに巻き込まれた郁人だろうな。兎に角、変なモノがいっぱい落ちてるから見ちゃ駄目だぞ」

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

犯人は私達なんです。ごめんなさい。……そういえば、後の半分以上のエロ本は何処へいったのでしょうか？

まあ、いいです。購入者の下に帰ったみたいですから。皆さん、エロ本はちゃんとマナーを守って処分しましょうね。

それから暫くした後、お義姉様が赤ちゃんを出産したと聞いたので、私と遥緋先輩と命先輩の休みが偶々重なった

日に全員で祝福に行きました。お義姉様は自宅出産をなさったそうです。これは、八神の習慣だとか何とか。

ちなみに、女の子です。名前は緋緒ちゃん。少し変わった名前です。善も変わっているといえは変わっています。

「お義姉様。お疲れ様でした。とても、大変だったでしょう」

「ああ……うん。何か、嫌がらせみたいのもあったから、結構動揺しちゃって焦ったわ」

「嫌がらせ？」

「うん。こっちは初出産で緊張しまくつてると言うのに、大量のエロ本を私が寝てる間に部屋にバラまいた馬鹿が居るのよ。

正宗がそれに兎に角怒っちゃってね。陸人と蒼威に向かって斬りかかっちゃってさ。結局、アリバイがあったから

三人とも病院送り位で住んだんだから良かったんだけどね。でも、笑っちゃうのがさ。幾つかのエロ本に見覚えがあつてさ。

その中にまだ私が死罪六神だった頃に、狂ちゃんに買ってあげたエロ本があつたのよ。アレには、流石に笑ったわね。懐かしいわあ」

「あ……あははははは。そ、それは奇怪なお話ですね」

「で、でもまあ！ 無事に出産できた良かったじゃないですか！」

「そうですよ！ もうそんな事はパツパと忘れて、子供の事考えてあげましょうよ！」

私達の必死な表情に少し驚きつつもお義姉様は綺麗な笑顔を作り、

「そうね。……でも、何時か犯人がわかったら八つ裂きにしてやるわ。その時は、三人も協力してね」

そう笑いながら言いました。じよ、冗談であると信じたいです。
ああ、狂さん……私、どうしたらいいのでしょうか？

Days 24：六道紡（前書き）

一月ぶりのDaysですね。

多分、次もDaysで由加の話になるんじゃないかと。
これがまた長くてですね。

紡の倍以上の文字数があるんですよ……

ちょっと洒落にならないくらい忙しいので。
また投稿頻度が激減しますが。

できればお付き合いいただければ幸いです。

Days 24：六道紡

亜矢子ちゃんが由加になって、勇一君が神璽になった後、私はしばらく六道を離れた。

裏切ったのは身内である継人。あの男が、自身の研究を進める為に私と亜矢子ちゃんと勇一君を引き離れたのだ。

ガラム おじいちゃんにそれを話したら、上手くやると言っていたので、私はそれからおじいちゃんと一緒に世界中で研究していた。

だから、知らなかった。二人が一課に預けられて、亜矢子ちゃんは軟禁状態にされて、

勇一君は記憶を消されて悠々自適に他の女の子とエッチな事ばかりしていたなんて知らなかった。最低。

「ふうん。この子も被験者だったんだね。ま、アダムとイヴは二人だったんだ。今更いいでしょ」

そして、ロキが二人を新たな種として迎え入れようとしていたのを知ったのは、かなり後だった。

ロキ達の目的は、世界を滅ぼすと言っていたが、結論から言えば人間の支配からの脱却。

そして、あの二人でまた人間を一から創りなおすのが目的と言えるだろう。それを知った時に浮かんだ感情は、嫉妬。

亜矢子ちゃんじゃなくて、私でも。

と我ながら恥ずかしい持論を展開していたわけだ。私が戒君とあの時の討伐についていったのも

あの二人だけの世界が氣にくわなかった。それだけ。三人だったのに、いつの間にか二人という寂しさ。

我ながらくだらない。そして、神々の黄昏事件で口キを撃破したのを見た時、私はあの二人の絆を感じてしまった。

もう、私が入る場所はない。

幼い頃の馬鹿だった私は、あの二人から自分の記憶を吸い出してしまったので自業自得なのだが。

アレだ。恋する人間なんてものは、皆精神病にかかったかの如く、通常の思考じゃいられないんだよね。うん。

だが、それ以上に悲しい事があった。おじいちゃんの記憶を継承した時に、きつとおじいちゃんが誰かのを継承したのだろう。

結晶計画の全てを知ってしまった。とても悲しかった。そして、怒りが湧いた。世の中にこんな腹立たしい事があっていいのかと思ってしまう程。

それを知ると、頭の中から私達以外の被験者の叫び声、鳴き声。全てが耳にこびりついて離れなくなった。

私の頭なら、その記憶だけ消し去る事も出来ただろう。だけど、それは私も彼らと同類になるという事である。

それだけは嫌だった。だから、私はその声に一人耐えるようにして、毎日を呆然と過ごすようになった。

どうすれば、彼らに償えるのだろう。どうすれば、彼らの無念を晴らす事が出来るのだろう。と心の奥底で考えながら。

誰か、誰か助けて。

頼れる人間は居なかった。世界で一番の味方だった友達も居ない。

親も死んでいる。六道内で唯一信頼していたおじいちゃんも死んだ。私は日々を自堕落に過ごし、おじいちゃんが残した研究を適当に進める毎日。そんなある日、一人の鬼神が私を訪ねてきた。

それが 風神の鬼神の風早碧ちゃん。彼女の存在は知っていた。天美運命が命と出会う少し前だろうか、後だろうか。

詳しくは曖昧になってしまったが、その頃に九尾の狐を脱退した鬼神。その彼女が尋ねてきた理由は、簡単なもの。

「……ガルムに頼まれたの。……もし、世界が無くなってなかったら紡を助けてやってくれって」

「それだけで、私の所に？」

「……私、何でも屋だもん。報酬は貰ってあるからね。……紡。何でも私を頼って。……私、頑張るから」

おじいちゃんめ。これを見越して、私にあの時全てを継承させたんだな。全く、優しいんだか厳しいんだか。

おじいちゃんは科学者失格だ。でも、ありがとう。本当に嬉しいよ。やっぱり、おじいちゃん大好き。

そして、私の中で何かが燃え上がった。おじいちゃんの意味を継ぐわけじゃない。私自身の手で、思いで、結晶計画の犠牲者に出来る事をはじめた。

「……は？ ……大悪鬼を討伐する？」

しばらく一緒に過ごした後、碧ちゃんに計画の一端を説明すると、彼女は珍しく驚いたような顔で私を見た。おじいちゃんの記憶によると、

結晶を移植する上で一番重要なのが、結晶が集まって出来た大悪

鬼の結晶を移植する事である。

やはり、人間だけでは反意思を制御出来ないらしい。大悪鬼と上手く共存し、作業分担する事が大切だという。

亜矢子ちゃんと勇一君の場合は、九尾の狐の力が異常に消耗していたので、本当に僅かな力しか使えなかったのだが、

二人は戦闘を重ね、反意思を少しずつ蓄えていき、神代事件のあの時に覚醒したという事だ。

私もそれ相応の覚悟をしなければならない。だから、自らの手で大悪鬼を倒し、結晶に戻したそれを移植しようと思った。

「……私の父は、純正悪鬼だから駄目だよ。……それに、風神程度じゃ九尾には遥かに劣っちゃう」

「不躰な質問だったね。確かに、九尾の狐はアジア最強の悪鬼だとすれば、西洋しかないか」

「……バジリスク」

「え？」

「……最強の蛇の悪鬼、バジリスクなら居る。……確か、二十年前に会った事があるから、まだ生きてるかも」

「それだ！ よし、早速準備をしようか」

「……二人で、やるの？ ……紡は式神使えたっけ？」

「今ならまだ使える。ただね、結晶を移植すると使えなくなるみたいなんだ。結晶の意味が自分の根源に何か

影響を与えるんだろうね。上手く、呼び寄せる事が出来ないらし

いよ。これは、一課の研究で

結果が出るよ。うん。だから、亜矢子ちゃんは武器一つでもあんなに強く訓練されているわけだけどね」

「……そうなんだ。ある意味、諸刃の剣というべきかも」

「式神が強ければそうだね。千島蒼威氏や戒君何かは逆に弱くなっちゃうんじゃないかな。」

「けど、私の式神はそうでもない。一応、十名家としては恥ずかしくない程度の能力を持っているが、

莉王君や律ちゃんには及ばないだろうね。あの二人は戒君さえいなければ、十名家最強になれたんじゃないかな」

「……十名家ってやつぱりまだあつたんだ」

「まだ、存在してるよ。顔ぶれは多少変わったけど。最近では八頭が消えて、あの八神が入ってきたんだったかな」

「……緋眼か。……そういえば、私の何でも屋ルートでの知り合いなんだけど。十名家の人が居たよ。」

「……最近フラフラとこっちの方に来たんだけど、やっぱり腕がいいから結構人気があがってるね」

「ふむ……その子も何でも屋なのかい？」

「……ん。彼は、用心棒？　みたいな感じかな。戦闘ばっかの傭兵みたいな感じ」

「うん。それではその子に早速会いに行ってみようか」

碧ちゃんの案内に従って、どうみても良心的じゃない酒場へと向かった。何というのだろう。物凄い匂いだ。

酒、香水、加齢臭、火薬、油、様々なモノを集めて、それを火で温めた時に出た蒸気のような匂いだ。

それなりに育ちの良い私が顔を顰めて歩く中、碧ちゃんは平気な顔で奥の方まで歩いていく。そして、その奥で私は颯太君と久しぶりの再会をした。

六道と五月は同じ十名家だ。私も被験者となる前に何回か会った。いやはや、あの気弱そうな男の子が中々に精悍な男になっているじゃないか。

碧ちゃんと私が自己紹介すると、彼は無表情だった顔を様々な形に変化させ、

「お前が……あの六道の紡？」

「そうだよ。君のエキセントリックなお姉様方は元気かい？ それにしても、五月待望の長男様がこんな場所に居るとは驚きだね」

「もう三年会ってない。俺、ほぼ五月から出家しているみたいなもの。姉や妹に任せておけば

あの家は安泰。無理に長男が居座っている必要無い。だから、ここにいます」

「かくいう私も六道は完全に放置だがね。頭首なんて名ばかりさ」

挨拶もそこそこに、私は早速本題を切り出した。バジリスクを討伐したい。そんな無謀でどうでもいい依頼を颯太君は真面目に聞いてくれた。

真摯な男だ。そして、愚かだ。こんな自己満足でしかない依頼を彼は大した見返りもなく、快諾したのだ。

最初は何で彼が受けたのかわからなかった。もしかしたら、遊ばれているのかもしれない。そんな思いが浮かぶも、彼の目は真剣そのもの。

後になってわかれば、彼はこの時既に私に恋していたらしい。彼の女性の好みがいまいちよくわからない。

今でこそマシにはなっているが、あの頃の私は髪は伸ばしっぱなし。肌の状態も悪い。服なんて適当に見繕ったものに白衣を着ているだけ。

そんな女に魅力を感じるってのはアレか。もしかしてB専なのか。私は自分でそこまで自分の容姿は悪いとは思わない。

あの勇一君にキスを求められた程だぞ。うん。それに、小さい頃の六道紡ちゃんの愛らしさは研究員の間でも有名だったらしいし。

……話が逸れた。私の悪い癖の一つだ。そんなわけで、私と颯太君と碧ちゃんはバジリスク討伐の為にヨーロッパの奥地へと向かった。

言葉でいうのは簡単だが、あの大悪鬼を倒すのに私達は数ヶ月かった。そこにはもう、長編小説が上下巻執筆出来るほどの

ロマンや冒険がつまっていたのだが、これは割愛させて頂こう。

正直に言うと、十八回死に掛けた。私はこの三人の中じゃ一番弱いしね。

そして、私はバジリスクの本体となっていた一際異彩な輝きを放つ結晶を手に入れた。無論、他の結晶も回収した。

碧ちゃんとはそこで一旦別れた。何やら、どうしても日本に行きたくないらしい。嫌な奴がどうのこうのと言っていたが詮索するのでも無粋だろう。

私と颯太君は結晶を移植する為に、六道特区へと向かい、結晶を移植する手術の準備を始めた。

すると、何処から私が帰ってきた情報を得たのか、我らが十文字

の五兄妹が六道特区を訪ねて来た。

「久しぶりだね。紡」

戒君は変わり果てていた。あのヘタレだった男の子が、複雑な雰囲気纏っていた。言うならば、憎悪と愛。曖昧だが、そんな感じ。四つ子も相変わらずだったが、何処か大人びている。原因はすぐにわかった。過去に一度会った時に居なくて、現在会った時に居る人。

彼女が居ない。だが、その場所にはもう別の人間が居る。当たり前前の事だが、ひどく悲しい。そして、嬉しくもある。

どうせなら、二人一緒に居て欲しかったね。それならば私は心からの笑顔で祝福の言葉を投げかけたであろう。

「やあ、久しぶり。早速だけど、不躰な事を聞いてもいいかな？」

「全て話そう……あの時、手伝って貰った時には殆ど話してなかったしな」

戒君の目的は最初からそれだったのだろう。私は兼ねてより気になつていた彼女の存在と反逆の十文字件の全てを聞いた。

中でも特筆すべきは彼女　希ちゃんの事だろう。あのお爺ちゃんも興味を示していたほどだ。

やはり普通なわけがなかった。六道に彼女の存在が知れていたら、十文字と六道の抗争にまで発展していたのかもしれない。

私だって希ちゃんの真実を聞いた時には、胸が震えた。だが、戒君にとっては希ちゃんは何処まで行っても希ちゃん。それでしかない。

彼女の存在も、境遇も、何もかもを気にせずに、ただ愛し続けた男。恋は盲目とはやはり上手い事を言っているものだ。

「成る程。概ねの事情は理解できたよ。それにしても、君達は結構物騒な事を考えて居たんだね。」

お爺ちゃんを介して、ラグナロクを操り。最終的にはユグドラシルを奪うつもりだったんだろ？

確かにあの時何で私が呼ばれたんだろう？　とは思っていたけど、その為だったのか」

「ああ。だがな　あの子が、楽しそうに笑うんだ。友達がいっぱい出来たって。今日は誰と何をしたとか、明日は誰と何をするとか。あの子は何も知らずに、世界を楽しんでいる。そんなあの子を見ていたら……踏みとどまってしまった」

「ある意味では最高の判断だったね。アレを実行してたら、私は戒君の敵に回っていただろうし。」

おじいちゃんは終焉を望んでいた。だが、私は終焉を望んではない。何もない世界なんて、もはや研究する価値もない。

何かが。悪い事も良い事があるから、世界は楽しいんだ。破壊なんてされちゃ、良い迷惑だよ」

私がそう言うと、戒君は黙ってしまふ。私も特に話を進めようとは思わなかった。やがて、彼は決心したような顔を見ると、

「それでも、何時かあの子が希を求める日が来るだろう……。その時は、力を貸してくれるか？」

「……勿論さ。その代わり、私の復讐にも力を貸してね」

「復讐？」

私は戒君に全てを話した。六道とこの国の一部のトップによって行われていた結晶計画の真実。

その計画に携わっていた人物の現状と所在地を調べる事に苦勞しているという事。

どれもこれも、六道の力だけじゃ無理だった。相手は日本のトップシークレットだ。十文字の力を借りても辿り着けるかどうかかわらないと言う事も。

その全てを私が話し終えると、戒君は簡単に頷くと、

「わかった。十文字の全権限を使っても調べよう。俺自身、純血の傲慢さにはいい加減腹が立っている。

十文字戒の名にかけて、真実を全て明かし、お前に伝える事を誓う。だから、お前もしもの時は頼む。

あの子には笑っていて欲しい。泣き顔なんてみたくない。あの子には全てを与えてやりたいんだ」

その言葉に私はしばし呆然とした感覚を覚えた。あの十文字戒がこんな事を言うようになるとは誰が想像できるだろう。

それ程までに愛おしいのだろう。経験の無い私にはわからない。だが、私もいつかはこうなりたい。何となくそんな事を思う。

そこで戒君と別れ、数日後の私の結晶移植手術の少し前だったか。颯太君は真正面から私を見つめた後に、

「始めて会った時から、お前がずっと好きだった。嫌じゃなければ、結婚して欲しい」

最初が緊張をほぐす為の冗談かと思ったよ。あの五月颯太が結婚してくれ？ おいおい、そんなキヤラじゃないだろうに。

理解できぬままヘラヘラ笑っていると、今度は抱きしめられた。

……流石に焦ったね。私は恋愛経験なんてゲームや脳内シミュレー

ションだけの

典型的な引きこもり少女だったわけだしね。ああ。うん。思い返すだけで恥ずかしい。いや、嫌じゃなかったんだ。ただね。顔から火が出そうな心境だったんだ。

それにしても颯太君。結婚の前に、まずは付き合ってくれじゃないか。君らしいといえは君らしいが。

と、今はこんな冷静であるが、当時の私は相当酷い反応をしてしまった。

「へ……？ あ、あ？ あの……颯太君？」

「嫌なら拒絶してかまわない」

初心な私にどう拒絶しろと。しばらく黙って抱きしめられていると、私の胸の中に残っていたとある感情が働き、

私は何時の間にか、颯太君の腕から離れていた。そして見上げると、そこには泣きそうな颯太君の顔。もう、戻れない。

黙っていれば幸せになれたのかもしれない。颯太君は優しいし、強いしね。きつと、私だって大切にしてくれるだろう。

だが、当時の私はどうしても勇一君の事が忘れられなかった。彼は、最高の男だ。優しく、強く、面白く、私の初恋の人。

二人の絆は知っている。だが、諦めきれない。全てを思い出したら、もしかして私の所に来てくれるかもしれない。

「ごめんね颯太君……今は、君の気持ちに答えを出せない。うん、ごめんね」

「何時か、答えは出るのか？」

「出すよ。君の気持ちに少しでも報いる為にね。だが、まずは結晶

を移植しようと思う」

「そうか……。なら俺、待つ。何時かその日まで、お前の傍で待つ」

「……ありがとう。じゃあ、行ってくるね」

それから手術が始まる。移植自体はそう難しくはない。だが、問題はその後だ。私のバジリスクは九尾の狐と違い、力を存在ギリギリまで消耗させていない。そう、移植して私と繋がった瞬間から、アイツは暴れだしたんだよね。

とても苦しかった。闇が、私を満たしていく感覚。一日中口汚くバジリスクと罵りあう様は正に獣の如く。

私は全てをぶつけた。バジリスクも全てをぶつけてきた。結果から言わせて貰えば、アイツは私の相棒になったがね。結

今でもうるさいよ。やれ、お前の中は窮屈だの。やれ、颯太君とヤっちまいなだの。余計なお世話である。

「俺、何時でも準備は出来てる」

そんな恥ずかしい台詞を、相変わらずの表情でかましてくれる颯太君も颯太君だがね。それでも、彼が居てよかった。

きつと彼が居なくては、私はバジリスクに負けていただろう。辛い時、彼は何時も私を励ましてくれた。

そんな颯太君に、私は勇一君と亜矢子ちゃんの事を全て話した。

彼等が知り合いなのは、何となく知っていた。

シヨックだろうとは思ったけど、一応全てを話してみた。案の定、シヨックだというのがわかる顔をした颯太君は、

「神璽だけはお勧めしない。いや、嫌いなわけじゃない。人間としては良い奴。でも、でも、神璽が好きだなんて……！」

「ほお、珍しく饒舌だね」

「からかうな。……うう、だが。お前が良いならそれでいい。お、俺は認めよう」

「可愛いなあ、颯太君は」

「お前には負ける」

そんな日々が続き、再び私と颯太君は碧ちゃんと合流して、一緒にあの場所へと戻り、それなりに幸せな生活を送っていた。

そして 戒君からついに連絡が着た。助けて欲しい。力をかして欲しいと。当然の如く、私も動き出す事にした。

亜矢子ちゃんと勇一君については、もはやストーリーカーと言えるほど情報を集めてある。そのついでにユニオンの事も調べは

ついていた。そして、碧ちゃんが偶に話す雷神の鬼神の件についてもほぼ居場所は知れている。まさか、本名で大学に

通っているとは夢にも思っていないだろうね。頭の中でその様々な情報を煮詰めながら計画を立てていると、

颯太君と碧ちゃんが私の方を向き、

「紡。悪巧みをしているな？」

「……また。変な実験をするの？」

……どうして私が考え事をしている「悪巧みになるのだろうか。とまあ、今はそれは置いておこう。あながち間違いでもないし。

とりあえず、ジトツとした視線で私を見ている二人に、まずは染髪料を買ってきて貰おうと思い、私は笑いながら財布を手を取った。

Days 25：稗由加（前書き）

少し、読者の皆様にお聞きしたい事があるのですが。
Daysでファーストコンタクト（死罪六神結成の話）
を投稿するかでとても迷ってます。

一応、話の展開は全部決まっています。

全部で六話か五話辺りになると踏んでいるのですが。

どうしても今更感が漂ってしまうんですね。

同じ過去の話で、朱音の話もdaysでやる予定なのですが。

これはPASTの最終話辺りに欠かせない話なので書きますが。
ここで死罪六神の話を今更……みたいな。

というわけで、読者様方の意見をお聞きしたいのです。

評価欄でもメッセージでもキャラ投票のコメント欄

の何処にでも構いませんので。

読んでやつからさっさと書けよカス

とか

別に読みたくねーよ。

のような意見でも全然構いませんので

よろしかったらご意見の程をよろしくお願い致します。

Days 25：棗由加

高校を卒業して、すぐに私と神璽は旅立ちの準備を始めた。

ガルの言っていた、六道紡という人間を探す為、そして、私達の本当の親について調べる為。

その為なら 例え、一課の皆だって敵に回す覚悟があった。

だが、現実には思いがけない方向へと進んでいった。森羅さんや未来さん。他の一課の皆さんといった

一課ぐるみで私と神璽は開放され、それぞれの親元へと旅立って行く事になった。

……あの時、皆は心配ないと言っていたが国と相当な問題となったらしい。しばらく、雲隠れしなければならぬ程に。

それを解決してくれたのが、八神。時雨をはじめとした色々な人達に、私と神璽は救われたのだ。

ありがとう。本当にありがとう。この数年間で出来た仲間是最高だった。

未来さんが私の両親の事を調べてくれたので私は寝台電車です移動しながら、その書類へと目を通していく。

母親の名前は棗文香というらしい。私自身、母親の事は殆ど覚えていない。心の痛みだけは残っているのに、何故か記憶だけがない。こんなにも悲しいというのを覚えているのに。何で私は辛い記憶の殆ど持っていないのだろうか。

そんな事を考えていても始まらないので、書類を一枚めくった。そこを読んで行くと、大体私がどんな境遇で捨てられたのかがわかる。

母、棗文香は十代半ばで当時付き合っていた男との間に私を身ごもったらしい。だが、男はその責任を逃れる為に金で無理やり解決

凄い、こんな人間の屑の遺伝子が私にも混じっているんだ。死にたいね。母親はそのまま学校を退学し、アルバイトをしながら私を育てはじめたとの事。

理解ある両親　私からすれば、祖父と祖母。だったのか。私はそれなりに幸福に育てられたらしい。

だが、その後に祖父と祖母が順に病気になったらしい。その看病と仕事、そして私に追われ、母は日に日に衰弱していき、

ついには半ば頭がおかしくなってしまうたらしい。それに追い討ちをかけるようにして、祖父と祖母が病死。

その時の母の唯一の便りが、当時付き合っていたヤクザの男。

だが、その男も組から横領した金を返済する為に祖母と祖父の保険金狙いの為に近づいただけだった。

だが、それだけで男は赦されなかった。かなり悪辣な組だったらしく、詳しくは書いてないが今でもその男は行方不明となっている。きっと始末されたのだろう。そして、保険金も全ての金も取られた母は、六道の上手い口車にのって私を売ったと。非常にわかりやすいね。

私の母は、男を見る目が無さ過ぎる。……私も人の事は言えないかも知れないが。そして、一つだけ気になった事がある。

「どうして……私はこんな人に会いたいなんて思ってるんだろう……」

世の中には謎が多すぎる。

翌朝目を覚まし、目的の駅に降りて更にそこから三十分ぐらい電
車に揺られて、私は鳥取県のとある町へとやってきた。

今まで住んでいた都会ではなく、中途半端な開発が成されたこ
にでもあるような町だった。

鳥取砂丘というものを一度見てみたかったが、ここからは全く見
えない。後で本屋で地図を買ってみよう。

私は未来さんから貰った書類にある、母が今何処へ住んでいるの
かを記したメモを見ながら町の中を歩いていく。

同年代の女の子達を見かけるが、どうにも素朴で自分の同級生達
と比べると、何かノンビリしすぎな感じもする。

しばらく歩いて行くと、目的の住所付近に辿り着いたようだった。
電柱を見ながら緊張しながら、そして何かよくわからない感情を抱
えたまま

私は ついにそこを見つけてしまった。妙にこじんまりとした、
自宅を改造した惣菜屋。だが、外装もどちらからかといえば微妙。

花丸惣菜と書かれた看板の上には、粗末な絵が書かれた紙が貼り
付けてある。よくよく見てみると、全部花丸柄だった。店名の由来
はこれらしい。

まだ昼前だからか、客の姿は無い。というよりも、この店は儲け
が出ているのだろうか？ と何故か心配になってしまう。

心を落ち着けて、少しずつ惣菜屋へと近づいていく。揚げ物の良
い匂いが漂ってきた。そういえば、昨日から何も食べてない。

恐る恐る中の様子を伺うが、今は姿が見えない。ホッと一息つく
と、何か無性に怖くなってきた。

やっぱり帰ろうかな…… と思い、私が振り返ろうとした時だった。

「あ、あの！」

心臓が跳ね上がった。相当油断していたのか、背後からの気配に全く気がつかなかった自分が恨めしい。

緊張しながら、そして何故か高鳴る物を押さえながら私はゆっくりと振り向く。

と、そこには期待した姿は無く、小さな、制服を着た女の子が立っている。今風の中学生だった。

縮毛強制した髪。あどけない顔。何処にでもいそうな、ごく普通の女の子。何だろう？ この子。

もしかしたら、このリピーターなのかもしれない。とりあえず、私は何か喋ろうとしたが、

「あ、アルバイトの面接に来た方ですか!？」

先に言われた。何を言ってるんだこの子は。私が訝しげな顔をしたのに気づいていないのか、女の子は、

「や、やっと来ました! 花丸惣菜初のアルバイト店員が。これでごつと負担が減る筈。」

お姉さん。自給は確かに高く無いです! 午後は死ぬほど忙しいです!

でも! それでも、ここを選んだお姉さんは店舗を見る目があります! 私が保証しますから!」

ちょっと頭の緩い子なのかもしれない。命と似ているといったらお互いに失礼かも。

一人興奮して勝手に頭の中で話を進めている女の子は、息を荒らげて私の手を掴むと引つ張り始めた。

……この子、結構力が強い。何か格闘技かスポーツをやっているのかもしれない。私の悪い癖だ。すぐに分析を始めてしまう。

そのまま女の子は脇にあったドアをバンと開けると、私を店の中

へと引き込み、

「お母さん！ ついに、ついに！ この花丸惣菜にもアルバイト店員がきましたよ！」

お母さん　の呼び声がしたすぐ後に、奥の方から沢山の材料を抱えた女性が現れた。

まだ若い。この年頃の娘がいるようには見えない。私が半ば予想していた通り、その女性は私の母親。

少しだが、顔を覚えていて。何より、匂いというのだろうか。私がそう知覚しているものが過去の母親と確かに重なった気がする。

昔よりも明らかに老けたが、それでもまだ若い。細かった腕は今では普通の太さに戻っている。

それと引き換えに腕にはかなりの筋肉がついたようだった。母親は荷物を置くと、私の方を向き、

「えーっと……本当に、アルバイト希望の子なの？」

「違います」

「ええっ！？ お姉さん！ お客さんだったんですかぁ！？」

凄まじく、驚いた顔をする女の子。……もしかして、この子。私の妹なのかな？

馬鹿な子程可愛いとはよく言うが、この子は少し頭にお花が咲きすぎなのではないだろうか。

ただ、アルバイトか。元々、母親がどんな感じで生きているのかわ知れたかっただけなのだ。

話す気や正体を明かす気は殆ど無い。とりあえず、ここは調子を合わせてみようと思い、

「でも、アルバイトは探しています。もし良かったら、後日面接をしてくれませんか？」

「そんなのいいですよ！ もう即決だよね！ お母さん！」

「ええ……確かに、今は人手が欲しいしね。とりあえず、貴女。名前と連絡先だけ教えて貰えますか？」

母親が私をジッと見つめてくる。多分、私の正体はバレてないだろう。神璽が言うには、子供の頃と今の私は本当に違うらしいし。笑顔が無くなった……と言われたのには些かショックではあったが。仕方ないじゃん。

そして私は少し嫌味の感情を込めて名前を名乗った。

「棗由加です。よろしくお願いします」

「冬木文香です。こちらは娘の美也子です」

「よろしくねっ！ 由加さん」

母と妹は私の正体に気がつかないまま、嬉しそうに微笑んだ。

とりあえず、住む場所を決めなくては。と思い、マンションは名義とかが面倒なのでホテルを取った。

未来さんが一課の予算を少しずつ、少しずつ削っていったお金を沢山貯めてくれてあったので

ありがたく使わせて貰おう。あの人より、未来さんの方がずっと母親らしい。

それで、森羅さんが父親。神璽と私が子供。悪くは無い。森羅さんは本当に良い人だ。

あの人達の子供になる子はきっと幸せだろうなと思いながら、ホテルの一室でベッドに寝転がり、一息つく。

後で履歴書も書かなくては。といっても、大半は嘘になってしまふが。一課から渡された偽造の

住民票を添えれば完璧だろう。そもそも、無理に働く必要なんてないのだ。

「私……何がしたいんだろ」

そんな言葉を発するが、ついに答えは出なかった。

翌日、もやもやとした気分のまま、ホテルから出て再び花丸惣菜へと向かった。まだ、開店前のようで、

妙に静かだ。「失礼します」と言い、昨日のドアを開けて入ると、そこには熱心な顔で下ごしらえをしている母の姿。

すると、私の存在にようやく気づいたのか、顔を上げ、

「あら、棗さん。おはようございます」

「おはようございます」

「アルバイトの件だけど、昨日連絡したように。短期でなら雇えるんだけど……それでいいかな？」

「ええ、構いません。元々、長期滞在は私の望む所ではないので」

そう。此処に居るわけにはいかない。私には、帰るべき場所があ

る。今は唯、待つしかないが。

「良かったわあ。じゃあ、よろしく願いしますね」

「はい。こちらこそ、よろしくお願いします」

それから、一言で言うなら大変だった。体力や力には自信があった。実際、母も舌を巻く程の力がある。

ただ……誤算だったのは、此処は惣菜屋だという事。そして、私の料理の腕は壊滅的だという事。

母を少し呆れさせるほどの失敗を幾つかしてしまい、必然的に私は調理よりも接客や力仕事を任されるようになった。

「いらつしゃいませ！」

「ゆ、由加ちゃん。目が笑ってないわよ……も、もう少しにこやかにね？」

何時の間にか母は、私の事を由加ちゃんと呼んでいる。どうしてもいいけど。本名じゃないし。

そして、ごめんなさい。

「はい……」

地味にシヨックだった。お客さんの一人に、冗談交じりではあるが、睨み殺されるかと思ったと言われてしまった。

花丸惣菜はこの地域では微妙に有名らしく、昼過ぎから夕方にかけては戦場のような忙しさである。

気がつけば、既に時刻は六時半。ようやく客足も減り始め、私は数時間ぶりの休憩をようやく満喫していた。

「由加ちゃん、お疲れ様。大変だったでしょう」

「はい。久しぶりに、疲れました」

「疲れている所を申し訳ないけど……一つ頼まれてくれないかな？」

「大丈夫です」

「ありがとう。助かるわぁ。実はね。美也子を迎えにいつて欲しいの。今日は部活が長い日でね。

帰り道は暗いところばかりだし、部活の友達は皆方向違つらしくて……最近物騒だから、心配でして」

「わかりました。地図さえ貰えれば、行ってきます」

「あ、わかった」

私は、母から美也子の通っている学校までの地図を受け取り、花丸惣菜を後にした。……愛されているね。あの子。

私の事は金で売ったのにね。……だからこそかもしれない。どっちみち、私が捨てられた事実には変わらない。

昔は酷く悲しかったが、捨てられて結晶を移植されて、私は神璽を初めとする皆と出会えた。それがあるから良い。

そんな事を考えながら歩いていると、眼前に中学校が見えた。若干緊張しながら中に入ってみる。

「由加さん？」

心臓が飛び出るかと思った！ 門を入ってすぐの場所にまさか美

也子が居るなんて、誰が気づくだろう。

「……頼まれて、迎えにきたよ」

「わぁ！　ありがとうございますっ！」

嬉しそうに私の周りを飛び跳ねる美也子。やっぱり、命と似ている。良い意味で、子供っぽい。

そのまま私と美也子は会話しながら、夜道を歩いていくのだが、この子。好奇心が強い子なのか、バンバンと質問を飛ばしてくる。もうね、この子命の妹で良いよ。私とは似ても似つかない。

「由加さんは、何処から着たんですか？　地元の人じゃないっぽいですけど」

「東京だよ。ワケあって、この街にきたの」

とか。

「年齢は幾つなんですか？」

「19だよ」

とか。

「どんなお友達が居るんですか？」

「どうしようもない女たらしとか、激甘党とか、バカップルとか。ロリコンだったりシスコンだったりも。」

……よくよく考えてみれば、私にはまともな友達が一人もない。まともなのは、郁人と英輔ぐらいかも」

とか。不覚にも、美也子のペースに釣られてかなりの情報を喋らされてしまった。うん、気を引き締めなきゃ。

そして、美也子を家まで送り届けて、母に誘われるがままに夕食をご馳走になってしまう私。流されやすい。

……ただ、母親の味というモノが感じられた。森羅さんや遙さんが作る類の味。私にはあの味は出せない。

それから 暫く穏やかで、忙しい時が流れた。朝九時ごろから花丸惣菜に行つて、夜までバイト。

そこで晩御飯をご馳走になって、ホテルに帰って寝る。現在、母の旦那。美也子の父は、出張で居ないらしい。

どうやら在宅系の仕事を基本はしているらしく、花丸惣菜は時に二人で、美也子が暇な日は三人でやってるらしい。

母は、中々良い家庭を築いているようだ。これなら、もう私は安心して帰る事が出来る。……そう、私は忘れ去られた子。

もう、この世には居ない子。母の記憶にも残っていない子なんだ。棗亜矢子は、もう結晶使い、棗由加なんだ。

「由加ちゃん……？ どうかしたの？」

「いえ、何でもないです。それより、アルバイト期間は何時まででしょう？」

「え……あ、うん。旦那が二日後位に帰ってくるらしいからさ。それまで。本当は、もっと雇ってあげたいんだけどね」

「いえ、私ももうこの町には用事が無いので、丁度良いです」

「そう……寂しくなるわね」

「……………美也子を、大切にしてあげてくださいね」

「え……？」

「そろそろ時間です。美也子を迎えに行ってきます」

逃げるようにして、花丸惣菜を飛び出す私。何で、あんな事を言ってしまったんだろう。気づいて欲しいのか。

わかんない。意味わかんない。心と体が矛盾してる。もう嫌だ。明日にでも荷物を纏めて出てこよう。

苦しいよ。悲しいよ。寂しいよ。よくわかんないよ。フラフラと複雑な気持ちで、美也子を迎えに行くと、

今日も美也子は何も知らずに元気だった。とりあえず、お別れだけはしておこう。そう思い、

「美也子。多分、今日でもうお別れ。私はこの町を出て行くから」

「……………え？ も、もうですか！」

「うん。用事も済んだし、バイト募集も終わりだって……だから、元気だね」

「また、何時かこの町に来ますよね？ 帰ってきてくれますよね！」

「二度とこないと思う。色々あってね、この町に居ると、私壊れちゃいそう」

「そんな……」

「でも、美也子の事は忘れないよ。ずっと、覚えてる。また、日本の何処かで会えたら良いね」

美也子はずっと私に懐いてくれた。年下に懐かれるのは初めてだと思う。光希だって、私を蒼二の次に

嫌っていたしね。今では、そうでもないけど。一年位までは地味にシヨックだった。神璽が光希に何故か好かれて

いたのもあるだろうけど。……話がそれた。美也子はまだ俯いたまま何も喋らない。そして

「……ん」

私達の周囲一帯に結界が張られる気配。きっと、人払い。もしくは記憶を曖昧にするタイプの結界。

そして、道の影からぞろぞろと現れたのは、いかにも悪人のような風体の男達。……賞金稼ぎ達だ。

「ひつ」と、美也子が脅えながら私の背後に隠れる。奴らの凶悪極まりない顔つきでは無理もないだろうが。

「棗由加だな？」

「そつだよ」

「依頼により、お前を捕縛する。異論は聞かない」

「……汚らしい」

「？」

「やり方が汚らしい。美也子は何も知らない一般人だよ。何で、巻き込むの？ 私がバイト終えてから襲えばいいのに」

「こつちも時間ギリギリなんだよ。あの八神が出張ってくる前に片付けねえと、めんどくせエ事になっからな」

合点がいった。やはり、時雨達が動いてくれるのだろう。その前に、国か他の機関は私達を捕まえない。

だから、金で動く賞金稼ぎ。他の家に頼むわけにはいかない。相手は十名家の八神だからね。

まずしり込みするだろうし。そして、私は薄く笑うと、美也子の方を向いた。

「美也子。残念だけど、ここでお別れ」

「由加さん……」

「楽しかったよ。美也子は、お母さんと幸せになってね」

「……？」

そして 私は力を発動させた。体内に反意思が駆け巡り、そして溢れ出した反意思を、武器や防具へと変換。

何時もの黒のコートに、巨大な斧。そして、足元には世界から奪い取った私だけの領域。

まずは、領域に命じて黒の刃を大量に顕現させて賞金稼ぎ達へと襲い掛からせた。その隙に、美也子を抱えて飛翔。

「え……ええっ!？」

「掴まってて!」

そのまま全速力で花丸惣菜へと飛んで行くと、花丸惣菜の前にも賞金稼ぎ達が居た。……っ。読まれていたか。

ゆっくりと降り立ち、男達の前まで歩くと、やはりそこにはリーダー格の男が笑いながら立っている。だが、余裕が無さそうだ。

そして、徐に巨大な燃え盛る剣の式神を取り出し、花丸惣菜へとそれを向けた。

「っ! やめて!」

「……なら、俺達の依頼を完遂させてもらおうか」

「……わかった。でも、此処の安全は保障して。約束破ったら、九尾を召還して全部滅ぼしてやるから」

私が睨みつけながらそう言うと、リーダーは冷や汗を垂らしてそれを承諾した。これで、大丈夫だ。

花丸惣菜に迷惑をかけるわけにはいかない。これは、全部私の我が侘なんだから。私が勝手に乱したんだから。

すると、騒ぎを聞きつけたのか、母が花丸惣菜の中から出てきた。私と賞金稼ぎ達の不穏な雰囲気を感じた

のだろう。妙に脅えているように見える。すると、リーダーが作り笑顔を浮かべ、

「いや、騒いでしまって申し訳ない。我々は、彼女の保護者の代理人だね。迎えに来たんですよ」

「……由加ちゃん。そうなの？」

「……はい。ご迷惑をおかけしました」

私がそう言うと、母もそれ以上何も言えないのか、黙ってしまった。私は美也子に目配せをすると、

母の下に行くように促した。最初は脅えていた美也子だったが、ゆっくりと歩き出す。それでいい。

と思っていた矢先、美也子は足を止めると、

「お母さん！ 嘘だよ！ この人達、由加さんを脅して、嘘をつかせてるんだよ！」

そう、怒鳴った。美也子のバカ、何で、何で黙ってないの！
？ と思うが時既に遅し、

「なっ ……！？」

「美也子！」

そして、慌ててリーダーが叫んだ。

「もういい。兎に角回収しろ。事後処理は上にやってもらえ！」

その場にいた式神使い達が、一斉に私に向かって襲い掛かってくる。だが、ここを戦場にするわけにはいかない。

そのまま動けないでいると、母と目が合った。脅えているのか。必死なのか。そして、大きく口を開け、

「亜矢子っ！ 後ろ！」

母の叫びに、勝手に体が反応した。瞬間的に横に移動し、背後から振り下ろされた巨大な棒の一撃をかわす。

そのまま、私は斧を振って男の体を吹き飛ばし、コンクリートの壁に叩きつけた。そして、冷静な思考が働き出す。

……………あの今、私の事……亜矢子って呼んだ。美也子じゃない。確かに、亜矢子って呼んだ。呼んでくれた。

怒りに顔を染めた賞金稼ぎ達が再び向かってくる気配。私も応戦体勢を一応取る。すると、一発の銃声が鳴り響いた。

「はい。そこまで」

全員が銃声のした方向を見ると、そこには拳銃を構えた時雨が立っていた。明らかに、機嫌が悪い。一瞬でそれがわかる。

だが、すぐに何時もの蒼二曰く「曖昧な作り笑顔」を浮かべると、私達の方に向かって歩いてきた。

「由加の身柄は現在八神預かりの身になっていてね。残念ながら、これ以上好き勝手はやらせないよ」

「あ……ああ。わかった。もう手を引こう」

「君達は、何処の所属かな？ 鎚木？ それとも九十九？」

「九十九だ……」

「ふんふん。九十九とは初対面だね。うん……ウチの身内に攻撃。それに加え、一般人を人質に。はいはい。」

どうしようもなく、僕等八神を舐めきってるね。これは、九十九が八神に喧嘩を売ったとみなすべきだろう」

「な……なんだと!？」

「容赦しないよ。裏の不文律を破った君らが悪い。全く、最近の若い賞金稼ぎときたら、これだからね」

そして、時雨が手を上げると同時に、賞金稼ぎ達が微動だにできなくなる。動きたいのに動けないようだ。

奥の方を見ると、奏も珍しく機嫌悪そうな顔で立っていた。成る程、七海の念動の力で固定されたんだね。

恐怖に脅える賞金稼ぎ達だが、その後更にその顔が引きつった。奏の奥から、蒼二と罪歌が出てきたのだ。

元死罪六神でも最強クラスの二人だ。しかも、二人とも性格は凶悪極まりないときている。

「よお、由加。久しぶりじゃん。そのエプロンはどうかと思うが」

「蒼二。幾ら似合っていないとはいえ、言って良い事と悪い事があるわよ」

……初っ端からこの二人は喧嘩を売っているのかな？ とりあえず、助けて貰ったので良しとしよう。

すると、時雨が私に視線で目配せをしてきた。その視線の先には、硬直したままの母と美也子の姿。

息をつき、緊張しながら私は二人に近づいていき、店の中で話したいという旨を伝える。そして、店の中に入ると、

「……亜矢子って、わかってたんだ」

「うん……。娘の顔だもんね。笑いそうなのを堪えている顔とかは、

美也子そっくりだし」

「え……？ お母さんと由加さんは親子なの？」

私と母は全ての事情を知っている。だけど、美也子は何も知らない。この辺りは、母に任せよう。そう思い、

「美也子。少し、上に行つてくれるかな？ 私は大事な話があるから。後で、全部お母さんに話して貰うから」

「う、うん……」

美也子は私の方を何度も向きながら、厨房から出て行つてしまった。後に残ったのは、私と母だけ。

気まずい沈黙が流れる。当たり前だ。捨てた方と捨てられた方。昔の私だったら、間違ひなく殴っている。

それでも、今は違う。とりあえず、私から言う事は特に無いので、黙つて母の言葉を待つ。

「……最初見た時にもう気づいたの。美也子と亜矢子が並んでるんだもの。心臓がひっくり返りそうだったわ。」

絶対、私に復讐しにきたって思ったわ。全部バラして、私の家庭を壊されるんだと思つてた。でも、覚悟してた。

再婚した時も、美也子が生まれた時も、何時かこの幸せを亜矢子が壊しにくるかもって。それが、私の罪だつて」

「そんな事……しないよ」

「でも、私はそれ位の事をさせちゃうような事をしたんだよ……」

母はそう言うのと、地面に手をつき、土下座して私に深々と謝罪をした。それが、とても嫌だ。

私は母に近づき、手を握る。母の手が一瞬、ビクツと震えるが、すぐに覚悟したようにその震えを止める。

そして、そのまま腕を掴んで母を立たせると、

「土下座なんてしないで。母親に土下座させるなんて、ヤクザみたい」

「でも……でも私は……」

「貴女に捨てられたけど。今では、それでも良かったって思える。

……あの後ね、いっぱいあったの。

色んな人と出会って、戦って。何回も死に掛けたりしたけど、外に居る人達と毎日楽しくやってる。

多分、貴女と暮らしていたら、私は彼等とは出会えなかった。こんな楽しい日常は無かったと思うの」

「でも……実の娘を……お金で……」

「仕方ない。結果は結果。今更、過去は変えられない。反省は大事だけど、後悔は何も生まないよ。

私の分も美也子を大事にしてあげて。それが、私に出来る一番の罪滅ばしだと思って」

そう、過去は変えられない。どんなに悔いても変えられないんだ。私だって、時を戻せるなら戻したい。

棗由加ではなく、棗亜矢子の人生を歩んで見たい。そう思う事もある。暫く俯いていた母だったが、

ようやく顔を上げると、震える声で私にこう言った。

「亜矢子……一度だけ、一度だけで良いから抱きしめさせてくれるかな？」

「うん」

私は母よりも背が高い。母は背伸びするような格好で私を抱きしめた。それは、久しぶりの感覚。

私の記憶の奥底に封印されている、思い出せない記憶が、確かに「久しぶり」と認識させた。

結局、私には母を責める事なんて出来ない。この小さな肩。傷だらけの腕。きつと、相当苦勞してきた筈。

母も私も生きるのに必死だったんだ。だから　もういい。今気づいた。私は怒ってなんかいない。

今回だって私は　ただ、会いたいから来たんだ。そんな事を思っていると、私は母から体を離すと、

「もう行くね。仲間が待つてるからさ」

「うん……。亜矢子。もし……。もし気が向いたら、また来て頂戴。気が向いたらでいいから」

「どうしようかな……。うん。此処のお惣菜。無料で食べさせてくれるならいいよ」
ただ

「わかった。何時でも、亜矢子には無料で食べさせてあげる」

私と母は、微笑を作りながら一緒に外へと出た。外ではもう、粗方の作業が終わったようで時雨と罪歌と蒼二と奏しかない。

……ああ、そういえば。言う事があったんだ。私は母の方を向い

て、花丸惣菜の看板を指差し、

「あの絵。趣味悪いから、何とかした方がいいよ」

と忠告した。幾らなんでも、あの絵はないだろう……幼児が書いたようなぐちゃぐちゃの花丸だ。

私の言葉に母は暫く曖昧な顔をした後、やがてとても言い難い事を言うような顔を作り、

「アレは……亜矢子を書いたのよ？ 覚えてないかな。私に、亜矢子が始めてくれたプレゼントだった。

私はそれを自分への戒めとして、何時か、亜矢子が此処を見つけた時にすぐわかるようにして。

それで、この店を開いてからずっとアレを看板にしてきたのよ。美也子も何故か気に入ってくれてね」

「え……」

後ろで、蒼二が笑いを堪えているのが、見なくてもわかる。あいつめ、後で命に色々吹き込んでやる。

だが、流石に恥ずかしかった。まさか、自分で自分の絵を趣味悪いとか言う日がこようとは……。

顔を赤くしているがバレるのは嫌なので、私は流れをぶった切つて母の方を再び向き、

「じゃあ……また何時か。美也子には全部話してあげてね」

「うん……わかってる。全部、話すつもり。あ、亜矢子。今までの給料、持ってきてなさい」

母から渡された、微妙に分厚い封筒。私はそれをありがたく受け取り、

「じゃ、行つてきます」

「……は、はい！ 行つてらっしゃい」

そう言つと蒼二と時雨と罪歌と奏と一緒に、私の帰るべき場所へと帰る事にした。とりあえず、こいつらは

四人で来たらしい。仕方が無いので、私の部屋で今晚は雑魚寝という事に。時雨がスイートじゃないと嫌だとか

ごねていたがめんどくさいので全員で黙殺。その晩、皆が寝静まつた後に、私はゆつくりとベッドから起き上がった。

そのまま蒼二の体を優しく反意思で浮き上がらせ、ベッドで寝ている奏と罪歌の真ん中に置いてやる。

少し手の位置を入れ替え、蒼二が二人を抱いて寝ている状況を作ると、それを写真で撮つて命と狂のアドレスに送信。

無事に復讐を完了した私は、久しぶりに心地いい気持ちで眠りについた。そして 翌朝。

「きゃ……きゃああああああっ！ そ、蒼二さん？」

という奏の悲鳴で半分意識を覚醒させ、その後断続的に起きた蒼二の悲鳴によつて私は完全に目を覚ました。

そして、ゆつくりと順番に皆で支度して、駅へと向かう。蒼二はその最中も、今度はずつとメールを打っていた。

余りにもその表情が必死な為、若干の同情を覚えたが、すぐにどうでもよくなり、私は母と妹が住んでいる町を最後に見つめた。

色々と思う事がある数日間だったと思う。そう感傷に耽り、新幹線に乗ろうとすると、

「由加さん！」

と駅のホームに声が響き渡った。私がそちらを向くと、そこには息を切らした美也子が立っている。

「美也子……」

「お母さんから、全部聞きました……折角、折角姉妹だってわかったのに……！」

「うん。ごめんね。でも私、行かなきゃならないの」

「……もう、会えないの？」

美也子が寂しそうな顔で私を見上げた。私は優しく美也子を抱きしめると、ポケットの中でこっそり紙を反意思で作成。

それは、私の携帯電話の番号とメールアドレスが書かれた少し高級そうな紙。それを、美也子に握らすと、

「今度、電話かメールしてね。困った時はすぐに連絡するんだよ。」

「お姉ちゃん」が、力になってあげるから

「う、うん！」

「夏休み頃になったら、私も住む場所が決まってるだろうから、遊びにおいでよ。一匹危険な狼が近くに居るけど……」

「狼……？ お……お姉ちゃんも何時でも遊びに来てね。私、由加さんがお姉ちゃんであって良かった。嬉しかったから！」

「私も、美也子みたいな妹が居て良かった。お母さんを、支えてあげてね。きっと、今でもあの人は自分を責めてるから」

「わかった……」

そう言うと、ついに発車を知らせるベルが鳴ってしまった。名残惜しいが、これでもうお別れだ。

美也子が涙目で手を振っている。私も笑って手を振り替えた。そして 違和感。何故か、目が熱い。

よくよく見てみると、 ガラスに映った自分の顔は涙で溢れていた。これが、別れ。とても悲しい。

でも今生の別れじゃない。また、何時か会える。これは、嬉し涙なのだろう。とりあえず、そう結論付けて、

私は大切な居場所。仲間の居る場所へと歩いていった。

F i r s t c o n t a c t : 1 暴力と欲望の街（前書き）

今回は連投します。

First contact:1 暴力と欲望の街

その町は、二階堂特区と呼ばれる暗黒街。暴力と欲望の街。

ここでは誰もが平等、殺人犯でも浮浪者でも力があれば幸せに生きていける。そんな街。

財力でも腕っ節でも頭脳でも良い、とにかく人より何かが秀でていれば誰もが幸せになれる街だった。

だが逆に、力の無い者は人権すらない、永遠の負け犬。ある意味では天国と地獄、両方の顔を持っている。

その街の入り口には一人の少年が立っていた。乱れた長髪、ボロボロになった服。だが、目だけは死んでいない。

「ここが二階堂特区か……」

少年 真砂剣菱はそう呟いた。まだ中学生ぐらいの外見であるが、完全に中身は大人ほど。

復讐のためにまず力を得る事にした剣菱は、特区の中でも二番目に危険なこの街へとやってきたのだった。

汚らしい路地を歩きながら剣菱は周囲を見る。酒を飲んでいる者、非合法の薬でイっている者。

本当にクズが集まるような街だった。剣菱は嫌悪感を隠さずに路地をどんどんと歩き、中心通りへと出た。

まず目に付いたのはヤクザの多さ。堅気の服装をした者など全くと言って良いほど見かけない。

周囲には露天や店舗が並び、それなりの活気を見せているが売られているものは危険な物も多い。

「本当に、腐った街だな」

半ば呆れながら、剣菱はまたぼやく。とりあえず、しばらくはこの街に居るので宿を手に入れなくてはならない。

式神を使って、強盗でもすれば簡単に金は稼げるだろう。実際に、剣菱は”あの日”から今までそうやって生きてきた。

人を殺すことにもはや躊躇いは無い。全ては復讐を果たすその日まで生き抜く事が剣菱の人生の目標。

そんな事を、考えていると突如として大きな音が鳴り響き、通りでは新聞社の使いのような者が紙を撒いていた。

「号外！ 号外！ 特区の代表が変わったよー！」

代表？ と剣菱も気になり号外を拾いに行こうとした所、周囲にあったTVやビルにあるスクリーン。

全てが一気に切り替わり、豪華なホテルの一室が映し出された。

どうやら、特区内の番組らしい。

偉そうにソファーにふんぞり返って居るのは、自分と同じぐらいの年齢の少年。

「雨龍だ……」

「二階堂の三男がどうして……」

「やっぱ……殺しちゃったのかねえ」

周囲から、そんなざわめきが漏れた。すると画面に映っていた少年 二階堂雨龍はニヤリと笑い、

「俺がこの特区の新しい支配者だ。これより、新しい特区のルールを発表するぜ。」

まずは、兄貴の時に禁止されていた強盗以外の殺人禁止令。これ

は解除だ、存分に殺しあえ！

気にいらねえヤツ、邪魔なヤツ。全部殺して良いぞ。俺が許す。
つか、あらゆる犯罪が解禁だ。何でもやりな」

歡喜の咆哮が街を突き抜けた。それもそのはず、この街に居るの
人間の大半が犯罪者。

しかも理由無き犯罪者。ただ、金が欲しかったらとか安易な理由
で人を踏みにじってきた者達。

そんなクズ共にとっては、まさに雨龍の発言は最高以外のなんで
もない。

「だが、一つだけルールがある。それは、二階堂特区の運営にと
ってマイナスになるような行動をするな、だ。

爆破テロとか式神で街壊しまくった奴は問答無用で俺らが殺す。後、
二階堂への上納金は二倍な。

各家の派遣やヤクザのにーちゃん達は必死こいて弱い奴から搾取す
るんだな。以上。後は、好きにやりな」

再び上がる歡声。既に何人かはナイフや角材を持って、大通りに
も関わらず強盗を始めていた。

ある者はそれを無視し、ある者は周囲から野次を飛ばしたりして
いる。血が舞い、肉と肉がぶつかり合う嫌な音。

そして最後に歡声と悲鳴。地獄絵図のような光景が剣菱の視界に
広がっていた。

剣菱はそれから目を背けるように裏路地へと入ろうとしていた、
だが、またしても付近から悲鳴が上がる。

「やだあ……嫌だあ！ 離して！」

一人の少女が、汚らしい格好をした大人達に羽交い絞めにされ、

服を破かれていた。

下卑た表情を上げる男達。泣き叫ぶ少女。通行人は好奇な視線と、嫌悪が混じった視線で彼らを見ている。

「助けて！ お兄ちゃん助けてえ！」

その時、その声によって剣菱の死んだ妹の姿が助けを求めた光景を思いだしてしまった。

寄生型悪鬼に取り付かれた妹と一族。誰もが泣きながら殺してくれと願っていたあの日。

自分はただ何も出来ずに、ただ殺されていくのを黙って見ていた。それが、とても悔しかった。

やがて、剣菱はその雑音を振り払うように意識を集中して、自身の式神【天照】の力を発動させた。

「黙れエ！」

怒りとも悲しみともつかない感情と共に、剣菱の周囲から強力な熱線が照射された。

通行人を掠り、その熱線は男達の胸や頭を貫通し一瞬で命を奪い、或いは瀕死の重傷を負わせる。

しかしそれだけでは終わらなかった。更に別の方向から一陣の風が吹き、生き残った男達の首筋を切り裂いた。

血が迸り、歓声と悲鳴が上がると、剣菱はその風を放った方を向く。そこには無愛想な金髪の男。

「……………」

「……………」

一瞬目が合った。だが、二人はすぐに目を逸らすと、別方向へと向かって歩き出す。

一つ気になったのは、金髪の男の目。自分と何かが似ている感じがした、がやや距離が遠いためよく見えない。

そして剣菱は裏路地に消えるようにして行き、金髪の男は大通りの人ごみへと消えてしまった。

剣菱が特区に来てから一週間が経った。相変わらず、街には犯罪が蔓延っている。

だが、それを良しとしない勢力も出てきた。街では毎日対立が起こり、何人もが死んでいく。

それでも特区の人口は減らない。一人減れば人生に絶望した一人がまた来るといった図式。

そんな中、剣菱はこの前殺した男達が使っていたアパートの一室に住んでいた。

あの後強姦されかけていた少女が剣菱を追いかけてきて、このアパートの事を教えてくれた。

少女はこの特区に家族と暮らしているらしく、買い物帰りにあのような目に会ったと言う話。

無事に家まで送り届けてからは、もう会う事も無くなっていた。

「……金が、無いな」

ベットに寝転びながら、そんな事を呟く。隣に置かれた財布には小銭しか入っていない。

特区といえども、家賃はある。力ずくで払わなくても良いが、二

階堂を敵に回したらそれこそ死ぬ。

……とりあえず、滞納は止めよう。そう考えて、剣菱はベットから起き上がると鍵をかけて外へと出た。

「むう……」

特区から見える青空は綺麗だった。青空は世界のどんな場所にも平等に、美しい。

特区の最端には薄い膜のようなモノが見える。アレこそが、特区でどんな事件が起きようとも、

外界に知れ渡らない理由。聞いた話によると、外から見える特区は普通の街に見えるらしい。

だが、一步入ってみればそこは式神と暴力の巣窟。その理由は、常に同じ景色を写す結界によるもの。

そして、街を歩きながら剣菱は何か金が入る事はないかと思案をめぐらせた。だが、何も浮かばない。

本当にこのままでは、強盗でもするしかない。あまり気が乗らないが、そうやって生きるしかない。

「おにーさん」

「ぬ……？」

何時の間にか、目の前に白髪の少年が立っていた。染めた髪ではない、普通の白髪。

きっと大変な事情があったのだろう。勝手にそんな風に解釈していると、少年は笑顔で、

「この前、大通りで人殺ししてた人だよねー？ バビューン光線で」

「バビューン光線……………多分、我だろう」

「僕らね。今強い人集めてるんだよ！ だからおにーさんもどう？
一応実技試験とかあるけど」

「興味ない」

「あちゃー、おにーさん自閉症？ もうちょっと人と関わってかないとこの街では生き残れないよ？」

「一理あるが、我は今忙しい。また今度会ったら話は聞いてやろう」

「んー、わかりました。僕らいつも西通りの酒場に居るんで、興味あつたらきてくださいね」

「うむ」

そう言つと、元気よく白髪少年は駆けて行つて、やがて人ごみの中に消えた。

そして剣菱は本来の目的地へと歩を進める。建前上はジャンク屋となつてゐるが、汚い仕事を斡旋してくれるその店。

よくわからない機械の部品の隙間を縫いながら、店の奥のほうへと向かうとキッチンとしたスーツを着た一人の男。

パツと見た感じでは普通の町に居るサラリーマンのような外見。だが、特区ではかなりの有名人なその男。

「仕事を紹介して欲しい」

「君はあ……………この前大通りで式神を使つた子だね」

「そうだ。だが、出来るだけ殺しの依頼は避けたい。痛めつける程度の仕事を望む」

「そんな仕事があるかと思う？」

「あるだろう。復讐代行人のような仕事だ」

「くつくつ。若いのに随分知ってるね。確かに依頼はあるよ。街のチンピラの掃除だ。しかもさっき入ったばかりのね」

「是非、紹介して欲しい。それとも、我では腕が足りぬか？」

「いやいや十分さ。中々強力な式神だったよ。ただ一つ、問題がある。別に殺そうが殺さないがどっちでもいいんだよ。

だが、この仕事の報酬はたった一人分。勿論他の幹旋場から着てる人も居るだろうね。君ほど腕の立つ人も居るかもしれない。ここまで丁寧に教えてやれば、僕のいいたい事はわかるね？」

「請負人同士の殺し合いが予想されるのか」

「正解。それでもいいなら紹介するよ？」

「……頼もう」

男から連絡用の携帯電話と、大まかな仕事に必要な情報が書いてある紙を受け取ると早速剣菱は

チンピラ達のたまり場へと向かった。早くしなくては先に報酬を達成されてしまう。そんな思いからか足は速まった。

ターゲットは二十人ぐらいの武装集団。依頼人は二階堂家。つまり、彼らは二階堂の執行部隊が動き出すほどの

強敵ではなく、少し腕が立てば余裕と言ったところのレベルだろうと解釈した。よくよく書類を読んでみると、
どうやら特区の建物を破壊したり、二階堂直営の店からも強盗をしたため標的にされたりらしい。

「フン……」

殺しても良いぐらいの悪人だろう。そう判断すると、そろそろ目的の廃ビル付近。

剣菱は懷から小瓶を取り出し、それを一気に飲み干すと一息つく。段々と体が熱くなる感覚。

そして 剣菱の目が緋色に染まった。それは真砂が代々次いできた力 緋眼。

意識を集中させると、いくつかの式神の気配も感じられた。しかも、どこかで感じたような気配。

ビルの門を天照で破壊し、中へと進むと焦げ臭い匂いが立ち込めていた。周囲には幾つかの死体もある。

「……………」

耳を澄ますと、上の階から怒声や悲鳴が響き渡っている。急いで剣菱は階段を駆け上がり、

上の階へと行くとそこでは金属バットやナイフや拳銃を構えた男達。そしてその中心に居るのは

目映い弓を右手に持った 細身の男。剣菱も負けじと天照を照射して、とりあえず一人を殺した。

すると、男はこちらを向き、

「ああ？ 邪魔するならテメーも殺す」

「フン」

男も目にも止まらぬ速さで何発のも雷の弓を放つと、次々と黒焦げの死体を量産していった。

剣菱はその弓の合間を縫うようにして天照を放ち、同じように良い後を奪っていった。

流石に短期間にこれだけ殺すと、倫理もクソもなくなって来る。段々と心が冷えていく。

そして最後の一人に天照を連続して照射した後、剣菱の頬にチクリと痛みが走り、その横を雷が通過していった。

振り向くと、先程の男が弓を構えてこちらを狙っている。

「やはり、こうなるか」

「デメエも紹介屋から説明を受けたんだろ？ わかった事じゃないか」

「まあな」

「一応殺す前に自己紹介しとくぜ、俺あ……御崎暁だ」

「真砂剣菱だ」

二人はお互いの”苗字”に驚愕しつつも、平静を装った表情をした。

どちらもこちらの世界では名が通った家。だが、お互いの下の名前はお互いとも聞いた事が無い。

そして、これが後に親友となり、死罪六神のメンバーとなる真砂剣菱と御崎暁の始めての出会いだった。

F i r s t c o n t a c t : 2 更なる闇へ（前書き）

ただ、疲れた……

次回は雨龍とか万里とか、色々動きはじめます。

閃光と轟音鳴り響くビルの三階。剣菱と暁は休む事無く、走り続け必殺の一撃を繰り出す。

天照の閃光が障害物を貫くため、暁は常に移動しなくてはならない。

だが、こちらの霹靂は壁を貫けない分、大体ではあるが矢の軌道を変えることができる。

条件は殆ど同じ。後は、体力の勝負。

（負けねえ……この程度、あの時に比べれば……！）

暁の脳裏に思い起こされたのは、悪鬼の餌にされた時、死に物狂いで逃げた光景。

迫りくる異形から、泣きながら、怪我の痛みを無視しながらひたすら叫んで走ったあの日。

一度地獄というもの見た暁には、この程度の事なら何の苦でもない。

一方の剣菱も、家の者全てが寄生型悪鬼に支配された時に、地獄を見た。

いつも笑いあっていた人々が、急に異形に取り付かれ、人としての理性を失ってしまった。

逃げた。逃げた。妹の手を引いて。だが、その妹も 最後には寄生されてしまった。

（我は死ぬわけにはいかん。まだ　まだ復讐が！）

そして、二人が同時に飛び出し、相手に全力の一撃を叩きこもうとした時だった。

窓ガラスを突き破って、莫大な炎が二人へと迫る。咄嗟に転がり、壁に隠れるも、

何箇所かは火傷を負ってしまう。その炎はすぐに霧散し、それが晴れると一人の少女が立っていた。

黒髪で少し肌の焼けている少女。その目は最近どこかで見た事あるような目をしている。

コツコツとブーツを鳴らし、少女は剣菱と暁から少し離れた場所で止まると、

「報酬、ちょうだい」

無慈悲な声だった。ただ、要求しているだけの声。その言い草に怒りを覚えた暁は、

ゆつくりと壁の影から出ると、怒りに顔を歪ませ、

「おいおい、姉ちゃんよ。テメエ、何言ったかわかってんのか？」

「うん。報酬を寄越せと言ってるの」

「チツ……おい、真砂。一旦休戦だ。この女にお仕置きしてから決着と行こうぜ」

「うむ。気をつける。只者ではない」

暁の言葉は強がりという事はわかっていた。それほどまでに、目の前の少女は強力な力を持っている。

剣菱も背中中に冷や汗が伝うのがわかる。そして、二人が同時に式神の力を放とうとした時、

「遅いよ」

足元に既に炎が纏わりついていた。それは一瞬で燃え上がり、暁の体が炎に包まれる。

剣菱はギリギリのタイミングで緋眼を発動させ、高速で移動しながら少女へと天照を放とうとする。

だが、背後に回ったときに少女は確かに反応し、振り返った。

その瞳の色は、自分と同じ緋色。衝撃が剣菱に走る。少女はその動揺を逃さずに攻め込むと、

剣菱の腹部に強烈な拳。更に一瞬後には荒れ狂う炎が生まれ、腹の中で爆弾が爆発したような錯覚に陥る。

「君、やっぱり緋眼使いか。真砂って言ってたからもしかしたらとは思ってたけど」

「貴様は誰だ？ 見た所八神ではないようだが……」

「私は、」 秋月「罪歌。もう、これでわかるわよね？」

秋月は自分達緋眼の一族の本家。だが、何年か前に悪鬼の襲撃を受けて全て死んだと聞く。

何故、滅んだはずの秋月の名を名乗る少女が、こんな腐った街に居るのだろうか。

次々と疑問が浮かび、剣菱はそれを口にしようとしたが、罪歌のブーツが顔にめり込み、剣菱の意識はそこで絶たれた。

次に剣菱が意識を取り戻したのは、小汚い病院のベッドの上だった。何故、こんな所に。

という疑問が沸き、そして自分がまだ生きている事に正直、驚きを覚えた。

秋月罪歌に自分を生かしておく理由なんて無かった筈。なのに、何故殺さなかったのだろう。

気まぐれか、それとも何か事情があったのか。考えても答えは出ない。仕方が無いので、

剣菱は起き上がるとベッドの上から降りた。式神で治癒されたのか、痛みは殆ど無い。

サンダルをペタペタと鳴らしながら、何となく剣菱は病院の屋上へと向かう。

「む……」

屋上へ続くドアを開けると、自分と同じく、病院支給のパジャマを着た御崎暁が居た。

相変わらず悪い目つきに、猫のプリントがしてあるパジャマは力ケラも似合ってなかった。

そして、ふと自分のパジャマを見てみると、そこにはウサギのプリント。何か、無性に裸になりたい気分になる。

「やっと、起きたか」

「うむ。快眠であった」

「どこが快眠なモンだっつの。仕事の金は取られるわ。変な女に殺されかけるわ。」

あーあ……これで、あのアパートはおんだされんだろな。また野良猫生活に逆戻りだぜ」

「いいではないか。そのパジャマの猫みたいで」

「ぶつ殺すぞテメええエツ！」

暁自身も猫柄は嫌なようで、声を荒らげて剣菱を睨むと猫のプリント部分を何度も引っかく。

「ふむ……では、我のアパートに来るか？ 一人であの家賃を払うのはどうにも厳しい。」

お互い半々の折半で行こう。そうすれば貴様も晴れて野良猫卒業だ。おめでとう」

「は？ お前正気かよ？ このクソの巣窟みてーな二階堂特区で、よくそんな甘っちょろい事言ってられんな」

「背に腹は変えられん。貴様もそうだろう。それに、貴様は腐ってもあの”御崎”の人間だ。」

それなりの訓練も受けている筈。実力にも不足は無いだろう」

「テメエもあの緋眼の一族だろうが。八神、千島と並ぶ真砂。相当な名家だぜ」

「だが、もう無い」

「……は？」

「真砂は我以外寄生型悪鬼にとりつかれ、千島蒼威と八神正宗に全員殺された。

父も母も祖父母も、友人や叔父や叔母も。そして、妹も殺されてしまった」

「マジかよ……」

「力が無いのが悔しかった。妹を最後まで守りたかった。可能性はあったんだ。

あの時奴らが殺さずに監禁でもしていてくれたら、もしかしたら寄生型を抜えるような

式神使いが居たかもしれない。外科手術で摘出できたのかもしれない。

その可能性を全て捨てて……奴らは真砂を殺し尽くした。我には、それが一番我慢ならない」

暁に言うのではなく、独白するように剣菱はブツブツと小さな声で呟いていく。

流石の暁にもこれには言葉が出ない。寄生型悪鬼の恐ろしさは聞いただけでも悲惨なビジョンしか見えない。

それを、目の前に居る男は見てきたのだ。それも、家族が寄生されるという最悪な場を。

同じ地獄を見てきた人間。共通の敵は人と悪鬼。何となく、自分達が似ている事を二人は同時に悟っていた。

しばらく黙って、お互いそっぽを向いていると、先に折れたのは暁の方だった。

「仕方ねえから 手エ組んでやるよ」

「……そうか」

「改めて自己紹介するぜ！ 俺は御崎暁。よろしくな！」

「うむ。我は真砂剣菱。よろしく頼むぞ、暁」

どちらとも無く笑うと、二人は固い握手を交わし一度病室へと戻って帰宅の準備を始める。

そして、一度剣菱が借りているアパートに暁が今住んでいる場所から引越しの荷物を持ち出そうと二人で話しながら歩いていると、眼前で大きな爆発が起きた。咄嗟に反応し、建物の影に隠れてやりすごすと、近くにあったパチンコ屋から数人の男が楽しそうに飛び出してきた。

式神の気配が二つ。後は銃火器を装備している集団。楽しそうに拳銃を乱射し、周囲に破壊を振りまいている。

アホだ……と剣菱は思う。雨龍の言っていた犯罪奨励政策の表面しか彼らはわかっていないのだろう。

確かに、あらゆる犯罪が解禁だ。だが、二階堂特区のマイナスになるような事をしてはいけない。

今回の騒ぎはどう考えてもマイナスだろう。あの政策の本当の狙いは、こういうアホを早急に、そして合法的に二階堂特区から消す為だという事は

よくわかっていた。結局、このまましばらくいけば二階堂特区は今より治安がずっとマシになるだろう。

二階堂雨龍という男は暴力的な思考の持ち主だと大半は思っているだろう。だが、実際は実に効率よく特区の安定を図る政策を打ち出しているのだ。

「どうするよ。このまま二階堂の鎮圧が来るのを待つか？ 俺らで殺すか？」

暁もそれには気づいていたらしい。だが、剣菱はそれを聞きながら視線の一番奥を見ていた。

逃げ惑う人と人の隙間に、黒衣の長身の男が堂々と歩いていた。

その姿は、異質。

どう見ても只者ではない。そして、強盗していた男達もようやく黒衣の男に気がついたようだ。

だが、笑って武器を向けている。愚かだ。あんな異常な気配を出す人間を前にして、笑ってられる神経が信じられないと二人は息を呑む。

「どうしたよ。おっさん。何か文句でもあるのか？」

「……黙れ。俺は今、機嫌が悪い。貴様等の所為で、ラーメン屋が途中で店を閉めてしまったではないか」

そう口にする、男は半分しかスープの入っていない器を取り出し、ぐいつと男に近づけた。

「アイツは……！」

すると、剣菱の背後から様子を伺っていた暁が驚いたような声を上げた。

「知っているのか？」

「ああ……」

暁の顔には冷や汗が浮かんでいた。その間も男達の言い合いは続いていく。黒衣の男が差し出した器を見て、男達は大笑いしている。

「こいつ小せえ」とか明らかに余裕をかましすぎていた。やがて、式神使いの男が奥の方から出てきて、
黒衣の男に巨大な斧を突きつけた。だが、黒衣の男は動じる事なく、相変わらず器を差し出している。

「マージ、おっさんうぜえから。殺されてえの？」

「足りない分の賠償しろと言っている」

「ハッ。舐めやがって！　ンなもん知るか！」

「なら貴様の血で贖え」

黒衣の男が洗練された動作で右手を振った。それと同時に、男の斧を握っていた腕がごとりと音を立てて地面へと落ちる。

男はそれを他人事のように見た後、顔を引きつらせ悲鳴を上げた。傷口からは夥しい量の出血。

それを器で受け止めながら黒衣の男は楽しそうに笑った。当然、男の仲間達も動き出した。拳銃を構え、或いは剣の式神を構え、だが

「アイツは……八神を追放された長男の八神村雨だ。あの八神正宗の兄貴だよ。

ウチは八神と仲悪かったから顔を覚えさせられたんだ。何でだよ……何であの戦闘狂がこんな場所に……！」

暁の声は震えていた。その気持ちは剣菱にも良くわかる。黒衣の男　八神村雨からは濃密な死の匂いがした。

現に今も眼を緋色に染めて、刀の式神を使い、凄まじい速さで男達の体を切り刻んでいる。剣の技術だけみても、凄まじい。

アレが　八神の直系。自分がこれから復讐しようとしている家を追放された人間。正直、背筋が寒くなった。

「ありやりや、村雨さん。またこんな所で力使っちゃってもー！」

突然、剣菱と暁の背後から幼い声が響く。振り向くと、そこには数日前に剣菱に話しかけてきて白髪の少年が居た。

「はろ。おにーさん。また会ったね」

「お前は……あの時の！」

驚く剣菱の間をすり抜け、白髪の少年は村雨へと向かってゆっくりと歩いていく。そして、

「村雨さーん！　もー終わりー！」

「む……」

少年の声によって、村雨の動きが止まった。男達は既に息絶えてしまったようで、ピクリとも動かない。

疲れたように、血が並々と注がれた器を投げ捨て、ついでといわんばかりに、持っていた刀をも投げ捨てる。

器は音を立てて割れ、刀はすぐにこの世から消えてしまった。それを見届けると、

「つまらんな。クソ野郎の癖にクソ見たいな式神でクソみたいな応戦しやがって、余計にクソ腹が立ったではないか。

ナナシ。一回でいいから貴様を殺させろ、そうすればこのクソみtainな気持ちもクソ晴れるかもしれん」

「嫌だよ。どうせなら、あっちのにおにーさん達とやり合った方が楽しいかもよ」

「……ほお」

ナナシと呼ばれた少年の指が剣菱と暁の方を指差した。それを見ると、村雨の顔に獰猛な笑みが張り付いた。

肉食獣が獲物を見つけた時のような表情。そして村雨は、ゆっくりと二人へと向かって歩を進めた。

当然、剣菱と暁は応戦体勢を取った。その身のこなしに少しは楽しめそうだと感じた村雨は、再び式神を召還。

「ほほお。ガキにしては中々の気配を出すじゃないか」

そして、村雨の目が緋色に染まった瞬間。剣菱と暁は、はじけるようにして村雨へと突進した。

剣菱は家に伝わる秘伝の薬を口に含み、緋眼を発動させて暁よりも前へ。暁は手に雷を纏わせて剣菱のやや後ろを走る。

先制攻撃。剣菱の周囲から熱線が飛び出し、村雨を襲うがそれは難なく回避されてしまう。そして、刀を振り下ろす一撃。

「っ
！」

それを懐から取り出したナイフで何とか矛先だけは変えた。豪快な一撃がアスファルトを砕いた瞬間、

今度は暁が雷の弓と矢を形成し、村雨が防御体勢を取れない体勢の時に一斉に矢を放つ。確実に、これは避けれない筈。

だが、村雨は緋眼使い。ギリギリで反応し、何とか矢を避けた。

「ナイスだ、暁」

バランスを大きく崩した村雨の背後に剣菱が迫る。天照の熱を拳に集中させ、膨大な熱を持つ拳を形成。

防御が出来ないと悟った村雨は何故か、持っていた刀を地面に突き刺し、剣菱へと向き直る。

だが、同じ緋眼使いでも流石にこのタイミングでは剣菱の方が圧倒的に有利。未だ防御体勢を取れていない村雨の

顔面に拳を叩き込もうとした時だった。突如として先程の男達が流した鮮血がボコボコと泡を立て、剣菱の顔へとかった。

「ぬう！」

目を潰されてしまった所為か、剣菱の拳は空振りし、その腕を逆に村雨へと取られてしまう。

そして、腹部で爆弾が爆発したかのような凄まじい衝撃。殴られたとわかった時には更に、顔面に一撃。

そのまま暁目掛けて村雨は剣菱を投げつけた。そして、刀を再び地面から引き抜き、剣菱達に突きつけると、

「及第点という所か。喜ぶがいい、貴様等を今日から俺達の組織の一員にしてやる」

最初村雨が何を言っているのか理解できなかった。組織の一員？何だそれはといった感じで

剣菱と暁が目の前に居る村雨を見つめていると、白髪の少年がニヤニヤ笑いながら近づき、

「じゃあ、案内するよ。僕らのボス達の場所にね。そっちのバビューンのお兄さんには前に場所言っただと思うけど」

「うむ。それでは腹も減ったし帰るとしよう。ほれ、くびり殺され
たくなけりゃさっさと立て」

村雨に強引に立ち上がられ、痛む体の部分を押さえながら剣菱
と暁は村雨と白髪の少年に並んで歩き出す。

これからどうなるかわからない事が気かりなのか、二人は終始
俯いている。否。笑っていた。

この男達についていけば絶対に強くなれる。そんな確信が二人に
はあった。そう、自分達は力を求めてこの街に

来たのだ。随分と遠まわりしてしまったが、再び復讐の道を歩め
る。剣菱は家族の仇を討つため。暁は家族に復讐する為。

正反対の理由を持つ、二人の式神使いの少年は低く笑いながら、
更なる闇の中へと進む。その先に、何があるのかも知らずに

First contact:3 守りたいもの（前書き）

正直、このFirst contactはPAST書くよりも悩んで書いてたりします。

過去編って難しいですね。ホント。

十名家が関わっているので、PASTと繋がる箇所も意外と多く、微妙に後々に重大になる設定とかも盛り込んであるので、お楽しみいただければ幸いです。

First contact:3 守りたいもの

「うーちゃん！ 特区の代表就任おめでとうございます！」

パンツと音がして、二階堂雨龍の前で粗末なクラッカーが一回音を立てた。ここは、二階堂特区の管理棟の中。

本家から少し離れた場所にある大きなビルの最上階の部屋だ。そこに居る人間は、現在二人。

十名家の一つ、三枝家の次女、三枝万里と二階堂家の三男、二階堂雨龍だ。雨龍の机の上には万里が買ってきた

様々なお菓子や飲み物が置かれており、雨龍は万里の祝いにやや苦笑しつつ、

「ありがとよ」

と口にして万里の頭を撫でてやる。万里は雨龍よりも二つ年下なのだが、外見が非常に幼い為に年よりかなり

低く見られることが多い。だが、小学生は小学生でも大人が束になっても敵わないほどの力を持っている。

普段は普通の女の子なのだが、剣を握った時の万里は凄まじい。歴代の三枝の中でもかなり拔きん出た才能といえる。

「これで、うーちゃんのパolicyが上手くいけば、龍一様や竜男様からも認められますよね。」

私、いっぱい協力します。お父様から暫くお姉様と一緒にうーちゃんに付いてるようになって

指示されましたから。暫くは一緒に居れますですよ」

「ああ……ま、何とか上手く行きそうだわ。二階堂特区に利点は犯

罪者の多さだがよ。龍介の管理情報を

見てるとな、行き過ぎ感がどう見ても漂っているし、小物臭が酷いんだわ。まずは、アイツの匂い消しからだ。

二階堂特区に只の快樂馬鹿は必要ねエ。これからは、新しい犯罪の街だぜ。全く、クソったれな事によオ」

「どんな街にするつもりなの？」

「まずは、治安を良くする事。居住区域のレベルをもう少し上げて、少しワケアリ程度の間人も住めるようにする。

このクソったれな治安じゃ相当切羽詰った野郎しか来やがらねエしなア。そして、二階堂の絶対的権威がほしい。

安全の保証を完全に二階堂が掌握する事によって、上納金をもう少し上げる。流石に治安良くすりゃ、反論は

出ねーだろうし。後はまあ、この前演説した通りだ。あらゆる犯罪が解禁。だが、二階堂の迷惑になる事は禁止。

頭の良いヤツはわかるだろうが、これはもう商売的な意味でしか効果をなさねえって事さ」

「うー……難しいです」

「つまり、強盗や重度の傷害は確実に駆逐対象、その代わり、売買だけは何でも自由って事だ。

流石に薬の類には気い使うが、後は自由。何でも売れ。何でも買え。人間でも物でも何でも売買可って話」

「成る程。流石うーちゃん。わかりやすいですっ」

そう言い陽気に笑う万里を尻目に、雨龍は一人その他の懸案事項についても考え始めた。

大体の問題はクリアした。だが、一つだけ大きな問題がこの街に残っていた。というよりも、生まれてしまった。

それは余りの治安の悪さに耐えかねた一部住人が始めだした自警団という存在。その数は十数人と多くはないが、

どれもこれもが、中々の式神使い。二階堂の下っ端達ではいくら予知の力があるとはいえ、勝つのは難しい。

だが、このまま彼等の存在を許してしまえば、雨龍の理想とする特区を作るのに大きな障害となってしまうのだ。

「ケーキ。ケーキ。うーちゃん好きなものマロンケーキ。私が好きなミルフィーユー」

雨龍は呑気に歌を歌いながらケーキを箱から出している万里を見つめた。万里は、雨龍にとってかけがえのない

存在だ。母親が死に、孤独だった雨龍の前に現れた万里は、二階堂によって傷ついた心を癒してくれた唯一の存在といえる。

龍一や竜男が望む大悪党、二階堂雨龍。その結果、「人でなし」

「人間のクズ」「二度と近づくな」とはもう数え切れないほど

言われてきた。あらゆる人間から恨みを買い、暗殺されそうになった数等もはや数え切れない。

それでも、雨龍の傍に万里は居続けてくれている。全てを許し、受け入れ、一緒に居てくれている。万感の感謝があった。

（万里を……守るには……）

三枝は二階堂の下の家だ。万里の姉の千里は、好きな人が居るのに何時かは龍一の女にされてしまうだろう。

もし、千里がその人間と結ばれてくれたらそんな事にはならないかもしれない。だが、その時は今度は万里が

龍一の玩具にされてしまうだろう。そんなのは、絶対に嫌だった。

千里にも万里にも幸せで居てほしい。

だから この二階堂特区は絶対に成功させなければならない。
ここでの功績を認めさせ、妾の子という

立場から脱却しなければ雨龍は一生二階堂に屈して生きていかなければなくなる。 それも嫌だ。

「っ……」

雨龍は万里に気づかれないようにこっそりとパソコンを立ち上げると、部下宛にメールの作成を開始。

その内容は、自警団の詳細の調査・警告というものと二階堂の本家から精鋭部隊を派遣しろというもの。

二階堂特区に、騒乱の嵐が吹き荒れようとしていた。だが、雨龍は迷わない。守りたいものが、目の前にあるから。

二度と失わないために、二度と後悔する事がないように。

「はっ、はっ、はっ、はっ！」

何も見えない暗闇。二つの荒い息遣いだけが聞こえる。それに加え、三つの人の気配と、三つの式神の気配がする。

真砂剣菱は感覚を研ぎ澄まして、味方である暁の気配を掴むと、もう一つの気配。八神村雨の位置を特定しようとした。

だが、出来ない。大まかな方角だけはわかるのだが、距離感が全くつかめないで居る。剣菱は、利き手に握っている

短刀を握り締め、周囲を伺うもそこは相変わらずの暗闇。そして、背後で足跡。咄嗟に緋眼を発動させて、しゃがむと

その上を刃が通り過ぎていく感覚がした。すぐさまその位置目掛けて短刀を振るうも、手ごたえは無し。

「バカめ、振って良いのは確実に当たると判断した場合と言っただろに」

直後、腹部に凄まじい衝撃。腹の中の物が一気に喉を通り抜け、剣菱は跪いて嘔吐した。すると、暗闇の中で

指を鳴らす音が聞こえた。それと同時に、部屋の照明が点灯し、目をすばめながら剣菱は状況を確認した。

ここは、地下にある村雨達の訓練場だ。一ヶ月ほど前から、この辺り一帯で剣菱と暁は村雨達と共に訓練している。

今日は暗闇の中での戦闘訓練。痛む体を傾けて周囲を見渡すと、ボコボコに殴られて気絶している暁の姿も見える。

「ほれ、さつさと立たぬか。一ヶ月も俺様が直々にコーチをしてやっているというのに、貴様等は相変わらずカスではないか。」

俺様のプラン通りだったら、とつくにナナシと同格程度にはなっていると思ったのだが、現実やはり上手いかな」

そうばやく村雨を尻目に、剣菱は立ち上がると暁を起こしに行った。二、三回名前を呼ぶと、暁は頭を振って

ようやく起き上がり、ばつが悪そうに俯いてしまう。だが、剣菱には微妙に村雨が褒めているのがわかっていた。

一ヶ月前はクソだったが、今はカスだ。一応、汚物ではない。それなりに評価してもらっているのだと考えてもいいだろう。

というか前向きでなきゃこの男とは付き合えない。と剣菱はこの一ヶ月で理解していたので、もはや考えない事になっていた。

そんな二人が起き上がるのを見ると、村雨は再び獰猛に笑いながら言う。

「よし、飯行くぞ。飯。よく殺しあって、よく肉を食う。これぞ、生物の本来のあり方だからな」

絶対違う　と二人は胸の中で呟き、村雨の後へと続いた。階段を上がって、たまり場である酒場の一階フロアへ。

もう夕方な所為か、それなりに繁盛している。所々で喧嘩が起こり、はたまた下世話な話をしているが、

誰も彼もがそれなりに楽しそうなので、特に気にせず三人が歩いていくと、目の前に一人のメイド服を着た少女が現れた。

天真爛漫という言葉が似合いそうな、柔和な表情。黒く艶やかな黒髪。その少女を見ると、剣菱と暁は顔を顰めた。

「ありやりやらん。まった、村雨にボコられたのー？」

それはこの前会った少女　秋月罪歌。村雨曰く、この酒場の最高権力者との事。しかも厄介な事に、秋月罪歌は

二重人格だった。今出ているのが、彼女のもう一人の人格、緋澄である。剣菱はこの良く喋る緋澄の事が苦手だった。

だが、村雨は剣菱達に向ける顔とは違い、表情を緩めると、

「ええ。このカス共ときたら、今日も今日とて俺のサンドバックに成り下がりにやましてね。

これから肉を食わせて、もう少し肉食獣としての気概を持たせようと思案していたところなんですよ」

「そりゃ、いいねー！ アタシもお肉食べたいけど、まだバイトの時間だからねん。今度はアタシ”達”も連れてってよー」

「わかりました。……今日は罪歌はお休みで？」

「うん。今日はねん。あの日だからさあ。罪ちゃん調子悪そうで、変わりにアタシが出てるってわけよん」

「ご苦労様です。では、我々はこれで」

「はいはいー。背後には気を付けてねー」

緋澄に送られて三人は酒場を出ると、大通りを歩いていく。村雨達と出会って一ヶ月近く経つが、二階堂特区はそれなりに治安が良くなっているようであった。凶悪な犯罪は日に日に減少し、明らかに堅気な人間も偶に見かけるほどに。

それでも、まだ堅気の人間は住めないだろう。だからこそ、自警団が必要だと八神村雨は言う。聞いた話によると、村雨は

この街で何か商売を始めようとしていた所、偶然白髪の少年、ナシ。それと行動を共にする秋月姉弟と出会ったらしい。

八神村雨は今でこそこれだが、基本的に家に縛られている類の人間だ。だからこそ、秋月には絶対的な忠誠を誓っている。

「そういえば、村雨。秋月の弟の方とはどのような人間なのだ？」

ふと気になってそう村雨に剣菱は聞いてみることにした。

「ハッ。姉がアレだからなあ……どーせ、弟のほうもロクでもねえに決まってるじゃねーか」

暁がそう茶化すも、村雨に拳骨を一発くらいすぐに大人しくなっ
てしまう。そして、今度は村雨が口を開いた。

「狂はどちらかというと、お前等よりは大人だ。俺様と出会っ
ずと、ナナシと緋澄と囚と罪歌の相手を

していたらしいからな。相当精神年齢が高いぞ。少なくとも、暁
貴様のようなカスよりは上だろう」

「るっせえんだよクソおやじっ!」

「ほほお。俺様がオヤジか。……ほほお。ほおほお。うん。ああ、
イラついてきたぞオ!」

再び村雨の拳骨をくらい、暁は頭を押さえながら黙って歩き出
した。剣菱も肩をすくめ、村雨の後に続く。

そして、三人がほぼ毎日通っている食堂へと辿り着いた。剣菱と
暁がメニューを見るまでも無く、

店員に「こいつら二人には肉とビールと飯」と言い放ち、自分は
何を食べようかを真剣に悩んでいる。もはや、これにも慣れた。

暁は近くにあった式神関連の新聞を手に取り、剣菱と自分自身の
前に広げる。

「お、七海と鴻巣の抗争にやっとケリがついたか……。やっぱ、十
名家の喧嘩ってスゲーなんかねえ。相手は海の藻屑だってよ」

「わからん。我が見た事ある有名どころは、八神正宗と千島蒼威だけだ。それでも、奴等は十名家に属しておらん。

あの二人とも、凄まじい式神だったが、十名家に属するという事は、やはりもつと強いのではなからうか」

「……ふむ。いい疑問だな」

メニューが決まったのか、何時の間にか村雨が珍しく機嫌が良さそうな顔で剣菱と暁の方を見ている。

剣菱は意を決して、触れてはいけなさそうな事を聞いてみることにした。下手すれば殺されるかもしれない。だが、それでも聞きたいことがあるのだ。

「八神正宗は、強いのか？」

そう問うと、一瞬の間が空き、

「強い。何故だか知らんが、俺様が海外で教会とか苛めてた際に、別人のようになってやがったな。

アレは子供の頃から捻くれに捻くれていたんだが、どういうわけか、一本筋が通っていやがった。

確実に蒼威の影響だろう。いや、陸人のバカ小僧の方が？ どちらでもいいが、今までは段違いだった。

あの日皆殺しにしてやろうと思っていたんだがなあ……あれは俺様の人生最大の誤算だった」

そう言つと村雨は左腕を差し出し、暁と剣菱へと見せる。よくよく見てみると、それは義手であった。

状況から察するに、八神正宗に左手を切り飛ばされてしまったの

だろう。暁と剣菱は押し黙ってしまいが、
当の村雨は涼しい顔をしてそのまま黙って義手を弄り始めてしま
う。

そして、暫くすると大量の焼肉が乗った更の上に山のようなご飯
が盛られた皿とビールが三本運ばれてきた。

抵抗しても仕方が無いので、剣菱と暁は黙々とそれを口に運ぶ。
味は悪くないのだ。

村雨は幸せそうな顔で北京ダックなんかを酒のつまみでつまんで
いる。その後、完食すると村雨はテーブルの上に
五千円札を起き、

「さて、俺様はこれから枕営業があるから、このまま仕事場所に向
かうぞ。釣りはくれてやるから、後で好きなものでも食え。

ちなみに、満腹の状態で腹を刺されたりすると、死亡確率が格段
に跳ね上がるからな。夜道は気をつける事だ。

しかも酒も入ってて頭がフワフワするだろう。ふはははは！ 貴
様等に喧嘩を売るように何人か仕向けておいたから安心しろ。

確実に襲われるだろうから、殺されずに家に帰って、また明日俺
様の所に顔を出せ。そしたら貴様等を次のステップへと進めてやる
うではないか」

そう最悪な言葉を吐いてくともはや振り返らずに、村雨は食堂か
ら出て行った。

村雨と別れ、剣菱と暁は特にやることも無いので二階堂特区をブラブラとろついていた。

あの酒場を拠点とした自警団に入ってからというもの、ようやく二人はこの街に馴染んできた気がしないでもない。

顔見知りもだが徐々に増えてきたりはしていたし、逆に今のうちにこつやって命を狙われる事だつてしばしばある。

「ふむ……」

「つたくよ。あのおっさん、何考えてやがんだ！」

現在剣菱の前に倒れているのは、拳銃を持った男達の死体。剣菱と暁はこの男たちの事を知っていた。

彼等は下っ端ではあるが、立派な二階堂の一員。狩猟部隊とも呼ばれる二階堂特区の闇とも言える存在。

こんな男達に突然命を狙われては流石の剣菱達でもただでは済まない、と思っていたが案外あっさりと片付いてしまった。

八神村雨の訓練は非常に厳しいものだったが、流石にこれは今考えても背筋が震える。

早々にこの場を立ち去ろうと、死体はこのままに歩いていた裏路地から走っていくと、

「きやつ」

路地から出た所で誰かとぶつかった。剣菱達よりも背の低い人間だったので、こちらは倒れはしなかったものの

相手は転んでしまう。そして、よくよく見てみると、ぶつかった子は何処かで見えた女の子。

「む。お前は……」

「あ、お兄ちゃんだ！」

ぶつかつたのは剣菱が特区に来た初日に助けた女の子だった。相変わらず、危なっかしいというか

今日まで生きていられたのが不思議なくらいである。

「ん、お前。アマネと知り合いだったんか？」

すると後ろから歩いてきた暁が、微妙に驚いた顔で剣菱へと問う。
剣菱も驚きを隠せなかった。

お前もかとても言いたげな顔で暫く二人が見つめ合っていると、
女の子　アマネは楽しそうな声を上げた。

「暁お兄ちゃんと光線のお兄ちゃんはお友達だったんだね」

「うむ。それと、まだ名を名乗っていなかったな。我の名は真砂剣菱だ。お前は？」

「アマネだよ。よろしくね、剣菱お兄ちゃん」

「うむ。それで暁、何でお前はアマネと知り合いなのだ？　ま、まさか……お前。このクスが！」

と、剣菱が犯罪者を見るような目で暁をみた。

「ふ、ふざけんなコリア！　俺はコイツが危なっかしくて、イライラしてきたから式神の使い方を教えてやってるだけだったの！」

「アマネ。本当にそうなのか？」

「うん！ 式神って面白いよね。暁お兄ちゃんに教わってから、変なお兄さんを三人ほど追ひ払っちゃった」

それを聞くと、剣菱は安堵したように胸をなでおろした。二階堂特区は、力が全てである。

だから、アマネのような力が弱い女の子は全て強者の慰み者や玩具とされてしまうのが、実情であるのだ。

だが、式神を得た事によって幾らかはマシになるだろう。そこまで思つて剣菱は、自分の本心に気がついた。

自分は力が得たくて、八神村雨の弟子となつた。だが、本当に、自警団というものに惹かれたのは、こういう弱いもの

を守りたかつたのかもしれない。妹を守れなかつたあの頃とは違う。今の剣菱にはそれが出来る気がした。

これから復讐に生きようとしているものが、こんな事を思ふのはバカらしい。と、自分の中で意見が出るも、

それはそれ、これはこれ。と剣菱はそれを受け入れた。復讐は、する。だが、守りたいというモノだつてあるのだ。

「お、おい剣菱。いきなりニヤけるとか、気味悪いぞ？」

「剣菱お兄ちゃん。何か楽しい事でもあつたの？」

二人の問いに剣菱は答えずに、ただそのままの笑顔を返したただけだつた。

その翌日、二階堂雨龍は自分の執務室で頭を抱えていた。昨日、警告の意味も兼ねて自警団に最近入った

少年二人に刺客を差し向けたのではあるが、全員返り討ちという結果になってしまったのである。

監視カメラの映像から二人の事を調べてみると、一人は御崎の裏切り者。しかも、直系である御崎朱音の兄にあたる男。

もう一人が、緋眼の一族の真砂。全員悪鬼に憑かれ、八神に皆殺しにされたと聞いていたがまさか生き残りが居るとは思ってもいなかった。これは、絶対に二階堂特区の脅威へと成りえる。

「仕方ねえ……か」

そう呟くと、電話を取つてとある番号を押す。これは、一種の賭け。雨龍は絶対に負けるわけにはいかない。

その為なら十名家になんかこだわつてられない。もしもの時の為に最強のカードを揃えておく必要がある。

数コールすると、電話が繋がった。出たのは勿論その家の使用人家の名と、下の名を敢えて別々に名乗ると、

暫くお待ちくださいと言われ、待つ事二分ほど。ようやくお目当ての相手が出てきた。

「もしもし、お電話変わりました。御崎家長女、御崎朱音でございます」

F i r s t c o n t a c t : 4 兄と妹（前書き）

緋色の眼執筆当時は、文章力がカケラも無かったので
あんまりな戦闘シーンだった暁と朱音ですが。
ようやくリベンジを果たせた気がする…

First contact: 4 兄と妹

何かイベントでもあるのか、今日の酒場は思いのほかすいている。もはや、やる事が無いぐらいに。

この酒場の店主も今日はあっさりと帰ってしまい、現在居るのは最近調理担当として雇われた剣菱と、オーダー担当の罪歌の二人だけ。本当に、この酒場は大丈夫なのかと思ってしまう。村雨と暁は、先ほどから情報収集に向かい、狂とナナシは、特区の外に出て特区以外の情報収集をしているので、暫くは罪歌と剣菱の二人だけだ。

「ねえ、剣菱」

「む。何だ？」

カケラも似合っていないエプロンを付けた剣菱は、アイスクリームの下ごしらえをしていた手を止めた。

罪歌と剣菱が初めて会ったのは、もう一ヶ月以上も前の話だ。仕事でぶつかり、戦闘したが罪歌の圧勝。

だが、始末はしなかった。罪歌は無用な殺生は好まないし、何より剣菱が緋眼使いという事もある。

何より重要視したのは、剣菱もそうだが暁も罪歌と同じ、復讐にとり憑かれた目をしていた事。

「剣菱と暁はこうやって私達の仲間になったわけだけど、貴方の最終目標って何なの？」

「八神正宗と千島蒼威を殺す事だ。可能性を信じず、我が一族を殺した恨みがあるからな」

「……そう」

ああ、と罪歌は心の中で悲しくなった。罪歌だって、正宗の事を恨んでいた。あれだけ優しくしてたのも

全ては秋月の直系である自分達の恩恵に預かりたかっただけ。そして、秋月が悪鬼に襲われた

際には自分の事も、狂の事も全て見捨てて助けてくれなかった。他の一族だって、そうだった。

散々秋月に頼っていたのに、最終的に要らなくなったら捨てる。だったら、今度は自分達が同じ事をしてやる。と

この特区でしている事は、その足がかりである仲間と資金集め。前者についてはもう、叶ったと言える。

「全く最低よね……こんな世界。悪鬼なんて、居なければいいのに」

「だが、現実には居る。だから、こうして力をつけて殺すしかないのだ」

「ふふつ。アイスクリームの下ごしらえをしながら言っただって、説得力無いわよ」

「……ほほお。折角我が氣を利かせて作つてやつてるといふのに。お前は、これが要らないと見えるが、それでいいんだな」

「……ごめんなさい」

「全くもってアホだな、貴様は」

「デメー程じゃねーよ、クソジジイ」

八神村雨と御崎暁のコンビは、いがみ合いながらも二階堂特区の数箇所での情報収集を終え、

ようやくの帰路につこうとしていた。村雨は自身が放つ拳骨を前までとは違い、軽くかわせるようになった暁が

小憎らしいとばかりに、拳を再びポケットの中へと突っ込むと黙って先を歩く。

村雨と出会ってからそろそろ一ヶ月と少し、その間に暁は剣菱よりも弱かった為に、散々村雨に殴られてきた。

何度も病院の世話になり、今では常連と呼ばれてしまうほどに。だが、確実に暁は強くなっている。そんな実感があった。

村雨の理不尽な暴力に耐え、受け流す術を思いつき、そして戦闘の手ほどきを受けて此处にいる。

「クソガキの分際で生意気な……」

最初はクソだったが今ではクソガキ。剣菱が言うには、自分達は村雨によやく人間として認められたという事。

胸になにかもやもやしたものを抱えつつ、村雨の後を暁は走って

追いかけた。だが、その足が途中で止まる。

今居る場所から見えたものに気をとられたからだ。それは、流れる者ではなく、それなりの立場の者がこの特区

に来る際に使う駐車場。少量ではあるが、高級車ばかり並んでおり、近くには二階堂の警備兵も居た。

「む、どうした」

「いや、あれ。三枝の長女じゃねーか？」

村雨も暁に釣られて目をやると、三枝家の長女が車のすぐ近くで同じ位の年の子と会話しているのが見えた。

物腰が柔らかそうで、綺麗な顔で笑う女の子だ。暁は完全に見惚れてしまっており、村雨もつい目をやってしまう。

そして、彼女を見ていてふと思う。幼い頃から気性が荒く、八神という家族集団の中でも孤立していた八神村雨。

そんな村雨が一番欲し、今では一生手に入らないもの。何となくではあるが、それを彼女は持っている気がした。

「……………」

「あ？ んだよ、おっさん。　　テメー、ああいうタイプが好みだったのか？」

「……………なあ、クソガキ」

「だから、何だよ？」

「今から、あの女に近づいたらどうなると思うっ？」

虚ろな目をして、綺麗な笑顔を浮かべる少女を見ている村雨に危機感を覚えたのか、暁は冷や汗を浮かべ、

「ば、バカ！　んな事してみる。相手はあの狂乱の三枝だぜ！？　殺されちまうに決まってるだろうが！」

そう言うと、流石の村雨も自分が何か変な事を言ったのだと自覚していたのか、ため息をついた。

「だよなあ……」

もし、この時八神村雨が彼女と会話していたら。もし、この時、村雨が勇気を出して一歩進んでいたら。

何もかもが変わったのかもしれない。だが、結局村雨はため息をつき、彼女から目を逸らす。

その間にその笑顔の綺麗な少女は、車へと乗り込み、何回も三枝の長女と別れを惜しみながら、ついに

行ってしまった。すると、それと入れ違いでもう一台車が入ってきた。その車を見た途端、暁は身を強張らせた。

「む……」

「何で…… 御崎の車が。おい、おっさん。一回引くぞ」

「過去から、逃げるのか？」

暁の言葉に、村雨はただ一言そう言いになった。暁の表情は硬い。色々な葛藤がある。

何より、あの車の中に乗っている人間が誰なのかはもうわかっている。御崎の家は荒事はそこまで得意ではない。

一部の直系が異様に郡を抜いて強いのでそう思われているだけなのだ。そして、ここは二階堂特区。

流石に十名家の仕事にはちゃんとした人間が来るはず。その中でも御崎の力を誇示できて、尚且つ十名家の期待に応えられそうな人間なんて暁が知る限り一人しか居ない。だからこそ、嫌だ。

「……テメエに、何がわかる」

「フン……まあ、今はいいだろう。引くならさっさと引くぞ」

そう言うのと村雨は踵を返して走り出した。暁も、苦々しげな顔でそれに続く。そして、暫く路地を走ったり、裏道を抜けたりしていると、村雨の姿が何時の間にか消えていた。何か、嫌なものをを感じる。

こんな日はさっさと家に帰ったほうが無難だ。そう思い、裏路地から出て中心街を歩き始めた。やはり、違和感。

何か首の辺りがチリチリする。一瞬振り返ると、何かが視界の中で変化した。何か釈然としないものを抱えたまま

暁は再び裏路地へと入ると、階段を音を立てずに登り、物陰に潜む。すると、すぐに誰かが走ってくる気配。

「あいつ等は……」

見覚えのある顔だった。御崎の、直属部隊の人間だ。実力的には大した事が無い。それを知っている暁は、

物陰から飛び出すと、式神を発動。ここ暫くというものの、暁は村雨にとある訓練を強要されていた。

遠距離から走ってくる村雨に百発以上放ち、尚且つ十発以上有効打を与えるという単純な訓練だったが、

相手は緋眼使い、百発撃つだけでもかなり集中しなければならぬのに、それに加え、有効打を与えるのは難しい。

訓練は困難を極め、何度も何度もボコボコにされた。その甲斐あってか、一瞬で二発放ち、二人居た直属部隊は一撃で昏倒した。

「……ふん」

微妙な達成感がある。だが、満足はしていない。御崎がつけてきたという事は、最強の相手と対峙しなくてはならないからだ。

そのまま暁は、階段を登って屋上まで上がる。とりあえず、周囲の状況を確認したいからだ。

そして、屋上へ辿り着いた瞬間、黒の斬撃が暁へと襲い掛かるが、何かを考えるよりも先に体が動き、事なきを得る。

物陰に隠れ、斬撃の方向を見ると、そこには半ば予想していた人間の姿があった。

「お久しぶりです、兄さん」

やはり　と、暁は舌打ちした。屋上の縁に優雅に腰掛け、優雅な佇まいで自分の妹、御崎朱音がそこに居た。

とりあえず、今は式神はしまつてあるようで、暁はゆっくりと物陰から出ると、数年前まで可愛がっていた妹と対峙。

昔を思い返してみれば、とても仲の良かった兄妹だったと思う。だが、今はそれと全く正反対。

暁が敵前逃亡し、御崎の裏切り者とされた今では、狩るものと狩られるものになってしまっている。

「久しぶりだな。　何で、お前がここに居る？」

「二階堂から連絡があったんですよ。お宅の脱走した長男が、二階

堂特区の害になっているってね。

つまり、身内の不始末は身内でつけろって話です。それに、私も、試されているんですよ。

御崎を担うものとして、裏切り者の兄を始末できるかどうか。なんというやら、嫌な家に生まれてしまいましたよ」

「ほお、テメエの出世の為にテメエの兄貴を殺すってか。元々、瀕死だった俺を餌にしたのはそっちなのによお」

「それが、家です。兄さんが餌役から逃亡した所為で、攻撃に転じた十二人があの大悪鬼に殺されてしまいました。

その責任は取らないとって事です。　　というわけなので、お分かりいただけましたか？」

何処までも冷たい妹の言葉。怒りの炎が暁の中で滾っていく。そう　結局、弱いものが悪いのだ。

だったら、強くなってやる。御崎を越えて、御崎を弱いものとするれば、暁はこれから先もずっと生きていける。

そう思うと、暁は笑った。もう、妹だろうが何だろうが容赦はしない。そう決めてしまった。

「わかった。　　とりあえず、お前を殺す」

「……わかりました。私も、始末つけさせてもらいます」

朱音はゆっくりと立ち上がり、手を大きく広げた。すると、朱音の影が大きく膨らみ、影で出来た鎧武者が現れた。

暁はその式神の能力を良く知っている。歴代の御崎の中でも最強と呼ばれる式神、影武者。

影武者は刀を引き抜き、一気に暁へと迫る。暁も腰から、村雨に

貰った短刀を引き抜き、鎧武者へと接近。

前に戦ったときは、鎧武者の速さについていけなかった。だが、今はそうではない。村雨に比べると、笑えるような遅さだ。

振り下ろされた刀の一撃を紙一重で避けると、短刀を影武者の顔の部分に叩きつけた。

もがき苦しむ、影武者。暁はその隙に助走をつけて、隣のビルへと飛び移り、朱音目掛けて霹靂の矢を連射した。

その数、七発。朱音は影武者を影の中にしまうと、腕の影の中から壁を作り出し、雷の矢を防ぐ。

「……やりますね」

そして、朱音の足をついていた場所の影が膨れ上がり、朱音の体ごと影の線となって暁まで伸びていく。

走るよりも早いので、朱音はすぐに暁へと追いついた。対する暁は、霹靂を持っていた腕で、短刀を掴み、雷を纏わせ

踵を返して朱音へと迫るも、朱音も朱音で手を丸めて、影を作り、両腕に剣を作ると暁へと接近。

雷の剣と影の剣が交差する。剣の技量と体格は暁の方が上なので、そのまま押し切ろうとしたがそうはいかない。

「出てきなさい！」

朱音の影から影武者の野太い腕が伸びてきて、暁の胴体を掴むと思ひ切りビルの外へと投げつけた。

「っ！」

だが、暁もこれを予想していなかったわけじゃない。先端に銅線を巻きつけておいたフック付のワイヤーを

投げて何とかビルの一部に引っ掛けると、事なきを得る。だが、朱音の攻撃がそれで終わるはずが無い。

慌てて上空から伸びてきた影の一撃を避けながら、地面へと飛び降りた。痛みと痺れが足の裏から伝わるが

構ってはいられない。そのまま走り出す。対する朱音も、影を伸ばして着地すると、走り出す。

「すいません。兄さん……時間が無いので、これで」

暁が走っていた前にあつた影。ほんの小さな建物から生まれた影から影武者の拳が飛び出し、暁を殴りつけた。

流石に予想ができない攻撃だ。地面に頭から叩きつけられ、意識だけはどうにか繋ぎとめる。

その間に朱音は暁との距離を詰め、自身の影から幾つもの影の刃を呼び出した。暁はそれに敗北を覚えた。

もう、勝てない。そんな惨めな感情が頭をよぎる。だが、その時、風が吹いた。唯の風じゃない。

台風の時、殴りつけるような暴風だ。

「おっと、姉ちゃん。そこまでだぜ」

暁の意識がようやくはつきりすると、眼前に金髪の男が立っていた。知り合いには居ない顔だ。

だが、何処かで見た事がある。暁は慌てて立ち上がり、金髪の男を見据えると、

「誰だ、お前？」

と問う。

「ああ、会つのは初めてだな。俺は、秋月狂。秋月罪歌の弟だ。村雨からさつき連絡があつてな。
ウチに入つた新人が、何か危ない目にあつてゐるから助けてやってくれつて頼まれたんだよ」

「おつさんが……？」

「そうだ。村雨の奴。今、ナナシと商店街の肉の特売戦争に参加してるから、これねえらしいんだわ」

俺の事は特売の肉以下かよ　と思うも、一応連絡はしてくれたのだ。素直に感謝することにした。

何より、八神村雨らしいと。笑いまでこみ上げてきたほどだ。さつきまで、死にそうだったのがウソのように。

ふと、見ると朱音が羨ましそうな顔で自分の事を見ていたことに気づく。だが、それは一瞬で消え、

「二体一では分が悪いですね……今日のところは、引きます」

「ああ、出来れば一生そのツラ見せないでくれ。アンタとは正直、戦いたくない」

「それは無理な相談です。では、兄さん。また、お会いしましょう」

そう言うと、朱音はとぼとぼ歩いていつてしまった。後に残つたのは状況が良くわかつていない狂と暁だけ。

とりあえず、話は後ですとして、狂と暁は自己紹介をしつつ、自分達のアジトである酒場へと向かう。

酒場までの道は特に危険は無かった。相変わらずの二階堂特区の現状を見ながら、歩いていく。

そして酒場までつくと、中は相変わらず騒がしい。中に入ると、それぞれのテーブルについて、何時もの面子が肉と飯のみの焼肉大会を開催していた。二人は、その中の一つ、剣菱、罪歌、ナナシ、村雨、そしてアマネが居るテーブルへと向かう。

すると、恐ろしい勢いで肉を食っていた村雨が顔を上げ、

「クソツタレ。もう帰ってきやがった。俺様の見込みだと、今頃狂が暁の死体処理をしている時間な筈なのだが！」

「うおい！俺の死体処理の為に狂を向かわせたのかよ！？」

「だって……あの女。お前の妹だっけか？影からちよつと見てたんだが、とてもじゃないが貴様じゃ勝てんぞ。」

御崎もあんなガキを用意してやがるとは、八神も結構苦戦するんじゃないか。俺様でも微妙に手こずるほどだ」

「なら、助けるよ！こっちは結構ヒヤヒヤしてたんだぞコラア！」

暁がそう怒鳴ると、無言でタン塩だけを狙って食べていた罪歌が顔を上げ、

「暁、うるさいわよ。生きてたんだからいいじゃない。ほら、これ貴方と狂の分。さっさと席について食べなさい」

「俺の命って……焼肉よりも低いのか……」

暁と狂は、席に着いて焼肉をつつき始めた。剣菱は我関せずな態度で、恐ろしい勢いで焼いては消費されていく

焼肉に脅えているアマネの為に、肉を取ってやっている。ナナシ

は一見笑っているが、先ほどから罪歌と

壮絶なタン塩争奪戦を繰り広げては敗北していた。村雨は、豚肉ばかりを焼いてひたすら飯と肉を往復している。

暁はそれに負けじと箸を突っ込ませていくのに対して、狂はのんびりと一枚を大切に焼き、守っていた。

「つーか、おっさん。何で、いきなり焼肉なんだ？ しかも、酒場の客にまで振舞うなんて随分気前がいいじゃねーか」

「……む？ こいつ等は、客じゃないぞ。俺様の私的な部下だ。ただ、戦闘力がクソツタレな程弱いので主に情報収集や、雑務を担当してもらっているだけだ。ふははは、偉い。俺様偉い。部下の事ちゃんと考えてる」

「え……」

「つーまーりーだ。今現在、俺様と対等に戦える仲間と認めたのは、今、このテーブルについてる奴等だけだぞ。

ふははは。泣いて喜べ暁。今日の戦いは良かったから、貴様も一応合格だ。この、クソツタレめ」

すると、他のテーブルから「村雨さんー。そりゃないっすよー」とか、軽い口調が次々と聞こえてくる。

村雨も村雨で機嫌がいいのか「今すぐ殺してやるから、速攻生まれ変わって成長しろ」等と無茶な事を言っている。

すると、暁の心の中に何かが芽生えた。口では表せない。どうしようもない感情の波。すると、アマネが不安そうな声を出した。

「わ……私も？」

「む。そうだなあ……アマネも一応、候補だな！何より、貴様の式神は面白い！面白すぎるぞ。」

今すぶち殺してやりたい程に貴様の式神は面白い。後、十年経ったら、絶対に俺様と戦え、勝ったら嫁にしてやる！」

そう機嫌よく返した村雨だが、物騒な物言いにアマネは完全に脅えてしまって剣菱に抱きついていてる。

それを優しく宥める剣菱。どうやら、年下の扱いには相当長けているようだ。そして、今度はナナシが口を開いた。

「駄目だよー、村雨さん。アマネっちは、僕のお嫁さんにするんだから！ね？アマネっち」

するとアマネは頬を染めて、剣菱の方を一度見ると顔を伏せてしまった。

その瞬間、ナナシと狂の表情が驚愕に染まり、罪歌だけが意味わからなさそうに、相変わらず肉を焼いている。

狂と暁は大体事情を理解したのか、生暖かい目で剣菱の事を見つめた。そして、村雨がビールを煽り、

「ふははは！ナナシ、ざまあないな。まさか、身近な新参者に取られるとは。この負け犬が！」

と嘲るように笑う。ナナシも負けじと、手近にあった焼酎をラッパ飲みし、

「む、村雨さんだって負け犬じゃんよー。何、その左手。弟に負けるとかマジないわー」

「ぬう……！ナナシ貴様！表に出ろ」

「望むところさあ！」

「お、おい。村雨もナナシも落ち着けて。ほら、まだ肉も酒も飯もいっぱいあるからよ」

いがみ合う二人を狂が仲裁しようとするが、何故か今度は狂に二人の矛先が向いたようだ。

特にナナシが酷い。酔っ払っているのか狂にくだを巻き、離れない。剣菱は何もわかってないのか。

ただ黙ってアマネに抱きつかれながら状況を静観していた。そして、暁は気づく。何時の間にか、笑っている事に。

そして 理解した。御崎を出てから、ようやく自分は信頼できる仲間を手に入れたという事を。

「ほーお、暁。何、一人でニヤけている？」

唐突に、さっきまで狂に絡んでいた村雨が話しかけてきた。暁は恥ずかしいのか、「うつせ」と短く呟く。

それで終わると思いきや、今度は、村雨の手がポンと頭の上に乗った。更にそのまま、わしゃわしゃと髪をぐしゃぐしゃにされ、

「ま、今日はよく頑張ったな」

そう言々と村雨はそのまま酒瓶を持って、酒場の外へと出て行ってしまった。すると、暁の心が何故か震えた。

我慢できなさそうな感情が今にも溢れそうである。恥ずかしい。だが、どんどん感情は昂ぶって行く。

すると、気の毒そうな顔をした罪歌と目が合った。気づかれたかと暁は恥ずかしさから、罪歌を睨むも、

「な、何見てんだよ！」

「いや……なんて言っているのかな？　ちょっと、髪触ってごらんなさい」

そう言われ、髪を触ってみると何故かベトベトしている。匂いを嗅いでみると、焼肉のタレのにおいがした。

昂ぶっていた感情が一瞬、急速に収まり、他の感情が凄まじい勢いで上昇を始める。

「さっきナナシが暴れたときに零れたのが手についたのね……」

罪歌の気の毒そうな視線が痛い。そして、暁は咆哮した。

「あんつの　クソジジイイイイツ！　何処行きやがったアアアアッ！！」

F i r s t c o n t a c t : 5 生涯で一度、たった一人の為に（前書き）

久しぶりの投稿っ！

その日、二階堂特区の天気は快晴だった。時刻は午後三時を過ぎた辺り。八神村雨は、たまり場である酒場の

外に設置されているカフェテラスで新聞を広げてのんびりとくつろいでいた。だが、一人ではない。

村雨の対面には、凄まじい量のフルーツやらアイスやらお菓子が突き刺さったパフェをついついているアマネが居た。

厨房で働いている剣菱がアマネの為に特別に作ったものだ。村雨でも「うっ」としてしま量のパフェを、アマネは

剣菱の好意を無駄にしたくないのか、必死になって食べていた。

「……残しても、構わんぞ？」

「うっん。食べれる。村雨おじちゃんに今日はいっぱい教えてもらったから、お腹すいちゃった」

そういうアマネだが、顔色が芳しくない。だが、アマネが食べるというのなら、もはや村雨に口を出す権利はない。

アマネの式神に興味を持ち、剣術の基礎から最近叩き込んでいる村雨だが、アマネの出来は良くない。

優しすぎるのだ。自分の身を守るためなら、それなりの攻撃を出来るが、それ以外では大した一撃は打てない。

いや、打ってこない。勿体ない逸材だ、と村雨は心の中でため息をつき、コーヒーを一杯口に含む。

「ふむ……」

穏やかすぎる午後だ。こんな安穩とした日々を過ごすのは、初めての経験で若干戸惑っている。

八神村雨は修羅の道を歩んできた人間である。数え切れないほどの人を殺し、気まぐれで他人の人生を破壊する。

それが、確固たる自分の在り方だという確信もある。だが 最近は何かがおかしい。心に何かが引つかかる。

この町に来てから特にそれが強い。自分が変わってしまったている気がするのだ。現に、数年前の自分なら

アマネの訓練をつけたりしなかったし、剣菱と暁の命もあの場で奪っていただろう。

「おじちゃん。どうしたの？」

と、考えていると、アマネが心配そうな顔で覗き込んでいた。余りの顔の近さに、村雨は若干身を引く。

こんな無防備に近寄られた事が今までの人生の中にあっただろうか。こんな、穏やかに他人と過ごした事があっただろうか。

否、一度も無い。すると、アマネは持っていたスプーンでパフェを掬うと、村雨の前に差し出し、

「疲れたときは、甘いものを食べるのがいいんだって。だからはい、おじちゃん。あーん」

冷や汗が久しぶりに出てきた。この八神村雨がこんな小学生にあらんして貰うなんて、シユールすぎる光景だ。

と客観的だが、ある種主観的に判断し、一瞬で周囲を伺う。中で働いている剣菱と罪歌の姿は見えない。

ナナシは朝からパチンコに行っている。先ほどプレミアキターとのメールが来たので、当分帰ってこないだろう。

狂と暁は仲介所からの依頼。居長の直系の子犬探しの依頼に奔走

しているはず。だと状況と思考を数秒で完了すると、アマネの突き出したスプーンに素早く口を運び、パフェを一口貰った。

「美味しいでしょ？」

「……ああ、しかし甘ったるいな。帰ったら、ちゃんと歯磨きをするのだぞ」

「うん！」

そう言うと、アマネは快活に笑った。村雨も釣られて笑ってしまふ。そして、パキンツという音が響いた。

アマネの顔の横に、一枚のカードが浮いている。これが、噂に聞いていたアマネの式神の力だと判断。

剣菱と暁とナナシで考えてつけた名前は「絆」。正に話に聞いていた通りだ、と若干村雨は驚いてしまった。

そしてその能力は　とまで考えて、村雨は自分が完全に変わってしまった事を自覚した。

「あ……おじちゃん。勝手にごめんなさい。この子、これだけはゆーことかなくて……」

アマネもそれについて悩んでいるようだった。だからこそ、剣菱達は「絆」という綺麗な言葉に置き換えたのだと判断。

昔の村雨だったら、この瞬間に確実にアマネの事を殺していた。だが、今は握り拳一つ作っていない。いや、作れない。

「気にするな。俺様には実害は無いしな」

そう、何とか大人として強がった。アマネはそれに無事騙されてくれたようで、安堵の息を漏らしている。

とりあえず、この件については保留として置くことにした。震える手を押さえて、何とかコーヒ―を再び口を含む。

そのまま何気なしに周囲を見渡すと、違和感。相変わらずの路地裏だが、何かが違う。

そして、村雨はその違和感に気がついた。何人かが、風呂敷包みを抱えていた。どれもこれもが、同じ形。

しかもその人間たちの表情がどこかおかしい。追い詰められ、極限状態に達しているような顔だった。

それを見て、反射的に、村雨は立ち上がり、大きく叫ぼうとする。先にアマネが声を上げた。

「お父さん！」

風呂敷包みを抱えた男の一人が、アマネの声がした方へと振り向く。そして、その表情が更なる絶望に染まり、

次の瞬間だった。男は、一瞬だけ我にかえり、風呂敷を大きく上方へと投げ捨てるとアマネへと駆け寄った。

村雨にはその風呂敷が何なのかそれだけで大まかに理解できた。アマネと父親らしき人間のいた方向に、

テーブルを投げ捨て、村雨自身は隣のテーブルを盾のように構えて、同時に紅椿を顕現。

直後　男たちの持っていた風呂敷包みと、上に投げ捨てられた風呂敷包みが閃光を発し、大爆発が起きた。

「な……っ!？」

二階堂のビルの最上階から、眼下に広がる町が破壊されていく様を、雨龍は驚愕と共に、見下ろしていた。

炎を上げている箇所は三箇所。しかも、その付近には既に結界が展開され、二階堂のトラックが乗り付けている。

町に住まわせていた二階堂も知らない雨龍の密偵から報告が入って、一分ほどでこの惨状。

誰がこんな事を　と想像を巡らすも答えは出ない。密偵から入った連絡も、町の様子がおかしい。とだけ。

「うーちゃ……雨龍様」

万里が不安そうに雨龍の袖を引く、それでどうにか冷静を取り戻す。とりあえず、現場に行こう。

そう判断し、出口の方へと歩いていくと、唐突にドアが開いた。入ってきたのは　派手な衣装の男だ。

それは二階堂の時期頭首にして、雨龍の腹違いの兄である、二階堂龍一。

「兄様……」

「よお、雨龍。相変わらず、可愛くねえツラしてんなア、おい」

ヘラヘラ笑いながら言う龍一。そして、雨龍の中で全てが繋がった。

「外の騒ぎは兄様のご指示でしょうか？」

「ああ、喜べ弟よ。テメーが抱えた問題は、この俺様が今日で解決してやろう。」

「なんだっけか？ 自警団？ あの八神のイカれ戦闘狂が中心の、カス共に随分てこずってるそうじゃねーか」

「……はい。申し訳ございません」

「いいや、気にするな。俺も、久しぶりに暴れたいんだわ。手始めに、二階堂に借金背負ってるクソ共を脅してな、人間爆弾をあのヤロー共と、反抗勢力にぶちこんでやったからよお。戦争が始まるぜえ！ はははは！」

くそつたれ。と言いつことになるのを、雨龍はギリギリで堪えた。この兄のやり方は、身にしてみわかつている。

自分の欲望にしか興味が無いのだ。殺したいから殺す。ただ、それだけ。確かに、自警団の存在は邪魔

だった。しかも、強い人間が多い。だからこそ、他の利用価値があったのだが、これではもう全てが水の泡だ。

「しかし、人間爆弾は、流石に住民達の反感を買うのでは……？」

「ああ、そりゃ、お前が何とかするんだな。実はよ、今日爆弾にした奴らってのはな。どうしようもねークズだが。」

娘や比較的若い連れ合いが多いんだ。だが、無理やりモノにすつと、あいつらうるせーだろ？

だから、邪魔だから有効利用させたもらったわけだ。ははは！ これぞ、一石二鳥ってヤツじゃねー？」

「ですね。流石兄様です。お話の通り、爆弾の件については私が対処致します」

「おう。出来によっちゃ、雨龍。テメーの待遇について、俺が親父に言つて色々甘い汁吸わせてやつからよ。気張つてやれや」

「はい……！」

だがしかし、これはチャンスでもあった。龍一が口利きしてくれる、権力は倍以上に跳ね上がる。

雨龍の最初の目標である妾の子からの脱出ができるのだ。迷ったのは、ほんの数秒。

自分は人の恨みを買ひ、その代償として大切な者を守ると決めた。

龍一は、その雨龍の瞳を見て

表面上はヘラヘラ笑ったまま、心の奥でほくそ笑む。これは、

死んだ弟より良い手駒になると。

「とりあえず、その自警団の奴らの詳細見せろよ。流石に、相手があの八神村雨だ。

俺たち十名家の人間でも、下手すりゃ食ひ殺されちまうような化けもんだぜ。準備するに越した事はねえ」

「ですね。こちらになります」

雨龍が書類を渡すと、龍一の顔が若干真剣みを帯びる。よくもまあ、これだけ調べたものだと感じもした。

露出が多い八神村雨の詳細は勿論。それ以外の人間の名前までもが、そこに記されている。

しかも、書いてある名前が一名を除き、全員が名家の出身。秋月、

真砂、御崎と油断していたら不味い相手だ。

特に厄介な緋眼使いが多い。それを見た後、龍一は自分の趣味と利益を考慮した結果、

「俺は、この罪歌つてのを貰おうか。それ以外はテーマで処理した後、万里は千里と一緒に出る。

流石にこの面子は少し不味いからな。十名家の二階堂、三枝って体面上、数に任せた方法でやっとな

他の十名家である、九我山や四条の連中にナめられちまうしよお」

と言い、肉食獣を思わせるような笑顔を作った。

熱い。と八神村雨は爆発のショックからようやく立ち直った。その手には式神と木製のテーブルが握られている。

目に映るのは瓦礫と炎。そして、うめき声を上げる人間。遠くの方では、悲鳴や怒鳴り声が響いていた。

村雨はゆっくりと立ち上がり、体の状態を確認。体の節々に痛みを感じるものの、出血無し、損傷無しの状態。

それに安堵し、ふと近くに目をやるとアマネが倒れていた。最悪な事に、体中から血を流して。

あの時、近寄っていったのが原因だろう。自業自得だ、と切り捨てて剣菱達を探しに行こうとする、が

「む……」

何故か体と心が合わなかった。頭ではわかっているのに、村雨は一步踏み出せなかった。

「俺様も堕ちたものだ……こんなガキ程度に」

アマネの出血はよろしくない。このままでは、十数分もすれば死んでしまっただろう。だが、治療できそうなの物は近くに無い。あるのは、死体ばかり。万事休す、だがふと閃

いた。一つだけ方法があった。

だがそれは、八神村雨が一度もした事がない事。そして、今までの生き方を否定する行為。迷ったのは一瞬。

結局自分は甘い、と考えた後に、村雨は唐突に自分の本質を理解した。

「ああ　俺様は、飢えていたのか」

八神村雨は修羅の道を生きてきた。殺し、殺され、悪いことは何でもやった。その行動の行き着く先は、

孤独を埋めたかった。八神という家に生まれて、子供の頃から村雨は独りだったのだ。

力を求めたのは、父を独占したくて。罪も無い人間を殺してきたのは、嫉妬から。それが、自分の本質。

だが、眼前で死に掛けている少女は、無垢な好意を村雨にくれた。二十数年生きてきて、村雨は初めて

他人から無垢な、何の含みも無い好意を受け取ったのだ。それが、きつと村雨を惹きつけて放さない。だから

「一度だけだ。俺様はもう、生き方を変えるのには遅すぎるし、殺しすぎた」

心ではわかってても、もう変えられない。過去は振り返らない。だから、今日、この時だけ。

八神村雨はアマネを助ける為に、一度だけ自分を曲げる事に決めた。そして、紅椿を顕現し、アマネの傷口へと突き刺す。

紅椿の力は、血を操る力。これで、アマネの血液の流れを調節し、地面に落ちた分は穢れを除去して体内へ戻す。

ビデオの逆再生のようにアマネの体へと血液が戻っていく。そして、着ていたシャツを脱ぎ、破いてはアマネの体に止血処置を施し、血の流出を防ぐと、

「おい、貴様」

少し歩いた所に見知った情報屋が居た。多分、早くも情報収集に来たのだろう。ご苦労な事だ。と

村雨はため息をつき、駆け寄っていく。

「おお、八神の旦那！生きてたんかい」

「ああ。ついでに、貴様に一つ要求しようか」

「なんだい？この事件の首謀者か？それは高くつくねえ……なんせ、相手は」

とまで言った所で、村雨は紅椿を情報屋へと突きつけ、

「この子を病院に運べ。そして、この事件の首謀者を吐け。支払いは、貴様の命の安全。悪くはないだろう？」

「あ……ははっ。ああ、構わないよ。だ、だからその式神しまつてくれて！」

村雨が式神をしまうと、情報屋は聞いてもいない事までべらべらと喋りだした。犯人は、二階堂龍一。

方法は人間爆弾。爆弾となったのは、二階堂特区に借金を抱える人間。頭の中で情報が整理されていく。

狙われた理由はわかっている。多分、自分達がやっている事が二階堂にとっては邪魔なのだろう。

何時か、こうなる事は覚悟していた。これを、自分の組織の始めとする事も。

「……わかった。さつさと、アマネを病院に連れて行け」

「わ、わかったよ旦那」

「もし、アマネを闇に売ってみる。貴様の一族諸共皆殺しにしたやるからな」

そして、情報屋がアマネを抱えて走り去っていく。これで、もう失うものは何も無い。元に戻った。

アマネは夢だった。一瞬限りの。それだけで、もう良いのだ。

「……お前は、こっちに来るなよ」

そして、村雨は沈黙した。直後、酒場が爆発して瓦礫が飛び散る。そちらに目を向けると、

粉塵の隙間から剣菱の襟を掴んだ罪歌が現れた。何時に無く、機嫌が悪い。多分緋澄であろうと予測。

「あー、もう。マジうつざあーい！」

「無事でしたか」

「あ、村雨。もう、何よこれえー！」

「二階堂の仕業ですよ。とりあえず、罪歌と剣菱を起こしてください」

そついうと緋澄は、自分の頬と剣菱の頬をぺちぺちと叩き出した。
……時間は、もう少しかってしまっただろう。

と考えていると、ナナシと狂と暁が走ってくるのが見えた。状況が状況な為か、何時に無く表情が硬い。

そして、村雨は三人に今回の事件について知っている事を話した。
暁は若干青ざめ、ナナシも珍しく

ヘラヘラ笑いを消す。やがて、全ての話を聞き終えた狂が神妙な表情で口を開いた。

「……村雨。やっぱりこれを発端にするのか？」

「ええ、少数精鋭の戦力は整いました。剣菱と暁もすぐに使い物になるでしょうし、これでいいのでは？」

「後は罪歌次第か……っとお二人さんも目覚めたようだ」

狂の言葉に全員が罪歌と剣菱の方を向いた。起き上がった罪歌は、頭に打撲でも作ったのは頭の一部分を手で押さえつつ、

「話は聞こえてたわ。……私もそれに賛成。今日が私達の始まりの日。このクソツタレな世界に皆で教えてやりましょうか。私達の恨みと、自分達がやってきたことの罪深さをね！」

そう言つと、罪歌の瞳に憎悪の色が宿った。誰も、それに何も言わなかった。この場に居る全員が

この世界と悪鬼に恨みを抱いている。その根底にあるのは、復讐という大儀。自分達を見捨てた

世界への復讐。人間への復讐。そして或いは、矜持。

「これより、私達は復讐の同士よ。それぞれの目的の為に、しばしの共闘といきましょうか」

罪歌がそういつと、全員が頷き、やがてナナシがふと思い出したように一言。

「ってゆーか、僕ら。チーム名とか無いの？　これからいっぱい悪い事するのに、ナナシじゃ駄目駄目っしょー」

「貴様がそれを言うか……だが、一理あるな」

そして全員が黙つてしまふ。罪歌も強力な同士を揃えることしか頭に無かったので、そこまでは

考えていなかったようだ。自警団は、もう既に無理だろう。これから、自警をするわけでは無いのだ。

そのまま暫く黙考していると、罪歌の立っている場所の上に設置されていた酒場の看板が焼け落ちた。

「ナナシ」

「へいよー」

ナナシが式神を虚空から抜き放ち、看板を一閃。真っ二つに断ち切られた看板の片割れが

全員のちょうど真ん中辺りに落下した。煤や汚れがついたその看板に書かれていた文字は、

「死罪、か」

「ここ、最低な名前だったよな。何だよ、酒場の名前が死罪上等つて。店主がアレだから仕方ない気もするが」

「客の殆どが死罪人のような店だったからな。ある意味、的を得た名前だった」

そう話していると、狂がゆっくりとしゃがみ、

「俺達は、六人だよな」

と死罪の横に六と文字をつけたした。それを見たナナシは急にテンションを上げ勢いよく喋りだすと、

「うつひよ！ やっぱいねえ。これ、マジで中二っぽくてカッコいいねえ！ 僕、テンション上がってきたよお！

とゆーわけで、僕からも一文字。僕らは、式神使いだよねえ。つーわけで、僕の好きな漢字の、神を」

「死、罪、六、神。死罪をくらった六人の式神使い、とも読める。ナナシのセンスはどうにもガキっぽくていかん」

だが、これ以上誰も何も意見が出ないようだった。そして、まず暁が罪歌に視線を向けた。次いで剣菱が。

つられてナナシも。そして、村雨と狂が最後に視線を送ると、罪歌は観念したようにため息をつき、

「仕方ないわね……。これでいきましょう。ちょっとセンスがアレだけど、まずは二階堂にお仕置きしなきゃだしね」

そうぼやいたが、口元には本人が気づかないうちに微笑が浮かんでいた。

D a y s 2 6 : 夫婦円満の秘訣とは（前書き）

本当に久しぶりですね。

Days 26：夫婦円満の秘訣とは

円満な夫婦関係を築きたい。

これが、最近の俺のテーマだ。簡単に言えば、命と仲直りしたいって事だ。もう、二週間口きいてない。

原因は俺の仕事が忙しすぎる事。殆ど家に帰れず、ユニオン本部の宿舎に単身赴任のようなものだ。

その間、命は一人で全てをこなす。育児、家事、その他諸々。だが、俺だって遊んでいるわけじゃない。

お互いがイライラが募り、はい、二週間前また大喧嘩しましたよ。原因すら思い出せない。

「というわけで……円満な夫婦関係のコツを教えてください」

俺は目の前に居る男、小さな頃から兄貴分として慕ってきた八神時雨にそう聞いてみた。

この男、俺と同じくらい忙しいのに夫婦関係良好という強者なのである。時雨は何時もの曖昧な

笑顔を浮かべ、手を顎に当てて暫く考え込むと、

「僕の嫁は、異常だからね……まだまともな命との参考にはそんなにならないと思うんだが……」

「いや、でもさ。律だつて育児と仕事の両立してるし、お前も忙しいし、境遇似てるじゃんかよ」

「……蒼二、律はね、もう凄いいんだ。僕がこの前徹夜で明けで午前

中に家に帰った時の話だ。

家に帰ると北斗と南斗が律とかくれんぼをしてたんだよね。で、僕が子供の頃によく君達と

かくれんぼした時に使った場所を教えてあげたんだ。んで、その後律とも会ったわけだよ」

「ほお、別に普通じゃん」

「律は、書類を書きながら屋敷内を歩いていたんだ。僕は注意したね、北斗と南斗との遊びはどうしたと。

そしたら平然と答えたよ。かくれんぼしながら仕事をやってるってね。しかも、その数分後にあの二人は

律に見つかって三人で楽しそうにはしゃいでいた。んで、僕がシャワーを浴びて夜の会合の準備をして仮眠し

ようとすると、北斗と南斗は疲れてお昼寝しててね。律がまた書類を書きながら子守唄を歌っていたんだ。

怖いのは書類を殆ど見ずに、子供達の方ばかり見て、片手で頭を撫でてやってるんだよ。何かもう言葉が出なかった。

で、僕が仮眠をすると報告すると、律は起き上がって布団を敷き、ここで寝ろと言ったんだよ。

もう、疲れてたからね。抵抗する意思もなくそのまま布団に寝転がると、律が布団をくつつけて、僕と

二人の間で書類を書き始めたんだ。寝れるかよ！ カリカリカリカリ音が聞こえるんだよ！ 後眠いのにキスとかもう……！」

「後半、ただの愚痴じゃねえか」

「はあ……はあっ……少し喋りすぎた。まあ、僕が言いたいのは一つだ。

夫婦円満のコツは、どちらかが折れてやること。我が家では必然的

に僕が折れてばっかだけだね」

「成る程……ありがとう、参考になった」

「いや、僕も愚痴を吐き出して少し楽になった。それに、次の時間までいい時間つぶしにもなったしね」

「ああ、ウチの親父とのアレか。まだ、時間はあるようだな」

「そうだね。残りの時間はコーヒーでも飲む事にするよ」

「いや、その自販機の陰で落ち込んでいる嫁さんの相手をしてやった方が懸命だぞ」

そう言うとき雨の顔が強張り、自分の背面にあった自販機の影で俯いている律の姿によく気づいたようだ。

慌てて駆け寄り、あーだこーだと弁解する時雨を見ると、何となくだが二人とも楽しそうに見えた。

そのまま次は狂辺りにでも話を聞いてみようと思いを歩いて行くと、親父と森羅さんの姿を見つけた。

珍しいことに、陸人さんがいない。きっと、何処かでしょうもない事をまたして詩歌さんに怒られてるんだろうな。

「よお、蒼二」

「お、馬鹿息子。聞いたぞ。また、命と喧嘩したんだってな！」

「ああ、今日はその事で相談がある。夫婦円満のコツってヤツを教えて貰いたくてな」

そう言うつと親父の瞳に光が灯った。とても偉そうな顔を作り、腕組みをすると

「ふふん！　そういう事ならお父様が優しくパーフェクトに」

「悪い。真面目な話なんだ。森羅さんの話に集中したいから大人しくしててな」

何か話し出そうとしたが、ふざけてる余裕はない。何か放心したような顔になっているが、この父親は

テンションで生きているので考えるだけ時間の無駄だ。それに、親父をずっと見てきた身としては

よくわかつている。千島家の夫婦円満のコツは「怒り、殴られ」定期的に母さんのストレスを溜めて

これまた定期的に怒らせて殴らせる。高度なコツだが、俺はマゾではないのでそれはご遠慮したいのだ。

「円満のコツつつてもなあ……。ウチはお互いが折れるから喧嘩もしねえし。今のトコ問題もねえし。

強いて言うなら、プレゼントだな。だが、ありきたりのものを渡しでも面白くない。サプライズプレゼントとかどうよ？」

「サプライズプレゼント……か」

「そうそう！　サプライズプレゼント！　俺昔ね、遙ちゃんに酔っ払って勢いのまま俺をあげるって自分に

リボンを巻いてプレゼントしてみたらね！　うん！　何かすっごい笑ってくれてよお。

何か次の日一緒に病院にデートしに行ったんだぜ！　レントゲンとかカウンセリングとかも受けさせられたな！

流石遙ちゃん！ デートしながら俺の体調管理とは主婦パワー恐るべしっ！」

…… またも親父が無理矢理割り込んできた。が、無視。つつこむのすら時間の無駄だ。俺に無視されて寂しそうな

顔をしている親父。森羅さんはそれを気まずそうに見ている。いや、頭が気の毒な子を見る目だ。

とりあえず、また一步理解が深まった。森羅さんに「参考になりました」と手を上げて挨拶し、

「親父、もう年なんだから年相応の発言しろよな……」

そう親父に言い残し、俺は親父達と別れ、今度は狂のオフィスへと向かった。奏と狂は良い夫婦だと思う。

お互いがお互いを思いやり、噂によると相当円満な夫婦らしい。あの狂も成長したもんだ。昔はめっちゃ

口が悪かったのにな。そうこう考えているうちに、狂のオフィスへと辿り着いた。ノックをすると、すぐに返事。

ドアを開けて入ると、そこにはスーツ姿の狂が休憩時間なのか、コーヒ一片手にテレビを見ていた。

俺に気づいた狂はテレビを消し、若干驚きを隠せないような顔でこちらに向き直った。

「珍しいな。お前が俺のオフィスにくるなんて。何か、重大な案件でも出来たのか？」

「いや、今日は友人として来た。仕事の話じゃねーから、そんなに身構えないでくれ」

「安心したわ。実は今日、善と一緒に料理の勉強する約束しててな。

悪いが早上がりさせて貰うぞ」

「構わない。ただでさえ、お前には残業押し付けてばかりだからな。やっぱり、管理職の中じゃお前が一番しつかりやってくれるからさ。他の部署でも評判だぞ。狂の下で働きたいってヤツも結構多いんだ」

「そりゃ、ありがたい話だな。で、何の用事だよ？」

「夫婦円満のコツを教えてもらいたい」

「ああ、命と喧嘩してるのな。だが、ウチは喧嘩なんて殆どしないからな。最後に揉めたのだって、善の子供服の色ぐらいだし、結局両方買って、善が気に入った方を使うて事で落ち着いたけどな」

「ほお……じゃあ、何か奏が喜ぶような事とかしてるか？ 例えばサプライズプレゼントとか……」

「奏は殆ど物欲がないからなあ。変な物買う時間あるなら、早く家に帰ってきて欲しいって言うてたし。」

「……あ、一つだけあった。奏が喜ぶ事。だがしかし、これは参考にならないと思うんだがよ……」

「いいから言うてみてくれ。ヒントになるかもしれん」

「ああ……実は、この前ふざけて関節技をかけてみたんだ。……何だよ、その意外そうなツラはよ！俺だってアイツの前じゃ少し違うんだ。んで、関節技を軽くかけたら、痛いとかいいつつも喜んでんだよ。」

その後、めっちゃ機嫌いいの！ 関節技かけた次の日の昼飯とかめ
っちゃ気合入ってるしな！」

「関節技か……」

「ずっとスキンシップをしてなかったからな。そんな些細な事でも
嬉しいんだろ。本当に、良い嫁貰ったよ」

「……ありがとう。参考になった」

「そか。まあ、頑張れよ。命だつてきつと仲直りしたい筈だからさ」

三時間後、俺は緊張した面持ちで自宅の玄関前に立っていた。手
には、花束。命に花束なんか

あげた事がなかったので、これが俺のサプライズプレゼントだ。
ああ見えて、花言葉に詳しくかったり

するので喜んでくれるはず。蒼華と煉次は今日は確か地元の子供
会のお泊りに行っている。

今日が勝負だ 色々な意味で。意を決してドアを開け、

「ただいま」

と何時もより大きな声で俺の存在をアピール。奥の方から若干く
ぐもってはいるが、びっくり

したような命の声が聞こえた。

「お、おかえり……」

奥のキッチンからエプロンをつけた命が現れた。何故か、顔にマスクをしている。

風邪でも引いたのかな。この後の家事は俺が代わってやる事にしよう。まずは、サプライズプレゼント。

後ろ手に隠していた花束を勢いよく命に突きつけた。

「……つくしゅ！」

途端に命が大きなくしゃみ。まさか、コイツ。花粉症なのか？ そうだ。毎年この時期命は花粉症

が酷く苦しそうにしていた。俺は花粉症とか全く関係ないから忘れていた。同時に、命の顔が曇った。

俺をジッと見て、更に恨めしげに花束をみた後、

「私……花粉症なんだけど」

「……すまん」

「ま、いいけど」

冷たく命はそう言い放つと、俺から花束を引ったくり、リビングへと歩き出してしまった。不味い。

俺もム力ついてきたぞ。あの態度は何だよとか、人が折角氣を利かせりゃ　とイライラが止まらない。

だが、時雨の言葉を思い出した。夫婦円満のコツはどちらかが折れてやる事。うん。そうだ。俺が折れればいい。

……よし、落ち着いた。靴を脱いでまずは風呂場へと向かった。そう、風呂に入ればいい。風呂は良い。

日本人に生まれてよかった。ああ、そう、風呂だ。だが

「…………あ？」

風呂が沸いていない。お湯すら張っていない。何だこれは。先程まで我慢していたイライラが復活。

すると、命が風呂場へとやってきた。手には、俺の持ってきた荷物の中の洗濯物が抱えられている。

俺はイラつく自分をどうにか抑え、笑顔を作ると命に聞いてみた。

「なあ…………風呂は沸いてないのか？」

「うん。蒼ちゃんいきなり帰ってくるんだもん。そりゃ、沸かしてないに決まってるでしょ」

「…………じゃ、沸かしてくれよ」

「えー。洗濯物今日中にやっちゃいたいから、その後ね。…………てゆーか、シャワーでいいじゃんもー」

…………そう、折れるんだ千島蒼二。確かに連絡もせずに戻ってきた俺が悪い。洗濯物を溜めた俺が悪い。

俺がちよっと頑張つて風呂掃除をしてお湯を張ればいいだけの話じゃないか。何をそんなイラつく。

仕事で疲れてるけど、めっちゃ疲れてるけど、偶にはやったっていい。

「…………わかった。じゃ、自分でやって自分で入るわ」

「へ…………？ あ、うん…………」

驚いた顔をして、命は出て行った。それから三十分、風呂を掃除し、ぼーっとしていたら風呂が沸いた。

ざっぱーんという音をわざと立てて入浴。やはり、風呂は素晴らしい。疲れが落ちていく。

たつぷりと三十分入浴を楽しみ、今晚の事を考えて入念に体を洗うと、何時の間にか用意されていた

パジャマを着て、俺は風呂場を後にした。キッチンへ行く。命は俺の夕食の準備をしてくれていた。

久しぶりの命の料理だ。ここ最近は出前が、ユニオン内の食堂でばかり飯食ってたからなあ……。

「もちよい待ってね。あ、ビールなら冷蔵庫にあるよ」

「おう」

言われるがままに冷蔵庫からビールを取り出し、蓋を開けた、プシュツという音が堪らない。

ビールは味わうものではない。喉越しを楽しむものだ。ゴクゴクと音を立てて冷たいビールを喉へと通す。

「ぶはあっ!」

いや、美味しいね。我が家で飲むビールは最高だ。……しまつた。そうだ、夫婦円満をしなければ。

サプライズプレゼントも駄目だった。折れても上手くないかない。相変わらず気まずい雰囲気である。

何時もなら命がベラベラと喋りまわしているが、それが無い。何か、寂しい。

「おまたせ」

何時もなら、「へいお待ちい！」ぐらいの勢いで置いていくのだが、それすらもない。

俺は、気配を殺して立ち上がった。もう、こうするしかないのか。これだけは避けたかった。

左足を命の左足の外からまわし俺の足首を引っ掛けると、俺の左腕を命の右わきの下を通して

命の首に後ろからまわすと、はい、コブラツイストですよ。

「うらああああっ！」

「ひっ！？ 痛い！ いたたたたあ！ 痛いつてばあああ！」

（頼む……夫婦円満になつてくれ……っ！）

「いたたたたたたっ！ てえ！ 痛いつていつてるじゃんかよー！ 吹っ飛べ！」

ピカーツと命と俺の体が発光し、命の言霊が発動した。はい、現在時刻19時43分。千島蒼二。

窓に突っ込み、網戸をぶち破り、マンションのテラスに転がり出しましたよと。ご近所の皆さん申し訳ない。

「あ、蒼ちゃん！？ 大丈夫っ！？」

「　　というわけで、俺なりに夫婦円満を考えた結果、こうなりました」

「……………」

言霊により、ガラスの修理と俺の怪我の手当てが終わると、全て白状させられた。

最初はぶんぶんと怒っていた命だが、今は呆れ果てたのか、何時もと何も変わらない。

言葉すら出ないようで、俺はただ命の言葉の続きを待つしかない。

「蒼ちゃん」

「はい」

「うん。私も、夫婦円満したい」

「命……………」

「わかってるんだよ、私だって。ユニオンが忙しい事ぐらい。でもね、偶に感情がそれを超えちゃうの。」

蒼ちゃんが頑張ってるから、私は専業主婦やってられる。だから、蒼華も煉次も寂しくないって言ってた。

だからね……………こうやって偶に喧嘩しちゃうけどさ。また、こんな風にどちらかが仲良くなるうとすれば、

私達は一生愛し合っていていられる。それを、忘れないようにしよう…

…お互いにねっ！」

「そっだな……………どんなに喧嘩したって、歩み寄ればいいのか。お互いが、お互いを愛している限り」

「うんっ！ それにね、結構面白かったよ。まさか、あの蒼ちゃんがぶざけて関節技をかけてくる日がくるとはね〜」

「ハハハ……」

狂よ、お前に心からありがとうと言いたい。森羅さんも時雨もありがとう。ついでに親父は……まあ、いいや。

「だーからっ！ 今日は私も関節技かけちゃおー！」

そう言い、命は笑うと俺に飛びついてきた。俺も思い切り抱きしめ返し、命を離さなかった。

久しぶりの感覚。とても温かく、心地いい時間が流れていく。何も考えたくない。仕事の事も。全て。

命だけに集中し、命の感覚を味わう。至福の時間が流れていた

「お母さん……」

ぼふっという何かが落ちる音と共に、声。俺と命が同時に振り向き、硬直した。

更に不幸な状況は続く、煉次の後ろから蒼華がひよっこり顔を出したのだ。しかも、母さんの姿もある。

「煉。パパ達どうしたんだー？」

「ちゅーしてた。これが、この前ゆってたえっちなこと？」

「ねえ、おばあちゃん！ パパ達えっちな事してたんだよー！ おこつてよー!!」

「え？ あ……ああ、うん。蒼二、命ちゃん、あんまり変な事しちゃ駄目よ。子供の前なんだから」

そして、俺と命は20代後半になってまでキスをしてた罪で子供の前で母親に叱られた。

最悪な事に、それが蒼華から親父に伝わって、尾ひれが大量について最終的にはユニオン全体まで広がってしまった。

「蒼二さんも、まだまだお盛んなんですね。子供の前で……」

奏の頬をちよつと赤らめた笑顔が憎たらしい。

「お兄ちゃん。あれは、蒼華ちゃん達の教育上よろしくないよ！」

鬼の首をとったかのような遥緋の顔が心底ムカついた。

「出たぞー！ 強姦魔だー！ うひゃひゃひゃひゃ！」

「お前ら逃げろー！ 襲われるぞー！」

「……蒼二、人の噂も75日までだ。頑張るんだぞ」

そう言い、ゲラゲラ笑いながらユニオン内部を走り回ってく親父と陸人さんの給料を下げてやった。

今日もこうやって、俺の穏やかに過ごそうとする一日は無常に過ぎていくのだ。

ま、平気だけだな。だってよ

「はろー。蒼ちゃん元気ー？ 蒼華達がそろそろ帰ってくるから、

おやつ作ってるよー」

あの件以来、暇な時間は命と音声メッセージのやり取りをする事にしたのだから。

だが、まさかこれが原因でまた命と喧嘩する事になるとは、夢にも思ってたがな。

F i r s t c o n t a c t : 6 鬼神 (前書き)

**連続投稿
1**

二階堂特区の二階堂本陣ビル前。時刻はとうに深夜だが、騒がしかった。

響き渡る、悲鳴。悲鳴。悲鳴。そして断末魔。周囲一帯に血の霧が立ち込め、おぞましい惨状だった。

バラバラにされた人体が幾つも転がり、そこには人類の敵 悪鬼の姿が在った。

二階堂の警備の人間の頭部を両腕で握りつぶした鹿の顔を持つ人型の悪鬼。その肩には、白髪の少年。

「脆いねえ！」

白髪 ナナシは楽しそうにそう叫ぶと、近くに居た警備の胴体を自身の式神で真つ二つに断ち切った。

恐ろしいほどの切れ味と腕力。小柄な体からは想像できない程の力だ。そして、ナナシが切り開いた道を、

三つの影が音もなく走っていった。村雨と剣菱と暁だ。進行を確認するとナナシも周囲を警戒しながら、

ビルの内部へと侵入。既に戦闘は終わっていた返り血を大量に浴びた鬼の如き村雨だけがそこに居た。

「十名家も大した事ないな。興ざめだ。帰りたくなってきた」

「おっさん……こんな強かったのかよ」

村雨の本気の戦いをはじめて見たのか、剣菱と暁は言葉が出ない

ようだった。ナナシはそれを見て笑う。

どう見ても剣菱と暁は自分よりも年上なのに、どこか自分より下の子に見えてしまうのだ。

実際、ナナシは村雨の戦いを見ても特に感想を抱かなかった。記憶は失くしても、体は覚えていた。

ナナシは村雨以上の圧倒的な剣士を見た事がある。そんな確信が心の中にあつた。

「じゃ、手筈通りに」

四人は散開して、それぞれの役割をこなす為に走り出した。そして、ナナシの目的は本陣への強襲だ。

箒絡を優しく撫でると、異音が周囲に響き渡った。黒色の点が周囲に現れ、やがて収束して鳥の悪鬼が生まれる。

「行こうか」

鳥型悪鬼に飛び乗り、頭を叩いて飛翔させる。そのまま二階堂特区のビルを瞬く間に上昇していくナナシ。

そして、最上階にある本家のオフィスの窓ガラスの傍まで上がると、手榴弾のピンを引っ抜いて投げつけた。

数秒後、爆発。ガラスが轟音と爆砕と共に飛び散り、ナナシはニヤリと笑った。開けた窓の隙間に、黒いものが見えたからだ。

雨龍の式神の黒龍だ。雨龍を守るようにして、黒い鉄板を重ね合わせたような龍が一匹。

「やってくれるな。こんな子供がよ」

子供、と言われてナナシは何故だか笑いがこみ上げてきた。とりあえず、

「うるせーよー！」

と叫ぶと共に鳥型悪鬼を黒龍目掛けて突っ込ませた。黒龍と雨龍も同時に臨戦態勢へと入った。

窓を抜け、鳥型悪鬼が黒龍に襲い掛かる。鋭利な爪を閃かせて黒龍を襲う鳥型悪鬼だったが、黒龍が大きく振った

拳の一撃でバラバラにされてしまった。物凄い力である。だが、その頃にはナナシはとくに鳥型悪鬼から離れており、

「いくら式神が強くてもねー。主をやっちゃえば、すぐなんだよ！」

空中から雨龍目掛けて簞絡を振るうが、雨龍は簡単にそれを避けた。

（あれ？）

すぐさま着地し、今度は確実な殺意をこめて簞絡を振るう。一度だけではなく。二度三度も。だが、雨龍には当らない。

やがて、雨龍の右拳が顔面に炸裂し、ナナシは後ろによろめいた。雨龍は淡々と拳を叩き込む作業に徹し、その間も

ナナシは簞絡を振るうが、どうして当らない。そして、背後に違和感。風の流れが変わったと思えば、黒龍が大きく

腕を振り上げている。このタイミングでは避けられない。簞絡を盾にして防御するが、それでも衝撃は凄まじかった。

反対側の窓を突き破っても止まらない勢いでナナシは空中に投げ出されると共に、大きく笑った。

「はっは！ 流石僕だ……！ 時間通り！」

隣のビルの壁に簾絡を突き刺して落下を止め、その上にふわりと飛び乗る。そして、遠く離れたビルの屋上を見た。

今夜は月が雲で覆われている暗い夜だ。だからこそ、気がつかなかったのだろう。そのビルの屋上で、黒の炎が

渦巻いている事に。罪歌の目的は、二階堂ビルの機密が詰まった最上階の完全破壊。自分達の情報の元を破壊

すると共に、二階堂の仕事を止めて暫く自分達への追っ手が手につかないような状況にするのが目的だ。

「罪ちゃん。いつけえー！」

凝縮された黒の炎が二階堂ビル目掛けて発射された。流石の雨龍もこれには焦った。黒龍の中に逃げ込み、

何とか自分の身だけは守れるだろうが、他は駄目だろう。だからこのような連中に喧嘩を売りたくなかったのだ

と雨龍の怒りは龍一へと向かった。だが、

「諦めるのは早いんじゃない？」

声が聞こえ、何時の間に現れたのか三枝千里が雨龍の前に立った。虚空から自身の式神を抜き放った

千里は、腰を落として乖離のオーラを長く伸ばし、

「っふ！」

向かってくる炎を真つ二つに叩き斬った。その一撃により、黒の炎は二階堂ビル最上階を焼き尽くす事が出来なかった。

罪歌は舌打ちし、違うビルへと移動を始めようとした。だが、その足が止まった。何時の間にか、自分の背後に誰かがいた。

偉そうな大柄な男。口元には下品な笑みと共にタバコが啜えられ

ている。

「こりゃあ、上玉だ。五体満足でいたきゃ、服脱いでメスらしくケツを振る事をおススメするぜ」

「噂よりも下品でちよつと中二病が入ってるわね、二階堂龍一。気持ち悪いから、殺すわ」

「交渉決裂ってか。ま、両腕ぶつたぎりや、考え方も変わんだろ」

罪歌と龍一は獰猛に笑い、戦闘を始めた。

その頃、二階堂ビルの最下層で剣菱と暁は死に掛けていた。

広大なロビー付近では装飾品やバイクが燃えており、夜の闇と相まって、無数の影が生まれている。

相手はたった一人。暁の妹、御崎朱音。それ以外の人間はこのフロアには居ない。村雨は上の階層に行ってしまったし

狂は罪歌の攻撃が失敗した時の事を考えて、罪歌とは違うビルの屋上で力を溜めている手筈だった。

それ故に増援はない。剣菱と暁だけで、ふらりと現れた御崎朱音を倒さなくては、未来がない。

「流石に、しぶといですわね」

朱音はロビーに腰掛けて寂しそうに呟く。それだけで、周囲のあらゆる影が質量を持つて二人を襲う。

それを避けながら霹靂と天照で攻撃を行うが、朱音も強い。影で完全に攻撃を飲み込んでしまっていた。

接近戦を挑もうにも、緋眼を持たない暁では近づくことも厳しい。更に剣菱だけでは、決め手にかけてしまう。

「貴様の妹、凶悪すぎると思うのだが……」

「当たり前だ。御崎が八神に喧嘩売ってられんのも、全てアイツという存在のお陰だからな」

「アホか！ 何でそんな妹をきつちり躰けておかんだ！」

「うるせえよ！ こうなっちまったもんは仕方ねえだろうが！」

言い合いを続ける暁と剣菱は朱音は冷めた目で見つめていた。戦いの最中に喧嘩をするとか、兄は相変わらずだ。

身体能力や式神は前よりもかなり上昇しているものの、精神方面での成長はなっていない。

とまで考えて、朱音は不信任を抱く。

（そんな弱点をあの八神村雨が　　）

とまで考えた時だった。罵りあったまま剣菱と暁が床に自身の式神の攻撃を叩きつけた。そして、轟音を立てて

剣菱と暁は一階層下へと落ちていく。

「……やられましたね。でも　っ！」

影の中から巨大な腕が飛び出し、剣菱と暁の空けた穴を大きく砕いて広げる。更に、もう一本影の中から手が現れ、

燃えていた装飾品やバイクを一階層下へと落とす。暗かった階層に明かりが灯り、これで朱音の影が消える心配はない。

影に乗ってゆっくりと降り立つ。だが、それこそが最大の誤算だという事に朱音は気づいた。

一階層下の通路は一本道。しかも、広くない。横道もない。その通路の最奥には、二つの光。

「引つかかったな！」

「流石に、これは防げまい！」

ずっと天照と霹靂の力を凝縮していた二人の攻撃が同時に放たれ、通路が光で満ちる。あまりの圧倒的な光に、

朱音の影は消し飛ばされてしまい。どうにか自分の体の部分だけは守った。だが、溜めた二人の威力の方が強い。

影の式神が限界を迎え、電撃と熱線を至近距離でくらい、朱音の体が火を噴いて吹き飛んで通路の壁に大きく叩きつけられた。

「つか……はっ！」

それを好機と感じたか、剣菱と暁が走ってくるのが見えた。特に、剣菱の速さは並じゃない。朱音は力を振り絞って影を顕現させ、

剣菱目掛けて影の拳を放つが、緋眼使いにそれが当るはずもなく、簡単に避けられてしまった。だが、意識が拳に向いたので

朱音は剣菱の足元の影を少し膨らませ、足をすくった。バランスを崩し、空中に浮いた剣菱を朱音は見逃さなかった。

「っは！」

影で全方位を囲い、全身に強烈な一撃を与えた。剣菱の全身が嫌な音を立て、そのままバランスを戻す事が出来ずに、倒れ伏した。嫌な音が響き渡り、

「やりやがったな！」

暁が怒りのままに突っ込んできた。朱音はそれを冷静な目で見据え、影武者で迎え撃った。雷を纏った刀をはたき落とし、それでも至近距離から放とうとする暁を周囲の影で一斉に殴りつけた。一発。二発。三発と影の拳が暁の体のめり込み、その度に骨が変な音を立てた。

「くっそ……が！」

暁が壁に持たれかかったまま、ゆっくりと崩れ落ちていく。戦闘が終わり、静けさがこの場所だけ戻った。上の方では今でも激しい戦闘音が響いているのが聞こえる。朱音は暁の前に立って、影の刃を手にした。狙うは首筋。それで、全部終わり、朱音の未来は約束される。二階堂の依頼をこなし、尚且つ暁を殺した事で御崎での位置は不動のものとなる。

「……っ！」

だが、出来なかった。影の刃を引っ込め、朱音は気絶している暁を悲しげな瞳で見つめたまま動かない。

「……やらぬのか？」

背後から声が聞こえた。振り向くと、真砂剣菱が立っていた。あの攻撃をくらったというのに、まだ立てるとは
流石の朱音も予想していなかった。だが、もう剣菱には戦闘をする意思はないようで、式神は顕現されていない。

「頭の中では整理はついているのに、心がついてきてくれないんですよ」

剣菱の言葉に、朱音は達観したような微笑でそう答えた。

「それは、貴様がまだ人間だという証拠だ。心を失って、戦い続けるのは獣がする事だ」

「ですね。この光の届かない世界でも、やはり理性は必要ですから」
「うむ」

会話が一度途切れた。お互い黙ったままの時間が数秒過ぎ、やがて朱音は意を決して口にした。

「兄さんをよろしく願います。貴方達と居れば、任務失敗もそうそう責められないでしょう。」

私は、御崎の家の勝手な希望なのですからね。だから、こうするしかないんです。殺す寸前まで追い詰めたが、
御崎暁の仲間に阻まれた、と。兄さんにどれだけ恨まれてもいい。でも、兄さんを生かすにはこれしかなさそうですから」

「本当にそれでいいのか？ 暁はこう見えて出来た男だ。全部話せば、きっと妹に力にはなってくれるのではないか？

だからこそ、貴様は兄を殺せないのではないか？ 暁から貴様の話は聞いた。ずっと昔は、仲が良い兄妹だったのだろう！？」

剣菱は声を張り上げた。剣菱には救えなかった妹が居た。だが、今ならまだ暁ならば妹を救えるのだ。

仲間には自分のような無念さは味わって欲しくない。だからこそ言葉だったのだが

「きっと、そうでしょうね。兄さんは、ずっと私を助けてくれましたから。でも、私が兄さん側についたら、御崎の家は終わりです。私と一部の力が強いのをいい事に、敵を多く作ってしまいました、それでも家族は見捨てられません。きっと、数多くの方が死ぬでしょう」

「……………そう、決めたのか？」

「はい。でも、希望がないわけじゃないんです。何時か、私を救ってくれる人が現れてくれるんじゃないか。そんな淡い希望ですが、すぎるのには十分です。私はこれからも、御崎でその時を待つ事にしようと思います」

朱音の言葉ははつきりとしていた。だから、剣菱はもう何も言わなかった。再び警戒した顔に戻り、構えを作る。

「ならば、我と貴様は敵同士だ。今日の事は無かった。聞かなかった。我はこれからも暁を狙うのならば、全力で貴様を撃退すると誓おう。暁が御崎に復讐するならば、何処までも付き合つと誓おう。貴様と、暁自身の為にな」

「ええ。それで、よろしくお願いします」

剣菱は暁を担いで朱音の地下通路を歩き始めた。悲しい兄妹だ。きつと、死ぬまで分かり合える事はないだろう。

だから　と剣菱は願う。御崎朱音を本当の意味で救ってくれる人間が現れる事を。

ナナシは再び始まった戦闘で苦戦していた。

空を飛べる雨龍と空中戦をやるのは不利なので、一旦ビルの中に逃げ込んだのだが、黒龍の体に変化したのだ。

体の形が大きく変わり、あれだけ大きかった黒龍が雨龍ぐらいの背丈へと縮んだのである。

厄介なのは、それで更に装甲が硬くなった事。今の自分では切断できないレベルまでになってしまった。

そして、一番厄介なのが

「当らない……！」

ナナシの攻撃が全く当らない。雨龍の予知の力による恩恵だ。全ての攻撃が読まれ、常にカウンターの恐怖に晒される。

時間をおう毎に傷ついていくナナシの体。それでも、ナナシの体力が尽きる事はなかった。

（こいつの体力は……人間のレベルじゃねえ）

このまま千里眼を使えばジリ貧になるのはこちらだ。あまり長時間使える能力ではないからだ。だからもう、決着をつける。

ナナシの突きの一撃を回避し、カウンターで腹に拳を打ち込む。それだけでは終わらない。くの字に折曲がった体を

更に殴りつけ、顔が降りた所に手加減なしのアッパー。黒龍の硬い拳で殴られ、ナナシの額から鮮血が飛び散る。

「終わりだア！」

口から火球を放つ。至近距離から放たれた火球はナナシの体に直撃し、爆砕。轟音をと煙を立ててナナシの小柄な

体は転がっていった。雨龍は空中へと飛び、ナナシの簞絡を握っていた手を踏みつけた。骨の折れる音がし、

ナナシが苦悶の声をあげる。これで、勝負はついた。ここで殺すにはあまりに惜しいので、雨龍は提案を投げかける。

今回の事件の六人を仲間に引き込めば、雨龍にとって大きな力となる。将来、二階堂を潰す為の大きな力に。

「いいか。よく聞け。死にたくなかったら、投降して俺に従え。悪いようにはしねえよ」

「つか……はっ！ まだ、勝負は……！」

「こつちには御崎も居る。あの八神村雨も、千里と戦えばただじゃ済まねえだろう。後は、ウチの万里が全員倒して終わりだ。

いいか。万里は俺達の中じゃ一番強い。あいつが本気を出せば、俺と千里で行っても勝てるかわからねえぐらいなんだ」

「う、ウチだって……罪ちゃんが居る……もんね！」

「秋月罪歌は諦めな。お前らが俺に忠誠を誓っても、悪いがアイツだけは今助けてやれねえ。

兄貴の慰み者として数年はコキ使われるだろうな。だが俺とく
りゃ、何時かは」

その言葉を聞いた瞬間、ナナシの中の理性が途切れた。罪歌が不幸になる？ そんな事は絶対に許さない。

気がついたら怪我だらけだった。記憶もなかった。何が無なのか
わからなかった。そんな自分を、罪歌と狂は助けてくれた。

言葉にできないほどの感謝がある。人に優しくされたのは久しぶりだった。それが、とても暖かくて嬉しかった。

そんな罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。

が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。罪歌が。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

絶叫。いきなりの事に、雨龍が一瞬たじろいだ。バランスを崩したので、後ろに大きく跳んで、体勢を立て直す。

驚いた事に、ナナシが立っている。しかも、折れた筈の腕で箆絡を持って。体中の出血も止み、傷口も次々と消えていく。

「な、んだ……よ」

「!!!」

咆哮を上げ、理性無く雨龍へと襲い掛かった。見れば、箒絡の形状も変化している。刀身が大きく広がり、

大剣のような大きさにまでなっている。更に一番驚いたのは、頭からは角が飛び出していた。即ち、人間ではない。

「こいつ……まさか、鬼神かよ!？」

十名家のみ知っている秘密の一つ。鬼神という種族の存在。日本では、十文字が特に何も言わない為に何も

知られていない。人間と上級悪鬼の間に生まれた、異形。その力は、絶大であると雨龍は聞いていた。

目の前の化け物を見て、改めて納得。ナナシの身体能力は先程までとは比べ物にならない。

「降魔箒絡……」

ナナシが小さな声で呟くと同時に、降魔箒絡を振った。それだけで、周囲に大量の鬼の悪鬼が現れた。

小鬼から大鬼まで、多種多様だ。そして、ナナシが降魔箒絡を振るうと同時に鬼達も一斉に襲い掛かってきた。

流石に危険すぎた。雨龍はビルの窓を突き破り、空中へと脱出。

「っ。悪い冗談にも程があるぞ……!」

そう吐き捨てていると、

「雨龍！ 後ろだ!」

黒龍が大きく叫んだ。慌てて雨龍が振り返ると、ナナシを先頭として全ての鬼達が力を溜めていた。

その前には闇色の巨大な球体。あれは危険だ。嫌な予感がする。今すぐ、予知の力を。

とまで考えた時にはもう遅かった。

「大鬼砲!」

闇色の光が発射され、雨龍はまともにそれを正面から受けた。圧倒的な威力で次々と装甲が破壊されていく。

何とか力を振り絞って光の中から脱出した時には、既に満身創痍で勢いを殺せず、近くにビルに激突した。

そして、意識が薄れる瞬間。雨龍は見た。近くにあった、先程の光を受けた30階建てのビルが真つ二つに倒壊していくのを。

「本当に……悪い冗談であってほしいわ……」

そう言つと、意識を完全に失った。

F i r s t c o n t a c t : 7 宣戦布告 (前書き)

連続投稿 2

First contact:7 宣戦布告

八神村雨は粗方の敵を斬り終えて、不満げに死体を蹴っていた。どれもこれもが弱すぎる。これが、日本に名だたる十名家の力なのかと幻滅もしていた。

「仕方ない。直系でも殺しに行こう」

堂々とエレベーターを使い、最上階へ向かおうとする。意外な事に、罪歌の目的の遠距離破壊はまだ

行われていないようだった。やがて、エレベーターが最上階到達。ドアが開くと、肌寒い。天井が無くなっている。

見えるのは闇色の空と少しだけ壊れた部屋の内部。人影は一つだけ。刀を持った女だ。

この前見た、村雨が妙に惹きつけられた少女と一緒に居た、三枝の長女。三枝千里だ。

「こんばんは。八神のおじさま」

「良い夜だな。三枝の出来損ない長女」

敢えて挑発してみる。村雨が調べた限りでは、三枝は長女よりもまだ小学生の妹の方が優れているらしい。

だからこそその言葉に、千里は歯を食いしばって耐えていた。反応から察するに、妹の事も嫌いになれないのだろう。

このようなタイプは一度壊れると、そのまま壊れて進むタイプだと村雨はニヤリと笑った。そう、自分とそっくりなのだ。

「殺しますよ、貴方」

「奇遇だな。俺様もお前を殺す予定だった」

お互い同時に動き出す。千里は自身の式神、乖離を抜き放つ。村雨も紅椿を抜き放って応戦を始めた。

光るオーラは全てを切断するという事は知っている。対する千里も、紅椿の真の怖さは血による攻撃だと知っている。

お互いの情報は出揃っていた。後は、剣の腕のみ。

「ハハハハハッ！」

血の霧を撒き散らしながら、村雨は千里へと襲い掛かった。血で刀身を倍以上の太さまで大きくし、

凝固して以上に硬くなった血の刀身で千里を叩き潰すように紅椿を振るう。千里は狂乱の力を発動させ、

身体能力を高めると、乖離を振って血の刀身を切り裂いた。だが

「若いな。小娘」

斬った刀身部分が爆ぜて千里へと襲い掛かる。目くらましをされ、乖離のオーラが一瞬制御を離れた。

その期を逃さず、村雨は緋眼を発動させて一気に千里へと襲い掛かった。獣のようで、何処か洗練された

荒々しい剣撃が千里を襲うと共に、村雨は哄笑しながら言葉を紡ぎだす。

「いいよなあ！ 妹というのは、無条件に慕ってくれるのだから！
たとえ、無能でも！」

「っ！」

「知ってるんだろう？ 妹の方が優れていると。妹が気をつかって手加減しているのを！」

村雨の言葉は適当だった。だが、千里の中にあつたほんの僅かな疑念を膨らませるには最高の言葉だった。

「努力なんて無駄。でも諦めきれないんだろう？」

千里の目に涙が見えてきた。防御もかなり遅れてきている。段々と、千里は村雨の術中に嵌りつつあった。

だが、村雨は気づいていた。千里に言っている言葉は、全て自分がかつて思っていた事だ。

弟に全てを奪われた。八神の未来も。左腕も。剣士としての誇りも。当事はこうして、毎日世界を呪っていた。

「そ……んな事！」

不恰好な一撃を村雨は見逃さなかった。紅椿で器用に千里の手を打ち、乖離は千里の腕からすっぽ抜けた。

回転し、ソファァーに刺さった自分の式神を絶望と共に、見つめる千里。村雨は、笑顔で千里の首筋に紅椿を突きつける。

「このまま生きていても、将来きつと苦渋を舐める事になる。妹が果たして、今の純なまま育ってくれるかな？」

「……」

「将来才能に溺れた妹はきつと歪むぞお！ その才能を使って、お

前を滅ぼしにくるぞお！」

「……っ！」

「お前は頑張ったよ、凡人。もういいだろ？ 楽になりたいだろう？ 安心しろ、一瞬で殺してやる」

村雨の中には何時の間にか妙な怒りが生まれていた。千里に対してか、はたまた自分に対してか。

だが、千里はキツと村雨の事を睨みあげた。たえそうであつても、千里には味方が居る。

どんな時でも自分を見捨てたりしない、大切な親友が居る。だから、諦めない。これからも生きてやると。

それは、村雨が一番心の奥底から欲し、言葉にできないものであった。対峙している村雨も、それに気づいた。

千里の心を照らした希望の光に。

「死ね」

冷徹な声でそう言うと、本気で紅椿を振り下ろそうとしたが、直前で手を止めて後ろへと跳躍した。

上空から何かが落ちてくる気配がしたからだ。そして、轟音を立てて落ちてきたのは、満身創痍の秋月狂だった。

「狂！」

「痛っ……何だよ、あのガキ」

上空を見上げると、長刀を下げた一人の少女が炎の翼を纏っていた。そして、炎を噴射し、急降下すると村雨の前へ。

ぞくつと。本能的な恐怖を感じ、本気で後ずさったと同時に銀色の閃光が走る。恐ろしいほどの剣速で、斬撃が放たれたのだ。緋眼を発動しても、見切るのは難しいほどの速さ。しかも、体は小柄で非常に見難い。

「お姉様。お下がりください！ 私が、倒します」

「万里……！」

千里の返事も聞かず、万里は炎を噴射させて飛び掛った。起き上がった狂も、同時に風を纏って万里に襲い掛かる。

二対一。万里には圧倒的に不利な状況。だが、万里は剣速を囿にしたとび蹴りを村雨の腹に叩き込んでいた。

子供といえど狂乱の力を発動しているため、威力は強い。そのまま蹴った反動を利用して、空中で半回転。

そのままの体勢のまま、驚異的なボディバランスで、万里は狂目掛けて斬撃を放つ。流石に、あの体勢から斬られるとは思っていなかった狂は、右腕を打ち付けられ大きく飛ばされた。

そして、万里は音も無く着地。

「訓練中で模造刀しか持っていなかったのが幸運でしたね。真剣なら、貴方の腕は飛んでいました」

その通りだった。狂はしばらくは使えそうに無い右腕を使うのをやめた。村雨と横に並び、

「俺が援護。村雨が斬り込んでくれ。相手はかなりのもんだ」

「わかってます。久しぶりに、ぞっとする剣士と出会いました」

村雨がじりじりと距離をつめていくと、万里は刀身を鞘にしまい、抜刀体勢をとった。その場にいた全員が息を呑んだ。

剣菱は万里の殺気の強さに驚き、吞まれかけていた。天才の妹など、所詮は子供レベルと侮っていたが、

三枝万里は本物の天才だった。小学生とは思えない。だが、逆に燃えても居た。これが、十名家の直系。殺しあうには楽しすぎる相手。

そして、村雨は緋眼を発動させて本気で万里を殺しにかかった。対する万里は、少しタイミングを外して、刀を抜いた。

高速の一撃。村雨は緋眼を発動し、集中力を極限まで高めてその一撃を避けた。

（勝った！）

そのまま、紅椿で万里を脳天から割ってやろうと手を振るうと、万里が右手の刀を投げ捨てたのが見えた。

投げ捨てたのは何故。何故、勢いをつけたのだ。答えを得た時には、万里の持っていた鞘がわき腹にめり込んでいた。

「が……っ！ ああああああ！」

骨が折れる音。呼吸が出来ない。威力が凄まじい。意識が途切れそうだった。村雨は大きく吹き飛び、屋上から落とされてしまった。

「村雨！」

狂が意識を失ったであろう村雨を追いかけて同じくビルから落ちていった。万里は、それを冷たい目で確認すると、千里に何時もの表情で向き直る。

「大丈夫ですか？ お姉様？」

「ええ。平気よ」

何故だか、千里は万里の顔を見ることが出来なかった。

他ビルの屋上で戦闘を行っていた罪歌は、余裕だった。

二階堂龍一。二階堂の長男だからと思って期待してみれば、大した事がない。

式神は鋼鉄化するのみ。攻撃はそれなりだが、そこまでのキレはない。本当に、無能な長男だと理解した。

「ええ。ええ。そのまま、脱出の手筈はお願い。ナナシは見つけたの？ うん。気絶してるだけなのね。良かった。

じゃあ、狂と連絡をとって合流も必要かもね。うん。後は、こつちで適当にやっておくから」

龍一の攻撃を避けながら、携帯電話で脱出の手筈を整えている剣菱と会話している。龍一にとってこれ以上ない屈辱だ。

どれだけ振っても、フェイントをかけても、罪歌の長い髪一本すら斬る事が出来ない。こんな筈じゃなかった。

予定ではとづくにこの女を好きにしている筈だった。なのに、何

故。自分ひとりだけこんな必死になっているのかわからない。

「くっそがあああああああ！」

「そうね。コンビニで人数分お弁当を買っておいて。あ、私リンゴジュースは100%じゃないと飲まないから」

「死ね！ 死ね！ 当れえええ！」

「え？ 好き嫌いは駄目？ 嫌よ。嫌いなものを嫌って何が悪いのよ。30%なんて邪道もいいとこだわ」

決して噛み合わない罪歌と龍一の言葉。通話を終わると、罪歌は「まだやってたの？」みたいな目で龍一を見た。

「で。私もう帰っていいかしら？ 他の所から、貴方のビルの最上階壊さなきゃ」

「て、テメエ……」

「貴方って何時もそんなハアハアしてるの？ それじゃ、モテないわよ？ ああ、モテないから権力で女をモノにしてるのね。

何それ？ 素人童貞以下だわそんなの。生きてて恥ずかしくないの？ ああ、バカだから恥ずかしいとか知らないのね」

罪歌はニヤニヤしながら龍一を挑発していく。龍一はあまりの怒りに声を大にして叫んだ。

「お前、殺すからな。俺は、十名家の二階堂龍一だぞ！ もう、テメエに安息の日々はないと思いなア！」

「現在進行形で安息だけど？」

「地の果てまで追ってでも、殺してやつからなあ！」

「いや、日本から出る気はないけど」

「絶対後悔させてやつからなあ！」

「そんな泣きそうな顔で言われても」

ついに我慢できなくなった龍一。全力で拳を振りかぶって罪歌へと放つ。そして拳が届く直前。

「残念でした」

龍一の拳の傍に小爆発が起きて軌道が変わった。更にそれは連続し、龍一が苦悶の声を上げる。

距離をとった所で少し大きめの炎を起こす。膨張した空気に龍一の体が飛んでいく。数十メートル上まで上げ、

罪歌は全力で力を溜めた。凝縮された闇色の炎が拳に集中し、龍一と二階堂ビルの中腹が重なった瞬間、

「吹っ飛びなさい！」

圧倒的な闇色の炎が放たれ、龍一を勢いよく飲み込んで二階堂ビルへの中腹を貫通した。中心を炎によって

全て焼き尽くされた二階堂ビルは周りの建物を巻き込みながら倒壊を開始した。流石に、やりすぎたかと思う程の轟音。

そして土煙。何時の間にか、ビルの下は野次馬で埋め尽くされて

いた。だが、目的は果たした。この世界への宣戦布告が。

「まあ、景気づけにはなるでしょ」

罪歌はビルを降りて大騒ぎになった野次馬の群れの間を器用にすり抜け、やがて姿を消した。

その次の日から、日本中は大騒ぎとなった。
十名家の中でも有数の二階堂が新鋭の組織で完膚なきまでに叩き潰された。

この一件から二階堂の権威が僅かに下がり、下の家だった三枝の謀反が計画されるようになり。

三枝姉妹の関係は崩壊の発端を見せ、命を救われた少女はまた彼等に会いたいと願うようになり戦いの道を選び始めるようになる。
そして、

秋月罪歌

秋月狂

八神村雨

ナナシ

真砂剣菱

御崎暁

の六人は文字通り、世界の敵と認知されるようになった。

死罪六神は復讐者達の集まり。そして後に、彼女等のかけがえない居場所となるのであった。

おまけ編 + ここから下を読む上での注意（前書き）

これより下の話を読む場合は。

緋色の眼シリーズ終了後の話となります。

ネタバレもあるのでお気をつけください。

おまけ編＋ここから下を読む上での注意

おまけ編。

今回のおまけ編はアレです。神々の黄昏からPASTまで数年の間があります。

神々やDaysまで出ていて、PASTで全く出ていないキャラが居ますので、

その人達がPAST時にどうしているかとか、その他PASTからの裏設定のようなモノを書いていきたいと思います。

【サブキャラの現在について】

・岩瀬奈央

バイト先だけの関係になると思っていたが、罪歌と同時期に保育の学校に入学。二年間同じクラスで卒業。

罪歌の初めての親友となり、八神家に招待された際に陸人達と出会い、話の弾みで純也の娘だという事が発覚し

蒼威と森羅と陸人の度肝をぬく。卒業後は保育士となり、充実した毎日を送っている。

・絹塚志保

高校卒業後、某有名国立大学へ。そこで四年間過ごした後に、親の会社の下請け会社を設立し、

社長として働き出す。高校で仲良くなった聖子は、現在そのパート事務員。未だ未婚。仕事が現在の生きがい。

・大野（伊達）聖子

高校卒業後、英輔と同じ大学へ。二回ほど別れたり、よりを戻したりしながらも、最終的には英輔と結婚。

現在は実家に身を寄せ、親に二歳になる娘の面倒を見てもらいながら夫婦で自立資金を溜めている。

・伊達英輔

高校卒業後、聖子と同じ大学の工学部へ。四年間資格を取るために忙しい日々を送り、何回か破局。

大学卒業後は、大手部品工場勤務。子供には不自由させたくないで、ひたすら働く毎日。

休日は少しだが、聖子の実家の店の手伝いもしている為、聖子の家族とはとても仲が良い。

・村松信吾

高校卒業後、大した目標も無く大学へ進学。その時期、今までの常識を全てブチ壊す変な女の子と出会う。

紆余曲折を経て、現在は命に仕事を紹介してもらい、大和と空我の店で働きながら、将来どうするかを決めている。

何回か仕事後に運命と飲んだ事があり、その時から理想の女性^{II}運命という考えが生まれた。

マッソ
・松島颯

何気に郁人と竜胆と梨香と高校卒業まで同じクラスだった。その為か、今でも付き合いはある。

現在は大学を卒業し、教職課程を取っていたので、母校の新任教師をやっている。科目は国語。

・牧島信哉

郁人と竜胆は、神々の黄昏事件終了後に蛇王を返しに行った。その後、勇雄が病気で死亡し、牧島の頭首へ。

他の家とは違い、ユニオンの傘下には入らずに段々と悪鬼討伐家業から引退し、用心棒やヤクザ関係の家へと移行。

郁人の事は特に恨んでは居ない。ただ、牧島から追い出した者の当然の結果としてユニオンとは違う道を自ら歩む。

・四条帝

自分の式神が結界だった事に絶望し、全てを莉王に押し付けて四条から逃げ出す。

それから、莉王に会うのが恐くて水商売をしながら、抜け殻のような状態で毎日を過ごしていたが。

その間に戌亥翔と海野友一と出会い、何かが変わる。意を決して莉王から届いていた遥緋との結婚式の招待状を

二人の持つて結婚式へ。そこで莉王に謝罪。遥緋は翔と友一と帝が知り合いだった事にただ驚くだけだった。

・杉谷（神崎）未来

一課を退職した後に、森羅と共に逃亡。その過程で森羅の事を愛するようになり、森羅も森羅で母から脱却し、

結婚を決意。その際に実家から勘当されるも、その有能な能力を買われて八神と浅葱の情報部に抜擢。

娘の真央には自分のようになって欲しくないと思い、四苦八苦しなから子育てを行っている。

・庄屋正人

運命の狐砲をくらうも、全くの無傷だったが、その際に式神に嫌気がさして解散後は暫く実家に帰る。

そこで、幼馴染と恋仲となり結婚するも、仕事が中々上手くいかなく、再び式神を使う仕事を生業とし、

かつての仲間だった白鷺兄弟と共にユニオンに入隊。現在は、再び森羅の部下となっている。

【PAST新キャラについて】

・九我山令

律の弟、姉とは違いのんびりと育てられた為に、姉とは全くタイプの違う子に育つ。

紫と太郎に小さい頃から散々可愛がって貰った。その為か、年上に甘えるのが上手いと良く言われる。

大学での交友関係は狭く深く。染谷、紫、令の他に二名の五人で基本は授業を受けている。経済学が専攻。

年上が好きだと思われがちだが、守備範囲は中学二年生までと少しロリコンの気がある。

・鳴神紫

雷神の鬼神。雷神の住む谷での生活に飽きて、知り合いだった大和と空我に誘われて、九尾の狐に入る。

その後、運命と大喧嘩をした際に、運命に殴られて泣きながら碧と共に、山の中へと逃走。そして、人間に

襲われ、瀕死だった所を太郎と令に助けられる。それから反抗したものの、律と律の母に教育を受けて、

九我山家の一員となった。趣味はパチンコと麻雀。大学ではその手のサークルに入っている為交友関係が広い。

・風早碧

幼い頃から好きだった空我と紫と一緒に居たくて、九尾の狐に入った後、紫と共に脱走。

途中、人間と戦闘になり、そのまま空を飛んで海外へと逃げた。

そこで、様々な人間と出会い、十数年程

海外での活動を主流とし、最後にガラムからの依頼を受けて紡と一時期行動を共にした。

趣味は料理と掃除。全ての鬼神の中で、一番家庭的な鬼神だと自負している。

・永沢希恵

令の大学の同級生。ロリ顔巨乳と、令の好みのド真ん中。紫の大学でのツレの一人。麻雀同好会所属。

実は、陸人が引っかけた出会い系的美津子ちゃんの姪である。

親同士が離婚している為、母方に引き取られており、妹の胡桃は

父方の親戚に預けられた。

【五月颯太の姉について】

- ・長女 五月風香
- ・次女 五月霧香
- ・三女 五月舞香

年子の長女と次女の次に、颯太が生まれる。それから颯太に十歳年下の妹、霧香が生まれる。

現在の頭首は颯太の父だが、実質は姉妹で取り仕切っている。長女と次女は結婚済。

【初期の十名家について】

元々十名家は緋色の眼シリーズに出るというわけで考えたわけではなかったんです。

時雨を主人公とした独立した物語のキャラとして浮かび上がったのが、十名家のキャラ達なんですよ。

十人であるものを求めてとある場所で争いあう。そんな感じで生まれた彼等でしたが、何時の間にか

神々の黄昏に登場し、PASTでは全員出てきて抗争を行っているわけですが、初期設定とは多く違います。

一之瀬凜 式神も何も考えてなく、ただのやられキャラ扱い。多分、戒に一撃でやられちゃうような子。

二階堂雨龍 ちよつと強いかませ犬 長男という設定だった。

三枝万里 初期設定では男でした。名前も「まり」と読むのではなく、「ばんり」と読むキャラ 中身はPASTの莉王。

四条莉王 初期の莉王には名前が無かったです。最終的にテキトーにりおうでいいやって決めました。中ボス的な感じ。

五月颯太 初期設定から何も変化していない。颯太は本当に何処まで行っても颯太でした。

六道紡 初期設定では男でキモオタっぽい子。2ちゃん語を現実で使っちゃう痛い子でした。

七海奏 初期設定では最強電波キャラだった。式神名が「すーぱーおめがはんまー」とか考えてた当事の俺は死んだ方がいい。八神時雨 これは変わらず。

九我山律 時雨に惚れていない。後は相変わらず。令？なにそれ？ 美味しいの？

十文字戒 初期設定ではどちらにしろ重大犯罪者。ラスボス的な位置。PASTのように穏やかではなく、獣のような男の設定だった。

【二階堂雨龍が七海遠音をブチ殺したがつている理由について】

空船の甲板の上。そこに設置されたテーブルには、幾つかのツマミと飲み物が置かれていた。

本来なら物凄い風が吹き荒れているのだろうが、甲板に居る人間達の髪は全く揺れていない。

その原因、六道紡はテーブルの上に空いた小さなスペースに将棋盤を置いて、二階堂雨龍と向き合っていた。

暇そうだった雨龍に声をかけて、対戦を申し入れてみたものの、雨龍はかなり強かった。

「驚いたね。颯太君よりも段違いの腕前だ。私の頭の中に無い戦法をこつと取れるとは驚きだよ」

「まあ、な。こういう勉強は二階堂で腐るほどさせられたし。それに、母親が俺に教えてくれた唯一の遊びなんだよ」

「ふむ。母親といえば、雨龍君。何で君はあんなに遠音ちゃんと仲が悪いのかな？」

「昨日もこの船の通路で何か言い合っていただろう。というよりも、君が一方的に怒鳴っていたみたいだが」

「……言いたくねエ」

「残念だね。では　こうしよう。この勝負に、私が勝ったら教えてくれ」

「……いいぜ。ま、この陣形を破れたらなの話だな。」

雨龍の陣形は完全な守備状態に入っていた。これだけ深く守られでは崩すのが難しい。

しばらく無言で二人が打ち合っていると、紡が突如猛攻に出だした。重要な駒が取られるにも関わらず

どんどん進めてくる。雨龍は少し訝しげに思いながらも順調に撃

退していくと、紡の表情は何時しか満面の笑みに、

「何笑ってんだよ？」

「いや。王手だ。これは詰みかな」

気がつくと、何時のまにか王が追い詰められていた。しかも、周りの駒に幅まれて動けない。

あらゆる手を考えてみたが、どう考えても詰みだった。負けたのは久しぶりだった雨龍は肩を落として落ち込む。

「いやあ、君は最強の敵だったよ。　というワケで教えてくれな
いか？　何で遠音ちゃんが好きなのかをさ」

紡はニコニコ笑いながら雨龍を見つめた。その、全てを見透かされそうな視線について耐え切れなくなったのか、

「……………た……………んだよ」

「ん？　よく聞こえない。もっと大きな声で頼む」

「戦いに負けて、万里の目の前で素っ裸にされたんだよっ！」

数年前だったか、二階堂の仕事と遠音が何かの柵で請け負った仕事
事が重なった。

報酬が払われるのは一人。その頃の雨龍は気性が荒く、遠音の事を完全に舐めきっていたのだ。

そして案の定ボコボコに殴られ、更には、

「だーれの顔がとも十代に見えないってえ？」

勝てないとわかった雨龍は挑発して、隙を作る為に遠音に罵詈雑言の嵐を浴びせた。

だが、それは火に油を注ぐような行為であったわけで、遠音は楽しそうに顔を歪めると、

「お前みたいな馬鹿タレにはキツイお仕置が必要だよだね」

遠音は超動で雨龍の体を空中に固定すると、更に超動をかけて雨龍の服を引き裂いた。

「ほらー、万里ちゃん。雨龍のヌード初披露だよお」

そして、ぽーんと雨龍の体を持ち上げ後ろに控えていた万里の方へと投げつけたのだ。

当時の万里は思春期の真っ只中、男性の裸なんて見ただけで悲鳴をあげてしまう程であった。

それだけなら、良かった。本当にそれで終わってくれたなら良かったのだ。

「きゃっ!?! あれ? 小さ..... ああっ!?!」

すぐに万里は自分の失言に気づいたのか、慌てて口を塞いだ。それを見て、遠音は腹を抱えて大笑い。

以来、雨龍は遠音の事が嫌いになった。遠音も遠音で雨龍をからかうのが面白いのか、会うたびに

その話を振ってくる始末。その全ての事情を聞いた紡は、身を乗り出して雨龍の肩をポンポンと叩き、

「雨龍君。男の良さはその大きさじゃないさ。器の大きさが大事

なんだよ」

「うるせえよ！ 絶対そういうと思ったから言いたくなかったんだよ！」

「何なら我ら六道に任せてくれ！ 少々移植、改造するかもしれないが、万里ちゃんをヒィヒィ」

そう紡がエロオヤジのような顔をしながら話していると、

「無理だよ紡。その男の小ささは筋金入りだ。私の小指ほどしかない」

甲板の影から七海遠音がニヤニヤ笑いながら歩いてきた。それと同時に、雨龍の顔が怒りと羞恥に赤く歪む。

だが、どうにか堪えたようでコーヒーを一杯すすり、下を向いて遠音の方を見ようとしない。

「あらら？ 器を大きく見せようって魂胆かな？ よせよせ、そんな事しても大きくならないぞー」

「……………ぶっ殺す！」

「やってみるがいいさ」

椅子から飛び出し、猛然と遠音に殴りかかっていく雨龍。遠音はそれを楽しそうに避けている。

それを見て紡は、少しの羨ましさを覚えた。アレは遠音なりの愛情表現なのだとわかっているからである。

雨龍が万里と別れて落ち込んでいたのを見かねて、声をかけたの

だが、どうやら遠音も同じようだった。

「ハハハ、どうしたどうしたあ」

「うるっせえ！ 化粧落としたら眉毛が麻呂みたいになるくせに！
貴族かコラア！」

「……お前、それを言ったな」

「え……？ あっ！ うわあああああ！？」

「あ……しまった」

遠音に投げ飛ばされて空船から落下していく雨龍を見て、やっぱり違いかもしれないと考え直した紡だった。

D a y s 2 7 : 御崎朱音の思い出（前書き）

お蔵入りだったものを

最終回後としてアレンジしたものです。

某シーンとかぶるのは仕様です。

Days 27：御崎朱音の思い出

久しぶりに、休暇を取れた。本当に、久しぶりだ。この所、ずっと仕事詰めだったから、当然といえば当然。

優しい郁人と竜胆が仕事を肩代わりしてくれたお陰で、二週間ぶりに昨日、俺は家へと帰ってきた。しかも、夕方帰宅。

無駄にテンションが上がったので、ケーキでも買っていつてみれば、命は娘と息子を連れて実家に行ってしまったていた。

そわそわしながら待つ事三十分。疲れが極限に達していた俺は、本当に！ 本当に少しだけ！ という気持ちで布団に

入り
結局、今の今まで寝てしまっていたというわけである。ちなみに、現在時刻は翌日の正午過ぎだ。

「不味いな……」

ここ最近、全く命の相手をしてやれていないので、機嫌は最悪に等しい。だからこそ、ケーキを用意したのだが、

起き上がって冷蔵庫を漁ってみれば、そこにはもう一皿分しか残っていないケーキしかない。しかもご丁寧に

「蒼華のおやつ！ 蒼ちゃんはお食べちゃ駄目」と書いてある。もう、アレだな。涙すら枯れたよ。

仕方が無いので、リビングへ行ってみると 目を疑う光景がそこに広がっていた。そう、娘の蒼華が勉強をしている。

（ありえねえ……）

千島蒼華という女の子は、何処で育て方を間違えたのか、とても女の子らしくない女の子に育ってしまった。

現在は小学生。髪は命に似てさらさらのストレートを、ショート程度に切りそろえてある。もう少し伸ばせば可愛いのに。

と思うも、本人が邪魔で嫌だと言っているので無理に伸ばさすわけにもいかない。そんな蒼華の俺に似ている部分は、目つきの悪さ。親がこういうのもアレだが、蒼華は目つきがあまり良くない。こんな所は、せめて俺に似ないでほしかった。

性格は、破天荒。興味ある事にはすぐに没頭し、周囲の迷惑なんのその。趣味はサッカーと野球。嫌いなモノは、スカートと勉強とピーマンとニンジン。……勉強嫌いは絶対に命の遺伝である。俺は成績はかなり良いほうだったしな。

そんな娘だが、可愛くて堪らない。何時か、蒼華も嫁に行ってしまうのであろうが、もう絶対に渡したくない程に。

「ねえ、パパ」

ああ、こんな蒼華でも何時かは彼氏が出来て、出来ちゃったと言ってしまうのであろうか。

もし、そんな事になったら相手をユニオン総力を挙げてつぶしかねない。どうか、まともな彼氏が出来ますように。

「パパってば！」

「お……？ どうした？　つか、命と煉次は何処へ行ったか知らないか？」

気がつけば蒼華が顔を見上げて、俺を見ていた。いやはや、二週間ぶりに娘と言葉をかわせるとは、感無量だわ。

「ママと煉は運命ちゃんとおばーちゃんとおじーちゃんと一緒にアウトレットモールに行っちゃった。

アタシもついてきたかったんだけどさー。ママがパパが一人だと可哀想だから、残ってて言ってたから残ってるんだよ」

運命の野郎……確か、先週も由加と何処かへ遊びに行ってた気がするんだが。何？　こんな働いてるの俺だけ？

と思いつつも、ヤツは数日間全く寝ずに仕事を出来るので、その時に終わらせているのであろうが。

「成る程な……ごめんな、蒼華。ママ、何か怒ってたか？」

「ずっと機嫌悪かったよ。パパからお仕事で帰れないーって電話がかかってくると、たまーに泣いてたもん。

だから、アタシはこうやって宿題ちゃんとやって、ママを喜ばせてたの。煉が考え付いたんだけどね」

小学生ながらに空気の読める子だ。……そんな事を考え付く煉次の将来も間違いなく心配ではあるが。

そんな事を考えていると、蒼華は再び算数のドリルに向かって鉛筆を走らせている。懐かしいなあ。

我が娘ながら所々というか、結構間違えている箇所すら愛おしい。……そういえば昔、こうやって誰かがやっているのを見ていた事があった。遥緋じゃない。

時雨でもない。命でもない。

ああ、そうだ。アイツだ。

「…………お前、何やってるの？」

「学校の宿題です！ 忙しくて余り学校に行けてないので、ちゃんと追試と課題をこなさないと留年しちゃうんですよ」

そう、俺が多分一番勉強していた頃、そして、世界で一番幸福だと思っていた頃の話だ。

「ほお。…………つかお前、その計算違くない？ ああ、横の英語の綴りだってミスもあるしな」

「ふふん、蒼二君。当てずっぽうはよくありませんよ。蒼二君はまだ中学生なんですから、あっちでテレビでも見てて下さい」

千島蒼二、14歳。御崎朱音、16歳。御崎戦争で、朱音が死んでしまう少し前の話だ。

「馬鹿が。ちいっと答え合わせしてみな」

「はいはい。仕方ありませんね……………って、ええ!？」

式神はデタラメに強く、若干16歳にして、御崎の大人達を従えて家を動かしていた御崎朱音は

「つか、お前の学校レベル低いな。これなら、俺でも解けるぞ」

「……………うう。蒼二君の意地悪……………」

馬鹿だった 人間的にはなく、勉学的意味で。それも、結構危ないぐらいに。

というわけで、当時遥緋よりも、自分を見てほしい。そんな勉強する理由にすら気づいていなかった俺は

この馬鹿な年上の女の勉強を少しみてやる事にしたのだ。まずは、一番危うそうな英語から。

朱音の通っていた高校はそんなレベルが高くない、頭は並み以下ではあるが、経歴は立派なお嬢様学校。

きつと、トップクラスの人たちが頑張って評価を上げていたのだろう。ご苦労なことって。

故にテキストはそう難しくない。英文が書いてあって、その空欄に単語を入れてくという初歩的なもの。

「蒼二君。蒼二君。確か、”ど”が入っていたら疑問文なんですよ
ね」

「ドゥーと読む。しかも微妙に違う」

「……でいすいずあんあつぽー」

「誤魔化すな」

前途多難だ。ここまで壊滅的だとは誰が想像できよう。

「蒼二君。蒼二君。この言葉の意味、知ってます?」

と、朱音。俺がその場所に目をやると「love」と書いてある。

「好き、だ」

「きゃっ。いきなり告白だなんて、最近の中学生は大胆ですね。では、私も。でいすいずらぶそっじー」

「これは蒼二が好きです。そう言うなら、アイラブソウジだろ」

「え……何で私が蒼二君に好きって言うんですか? 勘違いしないでください。」

私はこれは蒼二が好きです。って言いたかっただけです! ぷくくくく」

……殴っていいだろうか、この女。ちょっとムカついたので、席を立とうとすると朱音はすぐに俺にすがりつき、

「ごめんなさい。ごめんなさい。真面目にやります」

とちよつと可愛い顔でねだるので俺は再び席について、勉強を教えてやった。それから二時間。

俺の声が枯れてしまうほどに大声をあげ、その代償とばかりに御

崎朱音の英語の宿題はようやくの終わりを告げた。

流石に少し疲れたので、悲煉に変わって貰おうと思つても、

（蒼二。貴方がこんな疲れる仕事を、私が肩代わりすると思います？）

といい体の支配権を幾ら譲ろうにも絶対に変わってくれなかった。今思えば、あいつなりに気を使ってくれたのかも。

もう、この世には居ない煉という千島の血に宿る人格。アイツは、多分俺を世界で一番理解してくれていた人間だろう。

どんな時でも味方でいてくれた。どんな時でも俺の心配をしてくれた。ある意味では、俺のヒーロー。

すると、朱音は一番の難関の英語が終わった安堵からか、珍しく足を崩して、リラックスした体勢になった。

「いや、疲れましたよ。先生に、御崎は一生日本から出るな。と言われた意味がようやく理解できました」

「出たら、日本の高等教育の恥を晒すようなもんだからな。臭いものには蓋をする、とは良く言ったものだ」

「ひ、酷いです！ 先生だってそこまで言わなかったのに……」

「ははっ。悪かったよ。でも、逆にここまで酷いと何時かお前と英語圏の国に行つてみたい気もするわ」

「では、新婚旅行の際はアメリカに行きましょうか。アメリカンドリームです。二人でビッグになりましょう」

「ん？ お前、俺の事好きじゃないんだろ。勘違いなんだろ？ そ

んな奴と新婚旅行？」

「……あいらぶそうじです」

「良く出来ました」

「パパ、どうしたの？」

気がつくと、蒼華が俺の顔を覗き込んでいた。そして、握っていた鉛筆を放し、俺の目元を拭った。

……恥ずかしい。娘の目の前で、思い出に耽って泣くなんて。だが、これが俺の本心なのだろう。

それでも、あの頃とは違う。もう、俺は悲しくても笑えるんだ。

とても、残酷な事に

「お仕事で、いやな事あったの？」

「いや……パパな。多分、もう。受け入れちゃったんだ」

「何それー？」

「それよりも蒼華、宿題は終わったのか？」

「うん！」

「じゃあ、久しぶりに公園でキャッチボールでもするか？」

「いいの！？ やったあ！」

俺は戸締りをして、玄関に立ってかけてあったグローブとボール。

一応バットも持って、蒼華と外に出た。

こうやって、落ち着いた日常を過ごすのは久々だ。何時もは、暗い裏の世界で生きている俺にとって、

それはとても新鮮な事のように感じる。そして、マンションの敷地から出ると、近所の公園へと向かい、

蒼華と向き合って、ボールを投げあう。……うおう。小学生の女の子は投げる球とは思えん。だが、

「しんかー」

といいつつも普通の球が飛んでくるのがまた可愛らしい。そのま
ま、俺と蒼華は無言で、だが楽しく

キャッチボールを続けた。それは、とても幸せな時間だった。俺

の中にある汚いものが浄化されていくようにも

感じる。あの14歳の夏。俺は、全てを失った。生きる意味も、希望も、愛する人も。何度死のうと思ったか

わからない。何度楽になりたいと思ったかわからない。それでも、俺は生きていて良かったと今では思える。

命と結婚して良かった。蒼華と煉次が生まれてくれた日には涙を流して喜んだ。あそこで、諦めなくて良かったと

「ふぉーく」

俺は、御崎朱音を失った世界で生きていくしかない。そう思うようになったのは何時頃だったか。

それを受け入れるのに、何年かかったかわからない。朱音だけではない。今まで、大切な者を何人失っただろうか。

それでも生きていこう。失う事があっても、俺は進むしかないのだ。それが結局、俺の選んだ道。

「あー！ お前等、何面白そうな事やってんだよ！」

すると、公園の前の通りから、親父の声が聞こえた。見ると、買い物から帰ってきたのだろう。荷物を抱えている。

そして親父は、荷物を命に預けると柵を軽々と飛び越えて、こっちへと走ってきた。

「さ、運命もやる！ 煉次も行こ。 あ、遥ママ、この荷物お願い」

「はいはい。行つてらっしゃい」

おいおい……運命まできやがった。煉次は煉次で相変わらず、参加したいのかしたくないのかわからない顔だ。

母さんと命は、そんな俺達を何故か微笑ましげに見ると、マンシヨンの中へと入って行ってしまった。

そして揃う大人一人と子供が二人に子供もどきが二人。

「よっしゃ！ 俺、ピッチャーな！ 運命、お前キャッチャーやれ！ 俺の神速速球を取れるのはお前ぐらいだ」

「えー、運命はアレやりたい。 ぼーる！ とか すとらーいく！ とか言う人」

「……そ、そうか審判か。 じゃあ、煉次。 お前何処やりたい？」

「キャッチャー……」

「お前らしいな。 つーわけで、息子よ、俺がピッチャーお前が外野な」

「もう、年なんだから無理すんじゃないぞ」

「バカ、俺を誰だと思ってやがんだ」

そう言い会々と、俺は親父にボールを渡し、外野をやるべく後ろへと下がっていった。 とりあえず、こんな草野球で

これだけ盛り上げられる人間って言うのは、結構重要なかもしれない。 なんて思ってしまう。

そして蒼華には激甘い親父が、どう見てもホームランが打てる優しい球を投げたが、速球待ちだった蒼華は

見事からぶってしまった。

「ボール」

「ええっ！？ 今のストライクだろうが！」

「ていうか、蒼威パパ。ボールとストライクってどんな意味なの？」

「知らないのっ！？ てか、知らないのに審判やりたがるなよ！？」

「だって運命も、ああやってカツコよく言ってみたかったんだもん
！」

「……まあいい、続けるぞ。よっしゃ、蒼華。おじーちゃんからヒ
ット打てたら、お小遣いたんまりやるぞ」

「ホントに！？ よっし、おじーちゃん。ばっちこーい！」

気前は良いくせに、微妙にケチな親父はやや速めの球を投げた。
普通の小学生なら、まず打てないだろう。

そう、普通の小学生なら。だが、ウチの娘は普通じゃない。幼い
ながらも、緋眼を使え、それに見合う肉体を
生まれつき持っている。案の定、蒼華は親父の球を平気でかつ飛
ばし、外野の俺の出番が来ましたよと。

「そ、蒼二様アア！ 必ず取ってください！」

ここはリクエストに応えるか、もしくは娘の為にミスしてやるか
迷うも結局、球は取りこぼしてしまった。

親父は絶望したような表情。蒼華は運命と煉次に抱きついて大喜
びしている。それを見て、思った。

多分、これが俺が得た答えだ。

御崎朱音や仲間達を失っても生きていこうと決意した、その結果。

とても愛しく、とても優しいこの時間。

大切にしよう。もう、二度と失わないように。散っていった仲間達の分も楽しく生きてほしいと願いながら

D a y s 2 8 : 九我山令 (前書き)

令は書いてて非常に楽しいキャラでした。

Days 28：九我山令

あの十名家とユニオンの戦いから、半年が過ぎて僕の周りはかなり変わってしまった。

例を挙げるのなら、まずは太郎君が九我山の家から出て行った。子供化した太郎君は、新しい苗字を与えられ人間として生きていく事になったのだ。というわけで、お姉ちゃんの家には半ば半分拉致のような形で現在は居候している。

「何で俺が小学校に通わなくちゃ……！」

僕の甥の北斗と南斗と一緒にの学校に通わされているらしい。あの二人と一緒にとは、ご愁傷様としか言えない。

しかも子供なので、大好きなお酒も禁止されてしまったとの事。逆らおうにも相手はあのお姉ちゃん。

太郎君は結局、恭順の道を選んだ。この前、久しぶりに会った時に、その気持ちはよくわかるので、話が盛り上がった。

碧ちゃんも家から出て行った。碧ちゃん。どうやら空我さんの事が好きらしく、押しかけ女房をしているらしい。

空我さんが涙声で僕に電話してきた時には、本当に驚いたものだ。僕は空我さんの仕事と、住んでる場所を教えた

だけなのに。この前、ユニオンのパーティで会った時に、散々首を絞められたのも、今ではいい思い出だよ。

さて、そんな感じで僕の近況はこれで終わりたい。正直、紫ちゃんの話題にはあまり触れたくは無い。

……………いや、でも最近の紫ちゃんの可愛さは異常。という事で、

少しばかり自慢話でもしてみたい気分だ。ハッハー！

紫ちゃんが変わり始めたのは、太郎君と碧ちゃんが出て行っ
てすぐだった。

「今日は、アタシがご飯作ったる」

無愛想な口調でそう言い、紫ちゃんが珍しく厨房に入ったのだ。
しかも、ずっと暮らしてて気がつかなかったのだが

紫ちゃんは料理が上手だった。僕の家のお味噌汁は濃くてあまり
好きじゃなかったのだが、紫ちゃんの

お味噌汁は僕が一番好きな味なのだ。僕はどうして料理作って
くれたの？と聞いたが、紫ちゃんは答えをはぐらかした。

「ただの気まぐれ」

まだまだある。今までは僕の隣の部屋で寝ていた紫ちゃん
だが、紫ちゃんの部屋のクーラーが壊れたのを機会に、

僕の部屋で寝るようになった。最初の一晚は、緊張して眠れな
かった。何度襲い掛かろうと思ったかわからない。

だが、寝息を立てながら放電をした紫ちゃんを見て、その度に僕
とリトル令は縮み上がってしまったのだ。チキンっていうなよ。

しかも、クーラーが壊れた原因は謎の回路のショート。直そうと
したのだが、

「アタシと一緒に寝るのが、そんなに嫌なん？」

そんな事を言われては、直す気にはならなかった。他にも色々あ
るが、個人的に一番嬉しかったのが、

服装が若干の変化を見せた事。今まで、パンツスタイルが多かつ

た紫ちゃんだが、休日にはスカートを履くように

なったのだ。いや、素晴らしい心がけだと思うよ。しかもミニじゃないところが、また僕の心を揺さぶるのだ。

そして、現在。紫ちゃんは僕の正面のソファーですやすやと可愛い寝息を立てている。

「これは……誘っているのか？」

実を言うと、一度だけキスはした。その後、襲い掛かったが見事に鳩尾に一撃を決められ、悶絶したけど。

寝ているのはチャンスだ。今日は、放電していない。気配を消して、近づいてみる。反応は見られない。

ソファーと一緒に寝転がってみる。反応は無い。髪を撫でてみる。反応は少しだけあった。

「ん……」

声が聞こえた。……九我山令。そろそろ我慢の限界です。ゆっくりと、立ち上がり、紫ちゃんに襲い掛かった！

……なんて事が出来るわけもなく、タオルケットをかけてあげ、敗残兵のような気持ちで僕は自分の部屋に帰った。

そんな惚気話から数日。

相も変わらず、九我山特区は平和です。両親は最近あまり家に帰ってきません。僕たちが今住んでいるのが

九我山の由緒正しきお屋敷。それとは別に、九我山の仕事を行うビルが一軒あるんだけど、お姉ちゃんが

前回の母の日に、温水プールとサウナを増設してあげたら、両親揃って入り浸るようになり、ついには寝具を持ち込んだ。

だからこの広いお屋敷は基本的に、僕と紫ちゃんとお手伝いさん達だけ。ずっとお母さんが管理していたお屋敷の鍵も、

「はい、令ちゃん。後はよろしくね」

「はあ……」

という感じで押し付けられてしまった。しかも、笑えないのが、

「後、これもね」

追加でそう言い、コンドームを渡された。絶句して言葉が出なかったが、お母さんは当たり前のようにニコニコ笑っている。

そうだった。この人は、性について男として越えられたくない部分を平気で越えてくる人だった。

僕の15歳の誕生日は擬似AVという何とも微妙な代物だった。

……いや、お世話にはなっただけだね。

鍵の横に置かれている袋を見つめる。暫くぼーっと見つめていると、僕はとても重大な事に気づいた。そう、

「ヤバイ……使い方がわからない」

童貞。この世界で一番嬉しくない称号。それ故に、コンドームは言わば未知の装着品。

大学の友人に相談してみるか。いや、死ぬほど笑われるだろう。それでは、ユニオン関連にしようか。

郁人君は笑わなさそうだけど、忙しそうでパス。莉王兄ちゃん、無理。義兄さんは……お姉ちゃんに伝わりそうだからパス。

颯太兄ちゃんは恥ずかしい。……神璽さんは絶対に喋る。うん。
頼れるのは自分自身だ。

「……やるか！」

ズボンと下着を脱ぐ。ノートパソコンを引き寄せ、お気に入りを開くと同時に、僕はコンドームの封を切った。

下半身裸で、検索窓に『コンドーム つけ方』と打ち込むとサイトがいくつか見つかり、後は僕の準備だけだ。

音量を確認し、お気に入りの動画をクリックして再生。色々な意味でお世話になります。その時だった。

「令。ちよつとええかな？ 入るよー」

僕は全力でドアに飛びついてた。緋眼使いと同等ぐらいの速度だろう。今の状態は不味い。下半身を露出し、正面のパソコンに映るのは

女性の大半が嫌いなもの。しかも、かなり優しい表現をすれば若い。手にはゴム製のアレ。……殺される。見られたら確実に殺される。

「ちょ！ な、なんや？ 開けてよー。ちよつと、見て欲しいものがあんなん」

「無理！ 無理！ 五分待つて！」

「……あー。もしかして、また変なもん見てるんやろ？ アタシ嫌やゆーたでしょ？」

「後生だから……！」

「だーめ！」

「愛してる！ 愛してるから！ 紫ちゃんに大事なものがあるから！ 開けないで！ お願い！ 今は……！」

「そ、そうなんか。な、なら後でええわ」

ふう。何とか事なきを得た。紫ちゃんも案外チヨロいな。

「つて。そんな見え透いた嘘に騙されるかい！」

ギアアアアアアアア。

「れ、令……あんだ……！」

不意打ちで開けられたドア。紫ちゃんの視線。照準、今日も元氣だリトル令。振り上げられる足。激痛。そして、僕は意識を失った。

「っは！」

意識を取り戻した。部屋を見回す。パソコンについたイヤホンから流れる喘ぎ声が悩ましい。時計を見る。どうやら、

30分ぐらい意識を失っていたようだ。しかも、不味いよこれ。紫ちゃんきつとマジギレだよ。ゴムを投げ捨て、ズボンをはく。

隣の紫ちゃんの部屋をそつとのぞく（ノックするとノブ越しに電

撃を流される可能性がある為) どうやら居ない。

お手伝いさん達は買い物に行っている時間だ。家の中を走り回っている、廊下の奥で外を見ながら座っている紫ちゃんが居た。

紫ちゃんはすぐに僕の存在に気がついた。僕を睨む。そして、

「ちょっと、ここ座りなさい」

命令。逆らえるわけが無いでしょう。黙って頷き、紫ちゃんの横に座る。

「さっきの、何なん？」

「その……未知への探究心が」

拳骨。痛い。

「令さあ……。将来の事とかちゃんと考えとる？」

「一応……」

「この前な。ママさんに言われたん。悲しいけど、子孫が見込めない子を九我山の跡取りと一緒にさせるのは無理やて。

あたし、鬼神やもん。人間の学校行つたからわかるけど、生理なんて来た事あらへん。性欲なんて、滅多に湧かんわ。

多分、悪鬼には生殖能力がほぼ不要やからやろうな。おまけみたいなもんや」

「でも、人間になれば」

「それや。人間になれば、とママさんもゆーとつた。でもな。人間

になるゆゑ事は、これまでの数百年のあたしを捨てると同義や。
正直言えば、怖いよ。鬼神の回復能力や身体能力もなくなってしまう。
し。何よりあたしは雷神ではなくなる。簡単な事やない」

その言葉を聞いて、僕は自分の浅はかさを知った。人間になれば、
万事解決。そう考えていた自分を殺したい程に。

太郎君は緊急時だった。だけど、紫ちゃんは違う。僕が紫ちゃん
と一緒に居るためには、その全ての不安を取り除かないといけない。
力が必要だ。暴力と権力も含めて。その他にも色々やるべき事
もある。そんな現実を僕は何も見ていなかった。

「……ごめん」

「責めてるんじゃないよ。ただ、もう少し自覚して欲しかっただけ。
あたしと一緒に居る事へのリスクをな」

紫ちゃんの手が僕の頭に寄せられた。とても、落ち着く。子供の
頃から何時もそうだった。僕の隣には太郎君か紫ちゃんが必ず居た。
お姉ちゃんが寮生だったけど、何時も寂しくなかった。多分きつ
と、あの頃から僕は紫ちゃんに惹かれていたのだろう。

あの日、紫ちゃんのあの発言を聞いて、僕の中にずっとあった思
いもはじけた。でも、それは間違いの思いだったのかもしれない。
でも今なら言える。僕は紫ちゃんに惚れている。自分が一番敵し
いのに、それでも僕を気遣う優しさが愛おしかった。

「跡継ぎに関して言うなら。僕はきつと、近い将来、お姉ちゃんの
息子の南斗と争う事になるよ」

だから、僕も全力を尽くす。紫ちゃんを安心して、幸せにして上
げられるように。

「そつか……。南斗は鬼憑を継いだんやもんな」

「南斗が継げるような年になるまで、後十年近くある。多分、お父さんも何時か僕と南斗を試すつもりだと思う。」

南斗は八神を継がないから、そうなると行く所がなくなるわけだからね。その間に、僕は僕の可能性を広げるよ。

紫ちゃんを守る力を手に入れて。紫ちゃんを幸せに出来るような立派な男になって。そして、僕が頭首になったら、改めて紫ちゃんに告白するよ。そしたら、人間になって、僕と死ぬまで一緒に居てほしい」

「……わかった。ま、後十年ぐらいなら早いもんや」

「良かった。正直、愛想つかされるかもと思ってヒヤヒヤしたよ」

すると紫ちゃん。僕の肩に頭を乗せてきました。

「あー……。でも、この先十年はあたしは令の彼女って立場がええな。……他の女にとられたら嫌やし」

更に僕の腕に自分の腕を絡ませてきました。……もう、これは行くしかない。紫ちゃんを正面から抱きしめる。

流石というか、やはり女の子。柔らかい。莉王兄ちゃんには何回か抱きしめられた事があるけど、比にならない。

むしろ今では思い出すだけでおぞましい。さよなら莉王兄ちゃん。よし、このまま少し触ってみよう。ほんの少しだけ。

手を少しずつ動かす。あくまで、不意打ちが重要だ。意思を悟られてはならない。すると、紫ちゃんが思い出したように言った。

「あ、今度あたしのお父ちゃんに挨拶にいかんとね。めっちゃ短気やけど、酒飲ませれば気のいい悪鬼やから」

「ゆ。紫ちゃんのお父さん……ですか？」

「大丈夫やて。碧も連れてけば、たとえ大暴れしても何とか勝てそうやし。勿論、あたしも協力するで」

「は、ははは。穩便に行こうね」

これから数日後、僕は紫ちゃんのお父さんにご挨拶に行くのだが、大泣きするわ。五時間ぶっ続けで暴れるハメになるわの大変な事件が起こるのだが、それはまた、別の機会にという事で。

Days to follow: 千島光希(前書き)

緋色の眼シリーズの中でも
本当に最後となるお話です。

皆様本当にありがとうございました。

大学一年からずっと連載してきた、良かったです。

……でも五年生になっちゃいそうな予感もorz

Days to follow: 千島光希

一人称が僕から俺に変わったのは、何時からだろうか。

少なくとも小学生の時の一人称は、僕だった。中学一年になる今から思い返してみれば、何故か子供っぽい。

でも、あの頃はそれが普通だった。多分、俺も大人になったのだろうと、一人納得するほかないだろう。

早く大人になりたい。というよりも、俺は彼女に近づきたかった。二つ年上の、数年前に出会った女の子、未希ちゃん。

未希ちゃんは意地悪だ。俺の気持ちにとくに気づいているくせに、わざと俺の心を乱すような行動をとる。

やはり、からかわれている内はまだ子供だと扱われているに違いない。だから、もっと強くなりたい。

強くなつて彼女に頼られるような存在になりたかった。毎日、それを目指して訓練をしてきたのだが

「はぁ……」

実家の屋根の上でため息をつく。明日から、舞浜学園に編入だ。

正直に言えば、かなり心が重い。

ずっと生まれ育ったこの町から離れ、舞浜学園の寮に入る。知っている人間が居ないでもない。

親戚の八神兄弟。姪の四条莉那。彼等は舞浜学園の小等部に在籍している。それでも、不安といえば不安だ。

一つは未希ちゃんとの事。もう一つは、俺の力の事だ。

「……」

両腕にグローブの式神を顕現。その瞬間から、恐ろしいほどの力

が俺の中を駆け巡り、闘争本能を刺激する。

今でこそこれだが、訓練する前はもつと酷かった。俺の式神は一度だけ他人の式神を複製する式神。

運がいいのか悪いのか、俺はユニオンの長である自分の兄の式神と、かつて最強の鬼神と呼ばれたご先祖

様の式神を複製してしまっている。そんな式神を自由に使うのに、あの事件後からずっと鍛錬の毎日。

「強く、なつたよな」

風が吹く。まだ寒い。

「光希ー。ご飯よー！」

「おおっ！？ 今日焼肉だと！？」

「皆揃ってからね……って早っ！」

「うははは！ 焼肉は早いもの勝ちって……痛い痛いごめんなさい！」

相変わらず、楽しそうな両親だ。だけど、こちらの気分も上がってくるというもの。俺は返事をして、一階に降りた。

リビングへ行くと煙が充満しており、父さん母さんと、現在プチ家出中の姉さんが居た。姉さん何かは既に良い感じに出来上がっている。

「姉さん。まだ居たんだ」

「光っちゃん酷い！ そんなお姉ちゃんを邪魔者みたいに扱って！」

「いやだって、いい加減莉那も寂しがってると思うよ。確かに義兄さんの態度も悪かったとは思っけどさ。ここは大人になってね」

姉さんのこのプチ家出は現在一週間を記録している。莉王義兄さんが接待でベロベロに酔っ払ってきたのが原因らしい。

ちなみに、この家は皆莉王義兄さんの味方だ。浮気したわけでもないのに、かまってほしい姉さんがこうして気を引こうとしている。

「うーん。そうだねえ。莉那も仲直りしてって言ってたからなあ」

「莉王君も灼汰の世話を一人でやってるんでしょ。いい加減帰ってあげなさいよ」

母さんの追撃も入る。父さんは、

「ぎやははは！ この芸人面白れーな！」

駄目な人だ。

「そうねえ。莉王さんったら灼汰には甘いんだから。あの子、手がかからないけど、放っておいたら数日部屋から出てこないし」

俺の甥に当たる四条灼汰。若干小学生ながら機械やネットに精通しており、ゲーム分野においては数々の大会を総なめにしている。

ちなみに甥と姪は全部で四人居て、灼汰の姉の四条莉那は人畜無害でとても優しい子。兄さんの娘の千島蒼華は活発で、

父さんにそっくりな性格。今は確か陸上で活躍している。その弟の千島煉次は顔立ちが良い為に、偶に子供服のモデルをやったりもする。

何気に多彩な親戚達だ。まあ、この家族を見れば一筋縄ではないかな子が生まれるのは当然な気もする。

「じゃ、明日は帰ろうかな。あ、そうだ光っちゃん。後で、お姉ちゃんに付き合ってね。ちよっと用事があるから」

「飲酒運転は駄目だよ」

「いやいや、歩いていける場所だから平気だよ」

何故か、姉さんの含みをもった笑顔が気になった。

そして、食事も終わり一旦自室に帰る。俺の部屋はかつて兄が使っていた部屋だ。偶に命義姉さんの私物が残っているのが

多少気になるところ。それでも姉さんの部屋よりはマシだろう。

あの独特の甘い匂いは今も取れる事がないからな。

それに悲しいが、この家もそろそろ終わりだ。俺が舞浜の寮生になった後、母さん達も舞浜に住みたいだし。この家は売ると。

十数年育った家がなくなるのは寂しいが、仕方が無い。そんなこんなで暫く物思いに耽っていると、姉さんがドアを開けて入ってきた。

「ノックぐらいしようよ」

「男の子はいいの。着替え見られたって減るもんじゃないでしょ」

「姉さんは減ったら困るもんね」

拳骨。痛え。流石ユニオンの体長格。かなりのモノだ。そんな姉さんの最近の悩みは肩の発達による

服のサイズの上昇。まあ、かなり筋肉ついちゃったから仕方ない

とはいえ、姉さんも女性ならではの悩みもある。

梨香姉ちゃんも指の皮膚の事かなり気にしてたし（弓を使うだけに）

「さて、そろそろお姉ちゃんとデートに行こうか」

「人妻と夜のデートとは、中学生にはドキドキの展開だよ」

「流石年上好きね」

「姉の影響かな」

今ではこんな軽口が叩けるようになった、俺と姉さん。兄さんはこうもいかない。あの人、意外と頭固いし。

二人で階段を降りて一階へ。リビングを覗くと父さんが酔いつぶれていびきをかいて寝ていた。我が父ながら自由だ。

家から出ると、先程よりも寒くなっていた。

「うつつうつ……寒い……」

寒さに震える姉さん。だったら外に出なければいいのに。

しかしそのままふらふらと先に進みだしてしまった。こうなってしまうえば、俺はもうついていくしかない。

護衛なわけではない。この人が負けるなら俺だって勝てないさ。

ただ、何か愚かなしないように監視というか。そんな感じ。

そのまま暫く歩いていくと、懐かしい場所に來た。家の近くにある丘の上だ。俺が、かつて兄の式神を複製した場所。

広い敷地の中心辺りで姉さんは立ち止まると、携帯端末を取り出して何処かに連絡し始めた。

「光つちゃん。頑張つてね」

ヘラヘラと手を振る姉さん。次の瞬間、空中に紋様が現れてその中から数人が出てきた。全員見知った顔。

ユニオン幹部、榛名神璽さん。棗……ああ、今は榛名由加さん。

牧島郁人さん。竜胆さん。運命義姉さん。

兄さん　千島蒼二。最期に出てきたのは、俺の師匠でもある鬼塚二郎さんだった。

「光希。まずは舞浜入学おめでとう」

兄さんが仏頂面でまずはそう切り出した。

「祝うなら、もう少し笑顔で祝つてよ」

「む……。すまん」

兄さんはそう言うのと不自然な笑顔を作った。それを見て神璽さん達は爆笑の渦に巻き込まれた。姉さんも腹を抱えて笑っている。そして兄さんがひとしきり式神を振り回した所で、ようやく笑いは沈下した。ユニオンの代表がこんなに短気でいいのだろうか。

「それで、何の用事かな？　これだけの面子が揃ったんだ。ただの祝福だけではないんでしょ？」

「ああ。お前を特別扱いするわけではないんだが……。やはり、現時点でのお前の力は舞浜に来てでも飛びぬけている。

ウチの生徒達の地力もかなり上がってはいるんだが、まずお前は入学した時点で、もう五本の指には入るだろう。

だから、テストをさせてもらう。お前のその力がちゃんと制御でき

るのかどうか。俺と……二郎の二人でな」

そついう事か。意外と信頼されていない。確かに俺は兄さんと師匠の力を複製した。その力が凄まじい事は認める。

だからといって、何もしてこなかったわけじゃない。あの事件以降、ずっと鍛錬を続けた。師匠が居ても、一人の時でも。

兄さんを見る。不自然な笑顔は消え、殺気すら感じさせる表情。

師匠の方も、かなり本気だ。それに、背筋がぞくつとした。

「わかったよ。兄さん。師匠。テストを受けさせてもらつよ。

ただし、負けても文句は言わないでね！」

式神を発動。両腕にグローブが現れ、更にその中から二振りの剣を顕現させる。氷の式神修羅紅雪。炎の式神レヴァティーン。

ユニオン最強の男と鬼神最強の男の式神だ。兄さんと師匠もゆつくりとお互いの剣を抜いた。それと同時に、神璽さんと由加さんが結界のようなものを張った。それを合図として、俺と兄さんと師匠は同時に動く。

「流石に、緋眼じゃ勝ち目が無いか」

兄さんと師匠に比べると、やはり俺の緋眼は経験的にも肉体的にもまだ劣る所が多い。速さでは勝てない。更に

「っふ！」

師匠のレヴァティーンを同じくレヴァティーンで受け止める。手が痺れ、靴が地面にめり込む。力でも勝てない。ならば

「式神で圧倒するしかないよねえ！」

修羅紅雪とレヴァティーンの炎を限界まで上げ、周囲を炎と氷で埋め尽くす。それをお互いの式神で対抗する兄さんと師匠。

兄さんは俺の炎を掃い、師匠は俺の氷を山を破壊する。だが、それはブラフだよ。

「いつけえ！」

氷の山の中に火種を埋め込んでいた。一気に炎が広がり、更に飛び散った破片が兄さんと師匠を襲う手筈になっている。

だが、兄さんと師匠は急に加速した。それだけで何をしたかがわかる。まだ俺が禁止されている緋眼の昇華型を使ったのだろう。

「光希やるなあ！」

「だが、まだツメが甘い」

炎と氷を引き連れて襲い来る二人。そこで、ふと迷った。テスト状態の技が成功すれば、兄さんと師匠には勝てるだろう。

だが、失敗する確立がまだ高い。失敗すれば暴発し、どんな被害が出るかわからない。俺の入学はなくなるだろう。

未希ちゃんと同じ学校に通えなくなってしまう。それだけは嫌だった。

「正面突破！」

俺も緋眼を再発動させて兄さんと師匠へと突っ込んだ。射程距離に入った瞬間、炎や氷ではなく剣撃で兄さんと師匠を狙う。

向こうもそのつもりのような。名だたる二人の相手は厳しい。決して真ん中に入る事はせず、前方に二人を捉える。

兄さんの下段中段を攻撃。その間、片腕では修羅紅雪で師匠の攻撃を防ぐ。うっは、容赦ない。大きく後ろに跳躍し、距離をとる。

「いつくぞお！」

炎と氷の力を暴発寸前まで一瞬で溜めた。そして斬撃と共に、それを放つ。兄さんと師匠は正面からそれを迎え撃った。

「嘘お！？」

兄さんと師匠が腰を屈め、俺よりも早く力を練り上げるとお互いの式神で俺の放った炎と氷の斬撃を弾き返した。

信じられない。父さんでもこれは返せなかったのに。畜生。

と何とか防御はしたものの、俺の体は氷と炎に削られた。

痛い。熱い。痛い。痛い。裂傷がすぐに焼けどとなり、傷口は塞がるが地獄のような痛みだ。

「はいはい。決着はついたみたいだね」

安全圏で状況を見守っていた姉さんが輪廻転生の力で俺の傷口を再生してくれた。ああ、やっぱり良い姉だ。

兄さんと師匠の方を向くと、驚いたような顔で俺の事を見ていた。どれだけ俺を過小評価してたのって聞いてみたい。

「兄さん、師匠。どうかな？」

「素直に驚いたよ。もう、俺達と殆ど変わらないよな」

「ああ。俺のコーチももう必要ないだろう。光希。後はお前次第だ。お前の意思一つで、全てが決まるぞ」

俺次第　。　という事は……

「光希。お前は今日から戦闘においては一人前だ。後は清く正しく学生として、精神を育め、ユニオンはお前を歓迎する」

兄さんはそう言うのと、嬉しそうな笑顔を作った。今度は、誰かに笑われるような不自然な笑顔ではなかった。

そして翌朝。何時もの朝が始まる。

「お兄ちゃん！　洗面所早くしてよ。女の子は化粧とか色々あるんだからね！」

「はあ？　もう女の子って年じゃねえだろ！　男だつて髭剃りとか色々あんだよ！」

「お前ら朝からうるせえ！　二日酔いに響くだろうが！　静かにしやがれ！」

「三人とも。あんまりうるさいと朝ごはん抜きよ」

母さんの一声により、今日も千島家は平和になった。俺は兄さんや姉さんと違って朝は強いので、既に支度は済ませてある。

こういう時は、母さん似で本当に良かったと思うね。それからバタバタと姉さんが洗面所から走っていき、父さんがかつたる

そうに俺の目の前で新聞（競馬）を読み始め、兄さんも新聞（経

済）を読み始めると共に、母さんが置いていった牛乳を飲む。

そうこうしている内にまたバタバタと姉さんが二階から降りてきて、テレビの占いをチェックし始める。

「光ちゃん今日は占い一位だよ。きっと良い事あるんじゃない？」

「入学式で彼女できるフラグがたったね。それとも、曲がり角でパン啜えた女の子とぶつかったりするのかな」

「灼汰みたいな事言わないでよ……」

落ち込む姉さん。冗談なのに……。

「つかやべえ。俺、入学式でユニオン代表挨拶しなきゃならねえんだ。神璽に原稿頼んどいたんだけど、やってくれたかなあ」

今日の兄さんの挨拶はアドリブ確定しました。

「遙ちゃん。デジカメの充電終わってる？ 莉那の勇姿を取らなくてはい！」

「嘘でもいいから息子の写真とるって言うてよ。しかも莉那初等部だし。ってまさかそっちに行く気！？」

「光希の写真なんざどっかの勢力が腐るほど撮ると思うから、後でそっちから奪うわ」

なんて父親だ。

「ほら光希。そろそろ電車の時間よ。荷物多いんだから、ちょっと

早めに出なさいね。後でちゃんと行くから」

流石母親だ。

「うん。じゃあ、そろそろ行こうかな」

今日から寮生なので、荷物は多いといえが多い。それを担いで玄関から外に出る。今日でこの家も見納めだ。

振り返ると、父さん母さん兄さん姉さんの全員が玄関から出てきて手を振っていた。俺もそれに笑顔で手を振り返し、

「いってきます」

というと舞浜に向けて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0260b/>

緋色の眼 ~ Days ~

2010年10月20日13時30分発行